

讚良郡条里遺跡 IX

—本文編—

寝屋川市

讚良郡条里遺跡 IX

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

—本文編—

二〇〇九年三月

2009年3月

財團法人 大阪府文化財センター

財團法人
大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第188集

寝屋川市

讚良郡条里遺跡 IX

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

—本文編—

財團法人 大阪府文化財センター



(1) 調査地遠景（南西から）



(2) 調査地遠景（北西から）

巻頭図版 2



(1) 第1面微高地1 (03-5-6トレンチ 南から)



(2) 第1面微高地2 (03-5-8トレンチ 南から)



(1) 井戸1 (南から)



(2) 井戸3 (南から)



(3) 井戸4 (南東から)



(4) 井戸5 (南西から)



(5) 土坑2 (南西から)



(6) 土坑7 (東から)



(7) 建物8 (北西から)



(8) 建物3 排水09 (西から)

巻頭図版 4



(1) 第1面 流路1 (03-5-4トレンチ 南西から)



(2) 第1面 流路1杭列6 (03-5-10トレンチ 南から)



(1) 第1面 流路1遺物出土状況 (03-5-4トレンチ 北東から)



(2) 第1面 流路1遺物出土状況 (03-5-2トレンチ 東から)

巻頭図版 6



(1) 第2-2面 水田 (03-5-2トレンチ 南東から)



(2) 第2-3面 水田 (03-5-4トレンチ 西から)



(1) Y=-34,030 ライン断面（西から）



(2) 03-5-4 トレンチセンター ライン断面（南東から）



(3) 03-5-2 トレンチセンター ライン断面（南東から）



(4) Y=-33,980 ライン断面（西から）



(5) 03-5-2 トレンチ南北断面（南西から）

(6) 03-5-2 トレンチセンター ライン断面（南東から）



(7) 03-5-2 トレンチ南北断面（南西から）



(8) 南側溝断面（南から）

巻頭図版 8



(1) Y=-33,980 ライン断面（西から）



(2) Y=-34,030 ライン断面（西から）



(3) 03-54 トレンチ南北断面（西南から）



(4) X=-138,820 ライン断面（南から）



(5) X=-138,940 ライン断面（北から）



(6) Y=-33,980 ライン断面（西から）



(7) X=-138,830 ライン断面（北から）



(8) X=-138,860 ライン断面（南から）

序 文

讃良郡条里遺跡は寝屋川市と四條畷市にまたがって広がる遺跡で、その名前は条里型地割が良好に残っていることに由来します。この遺跡の範囲内を横切って、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路が新設されることになり、このたび大規模な発掘調査を順次、実施してまいりました。本書で報告する讃良郡条里遺跡03-5・06-2調査は遺跡範囲内のうちでも西南寄りに位置し、平成15年度から平成18年度にかけて発掘調査を実施いたしました。

今回報告いたします範囲では、弥生時代から近世にいたるまでの農耕地や集落の変遷があきらかになりました。とりわけ、古墳時代の流路からは千数百点にのぼる土器や木製品、鉄器、石製品などが出土しましたが、その中には朝鮮半島からの渡来人が用いた韓式系土器や、木製の鞍、馬の骨などが含まれており、「河内馬劍」にかかる遺跡である可能性が高まりました。さらに折り曲げられた鉄剣やほとんどさびていない鉄鎌、土製の馬、700点をこえる石の小玉など、流路で行われた祭祀の姿を彷彿とさせる遺物の出土もみられ、馬劍に加え、北河内地域における文物の流通拠点としての讃良郡条里遺跡のもつ歴史的重要性を、あらためて認識させる成果が得られました。加えて今回の調査では考古学的な調査に加え、自然科学の方法を用いた分析を実施し、地形の変遷や周辺の植生の変化などについても新たな知見を得ることができました。

このような調査成果も、多くの方々のご協力があってはじめて得られるものであります。とりわけ国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所をはじめとする関係機関の方々には多大なご協力を賜り、また大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会、四條畷市教育委員会、寝屋川市新家自治会の皆様からは調査の実施にあたりご指導とご配慮をいただきました。深く感謝申し上げるとともに、今後とも当センターの事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成21年3月

財團法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例　　言

1. 本書は、大阪府寝屋川市新家2丁目地先に所在する、讃良郡条里（さらぐんじょうり）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財團法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 現地調査および報告書作成にかかる受託契約と契約期間、工事請負契約の名称、期間は以下のとおりである。

平成15年度

受託事業契約名 第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡発掘調査（その6）

受託契約期間 平成15年4月1日～平成16年3月31日

平成16年度

受託事業契約名 第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡発掘調査（その6の2）

受託契約期間 平成16年4月1日～平成17年3月31日

平成17年度

受託事業契約名 第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡発掘調査（その6の3）

受託契約期間 平成17年4月1日～平成18年3月31日

平成18年度

受託事業契約名 第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡遺物整理

　　讃良郡条里（6）遺物整理

受託契約期間 平成18年4月1日～平成19年3月31日

平成19年度

受託事業契約名 第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡他遺物整理（その2）

　　讃良郡条里（6）遺物整理

受託契約期間 平成19年4月1日～平成20年3月31日

平成20年度

受託事業契約名 第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡他遺物整理（その3）

　　讃良郡条里（6）遺物整理

受託契約期間 平成20年4月1日～平成21年3月31日

03-5調査 工事請負契約名 讃良郡条里遺跡（その8）発掘調査に伴う工事

03-5調査 工事請負契約期間 平成15年4月17日～平成17年10月31日

4. 本事業の実施体制は以下のとおりである。

年度	本部		調査担当(平成15年度は京阪文所調査第二係、平成16~17年度は大阪調査事務所調査第二係、平成18年度は同調査第一係、平成19年度は同調査第四係、平成20年度は同調査第二係)					
	調査部長	調整課長	所長	係長	写真担当	調査・報告書作成担当		
平成15年度	玉井 効	赤木克視	渡邊昌宏	寺川文郎	主査 上野貞子	主査 吉村正綱	扶助 森本 敏 (6月~)	専門調査員 宮本飛鳥
平成16年度	玉井 効	赤木克視	渡邊昌宏	寺川文郎	主査 上野貞子	扶助 高橋 敦	扶助 森本 敏	専門調査員 宮本飛鳥
平成17年度	赤木克視	田中和弘	山本 彰	金光正裕	主査 上野貞子	扶助 高橋 敦	扶助 森本 敏	専門調査員 上木志穂
平成18年度	赤木克視	田中和弘	山本 彰	藤永正明	主査 上野貞子	扶助 高橋 敦	扶助 森本 敏	専門調査員 市来真澄
平成19年度	赤木克視	田中和弘	山本 彰	藤永正明	主査 上野貞子	扶助 森本 敏	副主査 森本 敏	専門調査員 市来真澄
平成20年度	赤木克視	田中和弘	山本 彰	秋山正三	主査 上野貞子		副主査 森本 敏	専門調査員 市来真澄

5. 発掘調査では土壤の分析を、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社パレオ・ラボに委託し、遺物整理作業では出土木製品の樹種同定、出土石材の岩石種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。また出土動物遺体の同定を京都大学大学院、丸山真史氏に依頼した。出土種子類の同定、出土木製品の樹種同定の一部、鉄製品のX線写真撮影についてはセンター中部調査事務所（現・資料活用課）主査、山口誠治・専門調査員、橋本俊範が行った。

6. 調査の実施にあたっては、国土交通省近畿地方整備局浜速国道事務所、西日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）関西支社枚方工事事務所、大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会、四條畷市教育委員会、寝屋川市新家自治会をはじめとする、関係各位からご協力を得た。また、以下の方々から調査内容の検討に際し、ご教示を得た。記して感謝の意を表します。（順不同）

濱田延光、野島 稔、神谷正弘、原田昌則、右鳥和夫、松井 章、村上恭通、宮路淳子、丸山真史、権五郎、柳基正、河承哲、崔榮柱、山岡邦章、大岡由記子、小林正史、中野 咲

7. 現地での写真撮影は調査担当者がおこなった。遺物写真撮影、報告書図版版下用紙焼きについては主査 上野貞子が担当した。

8. 本書の編集は森本が担当した。本文の執筆は森本が行ったが、第5章の一部については、市来真澄、パリノ・サーヴェイ株式会社 辻本裕也氏・辻 康男氏、高橋 敦氏、京都大学大学院 丸山真史氏、奈良県立橿原考古学研究所 中野 咲氏により起稿されたものを受け、森本が総括した。

9. 出土遺物ならびに実測図、写真などの各種資料は当センターで保管している。

10. 本書は、当センターが刊行した、讃良郡条里遺跡単独の報告書の第9冊目にあたり、書名を『讃良郡条里遺跡Ⅸ』とした。この方法による報告書名は平成16年度以降刊行のものについて用いており、それより以前に刊行されたものについては刊行順に、番号を付したものとして読み替えることとしている。それらを含む、これまでに刊行された讃良郡条里遺跡単独の報告書は下記のとおりである。

- (財) 大阪府文化財センター調査報告書第98集『讃良郡条里遺跡（その2）』平成15年6月刊行
- (財) 大阪府文化財センター調査報告書第109集『讃良郡条里遺跡（その1）』平成16年2月刊行
- (財) 大阪府文化財センター調査報告書第114集『讃良郡条里遺跡（その3）』平成16年3月刊行
- (財) 大阪府文化財センター調査報告書第138集『讃良郡条里遺跡 IV』平成18年2月刊行
- (財) 大阪府文化財センター調査報告書第160集『讃良郡条里遺跡 V』平成19年3月刊行
- (財) 大阪府文化財センター調査報告書第173集『讃良郡条里遺跡 VI』平成20年3月刊行
- (財) 大阪府文化財センター調査報告書第182集『讃良郡条里遺跡 VII』平成20年9月刊行
- (財) 大阪府文化財センター調査報告書第187集『讃良郡条里遺跡 VIII』平成21年1月刊行

凡　　例

1. 発掘調査及び整理作業の実施に際しては当センター制定の「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】」(2003年8月)に準拠した。
2. 本書に掲載した遺構実測図に付した北方位は全て、国土地理院第VI系の座標北を示す。なお調査ならびに本書における使用測地系は、世界測地系(測地成果2000)である。
3. 本書で用いる標高は全て東京湾平均海面(T.P.)を基準とする表示である。
4. 遺構図などに記載した座標値の単位、mは全て省略した。
5. 本書で用いた土色番号・名称は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』2004年版に従った。
6. 本書で用いる遺構名称・番号は現地調査終了後、報告書作成に際し新規に付したもので、調査時の遺構番号とは異なるものである。本書使用名称・番号と調査時の遺構番号との対照は、本書巻末の遺構一覧表において示した。
7. 本書における遺物番号は実測図、写真図版とも一致する通し番号である。
8. 本書掲載の出土遺物実測図の縮尺は、土器類を1/3に、打製石器類を2/3に、鉄製品を1/2にすることを原則としたが、適宜縮尺を変更したものがある。木製品、石製品、土製品などについては、遺物の法量に応じて、適宜縮尺を設定した。個々の縮尺については各図のスケールバーを参照されたい。
9. 遺物実測図には一部、アミフセ表現を行ったものがある。木製品におけるアミフセは彩色などの残存範囲を示した。土師器把手については、欠損部分を濃、芯の露出部分を中、破断面部分を薄のアミフセで示した。
10. 本書の記載にかかる参考文献は文末に一括して記載するが、第5章については節ごとに参考・引用文献をまとめ、各節末に記載することとした。表記の体裁については統一していない。

目 次

巻頭図版

序文

例言・凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 讀良郡条里遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 既往の調査成果と藤屋北遺跡	5
第3章 調査の方法	7
第4章 調査成果	11
第1節 土層序の認識と微地形	11
第2節 第1面の調査成果	31
第3節 第2面の調査成果	268
第4節 第3面の調査成果	314
第5節 近世～中世の調査成果	317
第5章 分析	331
第1節 古環境分析	331
第2節 樹種同定	365
第3節 動物遺存体の同定・分析	376
第4節 古墳時代集落構造の基礎分析	381
第5節 ヘラ記号・底部圧痕	385
第6節 土器煮沸具に残されたスス・コゲ等の分析	387
第7節 土師器把手の分析	399
第6章 総括	403
参考文献	407
遺構一覧表（1）～（4）	411
木製品一覧表（1）～（3）	469
石製品一覧表（1）～（6）	473
動物遺存体一覧表（1）～（2）	483
遺物観察表（1）～（54）	415
鉄製品一覧表	472
白玉一覧表（1）～（4）	479
植物遺存体一覧表（1）～（4）	485

報告書抄録

卷頭図版目次

卷頭図版 1

- (1) 調査地遺景 (南西から)
(2) 調査地遺景 (北西から)

卷頭図版 2

- (1) 第1面微高地 (03-5-6トレンチ 南から)
(2) 第1面微高地 2 (03-5-8トレンチ 南から)

卷頭図版 3

- (1) 井戸1 (南から)
(2) 中井戸出土土器
(3) 井戸3 (南東から)
(4) 井戸4 (南西から)
(5) 土坑42 (南西から)
(6) 土坑7 (東から)
(7) 建物8 (北西から)
(8) 建物3柱穴6 (西から)

卷頭図版 4

- (1) 第1面 流路1 (03-5-4トレンチ 南西から)
(2) 第1面 流路1杭列6 (03-5-10トレンチ 南から)

卷頭図版 5

- (1) 第1面 流路1遺物出土状況 (03-5-4トレンチ 北東から)
(1) 第1面 流路1遺物出土状況 (03-5-2トレンチ 東から)

卷頭図版 6

- (1) 第2-2面 水田 (03-5-2トレンチ 南西から)
(1) 第2-3面 水田 (03-5-4トレンチ 西から)

卷頭図版 7

- (1) Y=-34.030ライン断面 (西から)
(2) 03-5-4トレンチセンターライン断面 (南東から)
(3) 03-5-2トレンチセンターライン断面 (南東から)
(4) Y=-33.980ライン断面 (西から)
(5) 03-5-2トレンチ南北トレンチ断面 (南西から)
(6) 03-5-2トレンチセンターライン断面 (南東から)

卷頭図版 8

- (1) Y=-33.980ライン断面 (西から)
(2) Y=-34.030ライン断面 (西から)
(3) 03-5-4トレンチ南北断面 (西南から)
(4) X=-138.820ライン断面 (南から)
(5) X=-138.940ライン断面 (北から)
(6) Y=-33.980ライン断面 (西から)
(7) X=-138.830ライン断面 (北から)
(8) X=-138.860ライン断面 (南から)

挿図目次

図1 調査地の位置	1	図14 第1面 (第1a面)	33~34
図2 地形分類図	3	図15 第1面 (第1b面)	道構分布図・エリア区分図
図3 周辺道路分布図	4		35~36
図4 謙良都条里遺跡 (本書報告範囲) と鹿屋北道路	6	図16 第1面 微高地1・微低地1 道構分布図	38
図5 地区割りの方法	8	図17 第1面 微高地1 建物群 分布図	39
図6 地区割り・トレンチ区分・確認調査位置・断面図作成位置	9	図18 建物1 平・断面図	40
図7 センターライン土層断面模式図	12	図19 建物2 平・断面図	41
図8 03-5-4トレンチ南北土層断面図	13~14	図20 微高地1 建物 出土遺物1	42
図9 03-5-2トレンチ南北土層断面図	15~16	図21 建物3 平・断面図	43
図10-1 X=-138.820ライン土層断面図	17~18	図22 建物4 平・断面図	44
図10-2 X=-138.830ライン土層断面図	19~20	図23 建物5 平面図	45
図11-1 Y=-33.980ライン土層断面図	21~22	図24 建物6 平・断面図	46
図11-2 Y=-33.980ライン土層断面図	23~24	図25 微高地1 建物 出土遺物2	47
図12 X=-138.860ライン土層断面図	25~26	図26 井戸1 平・断面図 遺物出土状況図	49
図13 X=-138.940ライン土層断面図	27~28	図27 微高地1 井戸1 出土遺物	50
		図28 土坑1・2・4・6・8 平・断面図	52

図29	土坑3・5・7 平・立面図	53
図30	土坑9 平・断面図	54
図31	第1面 微高地1西縁土丘群 分布図	55
図32	土坑11~19 平・断面図	57
図33	土坑20~22 平・断面図	59
図34	土坑23~31 平・断面図	60
図35	微高地1 土坑 出土遺物1	61
図36	土坑42 平・立・断面図	62
図37	微高地1 土坑 出土遺物2	63
図38	微高地1 ピット 出土遺物	64
図39	微高地1 層 出土遺物1	66
図40	微高地1 層 出土遺物2	67
図41	微高地1 層 出土遺物3	68
図42	微高地1 層 出土遺物4	69
図43	微高地1 層 出土遺物5	70
図44	微高地1 層 出土遺物6	71
図45	微高地1 層 出土遺物7	72
図46	土器集中1 平面図	73
図47	微低地1 土器集中1 出土遺物	74
図48	微低地1 層 出土遺物	74
図49	第1面 微高地2・微低地3 造構分布図	76
図50	第1面 微高地2 建物群分布図	77
図51	建物7 平・断面図	78
図52	建物8 平・断面図	79
図53	建物9 平・断面図	80
図54	井戸2 平・立面図	81
図55	井戸3 平・立面図	82
図56	微高地2 造構 出土遺物1	84
図57	井戸4 平・立面図	86
図58	微高地2 井戸4 出土遺物1	87
図59	微高地2 井戸4 出土遺物2	88
図60	微高地2 井戸4 出土遺物3	89
図61	5 平・断面図	91
図62	ピット148・ピット153 平・立・断面図	92
図63	微高地2 造構 出土遺物2	93
図64	溝9 平・断面図	94
図65	井戸5 平・断面図	95
図66	土坑55 平・断面図	96
図67	井戸58 平・断面図	96
図68	微低地3 造構 出土遺物1	97
図69	微低地3 造構 出土遺物2	98
図70	微高地2・微低地3 層 出土遺物1	99
図71	微高地2・微低地3 層 出土遺物2	100
図72	微高地2・微低地3 層 出土遺物3	101
図73	微高地2・微低地3 層 出土遺物4	102
図74	微高地2・微低地3 層 出土遺物5	103
図75	第0.5面 造構 出土遺物1	104
図76	第0.5面・第1面 構群分布図	105~106
図77	第0.5面 造構 出土遺物2	107
図78	第1面 微高地3・微高地4 造構分布図	109
図79	土坑60・61・63 平・断面図	110
図80	土坑64・65 平・新・立面図	112
図81	土坑66~70 平面図	113
図82	土坑66・68・69・70 断面図	114
図83	土坑71 平・断・立面図	115
図84	土坑72 平・断・立面図	116
図85	微高地3 造構 出土遺物1	117
図86	微高地3 造構 出土遺物2	118
図87	微高地3 造構 出土遺物3	119
図88	微高地3 造構 出土遺物4	120
図89	溝12~15・17 平・断面図 溝12・13遺物	121
図90	遺物出土状況	122
図91	微高地3 造構 出土遺物5	123
図92	微高地3 造構 出土遺物6	124
図93	微高地3 造構 出土遺物7	125
図94	微高地3 造構 出土遺物8	126
図95	微高地3 層 出土遺物1	127
図96	微高地3 層 出土遺物2	128
図97	微高地3 層 出土遺物3	129
図98	流路1 断面図	132
図99	流路1・流路2 平面図	133~134
図100	流路1 遺物出土状況	135
図101	流路1 内杭列1・2 平・立面図	136
図102	流路1 内杭列4~7 平面図	137
図103	杭列6・7 断・立面図	138
図104	杭列4・5 立・立面図	139
図105	流路1-1層 出土遺物1	141
図106	流路1-1城 出土遺物2	142
図107	流路1-1城 出土遺物3	143
図108	流路1-1城 出土遺物4	144
図109	流路1-1城 出土遺物5	145
図110	流路1-1城 出土遺物6	147
図111	流路1-1城 出土遺物7	148
図112	流路1-1城 出土遺物8	149
図113	流路1-1城 出土遺物9	150
図114	流路1-1城 出土遺物10	151
図115	流路1-2層 出土遺物1	154
図116	流路1-2城 出土遺物2	155
図117	流路1-2城 出土遺物3	156
図118	流路1-2城 出土遺物4	157
図119	流路1-2城 出土遺物5	158
図120	流路1-2城 出土遺物6	159
図121	流路1-2城 出土遺物7	161
図122	流路1-2城 出土遺物8	162
図123	流路1-2城 出土遺物9	163
図124	流路1-2城 出土遺物10	164
図125	流路1-2城 出土遺物11	165
図126	流路1-2城 出土遺物12	166
図127	流路1-2城 出土遺物13	167
図128	流路1-2城 出土遺物14	168
図129	流路1-2城 出土遺物15	169
図130	流路1-2城 出土遺物16	170
図131	流路1-2城 出土遺物17	171

图132	流路1-2城 出土遗物18	172
图133	流路1-2城 出土遗物19	173
图134	流路1-2城 出土遗物20	174
图135	流路1-2城 上层出土遗物1	175
图136	流路1-2城 上层出土遗物2	176
图137	流路1-2城 出土遗物1	178
图138	流路1-2城 出土遗物2	179
图139	流路1-2城 出土遗物3	180
图140	流路1-3城 出土遗物4	181
图141	流路1-3城 出土遗物5	182
图142	流路1-3城 出土遗物6	183
图143	流路1-3城 出土遗物7	184
图144	流路1-3城 出土遗物8	185
图145	流路1-3城 上层出土遗物1	186
图146	流路1-3城 上层出土遗物2	187
图147	流路1-4城 出土遗物1	189
图148	流路1-4城 出土遗物2	190
图149	流路1-4城 出土遗物3	191
图150	流路1-4城 出土遗物4	192
图151	流路1-4城 出土遗物5	193
图152	流路1-4城 出土遗物6	194
图153	流路1-4城 出土遗物7	195
图154	流路1-4城 出土遗物8	197
图155	流路1-4城 出土遗物9	198
图156	流路1-4城 出土遗物10	199
图157	流路1-4城 出土遗物11	200
图158	流路1-4城 出土遗物12	201
图159	流路1-4城 出土遗物13	202
图160	流路1-4城 出土遗物14	203
图161	流路1-4城 出土遗物15	204
图162	流路1-4城 出土遗物16	205
图163	流路1-4城 出土遗物17	206
图164	流路1-4城 出土遗物18	207
图165	流路1-4城 出土遗物19	208
图166	流路1-4城 出土遗物20	209
图167	流路1-4城 出土遗物21	210
图168	流路1-4城 出土遗物22	211
图169	流路1-4城 出土遗物23	212
图170	流路1-4城 出土遗物24	213
图171	流路1-4城 出土遗物25	214
图172	流路1-4城 出土遗物26	215
图173	流路1-4城 出土遗物27	216
图174	流路1-4城 出土遗物28	217
图175	流路1-4城 出土遗物29	219
图176	流路1-4城 出土遗物30	220
图177	流路1-4城 出土遗物31	221
图178	流路1-4城 出土遗物32	222
图179	流路1-4城 出土遗物33	223
图180	流路1-4城 出土遗物34	224
图181	流路1-4城 出土遗物35	225
图182	流路1-4城 出土遗物36	226
图183	流路1-4城 出土遗物37	227
图184	流路1-4城 出土遗物38	229
图185	流路1-4城 出土遗物39	230
图186	流路1-4城 出土遗物40	231
图187	流路1-4城 出土遗物41	233
图188	流路1-4城 出土遗物42	234
图189	流路1-4城 出土遗物43	235
图190	流路1-4城 出土遗物44	236
图191	流路1-4城 出土遗物45	238
图192	流路1-4城 出土遗物46	239
图193	流路1-4城 出土遗物47	240
图194	流路1-4城 出土遗物48	241
图195	流路1-4城 出土遗物49	242
图196	流路1-4城 出土遗物50	243
图197	流路1-4城 出土遗物51	244
图198	流路1-4城 出土遗物52	245
图199	流路1-4城 出土遗物53	246
图200	流路1-4城 出土遗物54	248
图201	流路1-4城 出土遗物55	249
图202	流路1-4城 出土遗物56	250
图203	流路1-4城 出土遗物57	251
图204	流路1-4城 出土遗物58	252
图205	流路1-4城 出土遗物59	253
图206	流路1-4城 出土遗物60	255~256
图207	流路1-4城 上层出土遗物1	257
图208	流路1-4城 上层出土遗物2	258
图209	流路1-4城 上层出土遗物3	259
图210	流路1-4城 上层出土遗物4	260
图211	流路2 土层断面图	261
图212	流路2 遗物出土状况图 杭列8 平·断面图	262
图213	流路2 出土遗物1	264
图214	流路2 出土遗物2	265
图215	流路2 出土遗物3	266
图216	流路2 出土遗物4	267
图217	第2面(第2·1面) 遗構分布图	269~270
图218	杭列9 平·立面图	271
图219	杭列10 平·立面图	272
图220	第26層 出土遗物1	273
图221	第26層 出土遗物2	274
图222	第26層 出土遗物3 第2·1面出土遗物	275
图223	第2面(第2·2面) 遗構分布图	277~278
图224	第2b·2面 遗構分布图	281
图225	第2·3面 遗構出土遗物1	282
图226	第2·2b面 遗構出土遗物2	283
图227	第2·2b面 遗構出土遗物3	284
图228	南微高地 第3·2a層 出土遗物1	285
图229	南微高地 第3·2a層 出土遗物2	286
图230	南微高地 第3·2a層 出土遗物3	287
图231	南微高地 第3·2a層 出土遗物4	288
图232	南微高地 第3·2a層 出土遗物5	289
图233	南微高地 第3·2a層 出土遗物6	290
图234	第2面(第2·3面) 遗構分布图	293~294

図235 第2-3面 足跡	295～296	図283 讀良郡条里遺跡03-4・03-5調査区柱状模式断面図	348
図236 西北低地 第3-1～3-4層出土遺物1	297	図284 7地点の軟X線写真とその解釈図	354
図237 西北低地 第3-1～3-4層出土遺物2	298	図285 7地点試料および軟X線写真	355
図238 西北低地 第3-1～3-4層出土遺物3	299	図286 14地点の軟X線写真とその解釈図	358
図239 第3-1・3-2層出土石器	300	図287 14地点試料および軟X線写真	359
図240 第2-3面（第2-4面） 遺構分布図	303～304	図288 ウマの部位組成（N=48）	377
図241 土坑82～87 平・断面図	305	図289 第1面動物遺存体分布図	380
図242 木棺集中1 平・断面図	306	図290 居住域構成の比較	383
図243 西低地域第3層出土遺物1	307	図291 底部圧瓦	385
図244 第3-3層出土石器1	308	図292 頸椎器ヘラ記号	386
図245 第3-3層出土石器2	309	図293 法量分布と容量分布	387
図246 第3-3層出土石器3	310	図294 小型壺・小型甌の使用痕観察図	388
図247 西低地域第3層出土遺物2	311	図295 中型球腹甌の使用痕観察図	389
図248 西低地域第3層出土遺物3	312	図296 長胴甌・長胴系甌の使用痕観察図	390
図249 東半地域第3層出土遺物	313	図297 平底土器の使用痕観察図	391
図250 第3面 遺構分布図	315～316	図298 大型直口甌の使用痕観察図	391
図251 近世 遺構変遷図	318	図299 資料貯蔵出土位置図	398
図252 近世層出土遺物	320	図300 接合方法分類模式図	401
図253 中世 遺構変遷図	322		
図254 東半 第1-2層 出土遺物1	324		
図255 東半 第1-2層 出土遺物2	325		
図256 漢33 平・断面図 出土遺物	326		
図257 東半 第1-3～1-5層 出土遺物	327		
図258 西半 第1層 出土遺物1	328		
図259 西半 第1層 出土遺物2	329		
図260 西半 第1層 出土遺物3	330		
図261 03-5.5～7トレンチの柱状模式断面図および分析試料採取地点	332		
図262 03-5.8～10トレンチの柱状模式断面図および分析試料採取地点	333		
図263 2・3・4地点主要珪藻化石群集の層位分布	334		
図264 6地点主要珪藻化石群集の層位分布	334		
図265 7地点の主要珪藻化石群集の層位分布	335		
図266 8地点の主要珪藻化石群集の層位分布	335		
図267 9地点の主要珪藻化石群集の層位分布	336		
図268 10地点の主要珪藻化石群集の層位分布	336		
図269 11地点の主要珪藻化石群集の層位分布	337		
図270 14地点の主要珪藻化石群集の層位分布	337		
図271 2・3・4地点の花粉化石群集の層位分布	339		
図272 7地点の花粉化石群集の層位分布	340		
図273 9地点の花粉化石群集の層位分布	340		
図274 10地点の花粉化石群集の層位分布	340		
図275 14地点の花粉化石群集の層位分布	341		
図276 1～4地点の植物珪酸体含量の層位変化	343		
図277 03-5.5～7トレンチ15～19地点の動物細胞植物珪酸体含量の層位変化	343		
図278 7地点の植物珪酸体含量の層位分布	344		
図279 9地点の植物珪酸体含量の層位分布	344		
図280 10地点の植物珪酸体含量の層位分布	345		
図281 14地点の植物珪酸体含量の層位分布	345		
図282 讀良郡条里遺跡（03-5・06-2）における堆積物の累重状況	347		

挿入表目次

表1 植種同定結果	366～369
表2 弘生時代中期および弥生時代後期～古墳時代前期の器種別種類構成	370
表3 古墳時代中期～後期の器種別種類構成	371
表4 種名表	376
表5 雜定されるウマの大きさ	378
表6 雜定されるウマの年齢	379
表7 観察結果一覧表	392～393
表8 把手一覧表	400

写真図版目次

- 国版1 遺構
 (1) 調査地遺景 (南西から)
 (2) 調査地遺景 (北西から)
- 国版2 遺構
 (1) 第1面 微高地1 (03-5-5トレンチ 北から)
 (2) 第1面 微高地1 (03-5-5トレンチ 南西から)
- 国版3 遺構
 (1) 第1面 微高地1 (03-5-6トレンチ 南西から)
 (2) 第1面 微高地1 (03-5-6トレンチ 北から)
- 国版4 遺構
 (1) 第1面 微高地1 (03-5-7トレンチ 南から)
 (2) 第1面 微高地1・微低地1 (03-5-7トレンチ 南西から)
- 国版5 遺構
 (1) 第1面 建物1 (南西から)
 (2) 第1面 建物3 (南から)
- 国版6 遺構
 (1) 建物1 柱穴08 (南東から)
 (2) 建物1 柱穴02 (北西から)
 (3) 建物2 柱穴02 (北西から)
 (4) 建物4 柱穴02 (北から)
 (5) 建物3 柱穴11 (西から)
 (6) 建物3 柱穴13 (南から)
 (7) 建物3 柱穴09 (西から)
 (8) 建物7 柱穴01 (北から)
- 国版7 遺構
 (1) 第1面 建物6 (北西から)
 (2) 第1面 建物4 (北から)
- 国版8 遺構
 (1) 第1面 井戸1 全景 (南から)
 (2) 第1面 井戸1 断面 (南から)
 (3) 第1面 井戸1 遺物出土状況 (南から)
 (4) 第1面 井戸1 井戸口 (南から)
 (5) 第1面 井戸1 井戸口側曲物外面 (南から)
- 国版9 遺構
 (1) 第1面 土坑3 (北から)
 (2) 第1面 土坑5 (東から)
- 国版10 遺構
 (1) 第1面 土坑7 (東から)
 (2) 第1面 土坑9 (西から)
- 国版11 遺構
 (1) 第1面 土坑42 (南西から)
 (2) 第1面 土坑42 検出状況 (南から)
 (3) 第1面 土坑42 断面 (南西から)
 (4) 第1面 土坑42 遺物出土状況 (南から)
 (5) 第1面 土坑1 (西から)
- 国版12 遺構
 (1) 第1面 微高地1 西縁辺土坑群 (03-5-7トレンチ 南から)
 (2) 第1面 微高地1 西縁辺土坑群 (03-5-5トレンチ 西から)
- 国版13 遺構
 (1) 第1面 土坑16 (南から)
 (2) 第1面 土坑20 (南東から)
 (3) 第1面 土坑17 (南から)
 (4) 第1面 土坑18 (南から)
 (5) 第1面 土坑26 (南から)
- 国版14 遺構
 (1) 第1面 微低地1・2 (03-5-4トレンチ 北から)
 (2) 第1面 微低地1 土器集中1 (北東から)
- 国版15 遺構
 (1) 第1面 微高地2 (03-5-8トレンチ 南から)
 (2) 第1面 微高地2 (03-5-8トレンチ 東から)
- 国版16 遺構
 (1) 第1面 建物7 (北東から)
 (2) 第1面 建物8・9 (南東から)
- 国版17 遺構
 (1) 第1面 建物8 (北西から)
 (2) 第1面 建物7 (北西から)
- 国版18 遺構
 (1) 建物9 柱穴01 (北から)
 (2) 建物9 柱穴02 (南から)
 (3) 建物9 柱穴09 (北西から)
 (4) 建物7 柱穴06 (南西から)
 (5) 建物8 柱穴03 (北西から)
 (6) 建物8 柱穴04 (南東から)
 (7) 建物8 柱穴01 (北西から)
 (8) 建物8 柱穴02 (南東から)
- 国版19 遺構
 (1) 第1面 井戸2 全景 (西から)
 (2) 第1面 井戸2 井戸口 (西から)
- 国版20 遺構
 (1) 第1面 井戸3 全景 (南東から)
 (2) 第1面 井戸3 井戸口 (南東から)
- 国版21 遺構
 (1) 第1面 井戸4 全景 (南東から)
 (2) 第1面 井戸4 井戸口 (南東から)
- 国版22 遺構
 (1) 第1面 ピット14 (南から)
 (2) 第1面 ピット153 (西から)
- 国版23 遺構
 (1) 第1面 微低地3 (03-5-2トレンチ 北東から)
 (2) 第1面 微低地3 (03-5-9トレンチ 南東から)
- 国版24 遺構
 (1) 第1面 井戸5 遺物出土状況 (南から)
 (2) 第1面 井戸5 断面 (南西から)
- 国版25 遺構
 (1) 第1面 土坑55 (南から)
 (2) 第1面 土坑58 (西から)
- 国版26 遺構
 (1) 第1面 土坑58 (南から)
 (2) 第1面 溝9 (南から)
- 国版27 遺構
 (1) 第1面 微高地3 (03-5-2トレンチ 西から)
 (2) 第1面 微高地3 (03-5-10トレンチ 北から)

- 国版28 遺構
- (1) 第1面 微高地3 (06-23トレンチ 東北から)
 - (2) 第1面 微高地3 (06-23トレンチ 北西から)
- 国版29 遺構
- (1) 第1面 土坑60 (南東から)
 - (2) 第1面 土坑60断面 (東から)
 - (3) 第1面 土坑61 (南から)
 - (4) 第1面 土坑61断面 (南から)
 - (5) 第1面 土坑63 (南から)
 - (6) 第1面 土坑63断面 (南から)
 - (7) 第1面 土坑64 (北から)
 - (8) 第1面 土坑64断面 (北東から)
- 国版30 遺構
- (1) 第1面 土坑65 (西から)
 - (2) 第1面 土坑65断面 (北から)
 - (3) 第1面 土坑66 (東から)
 - (4) 第1面 土坑68断面 (北東から)
 - (5) 第1面 土坑69断面 (東から)
 - (6) 第1面 土坑69遺物出土状況 (北から)
 - (7) 第1面 土坑71断面 (北から)
 - (8) 第1面 土坑71遺物出土状況 (北から)
- 国版31 遺構
- (1) 第1面 土坑70断面 (北から)
 - (2) 第1面 土坑72 (西から)
 - (3) 第1面 土坑72断面 (南西から)
 - (4) 第1面 土坑72遺物出土状況 (南東から)
- 国版32 遺構
- (1) 第1面 溝12遺物出土状況 (南西から)
 - (2) 第1面 溝12遺物出土状況 (南から)
 - (3) 第1面 溝13遺物出土状況 (南から)
 - (4) 第1面 溝15遺物出土状況 (南西から)
 - (5) 第1面 微高地4 (06-22トレンチ 北から)
- 国版33 遺構
- (1) 第1面 微高地1 溝群 (03-5-6トレンチ 南から)
 - (2) 第1面 微高地1 溝群 (03-5-5トレンチ 北から)
- 国版34 遺構
- (1) 第1面 微高地1 溝群 (03-5-7トレンチ 東から)
 - (2) 第1面 微高地2 溝群 (06-24トレンチ 西から)
- 国版35 遺構
- (1) 第1面 流路1 (流路1-1城 東から)
 - (2) 第1面 流路1 (流路1-1城 西から)
- 国版36 遺構
- (1) 第1面 流路1 (流路1-1城 南東から)
 - (2) 第1面 流路1断面 (流路1-1城 南東から)
 - (3) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-1城 北西から)
 - (4) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-1城 東から)
 - (5) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-1城 北から)
- 国版37 遺構
- (1) 第1面 流路1 (流路1-2城 南西から)
 - (2) 第1面 流路1 (流路1-2城 北西から)
- 国版38 遺構
- (1) 第1面 流路1全掘 (流路1-2城 南西から)
 - (2) 第1面 流路1全掘 (流路1-2城 北から)
- 国版39 遺構
- (1) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-2城 南から)
- (2) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-2城 南東から)
- (3) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-2城 北から)
- (4) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-2城 北から)
- (5) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-2城 北から)
- (6) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-2城 北西から)
- (7) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-2城 北東から)
- (8) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-2城 東から)
- 国版40 遺構
- (1) 第1面 流路1 (流路1-3城 南東から)
 - (2) 第1面 流路1内杭列1 (流路1-3城 北東から)
- 国版41 遺構
- (1) 第1面 流路1断面 (流路1-3城 南東から)
 - (2) 第1面 流路1断面 (流路1-3城 南東から)
 - (3) 第1面 流路1断面 (流路1-3城 南東から)
 - (4) 第1面 流路1断面 (流路1-3城 南東から)
 - (5) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-3城 東から)
- 国版42 遺構
- (1) 第1面 流路1 (流路1-4城 南東から)
 - (2) 第1面 流路1 (流路1-4城 南から)
- 国版43 遺構
- (1) 第1面 流路1内杭列2 (流路1-4城 南から)
 - (2) 第1面 流路1内杭列6 (流路1-4城 南から)
- 国版44 遺構
- (1) 第1面 流路1内杭列4 (流路1-4城 南から)
 - (2) 第1面 流路1内杭列5 (流路1-4城 南から)
- 国版45 遺構
- (1) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-4城 南から)
 - (2) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-4城 南西から)
 - (3) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-4城 南から)
 - (4) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-4城 東から)
 - (5) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-4城 南東から)
 - (6) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-4城 北西から)
 - (7) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-4城 南西から)
 - (8) 第1面 流路1遺物出土状況 (流路1-4城 北から)
- 国版46 遺構
- (1) 第1面 流路2 (東から)
 - (2) 第1面 流路2断面 (東から)
 - (3) 第1面 流路2 (西から)
 - (4) 第1面 流路2遺物出土状況 (北から)
 - (5) 第1面 流路2遺物出土状況 (北西から)
- 国版47 遺構
- (1) 第2-1面 流路3 (南から)
 - (2) 第2-1面 流路4 (西から)
- 国版48 遺構
- (1) 第2-1面 流路3内杭列9 (南から)
 - (2) 第2-1面 流路3内杭列10 (北から)
- 国版49 遺構
- (1) 第2-1面 (03-5-2トレンチ 東から)
 - (2) 第2-2面 (03-5-2トレンチ 東から)
- 国版50 遺構
- (1) 第2-2面 水田 (03-5-2トレンチ 南東から)
 - (2) 第2-2面 水田 (03-5-1トレンチ 北から)
- 国版51 遺構
- (1) 第2-2面 水田 (03-5-10トレンチ 北から)
 - (2) 第2-2面 水田 (06-23トレンチ 北東から)

- 図版52 遺構
 (1) 第2-3・2-4面 (03-5-8トレンチ 北東から)
 (2) 第2-3・2-4面 (03-5-9トレンチ 南東から)
- 図版53 遺構
 (1) 第2-2面 (06-2-2トレンチ 北から)
 (2) 第2-3面 (03-5-2トレンチ 西から)
- 図版54 遺構
 (1) 第2-4面 (03-5-10トレンチ 北から)
 (2) 第2-4面 水田 (03-5-10トレンチ 北東から)
- 図版55 遺構
 (1) 第2-4面 (03-5-2トレンチ 北から)
 (2) 第2-4面 (03-5-2トレンチ 東から)
- 図版56 遺構
 (1) 第2-3面 (03-5-4トレンチ 西から)
 (2) 第2-3面 (03-5-4トレンチ 北から)
- 図版57 遺構
 (1) 第2-3面 水田 (03-5-1トレンチ 東から)
 (2) 第2-3面 水田 (03-5-4トレンチ 西から)
 (3) 第2-3面 水田面の足跡 (03-5-1トレンチ 南から)
 (4) 第2-3面 槽溝 (03-5-1トレンチ 南東から)
 (5) 第2-4面 (03-5-1トレンチ 南東から)
- 図版58 遺構
 (1) 第2-3面 (03-5-5トレンチ 南西から)
 (2) 第2-3面 (03-5-6トレンチ 南から)
- 図版59 遺構
 (1) 第2-3面 (03-5-7トレンチ 南西から)
 (2) 第2-4面 (03-5-8トレンチ 北西から)
- 図版60 遺構
 (1) 第2-4面 木材集中 (03-5-8トレンチ 北から)
 (2) 第2-4面 木材集中 (03-5-8トレンチ 北から)
 (3) 第2-4面 遺物出土状況 (03-5-8トレンチ 南から)
 (4) 第2-4面 遺物出土状況 (03-5-8トレンチ 北から)
 (5) 第2-4面 (03-5-5トレンチ 南から)
- 図版61 遺構
 (1) 第2-4面 土坑82 (南東から)
 (2) 第2-4面 土坑83 (南から)
 (3) 第2-4面 土坑84 (北西から)
 (4) 第2-4面 土坑85・86 (南西から)
 (5) 第2-4面 土坑87 (南から)
- 図版62 遺構
 (1) 第3面 (03-5-6トレンチ 南から)
 (2) 第3面 (03-5-7トレンチ 南西から)
- 図版63 遺構
 (1) 第3面 (03-5-5トレンチ 南西から)
 (2) 第3面 (03-5-4トレンチ 南西から)
- 図版64 遺構
 (1) 近世面1・第0-1面 (03-5-5トレンチ 南東から)
 (2) 近世面1・第0-1面 (03-5-7トレンチ 南西から)
- 図版65 遺構
 (1) 近世面2・第0-2面 坪境 (03-5-6トレンチ 南から)
 (2) 近世面2・第0-2面 (03-5-7トレンチ 南西から)
- 図版66 遺構
 (1) 中世面1・第0-3面 (03-5-6トレンチ 南東から)
 (2) 中世面1・第0-3面 (03-5-7トレンチ 北東から)
- 図版67 遺構
 (1) 中世面2・第0-4面 溝33 (03-5-7トレンチ 西から)
 (2) 中世面2・第0-4面 溝33遺物出土状況 (03-5-7トレンチ 西から)
- 図版68 遺物 3・19・11・12・16・18・20・25
- 図版69 遺物 8・10・9・13・15
- 図版70 遺物 17・23・21・26・22・28・31・33・32・30
- 図版71 遺物 24・29・36・34・27
- 図版72 遺物 37・35・40・41・42・48・44・45・46・43
- 図版73 遺物 54・47・74・75・71・63・49・57・50・51
 52・55
- 図版74 遺物 59・56・60・58・53・61・62・64・65・66
- 図版75 遺物 67・69・68・76・78・72・77・70・73
- 図版76 遺物 80・86・88・90・83・85・87・118
- 図版77 遺物 79・81・82・84・91・92・95・89・93・94
- 図版78 遺物 96・98・97・99・100・101・103・102・105
 104・106・107・108・109
- 図版79 遺物 110・111・114・112・113・115・116・119
 120・117・121
- 図版80 遺物 124・123・125・122・126・127・128・129・
 130・131・132
- 図版81 遺物 133・145・146・138・137
- 図版82 遺物 136・148・156・157・139・134・147・165・
 166
- 図版83 遺物 135・140・141・142・143・144・151・152・
 153・154・155
- 図版84 遺物 158・159・167・164・168・160・161・162・
 163
- 図版85 遺物 171・175・177・187・169・170・172・183・
 213
- 図版86 遺物 198・199・203・204・205・200
- 図版87 遺物 173・174・176・178・179・180・181・185・
 182・186・184
- 図版88 遺物 201・202・206・207・208・209・210・211・
 212
- 図版89 遺物 218・234・219・215・216・217・220・221・
 222・223・224・225
- 図版90 遺物 226・227・228・229・230・231・233・235
- 図版91 遺物 232・238・257・236・237・239・240・241・
 242・243・244
- 図版92 遺物 245・246・247・248・249・250・251・253・
 255・252・254・256
- 図版93 遺物 258・259・260・261・262・263・264・268・
 269・270・271
- 図版94 遺物 267・275・276・272・274・277・273・278・
 279
- 図版95 遺物 280・283・281・286・282・290・292・288・
 289・291・296・293・294・295
- 図版96 遺物 298・287・299・300・301・302・308・307・
 310・305
- 図版97 遺物 306・309・303・304・332・330・331・334・
 333
- 図版98 遺物 312・313・315・318・326・327・324・325・
 328・329
- 図版99 遺物 314・316・317・319・321・320・322・323

国版100	造物	335 · 336 · 337 · 338 · 339 · 340 · 344 · 341 · 342 · 343 · 345	681 · 682
国版101	造物	347 · 348 · 350 · 351 · 349 · 352 · 353 · 354	677 · 674 · 670 · 679 · 680
国版102	造物	355 · 356 · 357 · 358 · 361 · 359 · 360 · 365 · 362 · 363 · 364	683 · 686 · 688 · 689 · 694 · 697 · 698 · 700 · 703 · 704 · 705
国版103	造物	346 · 369 · 374 · 375 · 372 · 373 · 404 · 405	684 · 685 · 687 · 690 · 692 · 691 · 693
国版104	造物	366 · 367 · 370 · 368 · 371 · 387 · 388 · 389 · 390 · 391 · 396 · 398 · 399 · 400	695 · 701 · 696 · 702 · 699 · 706 · 710 · 713 · 709 · 714
国版105	造物	401 · 402 · 403 · 407 · 408 · 406 · 409 · 410 · 411 · 412 · 413	707 · 708 · 711 · 712 · 715 · 716 · 717 · 718 · 719
国版106	造物	392 · 393 · 394 · 395 · 397 · 415 · 417 · 418 · 419	720 · 721 · 722 · 723 · 724 · 725 · 726 · 736
国版107	造物	425 · 423 · 424 · 429	727 · 728 · 729 · 730 · 731 · 732 · 733 · 734 · 735 · 738
国版108	造物	426 · 427 · 428	739 · 743 · 746
国版109	造物	430 · 420 · 421 · 416 · 422	737 · 768 · 782 · 791 · 767
国版110	造物	432 · 433 · 436 · 438 · 441 · 442 · 450	742 · 740 · 745 · 744 · 741 · 747 · 751 · 752 · 748 · 750 · 749
国版111	造物	431 · 439 · 440 · 434 · 437 · 435 · 447 · 448 · 443 · 444 · 449 · 455 · 456 · 458	766 · 770 · 771 · 769 · 772 · 773 · 774 · 775 · 776 · 777 · 778 · 779 · 780
国版112	造物	451 · 452 · 453 · 454 · 457 · 445 · 446	783 · 784 · 785 · 786 · 787 · 788 · 789 · 790
国版113	造物	459 · 461 · 462 · 465 · 466 · 468 · 469 · 471 · 472 · 473	794 · 795 · 796 · 803 · 798 · 799 · 800
国版114	造物	469 · 470 · 464 · 467 · 463 · 474 · 475 · 476 · 477 · 478 · 480 · 479 · 481 · 482 · 483	807 · 805 · 810
国版115	造物	474 · 494 · 495 · 496 · 500 · 503 · 504 · 505 · 511	797 · 801 · 802 · 804 · 806 · 808 · 809 · 814 · 821 · 823 · 826 · 827
国版116	造物	499 · 498 · 497 · 501 · 502 · 506 · 507 · 508 · 509 · 510	811 · 812 · 815 · 816 · 813 · 817 · 818 · 819
国版117	造物	515 · 527 · 528 · 529 · 530 · 531 · 533 · 535	820 · 822 · 824 · 825 · 828 · 829 · 830 · 831
国版118	造物	512 · 513 · 514 · 516 · 522 · 526 · 525 · 523 · 524	833 · 835 · 838 · 839 · 841 · 847 · 849 · 855 · 859
国版119	造物	517 · 518 · 519 · 520 · 521 · 534 · 540 · 536 · 532 · 541 · 537 · 542	843 · 844 · 851
国版120	造物	538 · 539 · 543 · 545 · 549 · 551 · 554 · 555	832 · 834 · 836 · 837 · 840 · 842 · 845 · 846 · 848 · 850
国版121	造物	557 · 561 · 563 · 565 · 566 · 567 · 568 · 569	852 · 853 · 854 · 856 · 857 · 858 · 859 · 860 · 861 · 862 · 863
国版122	造物	570 · 571 · 575 · 586 · 574	864 · 865 · 866 · 868 · 870
国版123	造物	544 · 548 · 546 · 550 · 547 · 552 · 553 · 556 · 558 · 559 · 560 · 562 · 564	869 · 871 · 874 · 876 · 877 · 878 · 879 · 880 · 883
国版124	造物	587 · 572 · 573 · 579 · 583 · 580 · 576 · 581 · 577 · 578 · 582	867 · 881 · 882 · 875 · 889 · 884
国版125	造物	600 · 601 · 588 · 589 · 585 · 590 · 591 · 592 · 593	885 · 886 · 888 · 893 · 894 · 895 · 896 · 897
国版126	造物	594 · 598 · 596 · 597 · 595 · 599 · 603 · 605	890 · 891 · 892 · 906 · 887
国版127	造物	602 · 607 · 604 · 606 · 609 · 614 · 610 · 611 · 615	900 · 901 · 910 · 913 · 909 · 911 · 914
国版128	造物	612 · 617 · 620 · 616 · 618 · 621 · 625 · 627	902 · 903 · 904 · 905 · 907 · 908 · 912 · 915 · 916 · 917 · 918
国版129	造物	608 · 613 · 619 · 622 · 623 · 624 · 626 · 636 · 637	920 · 922 · 926 · 928 · 929 · 933 · 934 · 937 · 938 · 943 · 944
国版130	造物	628 · 629 · 630 · 632 · 633 · 638 · 634 · 631 · 635	919 · 921 · 923 · 924 · 925 · 927 · 931 · 930 · 932 · 936
国版131	造物	639 · 640 · 641 · 650 · 655 · 656 · 665	930 · 952 · 953 · 954 · 947 · 955 · 960
国版132	造物	642 · 644 · 643 · 645 · 646 · 647 · 648 · 649 · 651 · 652 · 653 · 654	935 · 939 · 940 · 941 · 942 · 945 · 946 · 948 · 949 · 950 · 951
国版133	造物	657 · 658 · 659 · 660 · 661 · 662 · 663 · 664 · 672 · 675	957 · 958 · 959 · 961 · 966 · 969 · 973 · 978 · 981 · 992
国版134	造物	666 · 667 · 668 · 669 · 671 · 673 · 676 · 678 ·	956 · 962 · 963 · 964 · 965 · 967 · 968
			976 · 975 · 989 · 970 · 971 · 974 · 972
			977 · 979 · 982 · 983 · 984 · 980 · 987 · 986 · 988 · 985 · 990 · 991 · 993 · 994 · 995 · 996

图版171	遗物	997 · 998 · 999 · 1001 · 1002 · 1003 · 1004 · 1005 · 1010 · 1011 · 1012 · 1014	图版196	遗物	1260 · 1262 · 1263 · 1264 · 1265 · 1266 · 1269 · 1267 · 1270 · 1273 · 1277
图版172	遗物	1015 · 1021 · 1022 · 1023 · 1027 · 1030 · 1031 · 1032 · 1033 · 1034	图版197	遗物	1275 · 1276 · 1280 · 1282 · 1283 · 1278 · 1284 · 1285 · 1286
图版173	遗物	1000 · 1006 · 1007 · 1008 · 1009 · 1013 · 1016 · 1017 · 1018 · 1019 · 1020 · 1024 · 1025 · 1026 · 1028 · 1029	图版198	遗物	1287 · 1288 · 1290 · 1291 · 1292 · 1294 · 1295 · 1296 · 1297
图版174	遗物	1035 · 1036 · 1038 · 1042 · 1043 · 1045 · 1046 · 1047 · 1048	图版199	遗物	1279 · 1281 · 1289 · 1293 · 1299 · 1302 · 1303
图版175	遗物	1037 · 1039 · 1040 · 1041 · 1044 · 1050 · 1051 · 1053 · 1054 · 1056 · 1058 · 1063 · 1065 · 1066	图版200	遗物	1298 · 1300 · 1301 · 1304 · 1306 · 1307 · 1308 · 1310
图版176	遗物	1049 · 1052 · 1055 · 1057 · 1059 · 1060 · 1061 · 1062 · 1064	图版201	遗物	1311 · 1312 · 1313 · 1317 · 1305 · 1309 · 1318 · 1321 · 1319 · 1320
图版177	遗物	1069 · 1075 · 1079 · 1082 · 1087 · 1089 · 1097 · 1099	图版202	遗物	1314 · 1315 · 1316
图版178	遗物	1067 · 1068 · 1070 · 1075 · 1071 · 1072 · 1073 · 1074 · 1078 · 1077	图版203	遗物	1322 · 1324 · 1327 · 1329 · 1333 · 1331 · 1334 · 1338 · 1341 · 1343 · 1344
图版179	遗物	1080 · 1081 · 1083 · 1084 · 1085 · 1086 · 1088 · 1091 · 1096 · 1090 · 1092 · 1098	图版204	遗物	1323 · 1325 · 1326 · 1328 · 1330 · 1332 · 1333 · 1336
图版180	遗物	1093 · 1094 · 1095 · 1100	图版205	遗物	1337 · 1339 · 1340 · 1342 · 1346 · 1345
图版181	遗物	1104 · 1105	图版206	遗物	1346 · 1347 · 1348 · 1349
图版182	遗物	1101 · 1102 · 1103 · 1107 · 1108 · 1109 · 1110 · 1111 · 1112	图版207	遗物	1350 · 1351 · 1353 · 1354 · 1355 · 1356 · 1358 · 1361 · 1362
图版183	遗物	1106 · 1115 · 1113 · 1116 · 1114 · 1120	图版208	遗物	1352 · 1357 · 1359 · 1360 · 1363 · 1365 · 1366 · 1367 · 1364 · 1368
图版184	遗物	1125 · 1133 · 1142 · 1157 · 1160 · 1154 · 1156 · 1135 · 1187	图版209	遗物	1369 · 1373 · 1377 · 1379 · 1388 · 1451 · 1455
图版185	遗物	1117 · 1118 · 1119 · 1121 · 1122 · 1123 · 1124 · 1126 · 1127 · 1129 · 1128 · 1130 · 1131	图版210	遗物	1370 · 1371 · 1372 · 1374 · 1375 · 1376 · 1378 · 1382 · 1380 · 1381 · 1383 · 1386 · 1387 · 1384 · 1385 · 1389
图版186	遗物	1132 · 1133 · 1134 · 1136 · 1137 · 1138 · 1139 · 1140 · 1141 · 1143 · 1158	图版211	遗物	1391 · 1390 · 1392 · 1393 · 1394 · 1395 · 1396 · 1397
图版187	遗物	1144 · 1145 · 1146 · 1147 · 1148 · 1149 · 1150 · 1151 · 1152 · 1153 · 1155 · 1161 · 1159	图版212	遗物	1398 · 1399
图版188	遗物	1162 · 1163 · 1164 · 1165 · 1166 · 1167 · 1168 · 1169 · 1170 · 1174 · 1171 · 1172 · 1173	图版213	遗物	1400 · 1401 · 1402 · 1403 · 1404 · 1405 · 1406 · 1407 · 1407 · 1408
图版189	遗物	1175 · 1176 · 1180 · 1177 · 1178 · 1179 · 1181 · 1182 · 1183 · 1185 · 1186 · 1193 · 1194	图版214	遗物	1409 · 1410 · 1411 · 1412 · 1413 · 1414 · 1415 · 1416 · 1417 · 1418 · 1419 · 1420 · 1421 · 1422
图版190	遗物	1184	图版215	遗物	1423 · 1424 · 1425 · 1426 · 1427 · 1428 · 1429 · 1430 · 1431 · 1432 · 1433 · 1434 · 1435 · 1436 · 1437 · 1438
图版191	遗物	1188 · 1189 · 1190 · 1191 · 1192 · 1195 · 1196 · 1197 · 1198 · 1199 · 1200 · 1201 · 1202 · 1203 · 1204 · 1205 · 1206 · 1207 · 1208 · 1209 · 1210 · 1211 · 1212 · 1213 · 1214 · 1215 · 1216	图版216	遗物	1439 · 1440 · 1441 · 1442 · 1443 · 1444 · 1445 · 1446 · 1452 · 1447 · 1448 · 1450
图版192	遗物	1217 · 1218 · 1221 · 1225 · 1226 · 1228 · 1234 · 1235 · 1236 · 1240 · 1241 · 1242	图版217	遗物	1449 · 1454 · 1453 · 1456 · 1457
图版193	遗物	1244 · 1251 · 1252 · 1253 · 1256 · 1257 · 1259 · 1261 · 1268 · 1271 · 1272 · 1274	图版218	遗物	1458 · 1460 · 1459 · 1461 · 1462 · 1463 · 1464 · 1465 · 1466
图版194	遗物	1219 · 1220 · 1222 · 1223 · 1224 · 1227 · 1229 · 1230 · 1231 · 1232 · 1233 · 1237	图版219	遗物	1467 · 1468 · 1469 · 1470 · 1471 · 1472 · 1473 · 1474 · 1475 · 1476 · 1477
图版195	遗物	1238 · 1239 · 1245 · 1243 · 1246 · 1247 · 1248 · 1249 · 1254 · 1250 · 1255 · 1258	图版220	遗物	1478 · 1479 · 1480 · 1481 · 1482 · 1483 · 1484 · 1485 · 1486 · 1487 · 1488 · 1489 · 1490 · 1491 · 1492
			图版221	遗物	1493 · 1494 · 1495 · 1496 · 1497 · 1498 · 1499
			图版222	遗物	1500 · 1501 · 1502 · 1503 · 1504 · 1505 · 1507 · 1509 · 1506 · 1510 · 1508
			图版223	遗物	1512 · 1513 · 1514 · 1515 · 1516 · 1517 · 1518 · 1519 · 1521 · 1524 · 1525 · 1529

图版224	造物	1511·1520·1522·1523·1526·1530· 1531·1532·1533·1534·1535·1536	1881·1884·1885
图版225	造物	1527·1528·1537·1538·1539	1870·1875·1882·1896·1897·1901· 1883·1903·1904·1905
图版226	造物	1625·1626·1632·1640·1641·1642· 1643·1644·1650	1889·1898·1900·1894·1895·1902· 1904·1906·1907·1908·1909·1910· 1911
图版227	造物	1616·1617·1618·1619·1620·1621· 1622·1623·1624·1627·1628·1629· 1630·1631·1633·1634·1635·1636· 1637·1638	1912·1913·1914·1916·1915·1919· 1917·1918·1920·1921·1922·1923
图版228	造物	1639·1645·1646·1647·1648·1649· 1651·1652	1930·1936·1939·1954·1924·1925· 1926·1927
图版229	造物	1654·1656·1657·1658·1659·1660· 1661·1662·1665·1664·1663·1666	1932·1933·1928·1929·1934·1931· 1933·1937·1940·1942·1941·1944· 1938·1943·1945
图版230	造物	1653·1655·1669·1671·1672	1961·1965·1967·1969·1972·1973· 1974·2016·2036
图版231	造物	1674·1677·1678·1681·1682·1683· 1684·1685	1955·1956·1957·1958·1959·1961· 1960·1962·1963·1966·1967·1968· 1970·1971·1975
图版232	造物	1670·1675·1673·1679·1676·1680	2015·2017·2018·2021·2019·2020· 2022·2023·2024·2025·2023·2027· 2028·2029·2030·2031·2032·2033· 2034·2035
图版233	造物	1688·1693·1696·1697·1699·1701· 1702·1704	2037·2038·2039·2040·2041·2042· 2043·2044·2047·2048·2049·2050· 2051
图版234	造物	1695·1708·1687·1689·1891·1686· 1690	2056·2063·2065·2069·2073·2070· 2077·2088·2094
图版235	造物	1692·1698·1700·1694·1703·1706· 1705·1709·1707	2057·2058·2059·2060·2061·2062· 2064·2066·2067·2068·2071·2072· 2075·2076·2078·2079
图版236	造物	1718·1721·1722·1726·1727·1732· 1733·1734	2082·2083·2084·2085·2086·2087· 2091·2092·2093·2089·2093·2095· 2096·2097·2098·2099·2100·2104· 2105
图版237	造物	1715·1717·1720·1716·1719·1723· 1724·1729·1730·1725·1731·1728· 1735	2102·2103·2101·2106·2107·2108· 2109
图版238	造物	1744·1745·1750·1759·1749·1765· 1775·1776	2112·2111·2074·2081·2080·2110
图版239	造物	1739·1740·1741·1742·1743·1746· 1747·1748·1751·1753·1755·1756· 1754·1757·1752·1758	2046·781·2045·898
图版240	造物	1760·1761·1762·1764·1766·1763· 1767·1768·1769·1770·1771·1772· 1773·1774	1542·1540·899·584·1544·1668· 1545
图版241	造物	1777·1779·1782·1783·1792·1795· 1819·1866·1868·1869	1543·1541
图版242	造物	1780·1781·1784·1785·1786·1787· 1788·1789·1790·1791·1793·1794· 1796·1797·1798·1799·1800·1801	1546·1547·1548·1555·1554·1553· 484·377·2117·2121·1556·378·2118· 2119·2122·1557·379·2120·2123
图版243	造物	1802·1803·1804·1805·1806·1807· 1808·1809·1810·1811·1812·1813· 1814·1815·1816·1817·1818·1819· 1820·1821·1822·1823·1824·1825· 1826·1827·1828	266·285·1549·1550·1551·380·381· 1552·2115·382·265·1888
图版244	造物	1829·1830·1831·1832·1833·1834· 1835·1836·1837·1838·1839·1840· 1841·1842·1843·1844·1845·1846· 1847·1848·1849·1850·1851·1852· 1853	2124~2523
图版245	造物	1854·1855·1856·1857·1858·1859· 1861·1863·1860·1862	2524·2902
图版246	造物	1864·1865·1867·1871·1872·1873· 1874·1876·1878·1877·1879·1880·	1581·1979·1950·150·1985·1978· 384·385
图版247	造物		386·1980·1889·1948·1946·1738· 1947·1585·2055·39·1981
图版248	造物		1983·2054·1984·1951·297
图版249	造物		1949·1982·1586·1890·284
图版250	造物		414·1587·1992·1995

图版273	遗物	1886·1977·1976·1887·2903	1997
图版274	遗物	149·1558·2052·1667·2116·793·1559·1560	2010·2014·2002·1999
图版275	遗物	1561	图版315 遗物 2114·2113·311
图版276	遗物	1·2053·1571·757	图版316 遗物 1611·1612·1613·1614·1615
图版277	遗物	2904·1565·1567	图版317 遗物 2001·2013·1998
图版278	遗物	376·1569·2905·1568·1563·1564·1565·2906	图版318 遗物 3003·3004·3005·3006·3007·3008·3009·3010
图版279	遗物	754·2907·2908·1893·2909·2910	图版319 遗物 3011·3012·3013
图版280	遗物	2911·2912·2913·2914·2915·2916·2917·2918	图版320 遗物 3014·3015·3016·3018·3019
图版281	遗物	383·1583	
图版282	遗物	756·1581	
图版283	遗物	1714·1582·1580	
图版284	遗物	214·792	
图版285	遗物	485·1572·1737·1570	
图版286	遗物	1736·1891·1579·1573·1892	
图版287	遗物	1712·1778	
图版288	遗物	1578·873·1711·755·753	
图版289	遗物	1577·1574·1562·1713·1576·2919·2920·2921·2922·2923	
图版290	遗物	38·1952·1953·1993·1987·1990·1889·1988·1886·1991·1994·2924·2925·2926·2927·2928·2929·2930·2931·2932·2933·2934·2935·2936·2937·2938	
图版291	遗物	2939·2940·2941·2942·2943·2944·2945·2946·2947·2948·2949·2950·2951·2952·2953·2954·2955·2956·2957·2958·2959·2960·2961·2962·2963·2964·2965·2966·2967·2968	
图版292	遗物	1710·1575·2969·2970·2971·2972·2973·2974·2975·2976·2977·2978	
图版293	遗物	2979·2980·2981·2982·2983·2984	
图版294	遗物	2985·2986·2987·2988·2989·2990·2991	
图版295	遗物	2992·2993·2994·2995	
图版296	遗物	2·7·14·4·5·6	
图版297	遗物	486·489·490	
图版298	遗物	493·487	
图版299	遗物	492·491·488	
图版300	遗物	760	
图版301	遗物	761·762·759·763	
图版302	遗物	758·872·1605·1593·1592·1604	
图版303	遗物	765·1609·764	
图版304	遗物	1588·1597·1589·1610	
图版305	遗物	1601·1602·1590·1603	
图版306	遗物	1606·1595·1594	
图版307	遗物	1598·1599·1600·1596·1591	
图版308	遗物	1607·1608	
图版309	遗物	188·189·190·191	
图版310	遗物	192·193·194·195·196·197	
图版311	遗物	2003·2011·2012	
图版312	遗物	2000·2004	
图版313	遗物	2005·2006·2007·2008·2009·1996·	

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

大阪府北部地域と京都府南部地域を結ぶ交通は、古来より主要な幹線経路のひとつであったが、物流の根幹を自動車輸送が担う現代社会においては、既設の道路は渋滞が慢性化し、効率的な物流を妨げていた。国ならびに日本道路公团（現・西日本高速道路株式会社）はその対策の一環として、第二京阪道路の新設などの事業を計画し、推進している。新設される第二京阪道路計画路線内には周知の埋蔵文化財包蔵地が多数含まれており、その取り扱いについては事業者である国土交通省、日本道路公团と、工事の届出を受けた大阪府教育委員会の間で協議が進められ、建設工事に先立つ埋蔵文化財の確認調査ならびに発掘調査実施の指示がなされることとなった。この指示に従い、平成8年度に実施した門真市三ツ島遺跡の確認調査以降、財團法人大阪府文化財センターが順次、発掘調査を実施している。

本書報告範囲を含む、讚良郡条里遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、平成12年度から平成14年度にかけて確認調査を実施した。おおむね路線全域において造構、遺物の広がりが確認されるという結果を受け、遺跡範囲北東側より順次、全面調査に着手することとなった。本書において報告する讚良郡条里遺跡03-5・06-2調査については、平成13年度に実施された確認調査（確認その2・その3）の結果を受けて、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所を事業者とし、平成15年度から平成17年度の3箇年度にわたる全面調査を03-5調査として実施することとなった。また当初の予定範囲内でありながら、その間に調査に着手できなかった部分については、06-2調査として平成18年度に実施することとなった。

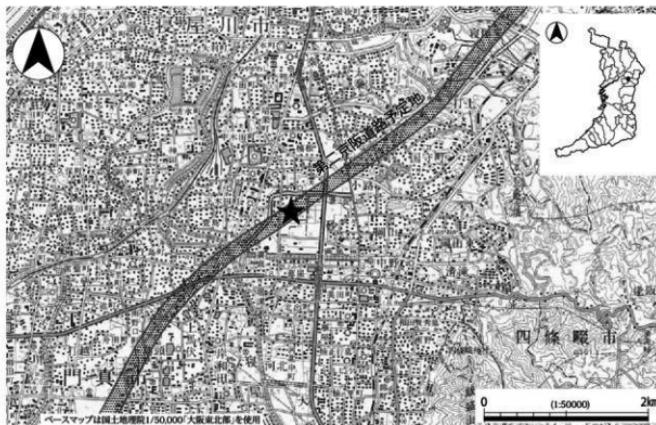


図1 調査地の位置

第2節 調査の経過

現地での発掘調査は、平成15年4月1日から平成19年3月31日にわたる4本の受託契約において実施し、平成17年度からは平成18年度には遺物整理事業も一部並行して実施した。平成19年4月1日から平成20年3月31日にわたる受託契約においては、遺物整理事業と報告書作成事業を実施した。また平成20年4月1日から平成21年3月31日にわたる受託契約において、印刷・製本を含む報告書作成業務を継続し、平成21年3月、本書の刊行をもって、讃良郡条里遺跡03-5・06-2調査にかかる一連の業務を完了した。

今回の讃良郡条里遺跡03-5・06-2調査は4年間にわたる長期のものとなった。ここでは各年度の経過を簡単に記載しておきたい。

03-5調査は当初、平成15年度から平成17年度にわたる期間を予定し、調査範囲全体を10ヶ所の調査区に分割し、順次調査を進めることとした。

平成15年度は1～3トレンチの調査を実施した。1トレンチは平成15年8月21日、機械掘削に着手、平成16年1月21日、調査を終了した。2トレンチは平成15年12月9日、機械掘削に着手、平成16年4月14日、調査を終了した。3トレンチは平成15年11月4日、機械掘削に着手、12月26日、調査を終了した。

平成16年度は4～7トレンチの調査を実施した。4トレンチは平成16年3月26日、機械掘削に着手、8月5日、調査を終了した。5トレンチは平成16年7月12日、機械掘削に着手、11月30日、調査を終了した。7トレンチは平成16年9月15日、機械掘削に着手、平成16年3月1日、調査を終了した。6トレンチは平成16年12月10日、機械掘削に着手、平成17年4月25日、調査を終了した。

平成17年度は8～10トレンチの調査を実施した。9トレンチは平成17年3月25日、機械掘削に着手、7月27日、調査を終了した。8トレンチは平成17年4月14日、機械掘削に着手、8月3日、調査を終了した。10トレンチは平成17年6月29日、機械掘削に着手、9月26日、調査を終了した。

03-5調査においては諸処の要因により未調査の範囲がのこされたが、平成18年度に道路本体工事と併行して、06-2調査としてこれらの範囲についての調査を実施した。4ヶ所の調査区を設定したが、本体工事との調整の結果、断続的な調査となった。1トレンチは平成18年9月11日、機械掘削に着手、10月26日、調査を終了した。2トレンチは平成18年8月30日、機械掘削に着手、10月26日、調査を終了した。3トレンチは平成18年11月20日、機械掘削に着手、12月27日、調査を終了した。4トレンチは平成19年1月15日、機械掘削に着手、2月21日、調査を終了した。

調査期間中には現地公開などを実施しえなかったが、調査終了後の平成17年10月15日に開催された讃良郡条里遺跡03-4・03-6調査の現地公開に際し、出土遺物の展示を現地にて行った。また同年11月19日から11月23日の期間、寝屋川市民会館を会場に開催した「北河内発掘！縁立道に歴史わきたつ 第二京阪道路内遺跡の発掘調査成果展」において、調査写真や出土遺物多数を展示し、調査成果の公開と普及に努めた。

現地調査終了後、平成17年10月から平成18年3月までの間、調査資料、出土遺物の基礎整理作業を京阪調査事務所整理棟において実施した。平成18年度は06-2調査と並行して、遺物整理作業を進め、平成19～20年度は京阪調査事務所整理棟より名称が変更となった京阪調査事務所寝屋川分室において、遺物整理作業と報告書作成作業を実施した。平成20年9月末日をもって作成作業、資料収納作業を終了し、報告書の印刷・製本を行った。

第2章 讀良郡条里遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大阪府埋蔵文化財分布図に記された讀良郡条里遺跡の範囲は、現地表面に条里型地割が良好に残存する、南北2.5km、東西1.5kmにわたる広大なもので、大阪府寝屋川市から四條畷市にかけて所在する。広い遺跡範囲の中には多くの字名を有するが、本書において報告する、讀良郡条里遺跡03-5・06-2調査地は寝屋川市新家に所在する。讀良郡条里遺跡の範囲内では南西寄りに位置することとなる。

讀良郡条里遺跡の地形環境については既刊の報告書において詳述されているので（井上2008）、一部を引用し、03-5・06-2調査地の地形環境を概観しておきたい。讀良郡条里遺跡の範囲には、遺跡東寄りの沖積扇状地面から遺跡西寄りの後背湿地といった多様な地形がみられるが、03-5・06-2調査地はほぼ全域が後背湿地域に含まれている。現地表面の標高はT.P.+3m前後を測り、遺跡範囲内でも最も標高の低い部分といえる。現代の盛土がなされたところ以外では、ほぼ水田として利用されており、近接して小面積ではあるが蓮根畑も残されている。調査地の東方は03-4調査区付近から扇状地地形となり、北側には讀良川によって形成されたと考えられる高まり、南側には岡部川によって形成された高まりがあり、それらに囲まれた低い部分に位置している。南北両河川により形成されたと考えられる高まりは「新期の扇状地ロープ・自然堤防」とされており、讀良川のものは中世末～近世始め以降に、岡部川のものは平安時代末頃を始まりとし、中世末～近世に形成されたものと考えられている。調査範囲においても、讀良川により形成された自然堤防を構成すると思われる堆積層が認められ、北東寄りに厚く、南西寄りに薄い砂層を確認した。この砂層以下、およそ中世に帰属すると考えられる層準においても泥質の層が厚くみられ、後背湿地という地形環境は少なくとも中世にまでさかのぼるものと推測する。

調査中においてもたびたび経験することとなったが、降雨による冠水後の復旧に苦慮するような状況が、中世以降の土地利用にも大きな制約となっていたものと推測する。

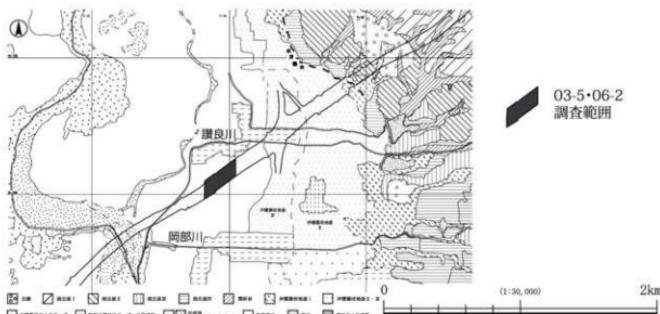


図2 地形分類図（井上2008図6を縮小・加筆）

第2節 歴史的環境

讃良郡条里遺跡の位置する北河内地域では近年、大規模開発による埋蔵文化財の発掘調査事例も増加し、とりわけ第二京阪道路の建設に伴う事前調査により各時代の多様な調査成果が蓄積されつつある。それ以前の調査事例も含めた周辺地域の歴史環境については、第二京阪道路関連の発掘調査報告書において詳細に整理されているので（市本2006など）、逐一繰り返すことは避け、今回の調査地における中心的な調査成果である古墳時代の様相を中心に整理しておきたい。

古墳時代前期の集落構についていまだ様相の不明な部分が多い。弥生時代中期段階の寝屋川市高宮八丁遺跡や四條畷市雁屋遺跡のような拠点的な集落は認められず、讃良郡条里遺跡03-1調査において確認された竪穴建物、掘立柱建物、井戸などを小規模な溝で区画する居住域といった単位が散在する可

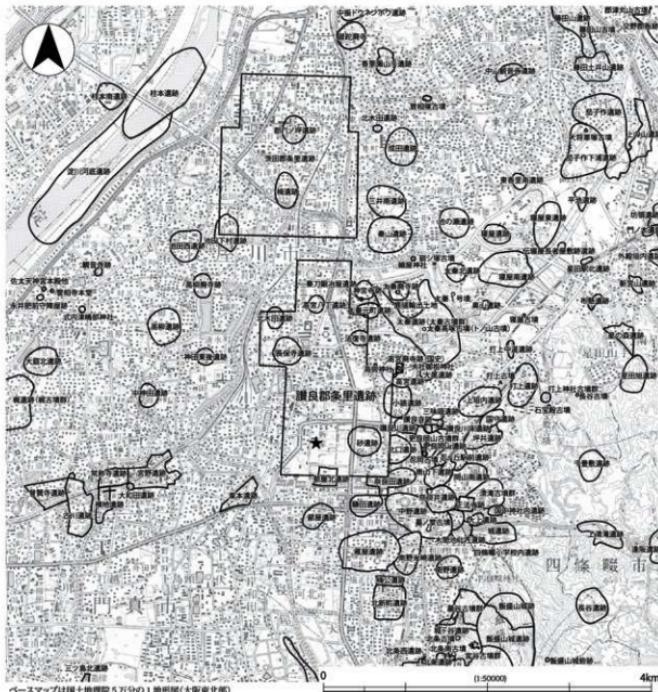


図3 周辺遺跡分布図

能性がある。近接する小路遺跡において前方後方形のものを含む周溝墓群が調査されており関連も想起されるが、一方で全長87mという規模の前方後円墳である四條畷市忍ヶ丘古墳も築造されており、その被葬者の居住域にふさわしい中心的な集落については今のところ候補を見出すことができない。

古墳時代中期には集落の形成は活況を呈するようになる。高宮遺跡では丘陵の斜面から堅穴建物が29棟検出され、斜面地を造成することで居住域を確保した様相が認められる。方形のプランをとり、竈を有する建物が大半を占める。出土遺物については現在整理作業中であるが、韓式系土器や初期須恵器、鉄艇といった特徴的な遺物がみられるようである。詳細な時期の比較はなしえないが、同じ頃かやや後れて四條畷市郡屋北遺跡、長保寺遺跡、楠遺跡といった、低地部においても集落の形成が始まるようである。郡屋北遺跡については今回の調査地との関係が深いと考えられるので、項を別けて整理したい。長保寺遺跡では規模の大きい流路に接して居住域が形成されたようで、井戸側に準構造船の部材や倉庫の扉板といった転用材を用いる井戸が確認されている。また移動式竈やU字形板状土器製品、韓式系土器、ウマ遺体といったような特徴的な遺物を含む、多量の遺物が流路内に投棄されている。倉庫の扉に関してはやはり井戸側に使用された例であるが、大東市北新町遺跡において建具一式を伴う出土例がある。ウマに関しては四條畷市城の扇状地上から多くの遺構、遺物の出土をみる。古墳時代中期の中野遺跡、鎌田遺跡、岡山南遺跡、中期から後期にかけての奈良井遺跡などが多く知られている。ウマ遺体の出土状態としては、流路、溝などに投棄されたようなものもあれば、井戸や祭祀場と目される周溝状遺構などにおいて祭祀に供されたものもあると考えられる。いずれの遺跡からも製塙土器が多量に出土しており、製塙作業自体も周辺地域で行われた可能性が指摘される。いわゆる首長系譜とされる前方後円墳は前期以降継続しないが、太秦古墳群では初期群集墳と目される一群が調査され、これまでに28基の古墳が確認されている。また近接して直径37m規模の造出付円墳の太秦高塚古墳が築造される。

古墳時代後期には郡屋北遺跡では依然、多くの掘立柱建物が営まれるが、周辺地域での集落の様相は不明瞭となる。低地部分では高宮八丁遺跡や長保寺遺跡なども継続するようであるが、飛鳥時代以降には丘陵上に堅穴建物、掘立柱建物が営まれ、高宮遺跡、大尾遺跡、太秦遺跡、寝屋東遺跡、寝屋南遺跡などにおいて確認されている。後期古墳としては寝屋古墳、四條畷市大上2号墳などが知られるが、極めて散漫な分布を示し、横穴式石室の確認例が極めて少ない地域として認識される。

第3節 既往の調査成果と郡屋北遺跡

今回の調査地においては平成13年度に2次にわたる確認調査が実施され、その成果が報告されている（清水2003・黒須2003）。讃良郡条里遺跡（確認その2）①～③調査区と、（確認その3）第①～第③トレントチが今回の調査範囲内に位置している。報告書では確認調査位置の記載と、調査区名称に混乱があるようで、その成果を今回の調査成果と直接対照することは困難であるが、おおよその地形環境の変遷と確認調査担当者による土地利用についての予測を念頭に本調査に臨むこととなった。確認調査の成果からは今回の調査範囲が絶して低湿な堆積環境にあったという点、最下位で確認された縄文海進期の海成層以降の多くの層準が認められる点、その中でも弥生時代と考えられる水田、古墳時代後期の土坑以外には顕著な遺構が認められない点、全体的に遺物の出土量が希薄であるという点が示され、これらに留意することとなった。確認調査は現地表面以下5mまでを対象としたが、上記成果を受け、本調査では現地表から約2m程度の古墳時代の遺構面、さらにはその下層に存在する弥生時代の遺構面をおおむねの調査対象とする指示がなされた。

確認調査の実施時期と併行して大阪府教育委員会により藤屋北遺跡の調査が進められた。藤屋北遺跡は当初、譲良郡条里遺跡の一部として周知されていたが、調査成果に鑑み、改めて藤屋北遺跡として範囲が設定・周知された。平成12年に実施された確認調査を受け、平成13年度に調査が実施されたH地区は、木製の輪鉸の出土がみられ注目されたが、今回の調査範囲から南に200mの至近に位置する調査区である。その後、なわて水環境保全センター建設に伴う大規模な調査が平成18年度まで続けられ、興味深い調査成果が明らかになりつつある。

現在、正報告書の作成作業中ということであり、既刊の概要報告書により提示された成果を概観するにとどまるが、古墳時代中期～後期の遺構面では、集落形成の初期にあたるTK73型式段階には方形周溝状の墳墓と考えられる遺構がみられ、以降、堅穴建物、掘立柱建物、井戸といった居住域を構成する遺構が多数、重なって営まれる。低湿な地形環境であることも反映するが、掘立柱建物には柱根がそのまま残存する形で廃絶されたものが多数みられ、建物の建替えにかかわる具体的な行為を知ることができる。居住域各所に営まれる井戸には井戸側に準構造船の材を転用したもののや、井桁状の井戸枠を持つもののが含まれ、内部より多数の遺物の出土もみる。また居住域の一角にウマ遺体全身を収めた埋葬土坑があり、各所で出土するウマ遺体とも併せて馬飼集団の居住域という集落の性格を示唆する遺構とされている。集落の西端を画するとされる南北方向の大溝を中心に多量の遺物が出土しているが、馬具（木製鞍、木製輪鉸・鉄製轡）、製塙土器、ウマ遺体といったウマの飼育にかかわる遺物や、製鉄や玉作といった手工業生産にかかわる遺物、初期須恵器や百済系の韓式系土器、竈の付属具たるU字形板状土製品といった、居住集団の出自や集落の機能にかかわる可能性のある遺物などの出土が特徴的である。この大溝が本書において報告する流路1とながる可能性があるなど、本書における報告内容とも深くかかわる様相が多く認められる。一方で5世紀代の重要な調査成果の影に埋もれがちではあるが、6世紀代に帰属する居住遺構、遺物も多くみられることは、6世紀後半まで居住域として活発に利用されていることを示しているが、この点は本書報告内容と異なる様相であり、注目される。これらの調査成果を総合的に捉えることで、周辺地域における古墳時代の様相把握は飛躍的に進むものとおもわれる。



図4 譲良郡条里遺跡（本書報告範囲）と藤屋北遺跡（s=1/10000）

第3章 調査の方法

今回の調査および整理作業・報告書作成は、(財)大阪府文化財センター作成の「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】」および、その後の追加修正指示に則って実施した。

調査単位

本書において報告する範囲は、事業者からの受託事業名称を「讚良郡条里遺跡（6）」とするもので、当初、平成15年度～17年度の期間で実施する予定であった。この調査については調査名として「讚良郡条里遺跡03-5」が付され、調査に当たったが、実際の調査実施に際しては、作業ヤード、残土置場、進入路などの諸条件を勘案して、10箇所の単位（トレンチ）に細分し、順次作業を進めることとした。平成15年度には1～3トレンチ、平成16年度には4～7トレンチ、平成17年度には8～10トレンチの調査をそれぞれ実施した。平成17年度の工期末段階で、進入路や代替地の関係で着手承諾が取れなかつた範囲などが未調査区として残されたが、この部分の調査を道路本体工事と併行して平成18年度に実施することとなった。この調査については「讚良郡条里遺跡06-2」という調査名が付されたが、やはり現地の状況を勘案して4ヶ所のトレンチ（1～4トレンチ）に細分し、調査を進めた。したがって、調査名としては2本、調査区の細分としては14ヶ所の単位を包括することとなった。

地区割

全体の調査範囲を世界測地系（測地成果2000）第VI系国土地標に基づく10m×10mの区画に分割し、原則的にこれを単位として地区呼称、ならびに遺物の取り上げを行った。区画の設定方法については図5に示した。今回の報告範囲においては、第I区画は「I-6」、第II区画は「15」及び「16」に含まれる（図6）。調査マニュアルには10m×10mの区画である第IV区画より細かい区画として第V区画、第VI区画の設定方法があるが、今回の調査においては使用していない。

遺構名・遺構番号

調査において検出した遺構のうち、遺物の出土をみたもの、個別の記録を作成したものなど、遺構個々の特定が必要となるものについては遺構番号を付した。複数のトレンチを同時に並行して調査する状況が生じたため、遺構番号はトレンチごとの通し番号とした。この結果、流路など複数のトレンチにまたがる遺構については、同一の遺構でありながら、トレンチごとに異なる遺構番号が付される状況も生じた。このような状況も勘案し、本書における報告に際しては、遺構種別ごとに番号を付け直すこととした。本書における遺構名称・番号と調査時の遺構番号との対応は、本書巻末に掲載する遺構一覧表において示すこととした。

掘削

確認調査の成果を受け、本調査に着手することとなつたが、厳密な遺構面の評価がなされている状況ではなかったため、調査の進捗に併せて機械掘削、ならびに人力掘削の深度を変更した。機械掘削については、現代の盛土・作土以下、調査範囲西半分では中世段階と想定される層までを対象としたが、ト

レンチごとに細部は異なる。調査範囲東半分では中世段階以降の遺構面が確認される部分においては近世の層までを対象とした。いずれも重機を用いて慎重に掘削をおこなった。人力掘削深度についてはトレーニングごとに大阪府教育委員会の立会い指導を受け、その指示に従った。03-5-1トレーニング（以下、トレーニングを省略）においては西半分を第2-4面まで、東半分を第2-2面までを調査の対象とした。03-5-2では第2-4面、03-5-3では第1面流路1の埋土途中までを対象とした。03-5-4～03-5-8では第3面までを対象とした。03-5-9においては第2面までを対象とした。03-5-10では第2-4面までを対象とした。06-2-1～06-2-2では第2-1面まで、06-2-3では第2-2面まで、06-2-4では第1面までを掘削の対象とした。なお、今回の調査においては鋼矢板などの土留め工を行えなかったため、調査時における安全確保の観点から、調査区周囲ならびに個々のトレーニングの壁面を、高さ1に対して幅2の割合の勾配をとって掘削した。その掘りしろ部分については未掘削のまま残されたか、あるいは不十分な調査となった。また同様の理由により、03-5-3ならびに03-5-10においては第1面流路1の掘削を、埋土の途中で中止することとした。

測量

調査成果の記録においてはヘリコプターによる航空測量を実施し、1/50スケールの平面図を作成した。調査の開始に当たっては遺構面の認識が十分でなかったため、調査の進捗に併せて航空測量対象面を隨時設定した。03-5-1トレーニング（以下、トレーニングを省略）においては西半分について第2-1面を、東半分について第2-2面を航空測量の対象とした。03-5-2では第2-1面を、03-5-3では第1面流路1の埋土途中を対

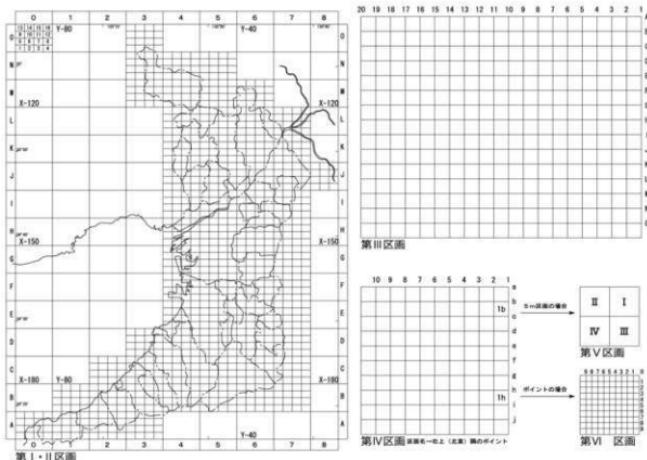
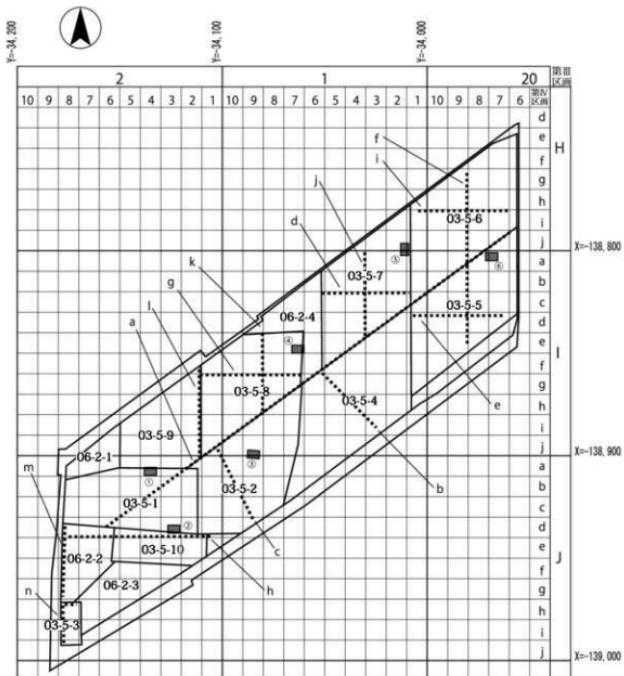


図5 地区割りの方法



..... 土層断面図作成位置

- | | | |
|------------------------------|----------------------------|---------------------|
| a : センターライン (図 7) | f : $Y=-33,980$ ライン (図 11) | k : $Y=-34,080$ ライン |
| b : 03-5-4 南北断面 (図 8) | g : $X=138,860$ ライン (図 12) | l : $Y=-34,110$ ライン |
| c : 03-5-2 南北断面 (図 9) | h : $X=138,940$ ライン (図 13) | m : 06-2-2 西壁 |
| d : $X=138,820$ ライン (図 10-1) | i : $X=138,780$ ライン | n : 03-5-3 西・北壁 |
| e : $X=138,830$ ライン (図 10-2) | j : $Y=-34,930$ ライン | |

確認調査トレンチ

- ①: 確認 (その2)①トレンチ ②: 確認 (その2)②トレンチ ③: 確認 (その3)①トレンチ
 ④: 確認 (その3)②トレンチ ⑤: 確認 (その3)③トレンチ ⑥: 確認 (その3)④トレンチ

図 6 地区割り・トレンチ区分・確認調査位置・断面図作成位置 ($s=1/2000$)

象とした。03-5-4～03-5-8では第1面および第2-3面の2面を対象とした。03-5-9においては第1面および第2-2面を対象とした。03-5-10では第1面および第2-2面を対象とした。06-2-1～06-2-2では第1面および第2-1面を、06-2-3では第1面および第2-2面を、06-2-4では第1面のみを対象とした。このような経緯により、結果的には連続する面を1枚の航空測量図として表現することはできなかった。航空測量の対象とした以外の遺構面については、平板を用いた測量を行い1/100スケールの平面図を作成したほか、個別の遺構図などについても適宜、割付測量を実施した。本書においてはそれぞれの遺構面の対応関係を考慮し、再度各遺構面の全体図を作成し、掲載した。

土層断面図については、調査着手時に担当者間で協議し、調査範囲全体を通しての第二京阪道路路線のセンターラインの断面を作成することで、調査単位を越えて、地形、層序の検討に供することのできる資料の作成を行うこととした。これ以外の土層断面図としては03-5-2、03-5-4では第1面流路1を横断する形での北西～南東断面図を作成したほか、国土座標に沿うかたちで、03-5-5では $X = -138,830$ ライン、 $Y = -33,980$ ライン、03-5-6では $X = -138,780$ ライン、 $Y = -33,980$ ライン、03-5-7では $X = -138,820$ ライン、 $Y = -34,030$ ライン、03-5-8では $X = -138,860$ ライン、 $Y = -34,080$ ライン、03-5-9では $Y = -34,110$ ライン、03-5-10では $X = -138,940$ ラインについて1/20スケールの土層断面図をそれぞれ作成した（図6）。原則として人力掘削の対象とした層準について作成することとしたため、トレンチごとに測量対象の層準は微妙に異なっている。本書においては、作成した図面の中からセンターライン模式（図7）、03-5-4南北断面（図8）、03-5-2南北断面（図9）、 $X = -138,820$ ライン・ $X = -138,830$ ライン（図10）、 $Y = -33,980$ ライン（図11） $X = -138,860$ ライン（図12）、 $X = -138,940$ ライン（図13）を掲載した。

自然科学分析

現地での調査に併行し、自然科学分析を実施した。平成16年度には主に弥生時代の土壤を対象に、植物珪酸体分析、植物珪酸体・花粉・珪藻分析を実施した。平成17年度にはやはり弥生時代の土壤を対象に、植物珪酸体・花粉・珪藻分析、土壤軟X線写真撮影分析を実施した。平成18年度・19年度には出土木製品、材などを対象とした樹種同定分析をそれぞれ実施し、平成19年度には出土石製品、石材を対象に岩石種同定（肉眼観察）分析を実施した。以上は分析委託として実施したが、これに加えて地形環境分析、ウマなどの動物遺存体についての同定・分析、植物種子同定などを行った。現地調査ならびに整理作業においてはこれらの分析成果を意識し、総合的な考察を行うように努めた。また分析成果の一部については、内容を再構成した上で本書に掲載した。

土壤洗浄

第1面検出の流路1においては、埋土に微細遺物の存在が予想されたため、03-5-7トレンチと03-5-10トレンチにおいて検出した部分の埋土の一部を対象に、土壤の洗浄を実施し、微細遺物の検出に勤めた。基本的に現地において実施したが、03-5調査の工期以降には京阪調査事務所整理棟（現寝屋川分室）において実施した。滑石製白玉、ガラス小玉、鉄滓、繩口羽といった微細遺物を検出し、滑石製白玉については総数700点を超えるものとなった。

第4章 調査成果

第1節 土層序の認識と微地形

今回の調査における土層の認識が結果的に不十分なものとなった点は否めない。調査を実施する上での最小限の遺構面認識は行い得たわけであるが、層序単位の垂直方向の認識や水平方向の広がりの把握、異なる地点における層序の対応、それぞれの形成過程の把握については、調査担当者としての理解をふまえて調査を進めたものの、それを客観的に検証可能な記録として残したかどうかは不安が残るものとなった。その原因について弁明を試みたところで調査成果の質的理義の向上につながるわけではないので、本章では調査の進捗に応じた土層の理解を時系列的に記述することで、調査成果を相対的に把握するための一助としたい。なお、第5章第1節、分析委託に伴う地形環境分析成果も参照されたい。

最初に調査に着手した03-5-1トレンチでは、最上層に存在した旧作土を重機により除去すると、粗い砂層が現れた。この砂は確認調査においても認められていた近世段階の砂層と判断されたため、その下面に足跡などのあることを認識しつつ、重機により除去することとした。この砂層以下には厚いシルト～粘土層があり、おそらくは中世段階に属するものと判断し、これ以下を人力掘削とした。この段階では層名について今回の掘削で確定した認識を得られるまでは、確認調査段階のものを用いることとしていたが、砂層が第II層に対応するものと思われ、第III層以下が厚い粘土層と認識された。センターラインに設定した筋掘りとともに、トレントの周間に排水と土層の確認をかねた側溝を先行して掘削し、面的な掘り下げを進めたわけであるが、その断面では厚い粘土層の細分は行えるものの、果たして地表面として認識できるものかどうかが極めて不明瞭であった。後の検討で地震動による変形の痕跡であることが判明したが、植物遺体を含む有機質層が乱れた状態で認められるなど、判断に迷う状況が続き、層として認識できる単位で掘削を重ねたが、遺構面と呼べる様相は見出しがたく、遺物もほとんどみられなかった。T.P.+1.0m付近まで掘り下げると、様相が大きく変わり、青灰色のシルト層をベースに暗灰色のシルトが遺構埋立として入る状況が断面で確認された。この青灰色シルト層（第2b層）の上面を第1の遺構面と認識し、遺構の検出を行った。調査区内は壁面からの湧水のみならず、検出した遺構面からも湧水が著しく、遺構検出も困難を極めたが、大きく暗灰色シルトの輪郭を把握することができた。結果的にこの土は第1面流路1の輪郭であったわけであるが、この段階では側溝の深度からその全容を把握することができず、また壁面の崩落が頻繁におきる状態であったことから、側溝に必要な深度を設定することもかなわなかった。結果、これを流路の堆積層としてではなく、土壤層として掘り下げることとなり、流路に含まれる遺物の多くも出土の遺物として取り上げてしまうこととなった。さらに当初、青灰色シルト層の上面を遺構面として認識したわけであるが、明確に遺構を確認することができなかつたため、さらに下層の遺構面を求めて掘削を進めたが、1トレント西半分と南東部では水田作土と想しき土壤層の最上部が側溝において確認されたため、これを遺構面（第2面）と認識し検出を始めた。この土壤（第3-2a層）は東南部では厚い砂層をベースとする土壤と判断されたが、この面を検出した段階で以下の調査は必要がないとの指示がなされたため、この面で掘削を終了した。また西半分では間層を挟まず重なる土壤層2層（第3-1a層、第3-2a層）と、その下に比較的細かい粒子の堆積層を挟んでみられる黒色粘土層（第3-3a層）層が確認され、面呼称は未整理なままであったが、それぞれについて面的

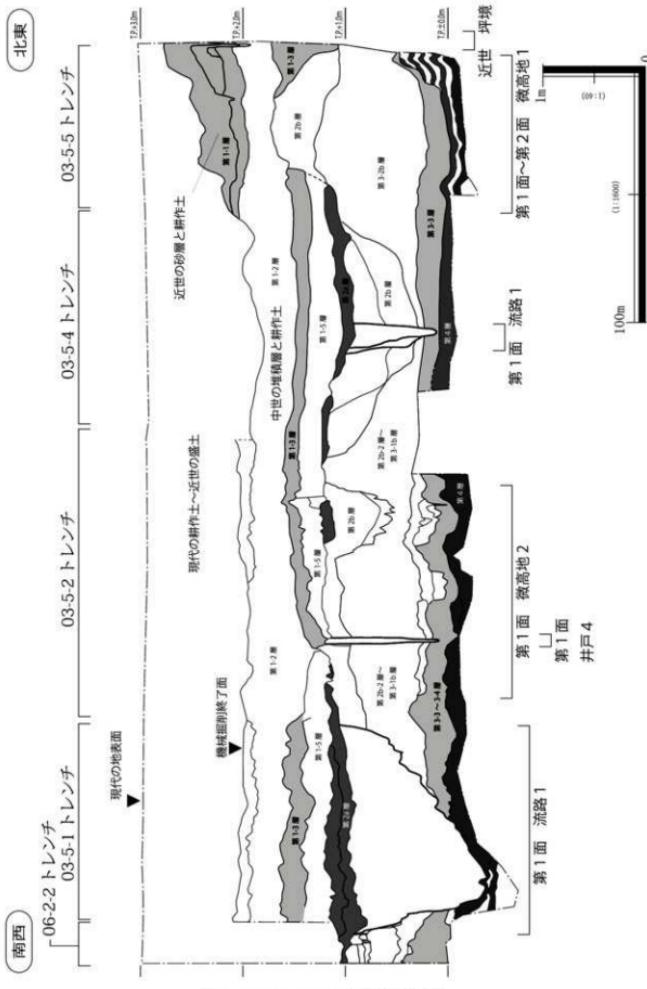


図7 センターライン土層断面模式図

(北西)
TP±2.0m

TP±2.0m

TP±1.0m
TP±0.0m

流路(1st面)

畦畔(2nd-3rd面)

畦畔(2nd-3rd面)

(南東)
TP±1m

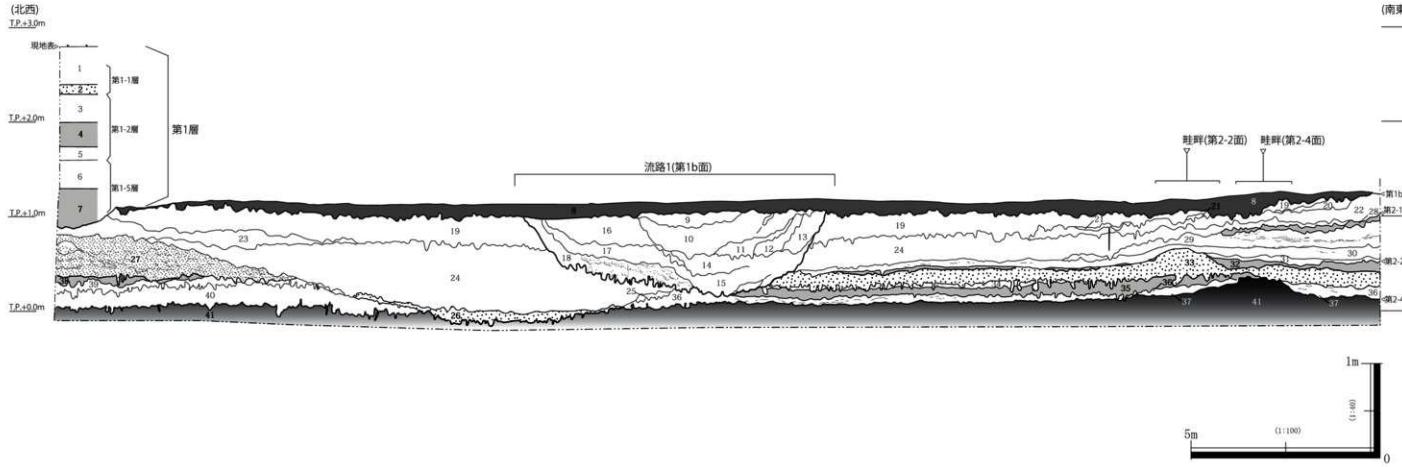
TP±1m

1m

5m
(1:100)

1. 黄灰 2.5Y4/1 シルト 和粘粒わずかに含む 植物細胞多く混じる。11 との間、凹凸の著しいところあり(地盤変形?) (第 2a 番)
2. 黄灰 2.5Y5/1 植物細胞多く含む、4 との境界は不明瞭 岩化物がうっすら見えるところあり、Fe 多い (流路 1)
3. IR 5Y4/1 シルト 和粘粒多く含む、4 との境界は不明瞭 岩化物がうっすら見えるところあり (第 2a 番)
4. IR 5Y4/1 シルト、3 の境界は不明瞭 植物遺体、岩化物多く含む (流路 1)
5. IR 5Y4/1 植物細胞多く含む 流路 (1) 多く含む 植物遺体多く含む (流路 1)
6. IR 5Y4/1 シルト 植物細胞多く含む 青苔色シルトブロック (第 2b 番) 植物遺体多く含む (流路 1)
7. IR 7.5Y4/1 シルト ブロック状 IR 5Y4/1 シルトブロック 岩化物多く混じる (流路 1)
8. 底質層 10Y8/4/1 し土の多い植物細胞土 (1) 1~2mm の青苔色シルトブロック多く含む (流路 1 の底層?)
9. 黄灰 2.5Y4/1 シルト 白灰 5Y7/2 植物細胞 白灰 5Y7/1 中粒砂の上層
- 上位植物細胞中にシルトブロック多く混じり、下位の砂層にはラミナリテーション (地表)
10. 上位砂层 5Y7/2 中粒砂 ラミナリテーション、下位 白灰 5Y5/1 剛一種植物細胞が混じる堆積 (流路 1)
11. 底質 2.5Y6/2 植物細砂一部ラミナリテーションが全体的にみえるややな土壌化を受ける (第 2b 番)
12. IR 5Y5/1 シルト 植物細砂 植物遺体多く含む 下位に灰質層 10Y6/2 を見るとところ多い (第 2b 番)
13. 底質 2.5Y4/1 シルト 植物細砂 白灰 2.5Y7/1 中粒砂の丘陵一部にラミナリテーション 下位に灰灰 2.5Y4/1 シルト部分があり (第 3 層?)
14. 底質 5Y7/2 植物細砂 ラミナリテーション、下位 10B6/4/1 シルトに変化 ラミナリテーション (第 2b 番)
15. 黄 5Y4/1 シルト 10Y4/1 岩シルトブロック入るが、ブロックとして明瞭ではない 岩化物多く含む (第 2b 番)

図 8 03-5-4 トレンチ南北土層断面図



1. 現代土-第1-1層
 2. 第1-1層-近世洪流水砂
 3. 第1-1-2
 67. 第1-5層
 8. 黄灰 2.5Y4/1 シルト質粗粒砂 小礫若干混じる (24に削られず残存した 26に伴う土塊?あるいはその2次堆積?)
 9. 黄灰 2.5Y4/1 シルト-中粒砂 若干含む、下層との境目に多い 第2b層、第3層に伴う土塊 上面は削平を受ける (第2a層)
 10. 黄灰 2.5Y4/1 シルト-粗粒化物粒若干含む (流路1)
 11. 黄灰 2.5Y4/1 粗粒質シルトトロッカ (径3~5cm大)と、黄灰 2.5Y7/2 極細粒砂ブロック (径3~5cm大)との混合 (流路1)
 12. 黄灰 2.5Y4/1 シルト-極細粒砂ブロック若干混じる (流路1)
 13. 黄灰 2.5Y4/1 シルト-粗粒砂ベースシルトブロック若干混じる (流路1)
 14. 黄灰 2.5Y4/1 シルト-粗粒粒砂 坡面地盤 多く含む (流路1)
 15. 黄灰 2.5Y4/1 シルト (流路1)
 16. 黄灰 2.5Y4/1 シルト-極細粒砂 粒状構造みられる (流路1)
 17. 黄灰 2.5Y4/1 シルト (流路1)
 18. 黄灰 2.5Y7/2 (白 2.5Y7/7) 中-細粒砂と黄灰 2.5Y4/1 極細粒砂 部分的に見れたラミナがみられるが、多くは凝固層、下面に凹が多い (流路1)
 19. 青灰 5B5/1 砂質シルト-極細粒砂 中央や左上に複数 SY7/3 極細粒砂が入りラミナ層者 8との境目に多い、ゆるやかな堆積か? (第2b層の上部)
 20. 青灰 5B5/1 砂質シルト-極細粒砂 中央や左上に複数 SY7/3 極細粒砂が入りラミナ層者 8の隙間に少い (第2b層)
 21. 明青灰 5B7/1 極細粒砂-砂質シルト 下部の乾燥にはいる (第2b層)
 22. 黄灰 2.5Y4/1 シルト-粗粒砂-砂質シルト (径2cm大) むずかに混じる-シルト主体へ変化-上面に乾燥多くみられる (第2b層)
 23. 青灰 5B5/1 シルト 混合物ラミナ状にむずかに混じる 19.2と地不連続、上面に乾燥層者 (第2b層)
 24. 黄灰 2.5Y4/1 シルト-粗粒化物 緑植物遺体 多く含む (第2b層)

25. 黄灰 2.5Y4/1 シルト質粗粒砂 小礫若干混じる (24に削られず残存した 26に伴う土塊?あるいはその2次堆積?)
 26. 黄灰 2.5Y4/1 シルト質粗粒砂-小礫 ラミナはみられない (24の堆積の下部か?)
 27. 灰白 10YR8/1 中粒砂-圓灰 2.5Y5/1 砂質シルト 亂れたラミナ層者 (第2b層あるいは第3層砂層)
 28. 黄灰 2.5Y4/1 シルト質粗粒砂 粗粒化物粒多く含む 灰色シルトブロックで入る (第3-1層 水田土塊)
 29. 黄灰 2.5Y7/1 粗粒砂-小粒 ラミナは見られないが下位にシルトの薄層はさむ (第3-1層 28cmベース)
 30. 黄灰 2.5Y4/1 シルト-細粒濃青色底質 多く含む (下層-土壤を削りてているか? (第3-1層))
 31. 灰 5Y4/1 シルト 植物遺体 多く含むが、ラミナ状にはいらない (第3-1層)
 32. 灰 5Y4/1 シルト 質粗粒砂多く混じる (第3-2層 33cmに対する土塊か?)
 33. 灰白 2.5Y7/1 粗粒砂-小粒 まき良、ラミナみせず (第3-2層) 屋ららは第3-2b層 水田ベースの砂 なし盛土か?
 34. 灰白 10YR4/1 極細粒砂-シルト 細いラミナ層者 33による凹多くみられる (第3-2b層下部)
 35. 灰白 10YR4/1 シルト-粗粒砂-中粒砂多く混じる シルトブロックわずかに混じる (第3-3層) 第14層に対応する土壤か?
 36. 灰 5Y9/1 シルト-粘土 坡面地盤 多く含む ラミナにはいらない 37との境は不明瞭で一體のものと考えられる (第3-3b層)
 37. 灰白 5Y7/1-明オリーブ 2.5Y7/1 粘土 粗粒化物わずかにラミナ状にはいる (第3-3b層)?
 38. 灰黃褐 10YR8/1 シルト 植物遺体 多く含む 上面に足跡みられる後、寄り寄りで極細粒砂へと変化し、なくなる (第3-3b層下部)
 39. 黄灰 2.5Y5/2 粗粒砂 ラミナはみられない 部分的に上位が黄灰 2.5Y4/1 シルト質粗粒砂のところあり下面に足跡層者 (第3-3b層下部)
 40. 黄灰 10YR4/1 シルト-粗粒化物 植物遺体 多く含む カルシウム?あり 上面に足跡層者 (第3-3a層)
 41. 黄灰 2.5Y3/1 シルト 分解のすくない 植物遺体一部はラミナ状に入る 固難カルシウム?あり (第4a~4b層)

図9 03-5-2トレーン南北土層断面図

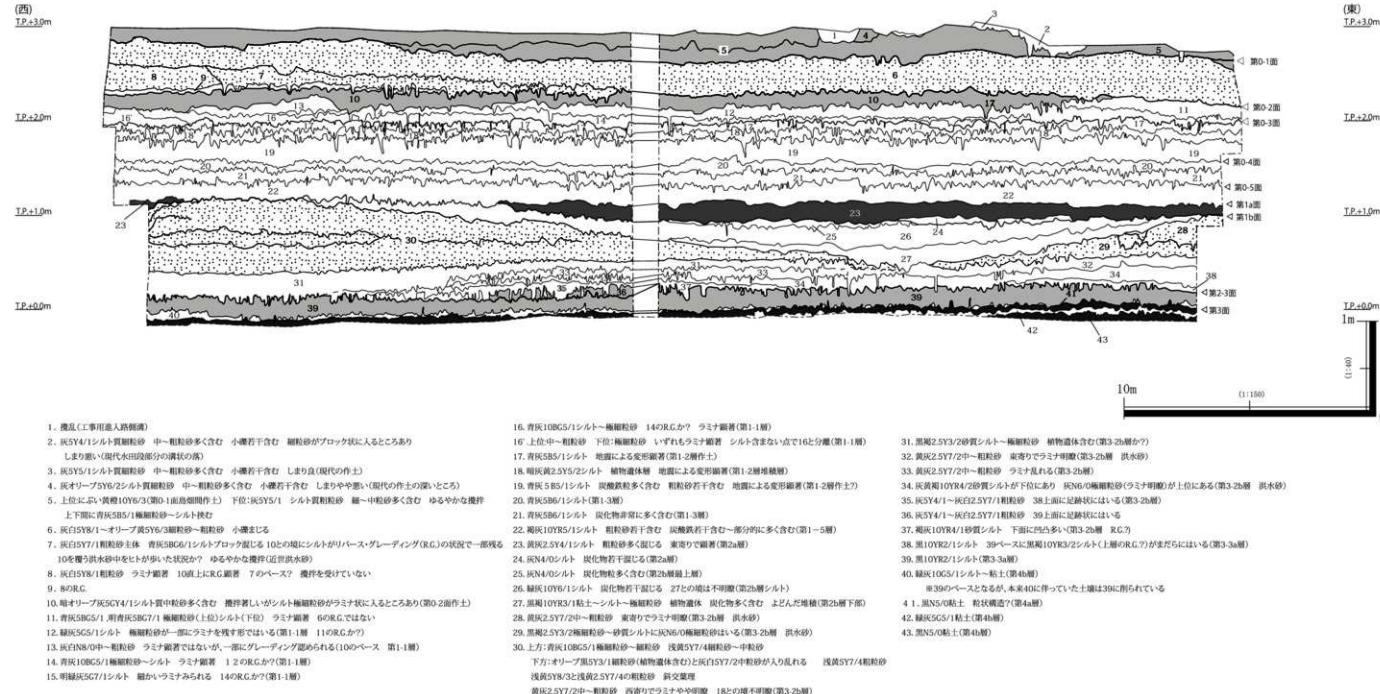


図10-1 X=138,820ライン土層断面図

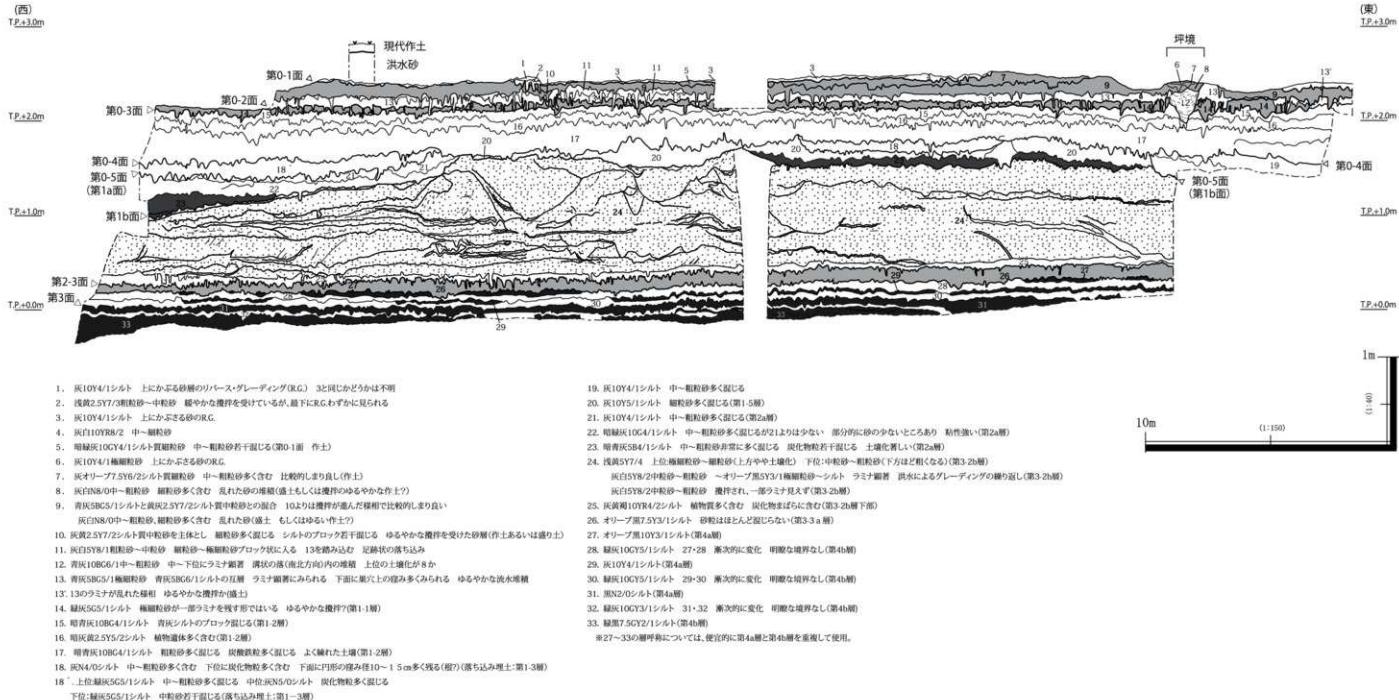


図10-2 X=138,830ライン土層断面図

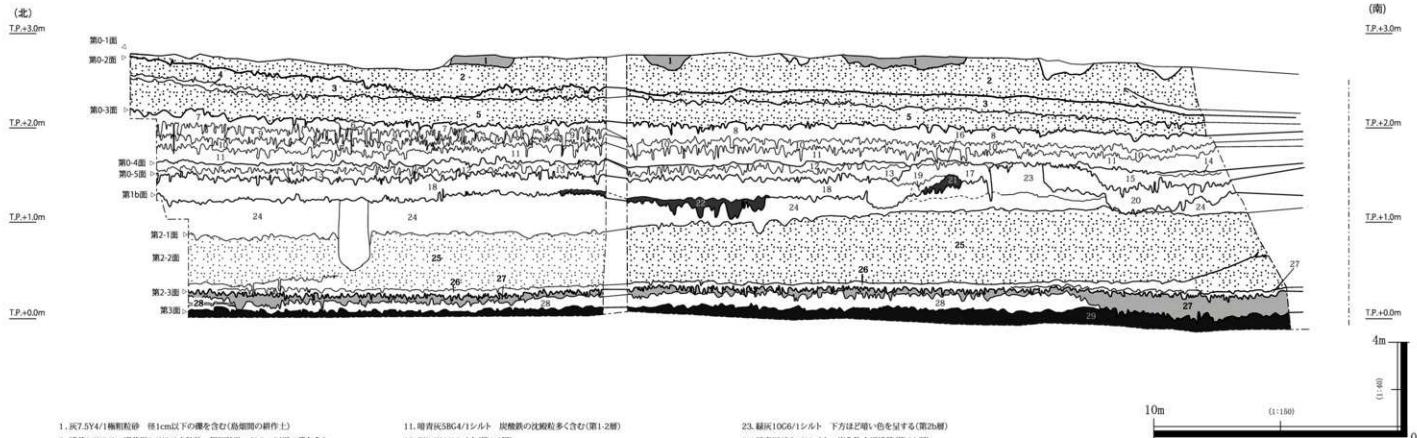
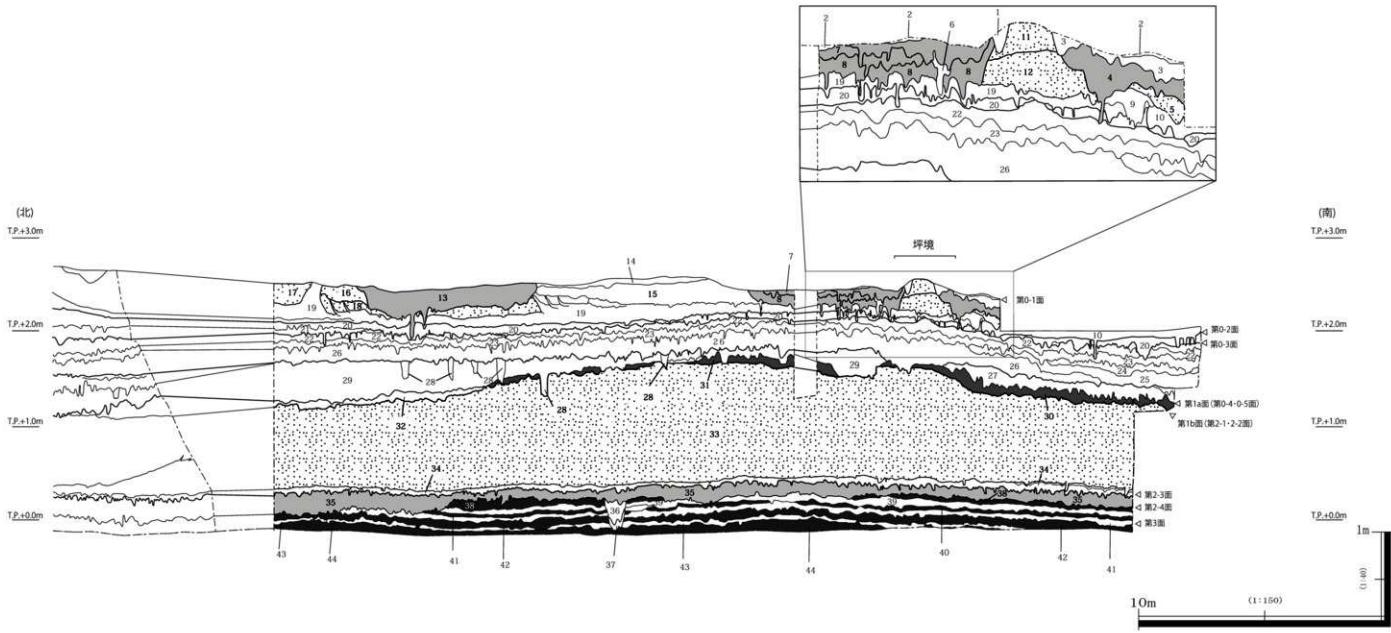


図11-1 Y=-33,980ライン土層断面図



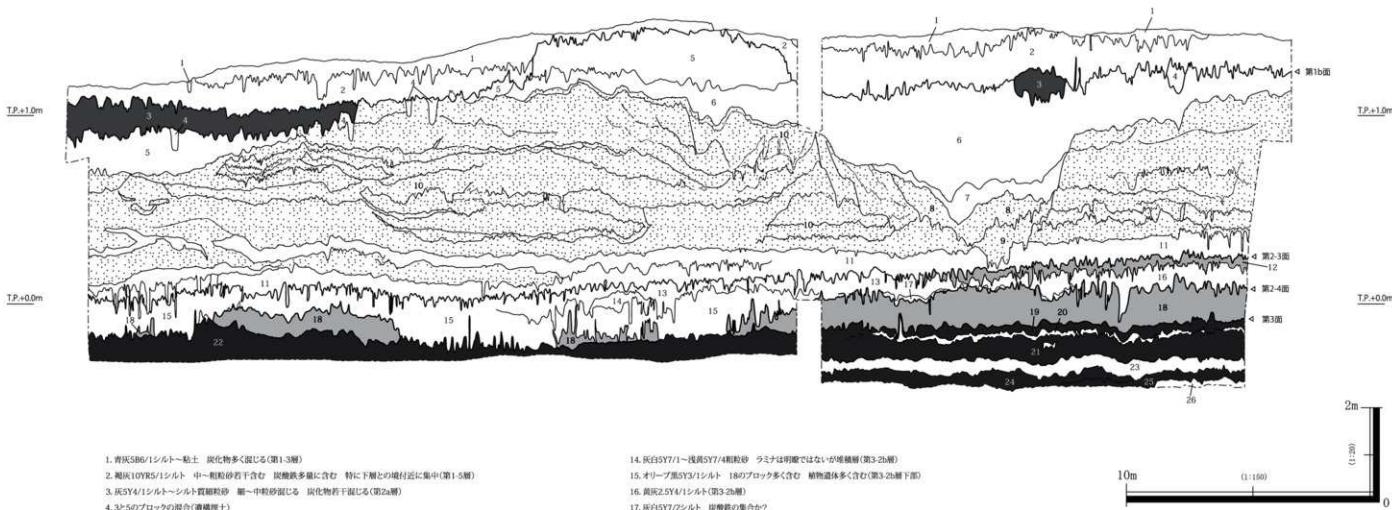
1. 現代作物の跡
2. R10/4/11タルト 上にかぶる砂のリバースグレーディング(R.G)
3. R4.リーフ/3YS/2輪耕砂跡 シルクうさぎ状に入るが汚れた砂
(40cm位)ここに入る作物? あるいは種類?)
4. 成熟2.5YT中~粗耕砂跡 シルクのフロートに入る 汚れた砂、ゆるやかな擾拌(作土)
5. R10/5/1タルト~粗耕砂跡 ラミナ鉛筆層(流水堆積)
6. R5/7/6/シルト質粗耕砂 中~粗耕砂、細耕砂のブロックに入る 内れた砂、ゆるやかな擾拌(作土)
7. R5/7/6/シルト質粗耕砂 中~粗耕砂、細耕砂のブロックに入る 内れた砂、ゆるやかな擾拌(作土)
8. 黒白5/7/シルト質粗耕砂 中~粗耕砂多く混じる 細耕砂のフロートに入る
12.3.しまない(作土) ゆるやかな擾拌 下面に凹凸混じる
9. 黒黄2.5YT中~粗耕砂 汚れた砂 ゆるやかな擾拌(作土)
10. 細耕SGS/1タルト 細耕砂跡が一部にコマセを残す所に入る ゆるやかな擾拌?(第1-1層)
11. 浅黄2.5YT/3/シルト質粗耕砂 シルク状に入るが汚れた砂(肥料堆土)
12. にぶい2.5YT/3/シルト~粗耕砂 ラミナ鉛筆層 細耕砂の薄層ナナク入る(呼吸耕耙芯の砂)
13. 深黄2.5YT/3/粗耕砂 細耕砂のフロートに入る(上土)
- 細耕SG/4/シルト質粗耕砂 粗耕砂多く混じる(下土)(面耕の水田作土?)
14. 黒灰1.0BG/5/粗耕砂 ラミナ鉛筆層(流水堆積・島畠の芯の砂)
15. 黒黄2.5YT/2 上位中~粗耕砂 下位:中~粗耕砂 ラミナ鉛筆層(面耕の芯の砂)

16. 黒灰2.5YT/1中~粗耕砂 水平粒状のラミナ鉛筆層(島畠の芯の砂)
17. 黒灰2.5YT/1中~粗耕砂 細耕砂跡ラミナ砂に入る ラミナ鉛筆層(島畠の芯の砂)
18. 浅黄2.5YT/1中~粗耕砂 ラミナ砂多く混じた砂 19.の層不規則(島畠の芯の砂)
19. 青灰SGS/5/粗耕砂 一級耕耙砂青灰SGS/6/1タルトの上層 ラミナ鉛筆層にみられる
灰白5/7/粗耕砂(16~19は一連の擾拌か?)
20. 黒灰SGS/4/シルト 細耕砂跡が一部ラミナ砂で埋まっている ゆるやかな擾拌か(第1-1層)
21. 黑灰G/7/0粗耕砂~粗耕砂 ラミナは明瞭ではないが、流水堆積層(第1-1層)
22. 浅黄G/10BG/4/シルト 青灰色シルトの小フロート混じる(第1-2層)
23. 浅黄2.5YS/2シルト 植物質多く混じる(第1-2層)
- 24~25. 26の上部 植物質多く混じる(第1-2層)
26. 浅黄G/10BG/4/シルト 粗耕砂多く混じる 畜糞糞跡多く混じる 土壌(第1-2層)
27. 上土 細耕SGS/1タルト 中~粗耕砂多く混じる
下土 RIN/S/0/シルト 土壌物質多く混じる 下面に凹凸多い(第1-3層)
28. 青灰SGS/1タルト 粗耕砂多く混じる(通耕堆土)
29. 黒灰1.0TG/1タルト 粗耕砂多く混じる(分離できなかったが 上位に細耕砂多く混じり土壤化(第1-4層)
湖は その下面で抽出(第1-5層)
30. 明青灰SG/5B4/シルト 中~粗耕砂非常に多く混じる 土壌物質混じる 土壤化著しい(第2a層)
31. 30に同じ
32. 明青灰SG/5B4/シルト層 中粒砂~粗耕砂 ベース粗耕砂の土壤化 但し覆被はないか?
ベース粗耕砂の土壤化層(第2-2層)
33. 深黄G/7/1上位 細耕砂跡~粗耕砂 下位 中~粗耕砂(下は泥層くる)
灰白5/8/2中粒砂~粗耕砂 オリーブ黒灰Y/3/粗耕砂シルト ラミナ鉛筆層 淋水によるグレーディングの纏り返し 水平堆積
灰白5/8/2中粒砂~粗耕砂 下には泥層(か土ではさばくとみられず)(第3-2層下部)
34. 黑黄褐10/8R/4/シルト 植物質多く含む 腐化物質ばかりに混じる(第3-2層下部)
35. オリーブ7.5YS/1シルト 北東の方多く含む 土地化著しい 南西の方では 砂粒はほとんど混じらない(第3-3層)
36. 黑灰10BG/4/シルト 増青灰/10BG/3/シルト層 在部分に軸筋層(土坑?壁?)上
37. 黑SG/2/シルト(土坑?壁?)
38. オリーブ7.5YS/1シルト(第4a層)
39. 細黄10GY/1シルト(第4b層) 38, 39層的に変化 明顯な境界なし
40. 黑10Y/1シルト(第4a層)
41. 細黄10GY/1シルト(第4b層) 40,41層的に変化 明顯な境界なし
42. 黑N2/1シルト(第4a層)
43. 細黄10GY/1シルト(第4b層) 42,43層的に変化 明顯な境界なし
44. 細黄7.5YS/1シルト(第4a層)
#38~44の呼称については、便宜的に第4a層と第4b層を重複して使用

図11-2 X=33,980ライン土層断面図

(西)
TP+2.0m

(東)
TP+2.0m



1. 青灰5B6/1シルト～粘土 硫化物多く混じる(第1-3層)
2. 亂成10Y5S/1シルト 中～粗粒砂若干含む 固結物多量に含む 特に下層との境付近に集中(第1-5層)
3. 黄5Y4/1シルト～シルト質細粒砂 新～中粒砂富む 硫化物若干混じる(第2a層)
4. 3c:5のブロック(混合(礁構造土))
5. 青灰5B6G/1シルト ラミナは不明瞭 よもぎ色はない(第2b層)
6. 青灰5B9/1細粒砂～粗粒砂 ラミナ有り 10Sの境界が不明瞭
青灰3B6G/1シルト ラミナは不明瞭(第2b-1層)
7. 灰黄褐10Y4/2シルト～砂質シルト 植物遺体多く含む 6の最下部 8との境界が不明瞭(第2b-1層)
8. 黄灰2.5Y5/1細粒砂～中粒砂 ラミナ有り 植物遺体多く含む 西側で10Sを緩やかに切る(第2b-1層)
9. 黄灰2.5Y6/1細粒砂 ラミナ不明瞭 東側で10S比較的はっきり切る(第2b-1層)
10. 亂成10Y5/1細粒砂～粗粒砂 黄5Y5/1 構成物砂の縦上にあり 乱成10Y5/1 構成物砂を2-3層挟む
全体的に水平方向 亂部では乱れたラミナ多く見える 6との境界も幾端 11との境は明瞭 一連の堆積か(第2b-2層)
11. 乱成2.5Y7/4-5～粗粒砂主張(上位) 乱成10Y4/1 構成物砂 細かいラミナ面層にみられる(第2b-2層)
12. 黄灰2.5Y4/1シルト粗粒砂 中粒砂まで多く含む
下部の凹部に乱成10Y5/1/粗粒砂入る(残る)にこう有り 西寄りで粗粒砂の割合減じる(第3-2a層?)
13. 黑灰3Y4/1シルト 粗粒砂含む 亂部砂は礁層で少なく 西寄りで多く含む(ベースの影響か)(第3-2a層?)
14. 黄白5Y7/1～浅黄5Y7/4粗粒砂 ラミナは明瞭ではないが堆積層(第3-2b層)
15. オリーブ黒5Y3/1シルト 180°ブロック多く含む 植物遺体多く含む(第3-2b層下部)
16. 黄灰2.5Y4/1シルト(第3-2b層)
17. 黄灰5Y7/2シルト 堆積物の集合か?
18. 黄灰2.5Y4/1シルトに黒褐2.5Y3/1シルトが小ブロックで混じる 壓縮糞多く含む(第3-3a層)
19. 黑N2/1粘土 上部を18C削られる(第4a層)
20. 綠灰10Y7/1シルト(第4b層)
21. 黑N1.5/0シルト(第4a層)
22. 黑N2/0粘土 上部を18C削られる(第4a層)
- ※19-22号標について: 使用時に第4a層と第4b層を重複して使用
- 23.灰オリーブ5Y5/2シルト(礁認調査第20層)
- 24.黑2.5Y2/1シルト(礁認調査第21層)
- 25.黑2.5Y2/1シルト(礁認調査第21層)
- 26.黄灰2.5Y4/1シルト～粗粒砂(礁認調査第22層)

図12 X=138,860 ライン土層断面図

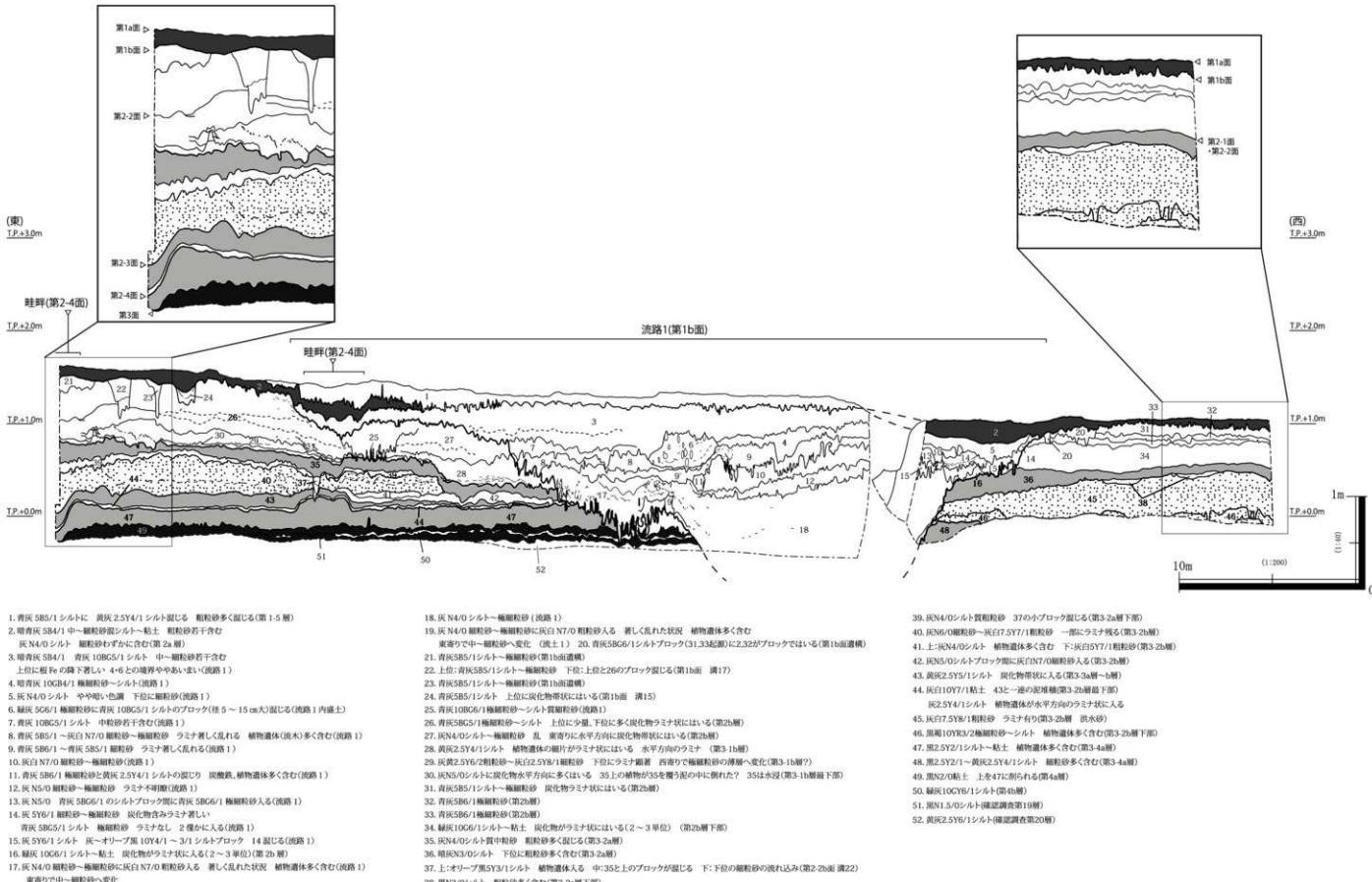


図13 X=138,940 ライン土層断面図

な把握を行った。掘削深度についての指示は第3-a層上面までであり、ここで掘削を終えた。いずれの水田域も北に向かって下がる地形を呈していたが、これに第1面の流路がほぼ重複していて、第2面の検出時に流路埋土を掘削するという混乱が生じることとなった。

2トレンチにおいては1トレンチの反省をふまえ、調査区壁の傾斜をゆるくとることで比較的深い側溝の掘削を行い、層序関係をより総合的に捉えることをこころがけた。T.P.+1.0m付近の青灰色シルト上面を第1面とする認識は変わらず、青灰色シルトを第2b層、これに伴う土壤を第2a層とし、第2a層より上の泥層を一括して第1層とした。調査中の湧水は1トレンチよりも相対的に少なく、第1面から掘り下げた南北方向の筋掘り（図9）において流路1の断面、第3層以下における複数の土壤の重なりを確認することができた。少なくとも3層の土壤とそれらのベースとなる堆積層が存在し、1トレンチ西半分で最終造構面とした黒色土壤と同じと考えられる層も認められた。この黒色土壤は流路1の北側にまで連続を追うことができたため、この段階では第3の造構面として認識し、第1面と第3面の間にある複数の造構面（地表面）を第2面のそれぞれ枝番号で理解することとした。しかし第2面はいずれの面も調査区全体に広がるものではなく、2トレンチ南東側が厚く、北西側へ勾配をもち、層厚も減じるもので、果たして当時の地表面がそのまま残されているものでないことが推測された。

03-5-4トレンチの調査に際しては1・2トレンチの所見を元に、それまで確認調査時の層呼称を用いてきたことを改め、第1層から第3層の大きなまとまりと、第1面から第3面までの造構面のまとまりを基準に層、ならびに造構面呼称を抜本的に整理した。流路1より南側における第3層の重なりについて、2トレンチとの対応が十分なものとは言いがたかったが、砂に覆われる遺存状況の良好な水田面を確認し、第2面とした。4トレンチにおいても南北トレンチとした筋掘り（図8）から得られる情報が大きいものであったが、この水田土壤と考えられる層が比較的厚く、その下層の黒色粘土を第3の造構面と捉えた。さらにそのベースに緑灰色粘土をもつ点が注意された。この層は確認調査において、T.P.+0.0よりやや低いところでみられたもの（確認調査第XⅣ層）と同一と考えられ、2トレンチで検出した第3の造構面が灰白シルトに覆われ、確認調査第XⅥ層と対応する点と齟齬をきたすこととなった。結果的には2トレンチの調査時に第3の造構面と捉えた面も、4トレンチで良好に残存していた水田面も、それぞれ調査範囲全体に広がる面ではなく、部分的に残存する範囲をそれぞれのトレンチで面として認識したものと理解できるようになった。したがって、2トレンチ以降に第3面として調査した面に、第2-4面と第3面が混在しており、第2面の各面の対応と併せて、現地での調査終了後に改めて整理することになった。結果、第2面は第2-1面～第2-4面の4面があり、第3層は造構面の認識を元に呼称すると、第3-1層～第3-4層としてとらえられることとなった。しかしながら、第3-1層のように分布範囲の比較的狭い層については、離れた地点で確認されたものが同一の地表面として存在していたかどうかは不明瞭なままである。

03-5-5トレンチの調査以降は、今回の調査範囲の中では比較的安定して確認された第1面を軸に、それ以上を第1層、それ以下を第2層～第3層として整理し、調査を進めることになったが、調査範囲東寄りの5～7トレンチにおいては再度大きく様相が異なることとなった。まず、4トレンチまでは機械掘削の対象とした第1層最上部の近世段階と想定した砂層が厚みを増し、その間に土壤が介在することが明らかとなった。これはさらに東側の03-4調査区においては調査の対象とされており、部分的ながらも面的な把握を行うこととした。機械掘削において現代の耕作土などを除去した段階で不整形ながら条里畦畔や島畑が認められたため、これ以下は人力掘削を行うこととした。さらに西寄りで第1層として

一括していた泥層も、その細分の単位が明瞭になり、間に炭化物を含む層などが挟在する部分もみとめられ、層の細分が必要な状況が生じた。調査範囲西寄りで設定した基本層序の呼称を変更することは困難であったため、近世段階の砂層以上は層名を便宜的なもの（近世層1など）とし、砂層以下については第1層に枝番号（第1-1層～第1-5層）を付することで対応することとした。造構面呼称については極めて変則的ではあるが、近世段階については近世面1などを、第1層に伴うものには第0-1面～第0-5面とする呼称を付することとした。なお7トレーニングの調査段階で実施した地形環境分析において、第1層上部を中心に地震による変形構造のみられることが指摘された。これは1トレーニングの調査段階から認識されていた、中世段階と推測される植物遺体を含む乱れた有機質層の形成原因でもあり、泥の中に堆積していた植物遺体などが地震動によって変形し、複雑に乱れた状況を形成したものと理解された。また第1-5層とした、一部で第2a層を攪拌する泥層については、7トレーニング以東においては青灰色を呈し、堆積層に近い様相をみせるが、以西では植物遺体を多く含む泥層へと漸移的に変化するようであった。やはり一部においては地震動による変形構造がみられるが、腐食の進んでいない蓮根の地下茎とおぼしき植物遺体が多量に遺存していた。この地震による変形は第1面の検出時にも障害となった。青灰色シルトの上面を検出する際、足跡状に第2a層、第1-5層があり込み、造構の輪郭などの確認が困難な状況が生じた。明瞭に把握するために波打つ層上面の底付近まで削り込むようにした部分では、そうでない部分より5cm程度深く掘り下げることになった。

また6トレーニング、7トレーニングでは調査深度の最下層付近にみられた第4層についても西寄りとは様相が異なる点が認められた。西寄りでは緑灰色粘土層の上位に位置する黒色粘土を第4層、厳密には第4a層としたが、6、7トレーニング東寄りではその上部にさらに複数の緑灰粘土と黒色粘土の組み合わせが認められた。この組み合わせについては、本来は複数のもののが存在していたが、第3-3層による擾乱により西寄りの部分においては上部のものが失われたものと推測された。しかしこの点については層名、造構面呼称ともに変更は加えていない。

8トレーニング、9トレーニングにおいては近世洪水層が薄く、間に造構面も見出せなかっただため、第1層の途中までを機械掘削の対象とし、おおむね第1-5層以下を人力掘削の対象とした。第1面は比較的明瞭に把握できたが、第2b層とした青灰色シルトが薄く、その下部に細粒砂を主体とした砂層の堆積がみられた。層境が不明瞭であったため、一連の堆積としてとらえたが、2トレーニング、4トレーニングにおいて流路1の南側に分布する第3層の一部とつながることも想定された。直接連続する土層断面を確認することができなかったため、位置付けについてあいまいな部分を残すこととなった。

06-2調査においては03-5調査における層序認識を前提として作業を進めた。06-2-2トレーニングで確認した流路1より東側の微高地における第3層の細分については、他の範囲との対応が不明瞭であったが、便宜的に上部からの造構面の順に対応を想定した。

以上のように、細部においてあいまいな部分を多く残す層序認識となったが、おおむね弥生時代前期、あるいはそれ以前の緑灰粘土と黒色粘土が互層をなす段階（第4層）から、弥生時代中期頃を中心に堆積物による微高地の形成（上部での土地利用：第3層）、古墳時代にかけての平坦化（第2b層）、古墳時代中期から奈良時代への安定期（微高地上の居住域の形成：第2a層）を経て、後背湿地の環境の中、古代から中世にかけて泥が堆積する環境（蓮根畠などの利用など：第1層）が継続したものと理解される。近世以降は讚良川からの堆積物で調査範囲東寄りは地盤が上昇し、耕作域として利用されたものと推測される。

第2節 第1面の調査成果

第1項 第1面の概要（図15）

今回の調査においては第1面が最も良好に把握できた遺構面とすることができる。調査面積が広いため、個別の遺構などの詳細については、調査範囲全体を微地形ごとに細分し、それぞれのまとまりごとに調査成果を報告することとした。本項では個別の報告に先立ち、微地形区分と調査範囲全体における第1面の概要を記載する。

第1面では、本来の地表面に近いものと認識する土壌の上面である第1a面と、土壌を除去し、堆積層上の遺構検出面である第1b面の2面を認識する。作業上の順序としては第1-5面を除去することで検出される第1面（第1a面）では、第2a層が全域にわたってあらわれるのではなく、部分的に第2b層があらわれる範囲がみられるが、それぞれはほぼ第1面全体の地形を反映した形で分布する（図14）。調査範囲東よりの高まり部分（微高地1）と調査範囲中央北寄りの高まり（微高地2）付近では第2b層が分布し、それ以外の部分では第2a層が残存する。おおむね第1-5層が攪拌を伴う土壌であって、地形の高い部分では第2a層を削平しているものと考えられ、第2a層の遺存部分においても当時の地表面がそのまま堆積層に覆われた状況ではないと考えられる。第1a面では第1-5層の下面としての遺構（内部が第1-5層で充填される溝など）がいくつかみとめられた。断片的に分布するものであり詳細には記録していないが、東西、あるいは南北方向をとるもので、ある程度、条里型地割の影響を受けているものと考えられる。

第1面に帰属する遺構は、ほぼ全てを第2a層を除去して検出した第1b面において検出した。第1面では調査範囲のはば中央付近に流路1が流走するが、これが第1面の最大の遺構であり、かつ微地形区分にも大きい意味をもつ。調査範囲中央付近、北西方向から流れてきた流路は弧状に向きを変え、北東から南西の方向を取る。この方向変化の頂点付近に東側から直線的に流路2が延び、合流する。この合流点から南西側ではゆるやかな蛇行をみせながら調査範囲南西部にいたって、幅、深さとも大規模なものとなり、南寄りに大きく方向を変える。

流路1、流路2の北東部分は第1面で最も地形の高いところであり、微高地1とした。弥生時代中期段階と想定する第3-2b層の堆積によって形成された微高地で、幅50mの帯状を呈し、中でも北西側がより高く、南東側にはゆるやかに下る。微高地の中央接線上に多数のピットが分布し、掘立柱建物、横などが分布する。また井戸もみられ、居住域を形成していたと考えられる。微高地南西側の傾斜は比較的勾配がきついが、この部分では等高線に沿う方向で、土坑が列状に分布する。03-5-7トレーニングにおいてまとまった分布を示すが、03-5-3トレーニングでは同様の地形においてピットが列状に分布する。また微高地の北東辺と南西縁に土器埋納遺構が分布する。

微高地1と流路1の間を微高地1とし、流路2の南側の部分を微高地2とした。微高地1と微高地1の比高差はおおむね60cm程度を測り、比較的急な勾配をもつ。微高地1・2とも遺構分布は希薄であり、土器集積1とした、製塙土器や炭化物、赤色顔料などの集中する遺構がみられる程度である。

逆「C」字状に湾曲する流路1の西側、調査範囲中央付近の高まりを微高地2とする。やはり弥生時代の堆積層により形成されたと考えられる微高地であり、北が高く南に下がる勾配をもつ。東西方向の幅は約30mであって、微高地1よりやや低く、小規模である。この微高地上においても居住域を構成する各種遺構を検出した。掘立柱建物、井戸等であるが、ピットの分布は微高地1に比べ散漫である。微高地の東西に土器を埋納する遺構の分布をみると、微高地1でみられたものとは時期が異なるものである。

また微高地3との高低差はそれほど顕著なものではない。

微高地2と流路1との間を微高地3とした。微高地2の縁辺に帯状にめぐる地形であり、東側と南側では幅約20m程度、西側には低い部分が広がっていく。微高地2の南側を中心に井戸や土坑といった遺構の散漫な分布が認められる。

流路1の南側の高まりを微高地3とした。検出範囲が狭く、微地形の全容を知ることは難しいが、微高地1、2よりはやや低い地形であり、調査範囲の南側に高くなっていく幅広い地形の可能性を推測する。微高地3の北東部分では微高地2へとなだらかに連続し、この部分に位置する土坑は埋土の様相に微高地3で確認されたものと類似するものが多い。一方、微高地3西線は流路1の肩部へと距離をおかず連続し、微高地といった部分を見出しがたい。微高地3上では北から西線にかけて、流路の輪郭に平行するように複数の溝が分布するほか、西側では流路の肩付近で土器を埋納する土坑などが複数分布し、比較的濃い遺構分布をみせる。

南へ大きく方向を変えた流路1の西側の高まりを微高地4とした。やはりベースには弥生時代の堆積と考えられる堆積層があり、安定した微高地と考えられるが、不整形な溝などの散漫な分布がみられるのみで、明確な遺構は認められない。これより西側は調査範囲外となるが、道路を挟んだ西側は讃良郡条里遺跡03-6として調査が実施されており、連続すると考えられる地表面も確認されている。

以上のように、第1面の調査範囲全体を微地形により、微高地1～4、微高地1～3に区分した。以下、この区分ごとに調査成果を記述していく。また流路については2条を検出したが、このうち流路1については大規模な遺構であり、單一の遺構名称で括ることが適當かどうかについては逡巡するところである。しかし流路そのものの形状や埋土の状況から明確に区分することは難しい。このため流路1については調査時のトレンチを基準に便宜的に4区域に分け、それぞれ流路1-1域～流路1-4域と認識することとした。主に遺物の報告に際してこの呼称を積極的に用いるが、遺構そのものの記述においても限定的に使用することとした。

第2項 微高地1

概要（図16・17）

調査範囲の北東部に位置する微高地1は、弥生時代中期の遺物を含む、大規模な洪水堆積物によって形成されたもので、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて周囲が埋没していった後、古墳時代以降においても微高地として残されていた地形である。周囲の調査成果からみると必ずしも高い地形とはいえない、特に北寄りの部分では調査中も湿潤な環境は変わらなかったが、それでも本書で報告する調査範囲のなかでは最も高い部分ということができる。最も高い微高地中央付近で標高T.P.+15m程度を測り、微高地上において相対的に低い03-5-5トレンチ南東部分で標高T.P.+13m程度を測る。古代以降、第1-5層の攪拌により上面を削られた範囲が多く、第0-5面検出段階において姿をみせていた遺構も多い。したがって、本来は検出状況よりもやや高い地形であったものと推測する。主観的な把握ではあるが、微高地上面の幅は40～50mを測り、その中央北寄りから南西斜面を中心には多数の遺構が分布する。

直接第1面にかかる事象ではないが、微高地上面が軸方向に直行して幅4～6m程度の溝状に分断されている箇所が認められた。埋土が第1-5層と考えられるもので、第1面廃絶後の作用であるが、後述する微高地2においてもみられる現象であり、興味深い。

微高地1においては03-5-6トレンチを中心とする北寄りの範囲で多数のピットを検出し、そのうちの

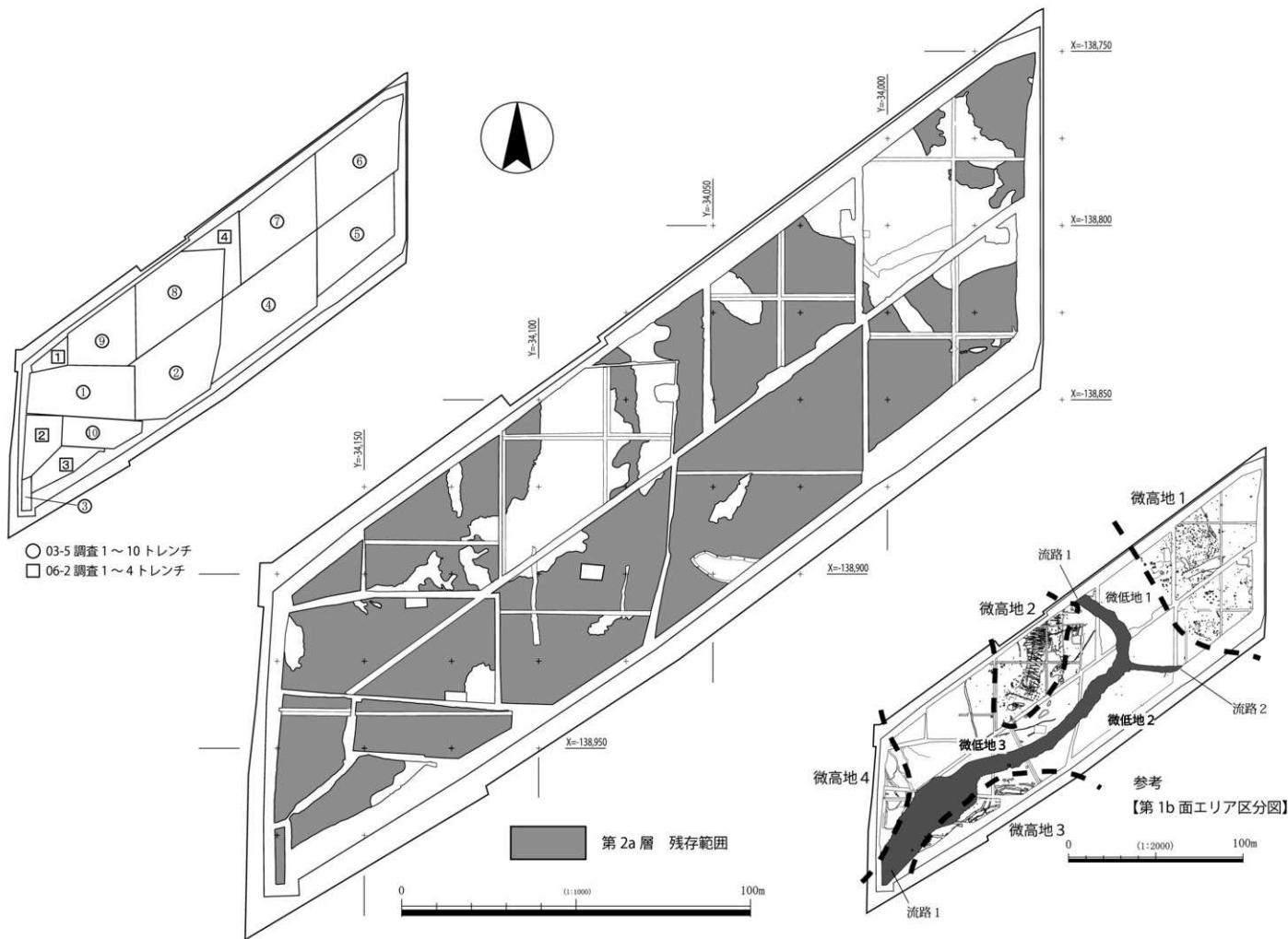


図14 第1面（第1a面） 第2a層分布図 (s=1/1000)

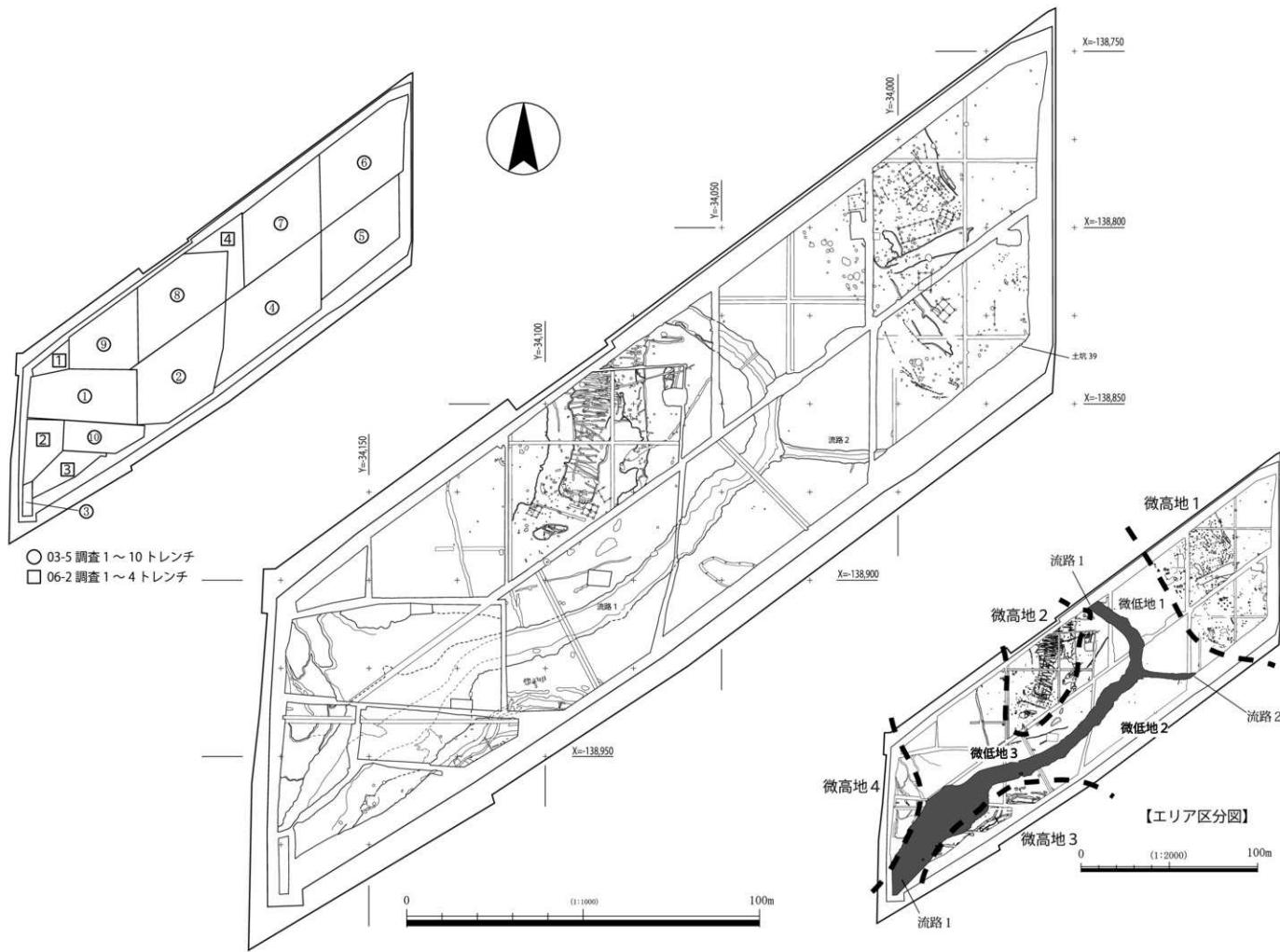


図15 第1面（第1b面） 遺構分布図（s=1/1000）・エリア区分図

いくつかについては掘立柱建物を構成するものと考えられる。微高地1においては建物1～6の6棟を想定した。また、建物を構成するにはいたらないが列状に並ぶものも複数認められる。また有意な組み合わせを見いだせないピットも多数あるが分布範囲が建物などの分布域に集中する傾向が認められるため、居住域を構成する遺構の一部であると推測される。建物以外の遺構には井戸があり、井戸側をもつという意味で確実なものとしては井戸1のみとなるが、土坑としたものの中では大型のものは素掘りの井戸であった可能性がある。個々の遺構間の切り合い関係は少なく、こと建物として認められるものは重複関係はみられない。同一場所において長期に営まれた居住域ではないと考えられる。なお、建物の主軸に統一性がみられない状況が認められ、おもに微地形の方向を反映した軸をもつものが多いと思われるが、全体的に計画的な配置がなされた可能性については否定的な状況である。

須恵器・土師器の坏類を土坑あるいはピット内に埋置し、埋め戻したと想定する遺構を土器納遺構とするが、微高地1上に多数みられる土坑の中では4基がそれに相当すると考えられる。時期的に異なる遺構と考えられ、直線的に並ぶようにみえる配置も、微高地の地形を反映したものとしておくほうがよいと考えられる。

調査範囲北半の遺構が集中する部分の南西側傾斜面には、等高線に沿う形で土坑が列状に分布する。規模、深さともばらつきがあり一様ではないが、いずれも掘削直後に埋め戻されたようであり、掘削土のブロックを多く含む埋土が認められる。明確な土器類の出土が無く、時期、性格とも不明であるが、1基からはヒヨウタンの仲間の種子がまとまって出土している点が注意される。

微高地1上面においても南寄りは遺構分布希薄となるが、ピット、土坑などが分布する。掘立柱建物もみられるが、周囲にピットの集中する傾向は認められない。微高地1南寄りでは南西側の傾斜面にピット列が複数認められた。やはり等高線に沿う方向のものが主体であり、横列のような性格が想定される。またこれらに近接して、大型の土坑に須恵器大甕を倒立て埋納したものが1基確認された。

遺構出土遺物については個別に報告するが、微高地1全体の土地利用を間接的に示す、地表面付近で形成された土壤に含まれる遺物には、弥生時代から古代にかけてのものが認められる。総じて層出土遺物の少ない調査区内においては細片が主体ではあるが、比較的出土遺物の多い地域といふことができる。また古墳時代後期以降の遺物も相対的に多いようである。

以下、個別の遺構について報告する。

建物1（図18）

微高地1北寄りに位置する掘立柱建物である。重複する建物遺構はみられないが、北西方向に井戸の可能性を有する土坑1、土坑2がやや距離を置いて位置する。散漫な柱穴以外に重複する遺構はないが、四辺にやや距離を置いて軸を近くするピットの列があり、あるいは関連する欄などの存在を想起させるが、厳密に軸をそろえるというものではなく、可能性を指摘するに留めたい。土層観察用の筋掘りにより、北角の柱穴1基を欠くが、梁間2間、桁行3間の柱配置をもつものである。柱間の寸法は均等ではなく、梁間は約2.0m、桁行間は中間の柱間が2.4mとやや広く、その両側は1.6mと狭い。北東側の梁間では確実ではないが、わずかではあるが棟持柱が外へ張出すようである。規模は芯々距離で、4.2m×5.4mを測り、面積は22.7m²となる。方位は座標北より55° 東に振れている。柱穴はおおむね一辺40cm程度の隅丸方形を呈するものであり、検出面からの深さは20cm～40cm程度を測る。柱穴埋土の詳細な観察はなし得なかったが、おおむね第2b層を構成するシルトのブロック土で埋め戻されていたようである。

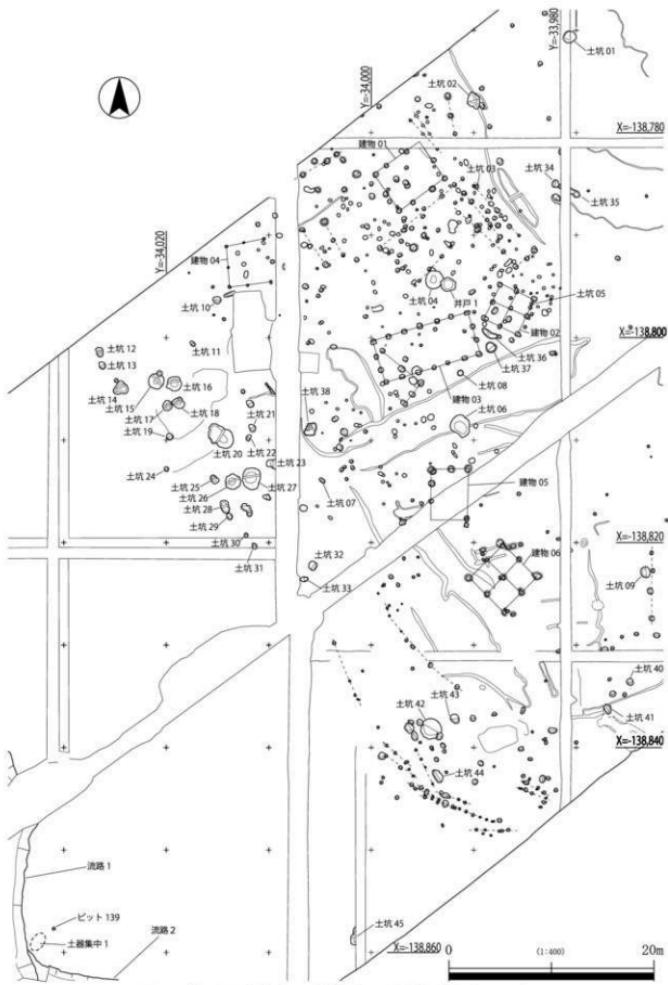


図16 第1面 微高地1・微低地1 遺構分布図 (S=1/400)

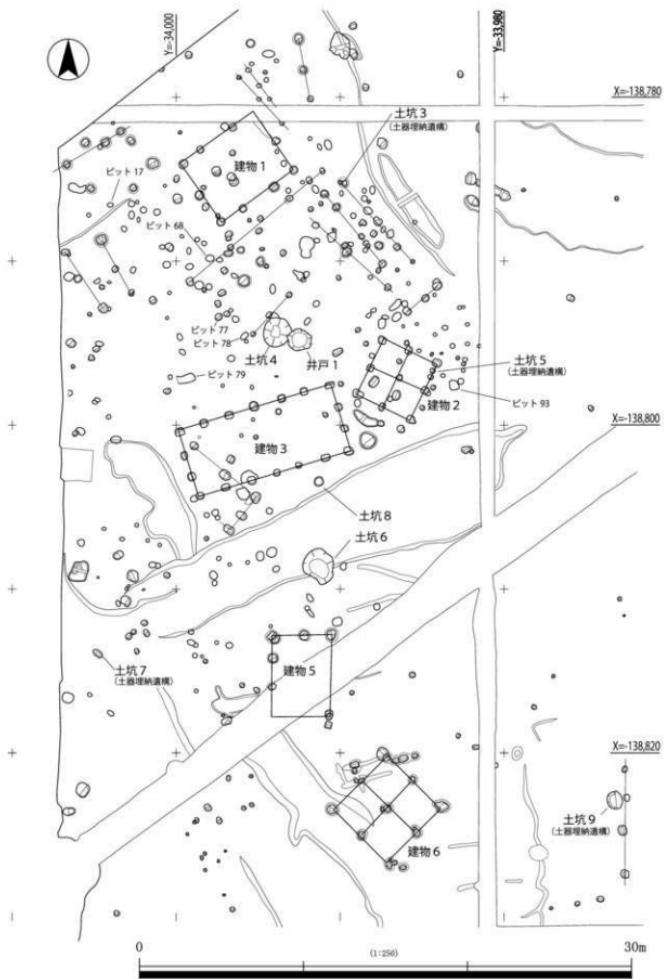


図17 第1面 微高地1建物群 分布図 (s=1/250)

柱穴のうち 2 基に柱根が遺存していたが、これ以外にも柱穴の底が一段下がるもののが含まれており、礎板がみられなかったことと併せ、上屋の重量により、柱が沈下したことが推測される。遺存した柱根のうち、柱穴 08 から出土した 1 点は図 25-2 に示した。最大径 18cm、残存長 30cm を測り、樹種はコナラ属コナラ亜属コナラ節である。柱穴 02 から出土した 1 点は図示し得なかったが、樹種はクリであった。また柱の抜き取りは認められず、建て替えなどは行われなかつたものと考えられる。柱穴内には意図的な埋納などの状況を想定させる遺物の出土は無く、出土遺物としては掘方理上に含まれた土器細片のみとなる。土器類の細片が約 60 件、須恵器の細片が約 10 件出土したが、古墳時代の須恵器环身細片を認めるものの、積極的な時期比定はなし得ない。微高地 1 の全体的な遺物の出土傾向からは、古墳時代中期～後期、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良時代に帰属する可能性があるが、より微地形に即した主軸をもつという点において、古墳時代のいすれかに當まれた可能性により重きを置いておきたい。

建物 2 (図 19)

微高地 1 北寄りに位置する掘立柱建物である。建物の中央同士の距離で、建物 1 の南南東 16m に位置し、建物 3 の東、9m に位置する。実際に上屋構造を想定すると軒が接する距離とみることができるところから、建物 2 と建物 3 は同時期には存在しないと考えられる。また、井戸 1、土坑 4 にも近い位置と

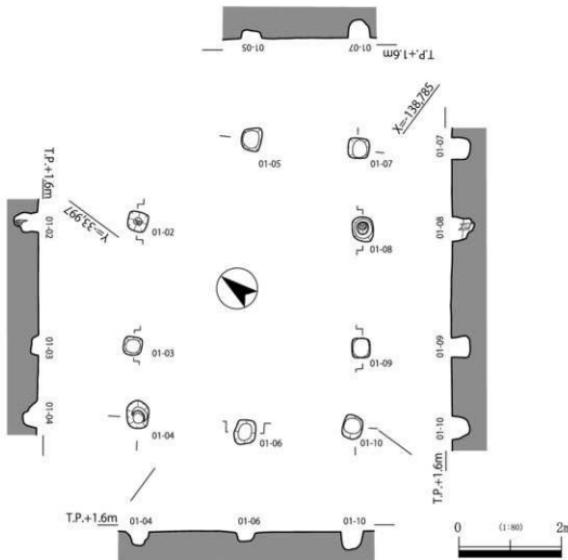


図 18 建物 1 平・断面図

なる。直接切り合う関係ではないが、土器埋納遺構と考える土坑5が重複する。建物の構造は、やや整然さを欠くが、東柱を有する2間×2間の柱配置をもち、ほぼ正方形のプランをもつ。柱間の寸法に大きなばらつきはみられず、おむね1.8m～2.0mの数値を測る。規模は芯々距離で、4.5m×4.8mを測り、面積は21.6m²となる。柱配置にばらつきがあり建物の軸を厳密には決しがたいが、方位は座標北よりおむね25°東に振れている。柱穴は一辺30～50cm程度の隅丸方形を呈するものを基本とするようであるが、不整形なものも含まれる。検出面からの深さは15cm～40cm程度を測るが、ばらつきが大きい。建物1同様、柱穴の底が一段下がるものも含まれており、礎板がみられなかったことと併せ、上屋の重量により、柱が沈下したことが推測される。柱穴埋土は、おむね第2a層、第2b層を構成するシルトのブロック土で埋め戻されていたようである。残存する柱根は無かったが、断面の観察では柱痕跡の可能性のあるラインが認められた。平面で明瞭ではなかった点や柱痕跡と考えられる部分にもブロック土が認められる点など、否定的な要素もあり、廃絶時に柱が残されていたかどうかは判然としない。柱穴内には埋納などの状況を想定せる遺物の出土は無く、出土遺物としては掘方埋土に含まれた土器片のみとなる。比較的大きな破片としては図25～3に示した須恵器高壺の脚部がある。脚端部径16.5cm、残存高6.7cmを測る。長脚二段の透かしをもつ脚部と考えられ、TK43型式段階に属するものであろうか。6世紀後半～末のものと考えられる。柱穴04から出土した破片と、柱穴06から出土した破片が接合した。これ以外には柱穴出土遺物は細片も少なく、土師器、須恵器片8点を数えるのみである。建物の時期については、柱穴出土の高壺を建物築造以前のものと積極的に認めるうえでは古墳時代中期～後期、5世紀後半から6世紀前半に帰属する可能性は低いと考えられる。微高地1において土地利用が推測される時期のうち、古墳時代後期～飛鳥時代、あるいは奈良時代が帰属時期の候補となるが、先に述べたように建物3との同時存在を否定的に捉え、なおかつ軸方向の層位などを根拠に築造時期に比較的大きな差をもつものとするならば、相互に異なる時期に營まれたものと想定することができる。

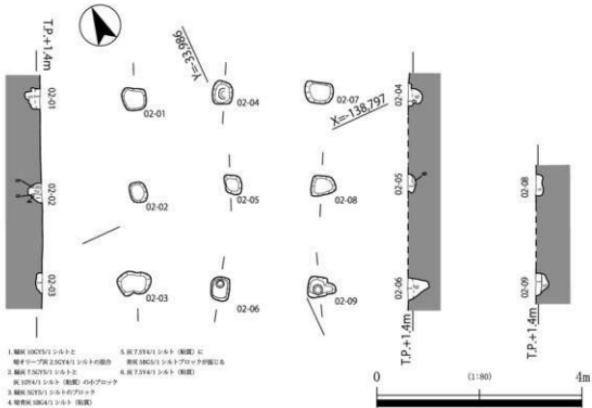


図19 建物2 平・断面図

建物3（図21）

微高地1北寄りに位置する掘立柱建物である。先述の建物2とは近接しており、北側に井戸1、土坑4が位置する。直接切り合う遺構はないが、L字の柱配置を想定する柱列と重複する。しかしこれも積極的に建物や構といった遺構とすることはできないので、明確な重複関係はないものとしておく。建物の構造は梁間3間、桁行6間の比較的の整然とした柱配置をもち、長方形のプランを取る。桁行の柱間隔は約1.6mと整っているが、梁間の柱間隔は1.2m～1.5mとややばらつきがある。奇数の梁間をもつことから変則的な棟持柱の構造が推測されるが、柱間隔が桁行のものに比べて若干狭いことは、これを反映したものと推測する。規模は芯々距離で、4.2m×9.6mを測り、面積は40.3m²となるが、本書報告範囲で検出した建物遺構では最も大型のものである。建物の方位は座標北より73°東に振れていて、比較的の正方位に近い軸をもつものとすることができる。個々の柱穴については、検出時に輪郭を把握しにくいものもあり、断ち割りを行うことで確認できたものもある。このため検出面での正確な法量を記録できていないものも多いが、一辻35～60cm程度の隅丸方形を呈するものを基本とするようである。建物の軸方向に柱穴の軸方向を描えるものが多く、整然とした印象を与える。検出面からの深さは25cm～60cm程度を測るが、底面の高さは比較的揃っているようである。柱穴掘方の壁面下部が崩落した状況のものも多く、掘削時の湧水による影響かと思われる。柱穴09、11、13の3基の柱穴に柱根が遺存していたが、それらを含め、柱穴の底が一段下がるものも含まれており、他の建物同様、上屋の重量により、柱が沈下したことが推測される。礎板は認められない。柱穴の埋土は第2b層のシルトブロック間に、第3層の砂

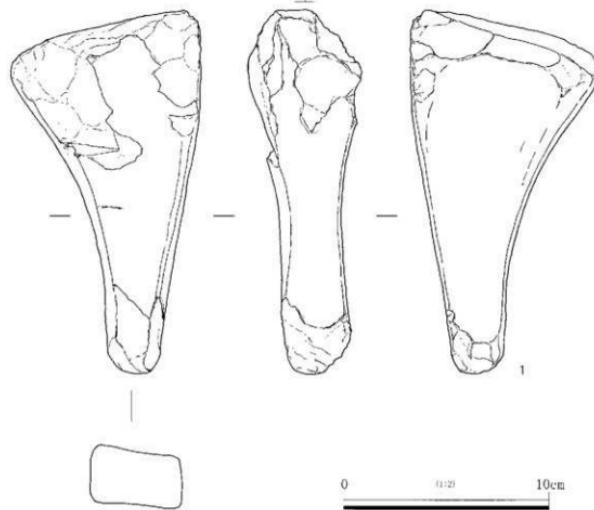
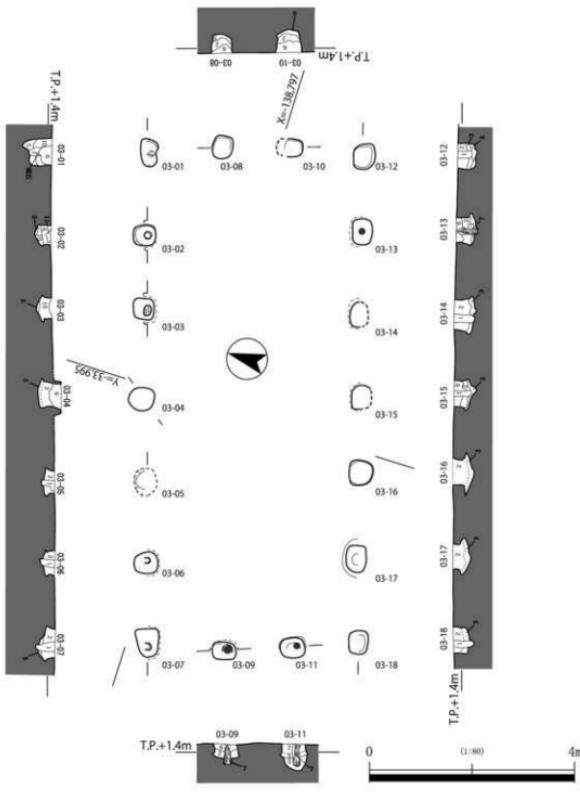


図20 微高地1 建物 出土遺物1



- 1. 磁磚 100×100 シルクプロックと
R 10V U1 1/2トプロックの組合(軒樋)
- 2. R 10V U1 1/2トプロックの組合(軒樋)
- 3. オーバーフローパイプ
- 4. 磁磚 100×100 シルクプロック組合
- 5. オーバーフローパイプ(組合)
- 6. 磁磚 100×100 シルクプロック
- 7. 磁磚 100×100 シルクプロック(軒樋)
- 8. 磁磚 100×100 シルクプロックと
R 10V U1 1/2トプロックの組合
- 9. 磁磚 100×100 シルクプロックと
R 10V U1 1/2トプロックの組合(軒樋)
- 10. 磁磚 100×100 シルクプロックと
R 10V U1 1/2トプロックの組合(軒樋)
- 11. 磁磚 100×100 シルクプロック
- 12. オーバーフローパイプ(組合)
- 13. 磁磚 100×100 シルクプロックと
R 10V U1 1/2トプロックの組合
- 14. 磁磚 100×100 シルクプロック
- 15. 磁磚 100×100 シルクプロックと
R 10V U1 1/2トプロックの組合

図21 建物3 平・断面図

が混ざるものが多く、柱痕跡とおぼしき部分にもブロック土が含まれている。柱材の残らない柱穴については、柱が抜き取られたものと考えられる。先述の柱3点は図25-4～6に示した。樹種については、柱穴09出土の4はコウヤマキ、11出土の5はスギまたはヒノキ、13出土の6はヒノキである。いずれも残存長40cm前後、残存最大径10～15cmを測る。柱根の遺存していない柱穴においても明確な柱の抜き取り痕跡は認められなかつたが、柱穴01において出土した砥石（図20-1）は柱穴の底面から浮いた状態で、なおかつ砥石の下に柱痕跡がのことから、柱抜き取り後に埋められたものと考えられる。この前提に立てば、施設時に一部の柱は抜き取られたものと理解することができる。1の砥石は砂岩製で、長さ17.8cm、幅9.3cm、厚さ5.5cm、重さ650gを測り、四辺とも良く使い込まれている。これ以外には埋納などの状況を想定できる遺物はなく、他の建物同様、柱穴埋土から土器の細片が出土しているのみである。土器細片を50点前後、須恵器細片を5点数え、いくらか器形を推測するものもあるが、詳細は不明である。したがって、出土遺物から建物の帰属時期を知ることは難しいが、奇数間の梁間構造を、高槻市新池遺跡の事例（森田1993）と類似するものとみれば、7世紀後半以降に下るものと考えられる。

建物4（図22）

微高地1北寄りに位置する掘立柱建物である。他の建物が微高地1の中央付近に微高地の軸に沿って分布するのとは異なり、やや西寄りの、遺構分布の比較的散漫な箇所に位置する。他の遺構との切合は無く、近接して建物間連の遺構もみられない。2間×2間の柱配置、正方形のプランをとるが、東側柱列の中間柱が認められず、南北の柱列も平行しないなど、極めて不整形なものといえる。柱間距離も1.7m～2.4mとばらつきが激しく、安定した構造のものではない。方位は座標北より西に4°程度振れた

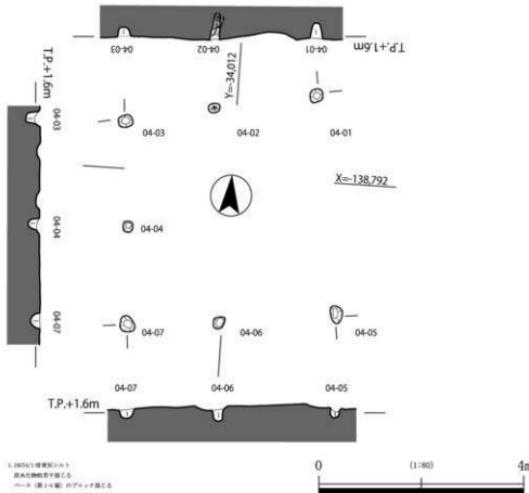


図22 建物4 平・断面図

もので、ほぼ正方位に近い建物軸をとる。個々の柱穴は長軸30cm未満の隅丸方形、あるいは不正円形であり、概して小規模である。柱穴02に柱根が遺存しており、これのみ深さ50cmを超えるが、他の柱穴は深さ30cm未満と浅い。柱穴埋土はベース土（第2b層）のブロックを含むシルト層であり、柱穴02を除き、柱痕跡は認められない。柱穴02に残存していた柱根（図25-7）は残存長49.4cm、残存径5cmを測るが、枝あるいは節が延びた状態で残存している。樹種はモミ属である。各柱穴からの出土遺物は土師器、須恵器の細片がわずか4片みられたのみで、時期などを詳細には知り得ない。建物の方位が正方位に近いという点をもって、第1面の遺構の中では遅れた時期を想定するにとどめるが、構造や柱穴の様相など、他の掘立柱建物とは異なるところも多く、建物としての性格も作事小屋のようなものを想定しておきたい。

建物5（図23）

微高地1中央付近に位置する掘立柱建物である。他の建物遺構との重複はない。北に14m離れて建物3があり、南に10m離れて建物6が位置する。03-5-5、03-5-6トレンチの境に位置するため、4基の柱穴を欠くが、2間×3間の柱配置をもつ構造と考えられる。柱穴は長軸50~60cm程度の円形の柱穴を主とし、深さは絶じて20cm程度と浅く、柱間隔は1.3m~2.0mとばらつきがおおきい。建物の規模は3.7m×5.0mを測り、面積は18.5m²となる。建物の軸方向は座標北から約2°東に振った方位をもっており、正方位に近い。個々の柱穴について建物以降であるとの認識が遅れたため、柱穴埋土に関する詳細な観察ができなかったが、平面、断面の確認においても柱痕跡は確認できず、柱根も遺存していない。出土遺物には意図的な理納などを示すものはなく、土師器、須恵器の細片が出土したにとどまるが、柱穴01、02からは小石が若干出土しており、正確な出土状況は不明ではあるが、柱根石の可能性も指摘される。出土遺物から時期を知ることは難しい。建物軸の方位からは後出の要素も指摘できるが、柱穴が円形を主とする様相は時期的にさかのほる要素とすることもできる。

建物6（図24）

微高地1中央南寄りに位置する掘立柱建物である。散在するピットとの切合はあるが、他の建物遺構との重複はない。今回の調査範囲では最も南端に位置する建物遺構ということができるが、建物6より南側においては遺構分布も散漫となり、微地形的にもさらに南側への傾斜が始まっている部分であり、比較的安定した地形としては南限といふこともできるのかもしれない。直接の関連はわからないが、微高地縁辺にみられる横列の方向も建物6の南側を大きく回るような方向をとっていることからも、微高地の南縁としての意識が働いた立地であると考えられる。2間×2間の柱配置を取り、束柱をもつ。柱間隔にはばらつきがあり、最も広いところでは2.5m強、狭いところで2.1mを測る。建物規模は4.8m×4.8mを測り、面積は23m²となる。厳密な方形の柱配置ではないため建物軸については不明瞭なところもある

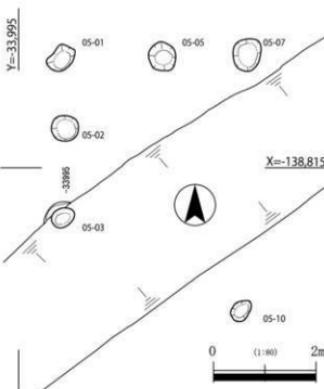
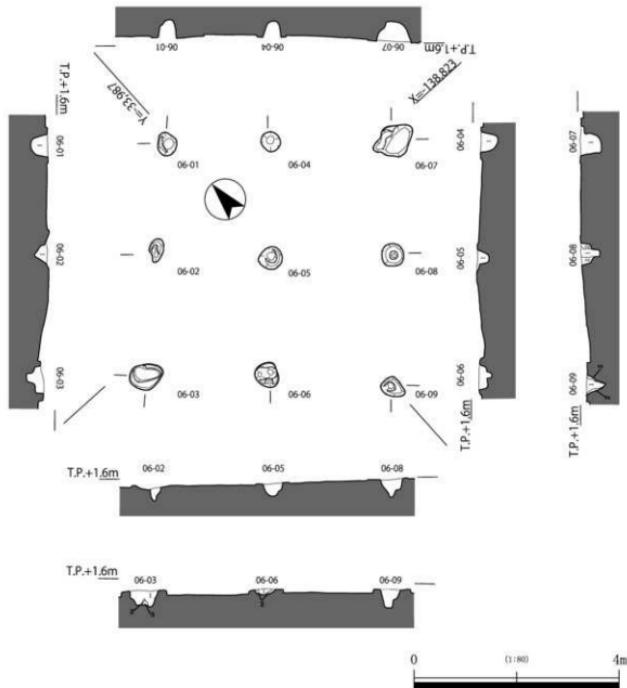


図23 建物5 平面図

が、座標北から約40° 東に振っている。個々の柱穴は不整形な形状のものが含まれるが、比較的整ったものでは、径ないしは長辺40cm程度を測る規模のものがあり、大きいものは長軸70cmを測るものまでが含まれる。柱穴の深さにもばらつきがあるが、検出面からの深さは40cm弱のものが主体を占める。柱穴には柱根の残存するものはみられず、平面的な検出時にも柱痕跡を認めるることは無かったが、埋土断面の観察においては柱痕跡の可能性のある土が認められ、さらに柱穴床面が一段下がるものも認められた。柱穴出土遺物には埋前などの状況をみせるものはもとより、土器細片もみられない。柱穴埋土はべ



06-1. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による
06-2. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による
06-3. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による
06-4. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による
06-5. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による
06-6. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による
06-7. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による
06-8. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による
06-9. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による
06-10. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による
06-11. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による
06-12. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による
06-13. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による
06-14. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による
06-15. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による
06-16. 高岡 100G01 1号館壁
〔ベース面〕に瓦残りシルトの小ブロック層による

図24 建物6 平・断面図

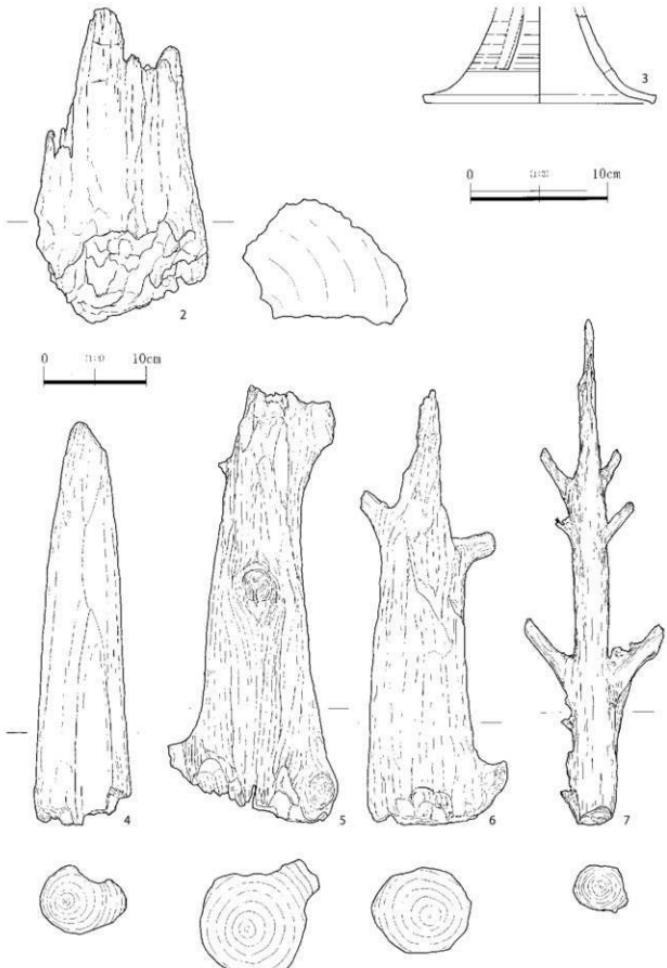


図25 微高地1 建物 出土遺物2

ースの砂層、あるいはシルト層のブロックを含むものであるので、廃絶に際して柱が抜き取られた可能性がある。また埋土に遺物細片を含まないということは、遺構掘削時の周辺土壤に遺物がそれほどなかった状況を示すとも考えられ、微高地1における土地利用の比較的初期の段階であることを推測させる。遺物から建物の帰属時期を知ることはできないが、建物の方位が比較的地形の影響を強く受けていると考えられる点もあわせて考えると、古墳時代にさかのばる建物であることを推測する。

井戸1（図26）

微高地1北寄りに位置する井戸である。近接する建物との位置関係では、建物3の北辺柱列から25m、建物2の西辺柱列から38mの距離を置いて位置している。西側に位置する土坑4を切る関係で、一部が重複する。構造は曲物を井戸側に用いるものであるが、井戸側は最下部から曲物2段分が残存していたが、3段目については下部が残存していたのみであり、これより上部の井戸側は遺存していない。検出面での掘方は基本的には円形を志向しながらも不整形な形状で、長軸1.6m、短軸1.3m、深さは75cmを測る。掘方は掘鉢状の断面形状をもつが、掘方掘削時に崩落したと思われる箇所が壁面に認められる。また井戸側最下段部分の掘方は曲物の法量にあわせて掘削されており、掘方と井戸側が接している。おそらくこの段階で壁面の一部が崩落していた可能性があるが、井戸側2段目、3段目を設置した段階までに、3段目下部までの掘方を崩落土も用いて埋め戻し、曲物を固定したのち、さらに上部の井戸側の設置と掘方の埋め戻しを段階的に進めたものと考えられる。井戸側に用いられた曲物は径40cm、一段の高さ20cmのもので、竈は個別には巻かれず、各段の縦ぎ目の外側に幅10cmのものが巻かれている。掘方は第3-26層の砂層を貫通しており、これが主たる取水層であったと考えられる。廃絶時に最上部の井戸側が抜き取られたかどうかはわからないが、最終的には比較的均質な砂混じりシルトによって上部まで埋められたようである。

出土遺物には土師器、須恵器、瓦、石、木製品があり、細片を含めた総数は30点を超える。釣瓶などの機能をもつらる土器については使用時の遺物であるのか、廃絶時の遺物であるのかは明確に区分できないが、比較的大型の個体は井戸側最下段の曲物内部に集中して残されており、廃棄の一括性を想起させる。いずれにしてもこれらの遺物とともに井戸廃絶時には埋め戻されたものと推測される。出土遺物のうち図化し得た遺物は図27に示した。土師器には坪（8・9）、皿（10）、堀（11）、ミニチュア堀（12）がある。8は内面に放射状暗文があり、9は外面口縁部直下に横方向のヘラミガキが認められる。いずれも精製胎土のものである。須恵器は堀部片（13）のみ図示した。外面に等間隔に並ぶ破裂痕あるいは器壁の剥離痕跡がみられる。瓦は1点のみの出土であるが、半裁された平瓦（15）がある。長さ35.2cmを測る。木製品（14）も1点のみの出土であるが、杭の先端とおぼしきもので、残存長13.5cmを測る。樹種はモミ属である。これ以外に砂岩（図版292-1929）と緑色凝灰岩（図版295-2995）の石材ないしは自然石が出土している。近接地に存在しないものであり、意図的に井戸内にもち込まれたものと考えられる。これら遺物からみて奈良時代中頃に帰属する遺構かと思われるが、平瓦に関しては井戸1の周辺において瓦葺の建物の存在が認められていないことなど、それぞれの遺物の由来については調査範囲を超えた範囲が対象となろう。先述の建物群の中に井戸1と同時期のものも存在すると考えられ、整然とした配置をもつ建物2や建物3などが位置関係からも候補になりうるが、建物個々の造営時期についても明確でないことから、奈良時代段階の景観については、層出土遺物などの様相を加味し、小結において検討したい。

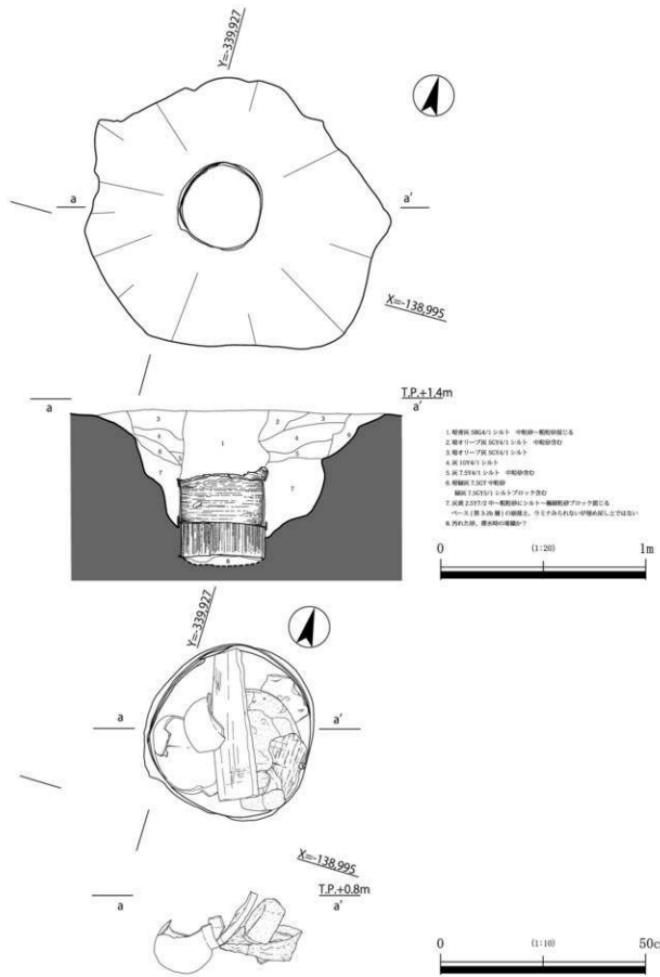


図26 井戸1 平・断面図 遺物出土状況図

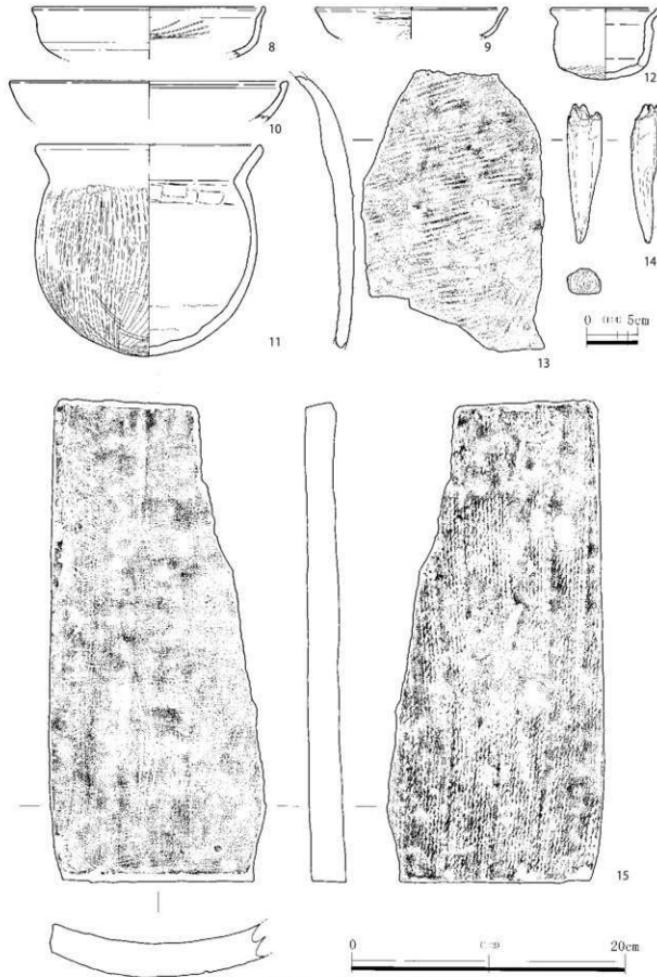


図27 微高地1 井戸1 出土遺物

土坑1（図28）

微高地1の北寄りに位置する大型の土坑である。周辺の造構分布は極めて希薄であり、位置的に有意な関連を想起させる他の造構はみられない。径1.1m～1.2mを測る、やや不整形な変面形を示すが、円形を志向して掘削されたとみることができる。底部は平坦で、壁も一部に崩落によると思われる部分があるが、ほぼ垂直に掘削されている。深さは67cmを測る。埋土下半分はシルトブロック間に砂が入るという状況をみせ、木片、炭化物などが多く混じっている。掘削後、短時間での埋め戻しを想起させる。中位より上層にはシルト～極細粒砂の堆積がみられ、さらにその上面の擂鉢状にくぼんだところに炭化物の薄層が堆積する。これを植物遺体の炭化とみれば、漏水状況に植物遺体がよどんだ状況を推測することができる。さらに炭化物層の上部は粗粒砂、炭化物を多く含むシルトで覆われ埋没したようである。土坑内からの遺物の出土はわずかであり、土師器細片が2片出土したのみである。土坑と呼称するが、水溜あるいは井戸の機能を否定するものではない。

土坑2（図28）

微高地1の北寄りに位置する大型の土坑である。建物を想定するにはいたらないが、柱穴の可能性のあるピットを切る。基本的に円形を志向した平面形を示すが、いさか不整形であり、南北1.4m、東西1.1mを測る。深さは84センチを測り、壁はほぼ垂直、底もほぼ平坦である。埋土は土坑1同様、下位が間に粗粒砂を含むシルトブロックで埋められ、上位がシルト～極細粒砂で埋没する。遺物には土師器細片2、須恵器細片1があるが、図示し得るものではない。

土坑3（図29）

微高地1の北寄りに位置する土器埋納土坑である。土坑2の南、約8mに位置する。周辺はピットや土坑が集中する部分であり、横列を構成する可能性のあるピットと重複するが、切り合いは明確でない。平面形は梢円形で長軸0.4m、短軸0.35mを測る。垂直に近い壁からゆるやかな擂鉢状の底面へつながるU字形の断面形状をもち、深さは27cmを測る。埋土は第2b層のシルトブロックを主体とし、人為的な埋め戻しが推測される。底よりやや浮いた位置に須恵器杯蓋片（図35-16）がみられ、厳密には埋置を意図したものではないかもしれないが、土器埋納造構として扱う。これ以外に土師器の細片9がみられたほか、須恵器ないしは陶質土器の細片（図35-17）があり、外面には網席紋・沈線がみられる。16はTK209壺式段階に属するとみられ、6世紀後半～7世紀前半頃の年代が想定される。

土坑4（図28）

微高地1の北寄りに位置する大型の土坑である。比較的造構の分布密度が高い範囲に位置し、井戸1に切られる関係となる。平面形は円形で、径1.8mを測る。深さは40cmと直径に比して浅い。やや凹凸のある擂鉢状の断面形状をもち、底部中央がさらに一段深くなっている。埋土は底から壁までが細～中粒砂、シルトブロックなどで埋め戻され、その後、中央上部が砂の多く混じるシルトで埋没している。遺物には土師器細片2、須恵器甕細片1がみられたが、図示し得るものはない。

土坑5（図29）

微高地1の北寄りに位置する小型の土器埋納土坑である。比較的造構の分布密度が高い範囲に位置し、建物2の柱列と重複する位置にあるが、直接の切り合い関係はない。径0.3mの円形の平面形を示し、深さは10cmを測る。土坑の北西部に土師器塊（図35-18）を正置する。埋土については記録ができなかつたが、意図的に土器を埋納した造構であると考えられる。18は径10.6cm、器高3.7cmを測る小型の壺で、外面は工具によるナデにユビオサエの痕跡が残る。時期は奈良時代中頃～後半と考える。

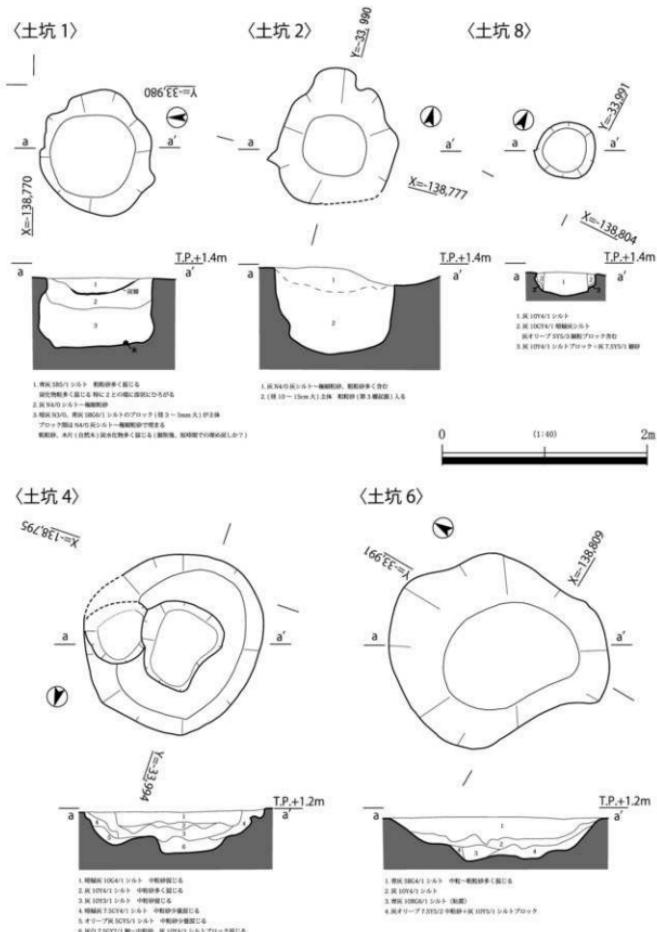


図28 土坑1・2・4・6・8 平・断面図

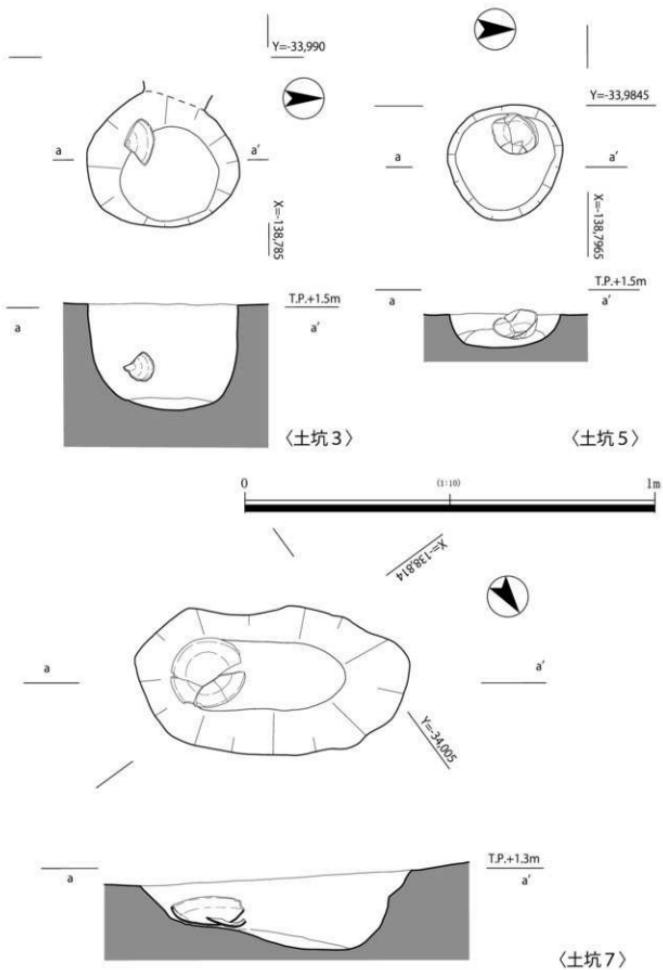


图29 土坑3·5·7 平·立面图

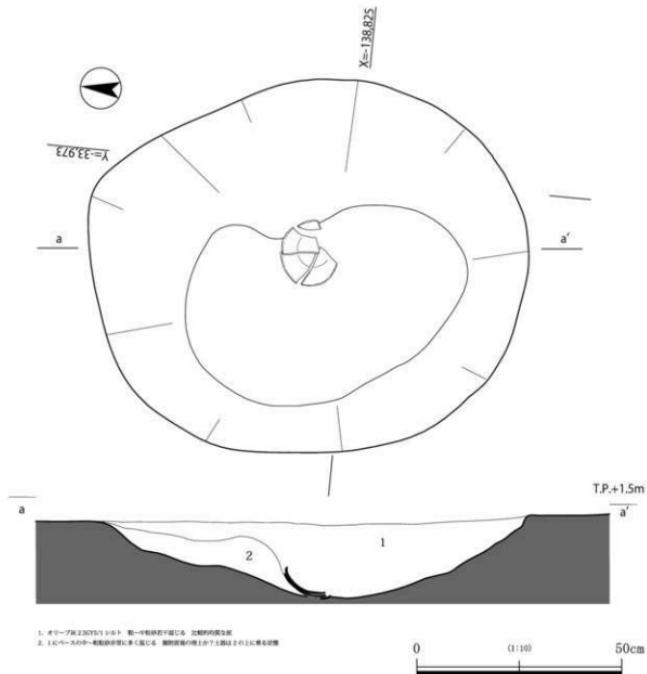


図30 土坑9 平・断面図

土坑6 (図28)

微高地1の中央付近に位置する大型の土坑である。建物3と建物5の中間に位置し、周囲の遺構分布は希薄であり、他の遺構との切り合いはみられない。長軸2.0m、短軸1.8mの不正円形を呈し、深さは44cmと規模に比して浅く、土坑4に近い規模である。壁から底部の形状も凹凸のあるゆるやかなU字状を示す。埋土の最下にはシルトブロック間に砂の混じる、埋め戻しを想起させる層があり、上位にはレンズ状にシルトや砂混じりシルトの堆積がみられる。出土遺物は土器の細片に限られ、土師器片10、須恵器片1を数えるのみである。

土坑7 (図29)

微高地1中央付近西寄りに位置する土器埋納土坑で、これより西側は微高地1西縁の傾斜が始まっている。周囲の遺構の分布は希薄であり、重複する遺構はみられない。長軸0.6m、短軸0.4mの長楕円形の平面形をもち、深さは18cmを測る。底面は北西部が深く、やや深い南東端の底面に接して、

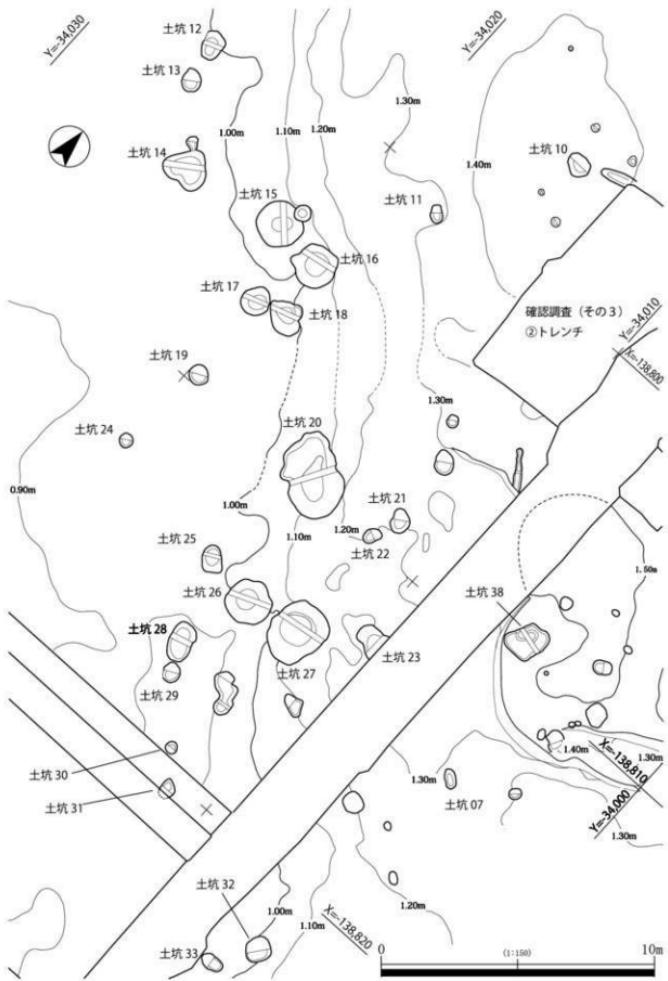


図31 第1面 微高地1西縁土坑群 分布図 (s=1/150)

土師器壺（図35-19）を正位置に置いている。埋土にはブロック土が認められ、土器を置いた後、埋め戻したものと考えられる。これ以外には遺物の出土はみられなかった。I9は口径18.1cm、器高4.8cmを測るもので、外面口縁直下に工具痕を残すヨコナデを施している。口縁端部はややゆるやかに外反し九く収めるもので、時期は平城V期、奈良時代後半としておく。

土坑8（図28）

微高地1北寄りに位置する小型の土坑である。建物3の南側にあり、南側柱列からは12mの距離に位置する。径0.6mの円形の掘方をもち、深さは23cmと浅いが、径0.4mの曲物を据えていたと考えられる。曲物自体は腐蝕して遺存していないが、径40cm、高さ20cmという法量は井戸1に用いられたものと近似する数値であり、同様の曲物が用いられていたと考えられる。小規模な井戸、ないしは水溜のような性格が想定される。曲物内部に相当する埋土は比較的均質なシルト、曲物と掘方の間はシルトブロックと砂により埋め戻されている。遺物としては土師器の小片4点が出土しているが、図示し得るものではない。したがって出土遺物から時期を想定することはできないが、構造上の類似から、井戸1に近い時期を想定しておく。

土坑9（図30）

微高地1南寄りの東縁に位置する大型の土器埋納土坑である。比較的遺構分布が希薄な地点に位置しているが、東側に接して南北に並ぶピット列がある。南北（長軸）11m、東西（短軸）0.9mの南北方向に主軸をもつ楕円形を呈する。深さは20cmであり、平面規模に比して浅い。断面の形状はゆるやかな掘鉢状で、中央付近に一部を欠く土師器壺（図35-20）を埋設するが、土層からみて北寄りの一部を埋めたのち、土器を置いたようである。土器を置いた後の埋土は比較的均質なシルト層であり、埋め戻されたものであるかどうかは不明である。これ以外には土師器の壺体部細片が1点、須恵器壺体部細片1点が出土しているのみである。20は約三分の二程度が残存する個体であるが、復元口径16.1cm、器高4.2cmを測るものである。外面底部付近は工具によるナデ、ないしはケズリによる調整が施されている。このような外面調整や口縁端部の特徴から、平城V期、奈良時代でも後半のものと考えられる。

土坑10

微高地1西斜面に列状に分布する土坑群の1基である。等高線に沿って列を成す他の土坑とはやや距離をおいてT.P.+1.4m付近の比較的高所に位置する。0.8×0.7mの長楕円形を呈し、深さは48cmを測る。埋土は第2a層と第2b層起源のシルトブロックの間に砂が入るもので、掘削後、極短時間のうちに埋め戻されたと考えられる。出土遺物には土師器壺、韓式系土器の細片があるが図示し得るものではない。

土坑11（図32）

微高地1西斜面に列状に分布する土坑群の1基である。他の土坑と距離をおき、土坑10と土坑16の中間付近に位置する。0.6×0.3mの楕円形を呈し、深さは16cmを測る。埋土は第2a層と第2b層起源のシルトブロックの間に砂が入るもので、掘削後、極短時間のうちに埋め戻されたと考えられる。遺物の出土はみられなかった。

土坑12（図32）

微高地1西斜面に列状に分布する土坑群の1基である。土坑12～土坑33をもってT.P.+1.0m付近の等高線に沿って並ぶ一群を構成する。1.0×0.7mの楕円形を呈し、深さは48cmを測る。埋土については記録できなかった。土師器壺の細片が1点出土している。

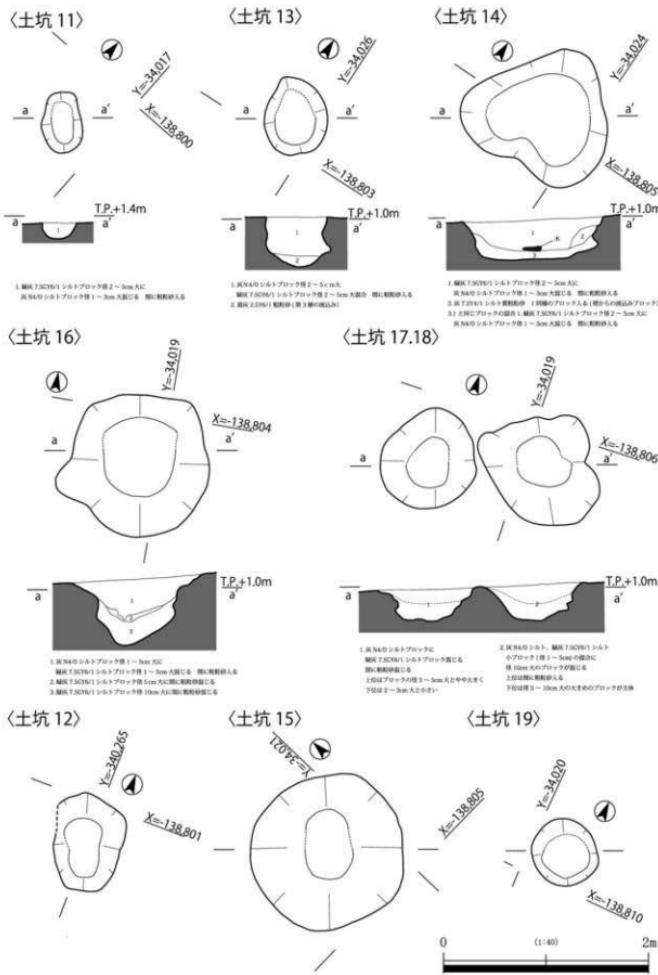


図32 土坑11~19 平・断面図

土坑13（図32）

径0.6mの円形を呈し、深さは50cmを測る。掘削時、最下層に第3層の砂が流入し、その上部は第2a層と第2b層起源のシルトブロック間に粗粒砂が入る埋土で埋め戻されている。出土遺物は無い。

土坑14（図32）

不整形な平面形を呈し、長軸1.2m、短軸1.0mを測る。深さは48cmを測る。埋土は第2a層と第2b層起源のシルトブロック間に粗粒砂が入るものであり、掘削後まもなくの埋め戻しが想定されるが、埋土は上下に分層が可能であり、埋め戻しの単位を示すものと考えられる。出土遺物には用途不明の木片がある。

土坑15（図32）

一群の中では大型の部類に入る。径1.5mの円形を呈し、深さは60cmを測る。埋土については記録できなかったが他の土坑同様、ベース土による埋め戻しが想定される。古墳時代の土師器壺片（図35-21）が出土している。

土坑16（図32）

後述する土坑17・18の分布を参照すると、土坑15と有意な関係をもつ可能性がある。径1.6mの円形を呈し、深さは65cmを測る。他の土坑同様、掘削時に発生した土によって短時間に埋め戻されたと想定されるが、土坑16では埋土下半が径10cm大のブロック、上半は径5cm以下のブロックが主体となっており、埋め戻しの段階を一層具体的に推測することができる。遺物には外面に格子タタキのみられる韓式系土器の小片や土師器小片、木片があるが、いずれも図示するものではない。

土坑17（図32）

一連の土坑群の中で、土坑18と並んで分布し、形状、規模的にも近しい様相を示す。径0.9mの円形を呈し、深さ32cmを測る。やはりブロック土による埋め戻しが想定されるが、埋土上位がややブロック径が大きい。遺物としては木片が出土しているのみである。

土坑18（図32）

土坑17の東側に並ぶ。径1.2mの不整形円形を呈し、深さ50cmを測る。埋土の様相からは掘削土による埋め戻しが想定されるが、こちらは埋土上位のほうがブロックの径は小さい。出土遺物には木片があげられるのみである。

土坑19（図32）

列を成す土坑群とはやや距離をおいて位置し、一連の土坑の中では中型の部類に属する。径0.6mの円形を呈し、深さ35cmを測る。埋土の記録はできなかった。遺物はみられない。

土坑20（図33）

一連の土坑の中では大型の部類に属し、主軸方向も他の土坑とはやや異なっている。長軸2.9m、短軸2.0mの長辯円形を呈し、深さは44cmを測る。地形的に低い南西側の底部に植物遺体を含む砂層が堆積し、その後、掘削時の発生土で埋め戻されたと考えられる点は、他の土坑と同じである。出土遺物には、外面に格子タタキを残す韓式系土器長胴壺の破片、土師器壺口縁片（図35-22）がある。22と同一個体と思われる口縁片が第2a層からも出土している。

土坑21・土坑22（図33）

近接して並ぶ2基の土坑である。土坑21は長軸0.8m、短軸0.6mの辯円形を呈し、深さ22cmを測る。土坑22は長軸0.6m、短軸0.4mの辯円形を呈し、深さ24cmを測る。埋土の様相は他の土坑同様、掘削直後の埋め戻しが想定されるものである。いずれの土坑からも遺物は出土していない。

土坑23(图34)

東側を調査区域の個溝により失い、全容は不明である。規模としては中型に属すると思われる。埋土の様相は他の土坑と類似している。遺物は出土していない。

土坑24(図34)

土坑19同様、他の土坑とはやや距離をおいて位置する。径0.4mの円形を呈し、深さも40cmを測る。埋土の様相は他の土坑同様であり、遺物は出土していない。

土壤25 (図34)

長軸0.7m、短軸0.6mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土の様相は他の土坑同様である。木片と土器類等の骨片が出土している。比較的大型の破片を含むが、図示し得るものではない。

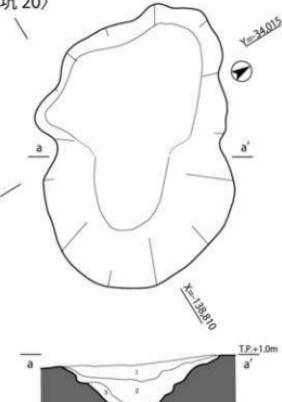
十一坊26(圖34)

土坑27と並んで位置する比較的大型の土坑である。径14~1.5mの円形を呈し、深さ60cmの擂鉢状の断面形状をもつ。他の土坑同様、掘削時の発生上で埋め戻されたと考えられるが、下位に第2b層、上位に第2a層のシルトブロックをそれぞれ主体としている。遺物には韓式系土器甕(図35-23)、土師器高壺脚(図35-24)のはか、土師器甕細片などが出土している。

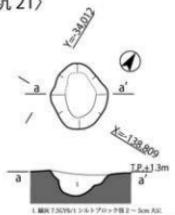
土坑27（图34）

土坑26と並ぶ大型の土坑で、長軸1.8m、短軸1.4mの楕円形を呈する。深さは20cm未満と浅い。埋土は他の土坑と変わらない。遺物には古墳時代の土師器甌口縁の小片が出土している。

〈十航 20〉



〈十坑 21〉



(本章 22)

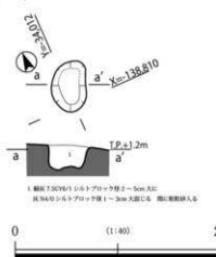


図33 土坑20~22 平・断面図

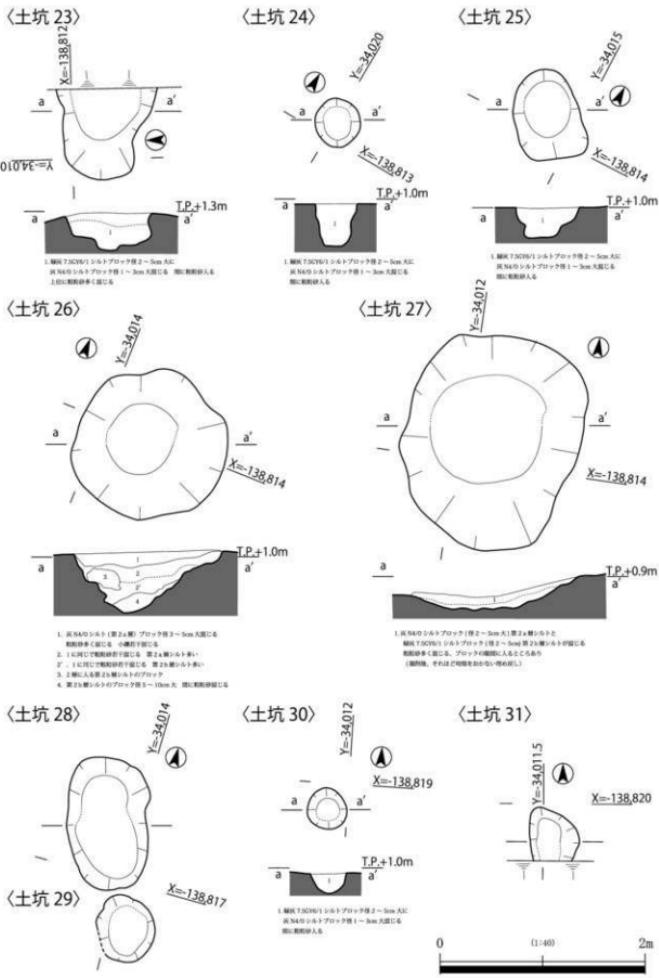


図34 土坑23～31 平・断面図

土坑28（図34）

土坑29と軸方向に並ぶ中型の土坑である。楕円形の平面形を呈し、長軸1.3m、短軸0.9mを測る。深さは35cmを測るが、埋土の記録はできなかった。埋土掘削中に植物種子を確認したことから、残りの埋土を洗浄したところ、ヒヨウタンの仲間の種子2500点余りを検出した。これ以外には遺物はみられない。

土坑29（図34）

土坑28の南に接する小型円形の土坑である。径0.5m、深さ18cmを測る。埋土については記録をしていない。遺物は土器細片が2点出土しているのみである。

土坑30（図34）

土坑31に接する小型円形の土坑である。径0.4m、深さ18cmを測る。埋土の様相からは掘削時の発生土により短期間で埋め戻されたと考えられる。遺物はみられない。

土坑31（図34）

南側を土層観察用の筋掘りにより失い、全容は不明である。残存部分では幅0.5m、深さ13cmを測る。規模としては中型に属するとと思われる。埋土の様相は他の土坑と類似している。遺物は出土していない。

土坑32・土坑33

T.P.+1.0m付近の等高線に沿って並ぶ一群の土坑では南端に位置する2基である。土坑32は径1.0m程度の円形、土坑33は長軸1.0mの楕円形を呈する。いずれの土坑からも遺物は出土していない。

土坑34～土坑41・土坑43～土坑44

微高地1上で検出された遺構のなかで、単体として一定の規模をもつものを土坑とし、遺物の出土しているものについては遺構番号を付した。このうち図示し得るものは土坑36出土の土器把手（図35-26）、土坑39出土の須恵器壺頸部（図35-25）があるが、遺構の性格を推測させるものではない。

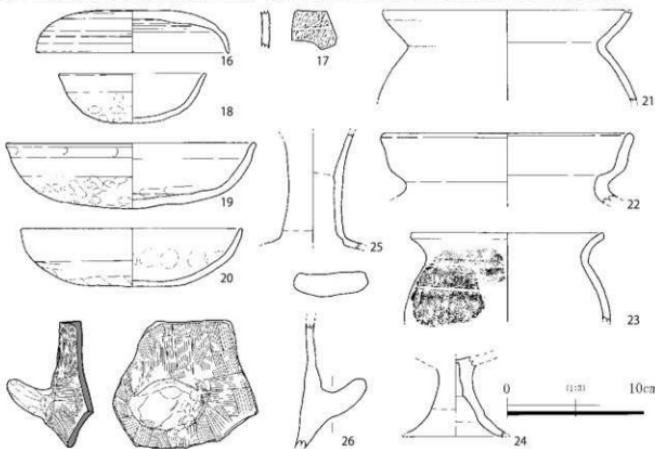


図35 微高地1 土坑 出土遺物1

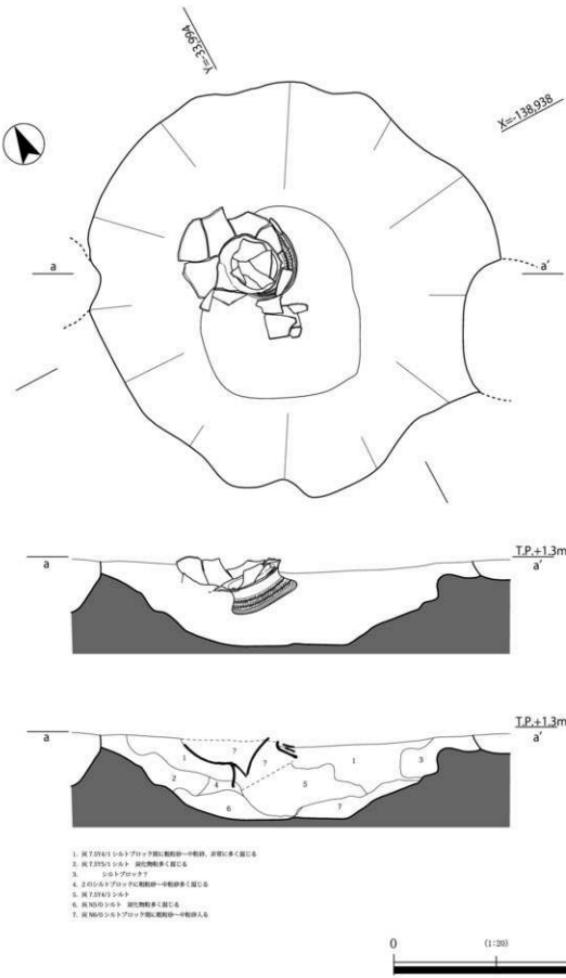


図36 土坑42 平・立・断面図

土坑42（図36）

微高地1南西の傾斜換点付近に位置する大型の土坑である。周囲にいくつかの土坑、ピットがまとまって分布し、さらに傾斜面では等高線に沿って柵とおぼしき柱列がみられる。平面形状は径2.0m前後の円形を呈するが等高線に沿う両肩を別のピットが切る。対称の位置にあり、有意の関連をもつと思われる。断面形状は浅い鉢鉢状であり、検出面からの深さは40cmを測る。須恵器の大型壺（図37-27）が土坑内部に倒立していたが、ある程度土坑底部を埋め戻したのち、北西方向から壺を転倒させ、置いた状況が推測される。多くの破片が重なってみられ、体部から底部にかけての破片も部分的に残されていた。当初完形で埋置されたものであるかどうかはよくわからない。土器設置後もシルトブロックを中心

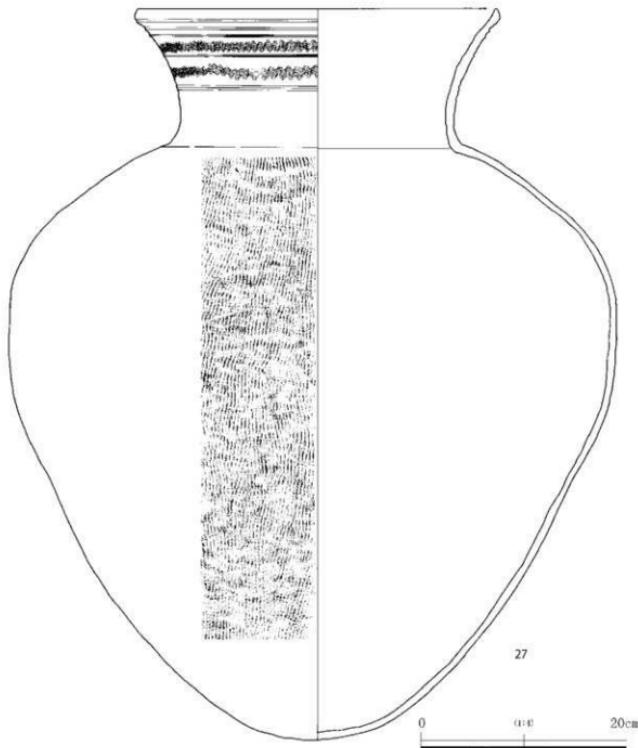


図37 微高地1 土坑 出土遺物2

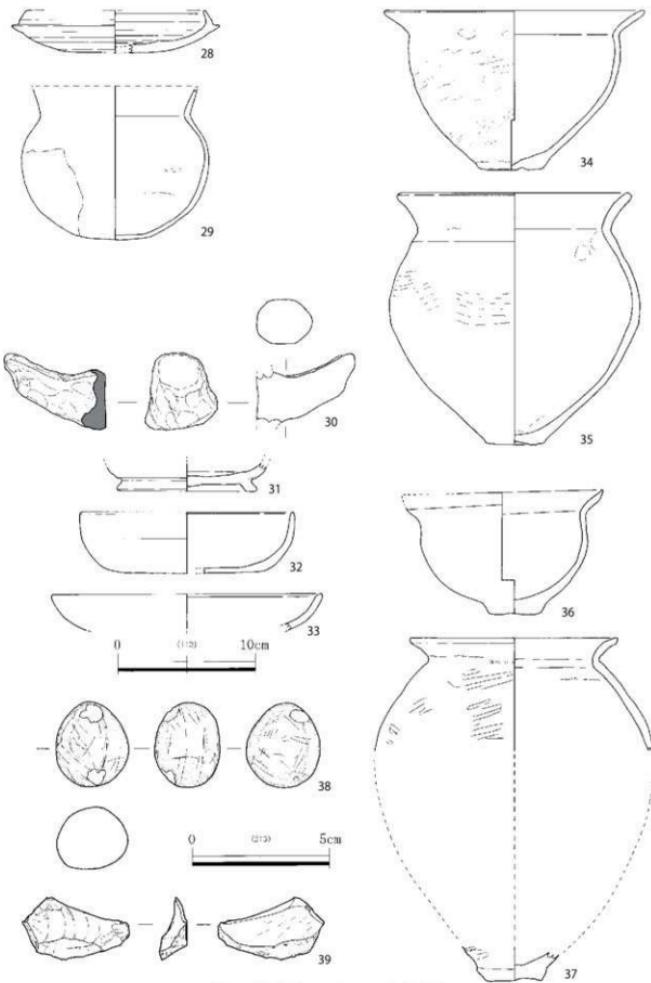


図38 微高地1 ピット 出土遺物

とする埋土で埋め戻されており、比較的短期間での埋め戻しが想定される。これ以外にも土師器小型壺の細片などが出土しているが、図示するに至らないものである。27は口径35cm、器高72cmを測る大型の壺で、口縁部外面に突帯をもって紋様帶を構成し、下位2段には波状紋が施される。体部外面には平行タタキを施すが、内面の当具痕跡はすり消されているようである。時期については限定しがたいが、TK23～47型式段階、古墳時代中期後半のものと考える。

柵・ビット

微高地1上で検出された多数のビットの中には列をなすものが含まれる。それら全てに柵としての性格を与えることは難しいが、地形や他の遺構との位置関係からその機能を推測できるものも認められる。調査時に現地で認識し、精査できたものは無く、遺構分布図の整理作業の過程で抽出したものがほとんどを占めるので、あえて遺構名を付すことは避けたが、図16、図17に点線、あるいは細線によって図示したものがそれである。微高地1北寄りの遺構が比較的密に分布する範囲では、建物1の軸方向に近い方向に並ぶのがいくつか認められる。その方向は微高地の微地形に即したものと考えられるので、必ずしも建物1と有意の関係を強く主張することはできないが、近接地にまとまり、かつ重複しないという点で、同時期に存在した可能性も意識しておきたい。

微高地1の南寄りでは南西側の傾斜面に臨む位置に柵列と推測する柱列が分布する。斜面の等高線に沿って分布することから、微高地の縁辺を画する柵列であると考えられる。微高地1北寄りに分布するビット列のものと比べて、個々のビットは小規模なものが主体を占め、ビット間の距離も短い。同じ微高地1南西側斜面においても北寄りの土塹が列状に分布する範囲では、小規模なビットによる柵列は認められないことから、遺構としての分布域に比較的明瞭な区分が存在することになる。微高地1東側の様相は本書報告の調査範囲外となり比較することはできないが、南西側に設置された意味としては、微高地からみてより低湿な地域との境界を画するという位置に柵列が設置されたものと考えられる。

このような柵列を構成するビットからは時期や性格を考察するに足る遺物の出土は無かった。ビット122から弥生時代のサクカイト剣片（図38～39）が出土したが、これは本来ベース層である第3-2b層に含まれていたものと考える。

図38にはこれ以外のビットから出土した遺物を掲載した。時期的には奈良時代、古墳時代後期～飛鳥時代、古墳時代中期～後期、弥生時代～古墳時代初頭のものがある。

30はビット93出土の把手で、古墳時代中期～後期のものであろう。28はビット17出土の須恵器環、29はビット68出土の土師器小型壺で、古墳時代後期～飛鳥時代に属すると考えられる。31はビット115出土の須恵器環、32はビット116出土の須恵器環、33はビット132出土の土師器皿で、これらの遺構は微高地1の南から東辺に偏在する。

34～38は弥生時代に属する遺物で、34・35はビット78出土の弥生土器壺、36はビット79出土の鉢、37は同じくビット79出土の壺である。38はビット77出土の石製品で、投弾ないしはリタッチャーと考えられるものである。土器類は弥生土器のなかでも最も新しい形態を示すもので、古墳時代初頭に帰属する可能性もある。ビット77～79は微高地1北寄りの遺構集中範囲に位置するビットで、古墳時代中期以降のビットとはやや様相が異なり、隅丸長方形を呈し規模もやや大型である。比較的まとまって分布することから、微高地1上における弥生時代～古墳時代初頭の土地利用の一端がこれら遺構の分布範囲にあるものと考えられる。

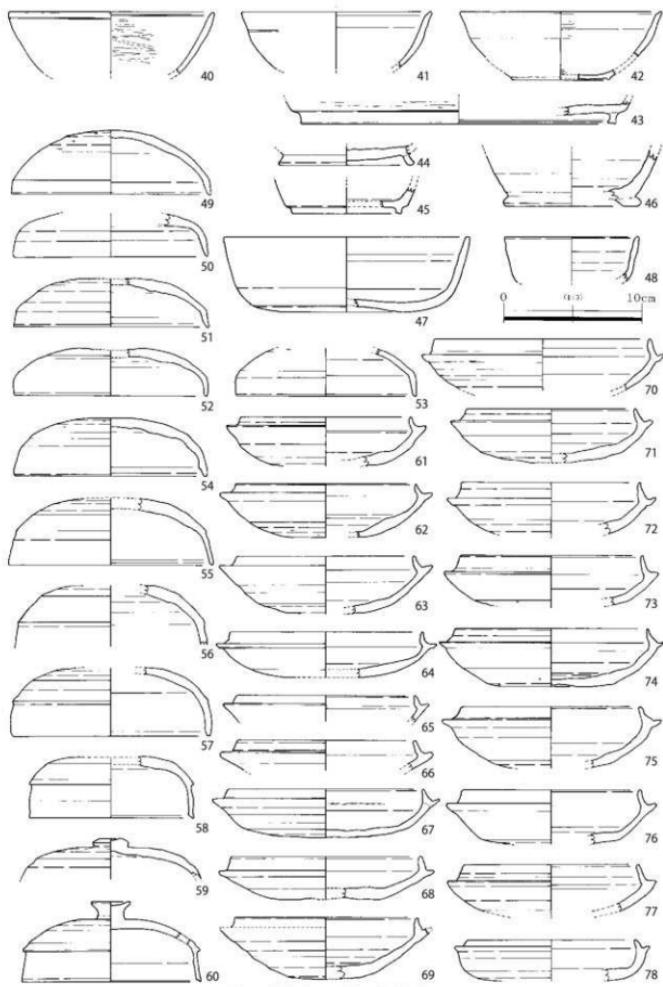


図39 微高地1層 出土遺物1

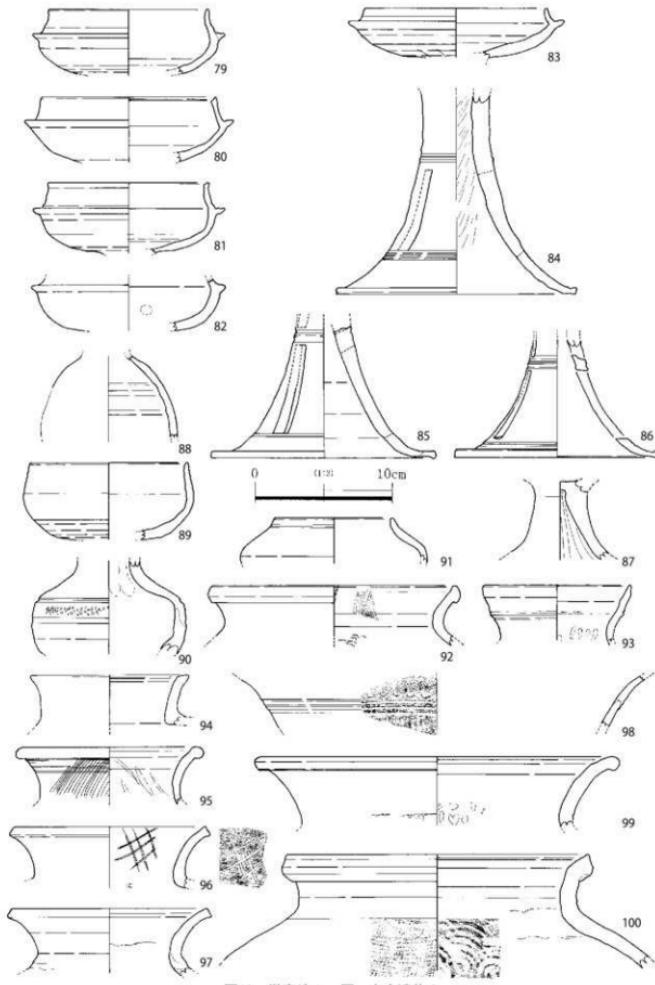


図40 微高地1層出土遺物2

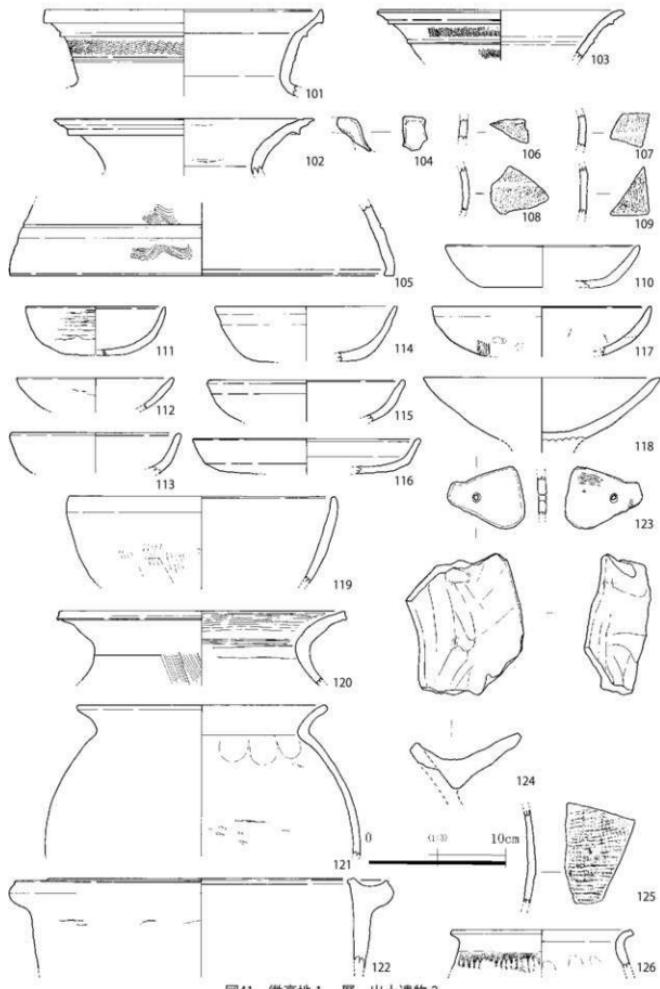


図41 微高地1層出土遺物3

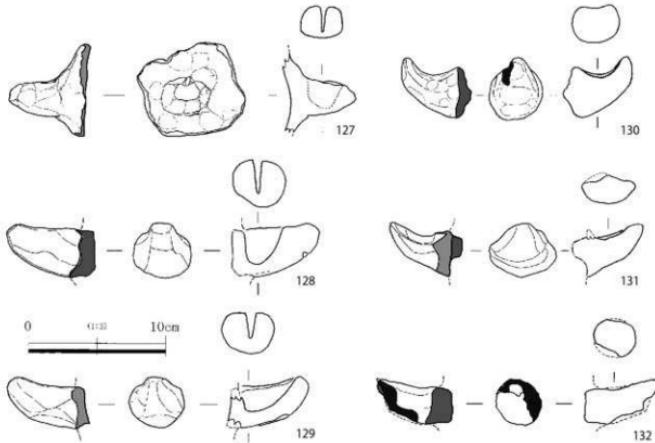


図42 微高地1層出土遺物4

微高地1層出土の遺物（図39～45）

微高地1は弥生時代中期に堆積した砂層の高まりによって形成されており、弥生時代後期から古代にいたるまでの遺構が重複する。したがって、その地表を構成する土壤も長期間にわたって形成されたものであり、それぞれの時期の遺物が含まれ複雑な様相を示す。現地での調査に際しても土層の分別が必ずしも容易に行えたわけではなく、認識の誤りも否定できない。したがって調査時に取り上げた層ごとの遺物の様相を分離して示しても、実態を正確に示すものではないと考えられるため、ここでは微高地1にかかる範囲の第1・5層、第2a層出土とした遺物、また遺構面検出時に遺構に伴わない形で出土したもの（厳密には遺構に伴わない以上、いずれかの層に帰属させるべき遺物と考えるが、調査時には「第1b面出土」として取り上げられているものがある）などを包括し、微高地1にかかる層出土遺物として報告する。図では遺物の種類ごとに別けて掲出している。個々の遺物の法量、胎土、製作時の痕跡などは本書本文末掲載の「遺物観察表」に記載しているので、本文では特徴的な事項を中心に記述していきたい。

図39～40～42は黒色土器A類の椀である。残存率が悪く、断片的な資料である。あえて帰属時期を示すとすれば、9世紀後半代となろうか。

43～48は須恵器で、古代に属するものである。総数が全体的に少ない中で、高台をもつ食器類の割合が高い。49～60は須恵器蓋、高坏蓋で、58・60などはTK23・TK47型式段階、55・57などはMT15・TK10型式段階、49～53・59などはTK43・TK209型式段階に属すると考えられる。61～図40～87には須恵器坏、高坏を配した。蓋同様の型式区分に属するものがみられるが、高坏ではTK43・TK209型式段階のものが目立つ。建物2出土のものも併せて、長脚二段の高坏が特徴的であるが、無蓋高坏の坏部は認められず、有蓋高坏に限られる。88～図41～105には壺、甕、瓶類を配した。88は縦窓の器種分類で壺

Cに属する壺。頭部から体部へ鉤錐型に開く形状が特徴的である。図示した部位以外に体部下半の破片も残存する。89は环、90は小型の細頸壺で、沈線によって区画された紋様帶に乱雜に刺突列点紋を施す。91は小型の短頸壺。94は傾きが認められ、平瓶の口縁部かと思われる。96の壺は口縁部内面にヘラ描きの格子を刻む。101・102は古手の壺口縁で、102はTK73型式段階に特徴的な口縁端部形状をもつ。104は平瓶の把手部分である。105は器台の脚端部と考える。復元径28cmを測る。

106～109には韓式系土器の細片を示した。非常に細かい破片ばかりではあるが、沈線や繩縫紋タタキが認められる。

110～124には土師器を配した。110～116の环、皿類は飛鳥時代～奈良時代に属するものか。119は鉢。120は長胴の甕かと考える。122は羽釜で、鍔は太く短いものが巡り、口縁部はやや内傾気味に短く延びる。123は土器片を加工したもので、内外面から穿孔が施される。124は移動式竈の庇部分で、焚口部分に貼り付けた部分で剥離している。

125～129には韓式系土器を示した。125は甕の破片で外面には細かい格子タタキがみられる。126は平底鉢の口縁部で、体部外面には平行タタキが認められる。127～129は把手で、上面からの切込みと、129には下面に刺突痕跡が残る。

130～132は土師器把手である。いずれも残り具合は悪い。

図43～133は平瓦の破片である。内外面とも摩滅が著しいが、内面には布目压痕を認めることができる。黄灰色を呈し、焼成は不良である。

図44には弥生土器を配した。134・135は後期の甕、136・137は中期の甕であろうか、底部が薄い。138は小型の壺で、底部の厚さが目立ち、内外面とも成形、調整が確である。139は鉢。体部の最下位にまでタタキ痕跡を残す。140も鉢であろうか。141は器形については甕かと考えられるが、受け口状の口縁部外面に刺突列点紋を施しており、近江系とされるものである。142・143は壺の口縁部、144は壺の底部であろうか。145は後期に特徴的な長頸壺で、体部下半1/3のところに分割成型の痕跡を残す。146も壺の体部～底部である。147は甕か鉢か。148壺の口縁～体部である。

図45には石製品を示す。149は砥石で、石材は流紋岩である。両端部を欠損するが、それ以外の面は研磨面として使われている。一面には比較的深い痕跡も目立つ。150は石錐で、石材はサスカイトである。長さ4.2cm、重量1.9gを測る。

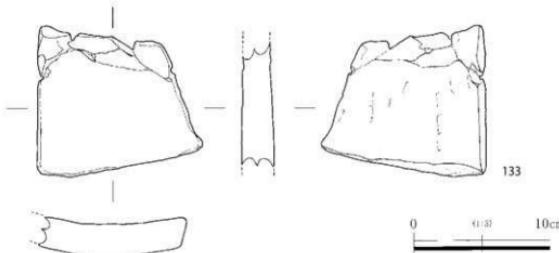


図43 微高地1層出土遺物5

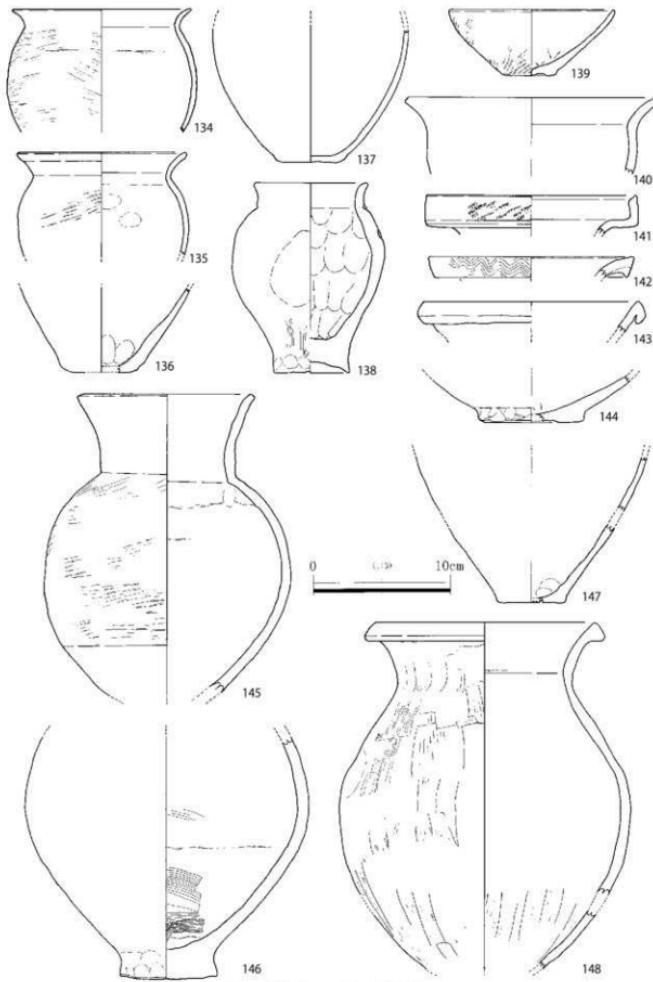


図44 微高地1層出土遺物6

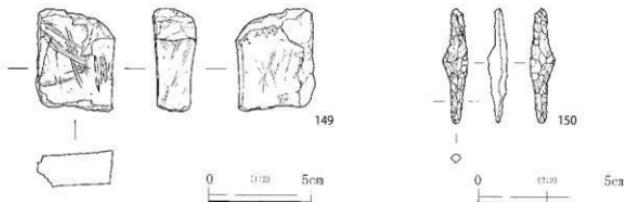


図45 微高地1層出土遺物7

微高地1 小結

微高地1は本書報告範囲においては、相対的に遺構が多くみられた範囲であった。これは主に地形的な要因から長期にわたり安定した微高地であったことが反映していると考えられる。層出土の遺物をみると、弥生時代から古代にかけてのものがあり、弥生時代中期に微高地が形成されたと推定されることを考え合わせると、弥生時代後期～古墳時代初頭にまで何らかの土地利用があったものと考えられる。本書報告範囲全体では道路を中心に、古墳時代中期～後期に帰属する遺物の出土が最も多いわけであるが、微高地1においても同時期の遺構、遺物は認められ、古墳時代前期から中期の空白時期をはさんで、土地利用が再び行われたものと考えられる。その後、再び遺物のみられない時期を挟み、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良時代にそれぞれ土地利用がなされたものと考えられる。次に土地利用の具体的な内容を遺構の性格とその時期を加味しつつ、検討してみたい。

掘立柱建物は6棟を確認したが、やや構造的にあいまいな建物4を除いても、5棟が居住域を構成している。また井戸側の遺存する井戸1が居住域を構成する要素であることも確実であるが、これ以外にも大型の土坑については水溜的な性格をもつ可能性がある。このような居住域を構成する各遺構の帰属時期については、井戸1をのぞくと明確にしがたい。井戸1から出土した土師器環は奈良文化財研究所による編年では平城Ⅲ～Ⅳ期のものと考えられるので、奈良時代中頃に居住域形成の一不定を置く事ができる。微高地1における土地利用の変遷を考えると、この時期以外に弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代中期～後期、古墳時代後期～飛鳥時代の建物が存在する可能性があるが、長脚二段高壙の出土した建物2は古墳時代中期以前に遡ることはないと考えられ、建物3の柱配置が飛鳥時代以前に遡ることも考えがたい。建物5の軸はほぼ正方位をとり、地形に左右されていない。この点を後出の要素みると、建物1、建物6は微地形の方向に規制された方位をもつことから、時期的に遡るものとみることもできる。このように確たる判断基準を示すにはいたらないが、5棟の建物については建物1、建物6に古墳時代中期～後期に遡る可能性を認め、建物2、建物3、建物5が飛鳥時代以降のものとする可能性を認める事となる。これは井戸1との位置関係において、建物2・3が近接するという状況と調和的であり、両者のどちらか、あるいは両方が奈良時代に属する可能性を指摘しておきたい。

土器埋納遺構については、前提として地鎮といった祭祀的性格を想定するものである。古墳時代後期～飛鳥時代の土坑3、奈良時代の土坑5・7・9があるが、前者についての性格はよくわからない。後者については居住域との先後関係が問題となるが、土坑出土の环類が井戸1出土のものより後出すると考えられることから、居住域廃絶後の土地開発に先立つ地鎮とする見方を主に、微高地上に居住域を形

成するにあたっての地鎮とする見方を副としておきたい。

微高地縁辺部における土坑については土器を埋納した可能性の高い土坑42を含め、性格については良くわからない。北寄りの斜面地に列を成す土坑群については掘削直後に埋め戻されている点、比較的規模の近しいものが2基1対になる可能性が高い点などを指摘することができる。掘削直後の埋め戻しという状況は、土坑下部の土壤の採取や、下部の地層の確認などが考えられるが、規模にばらつきがある点などは否定的な要素となる。多量の植物種子が出土した土坑もあるので、種子そのもの、あるいはそれらを内包する果実などの埋納や保存なども候補となるが、やはり全体的な性格をしるには至らない。時期も明確にしがたいが、韓式系土器などの破片を含むものもあり、古墳時代中期～後期の可能性を想定しておきたい。

微高地1は本書報告範囲においてはもっとも遺構分布の集中する部分であり、不明瞭な様相を残しながらも居住域としての性格を示すことができる。しかし建物や井戸が重ねて営まれるほど、活発な居住域形成がなされなかつたことも事実であり、居住域利用の限界点に近い様相を示しているように思われる。

第3項 微高地1（図16）・微高地2

微高地1と流路1・流路2との間の低地域を微高地1とする。T.P.+1.0m前後の標高を測る。明瞭に遺構と認識できるものは無く、土器集中1とした土器の分布と、近接してピット139とした穴がみられたのみである。

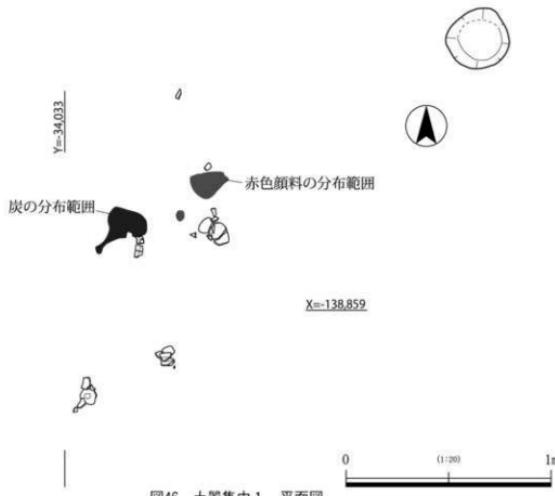


図46 土器集中1 平面図

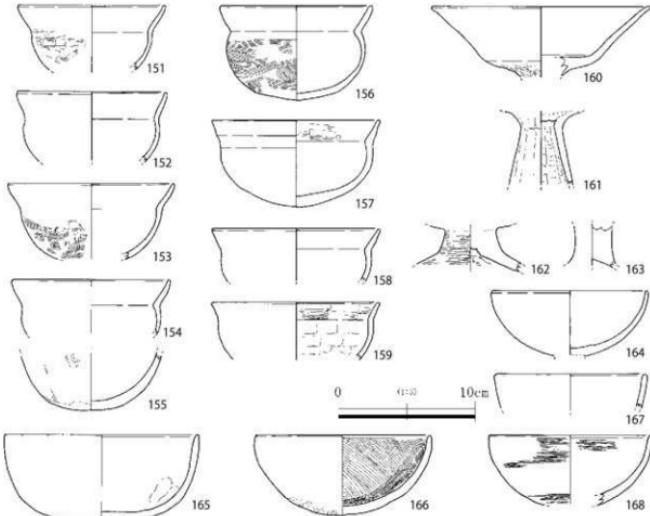


図47 微低地1 土器集中1 出土遺物

土器集中1（図46）

第1b面検出作業中に土器片のまとまった分布を確認し、周辺から炭化物のまとまりと赤色顔料の分布をみた。土器などを取り上げた後も、土坑など痕跡は認められず、土器等のまとまりとして土器集中1とする呼称を付した。土器などの分布範囲は南北約2 m、東西約1 mであり、この範囲に図示し得たもので土器18点、図示し得なかつたもので須恵器細片1点、土師器細片数点がみられた。

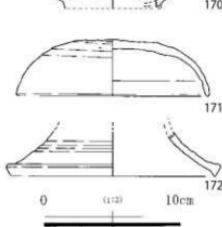


図48 微低地1 層 出土遺物

図47に土器集中1出土遺物を示した。全て土器であり、高坏を含むものの小型の塊・壺類が主体を占める。図47-151～159は小型壺で、全体的に遺存状態は悪い。160～164は高坏で、壺形の坏部をもつものはその法量が他の小型器種に近い。165～168は小型の塊であるが、166の内面調整は貝殻条痕と考えられる。他の個体にも二次焼成を受けているものがあり、製塙土器が含まれているものと考えられる。

以上の土器の様相に炭化物がまとまって分布することとあわせ、この場で土器の加熱を伴う何らかの作業が行われたものと推測される。製塙土器が含まれているとの見立てが正鶴を射たものであ

れば、明確ながいすることはできないまでも、製塩作業もその候補のひとつとなる。微高地1部分の層からは図48に示す遺物が出土した。171は内面に同心円圧痕を残すものである。

微高地1から流路2をはさんだ南側を微高地2としたが、微高地1同様の低湿な環境であり、記載すべき遺構、遺物はみられない。

第4項 微高地2・微高地3

概要（図49・図50）

調査範囲の中央部に位置する微高地2では、微高地の母材となる堆積層に明瞭な時期を示す遺物が希薄であり、第2b層と第3-2b層の区分が不明瞭なことからも詳細については不明なところもあるが、おむね微高地1同様の形成過程を経た地形であると考えられる。周囲の調査成果からみると必ずしも高い地形とはいえず、全体的に調査中も湿润な環境は変わらなかったが、それでも本書で報告する調査範囲のなかでは比較的高い部分ということができる。最も高い03-5-8トレンチ北西端付近で標高T.P.+1.3m程度を測り、微高地において相対的に低い03-5-8トレンチ南東部分で標高T.P.+1.1m程度を測る。古代以降、第1-5層の擾拌により上面を削られた範囲が多く、第2a層が残存しない範囲も広い。また第1-5層すらも削られ、残っていないかった範囲もある。結果的に第0-5面に属する遺構と第1面に帰属する遺構を同一面で検出することとなり、それぞれの帰属についての認識は難しいものとなった。主観的な把握ではあるが、微高地上面の幅は30~40mを測り、その中央を中心で多数の遺構が分布する。

微高地1においても認められた現象であるが、微高地南端寄り付近の上面が軸方向に直行して幅9m程度の溝状に分断されている箇所が認められた。埋土が第1-5層と考えられるものである。また微高地の東辺に幅5メートル前後の不整形な溝状に落ち込む部分がみられる点や、微高地上面の縁辺がゆるやかな勾配をもって傾斜するのではなく、はっきりとした段差をみせる点も、当初の地形に対して人为的に手が加えられた痕跡と考えられる。さらに06-2-4トレンチでは、第2b層を削りだす形で、微高地の東辺から畦状にのびる箇所も認められた。この部分を延長すると、本章第5節において記す、中世以降の坪境想定線に連なることから、第1-5層による第2b層の削平は条里型地割に規制されたものと考えられる。

微高地3は微高地2の縁辺にあり、流路1へ至る低湿な部分である。標高はT.P.+0.9~1.0m程度を測り、多くの部分では第2a層を除去することで、第1b面を検出した。

微高地2においては03-5-8トレンチの範囲で多数のピットを検出し、そのうちのいくつかについては掘立柱建物を構成するものと考えられる。微高地2においては建物7~9の3棟を想定した。また、建物を構成するにはいたらないが列状に並ぶものも若干認められる。微高地1と比べると、ピットなどの分布密度は低く、本来的に多くの建物が存在したものではないようである。建物以外の遺構には井戸があり、井戸側をもつもの3基（井戸2~4）を確認した。個々の遺構間の切合い関係は少なく、こと建物として認められるものには重複関係はみられない点は微高地1における状況と同じである。やはり同一場所において長期に営まれた居住城ではないと考えられる。同様に、建物の主軸に統一性がみられない状況が認められ、おもに微地形の方向を反映した軸をもつものが多いと思われるが、全体的に計画的な配置がなされた可能性については否定的な状況である。

ピットなどからの遺物の出土は皆無ではないが、微高地1において土器埋納遺構としたような、壺や皿類を単独で埋納する遺構はみられない。しかし、ピット148については遺構の輪郭を確認することはできなかったが、土師器甕2個体を意図的に埋納した遺構である可能性がある。またピット153についても

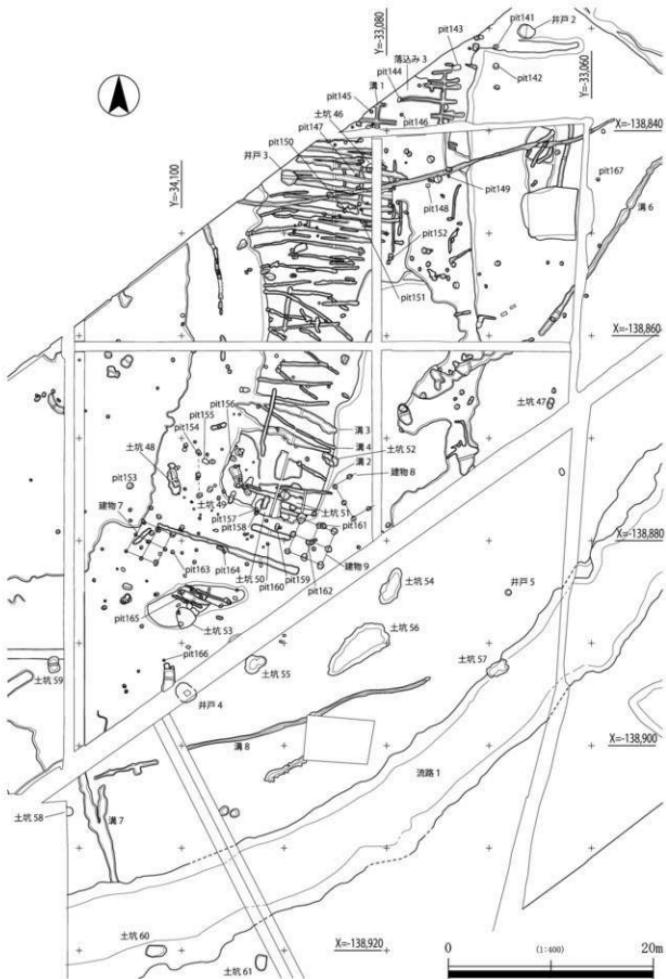


図49 第1面 微高地2・微低地3 遺構分布図 (S=1/400)

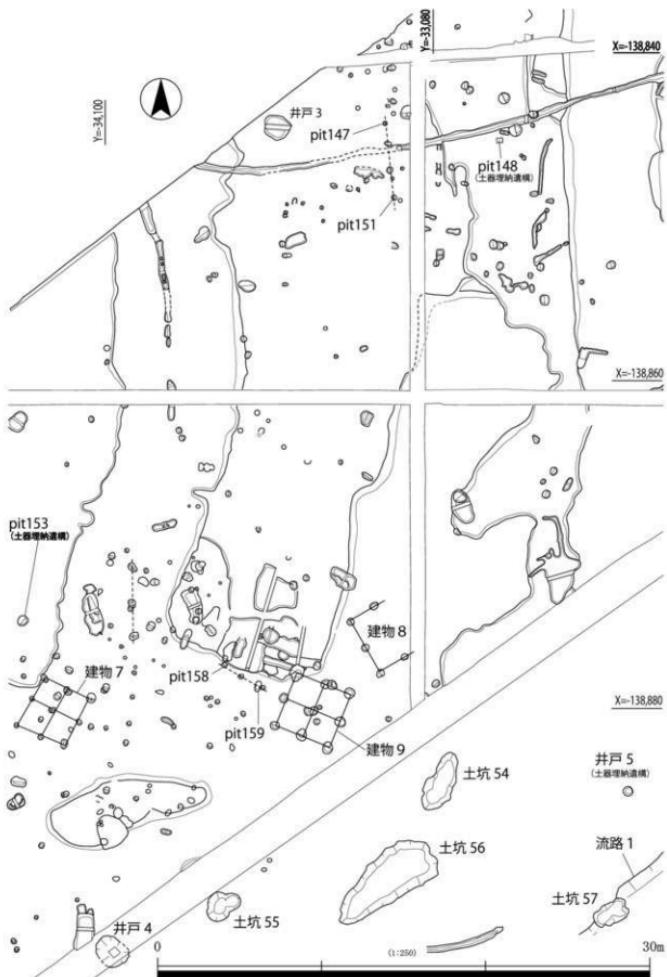


図50 第1面 微高地2 建物群分布図 (s=1/250)

韓式系土器瓶を意識的に埋納した土坑であると考えられる。

第0.5面に帰属する溝群と錯綜し把握が難しかったが、微高地北寄りを東西に横断する溝（溝5）を検出した。ゆるやかな弧状を描き延びるもので、調査範囲外へ延びるため全容は不明であるが、検出した範囲だけでも長さ35mを超える。

微高地3では微高地2の形に添うように、井戸、溝、土坑などが分布する。井戸は井戸側をもつものはないが、小径で深さをもつもの（井戸5）があり、韓式系土器の埋納がみられた。土坑は微高地1で確認されたものより大規模なものが多いが、同じように掘削直後に埋め戻されているようである。

以下、個別の遺構について報告する。

建物7（図51）

微高地2南西縁に位置する掘立柱建物である。柱穴のいくつかに切り合ビットがあるが、重複する建物遺構などは認められない。東15mに建物9が、南15mに井戸4が位置する関係をもつ。2間×2間の柱配置を取り、東柱をもつが、柱配置は極めて不整形であり、平行四辺形の平面プランをみせる。それでも規模は梁間3.1m、桁行3.4mを測り、面積は10.5m²となる。柱間隔にもばらつきがあり、梁間の柱間隔は1.5m、1.6m程度の差であるが、桁行では最大2.1m、最小1.3mと大きい。建物主軸の方位は座標北から約28° 東に振れている。個々の柱穴は不整形な形状のものが含まれ、規模にもばらつきがある。

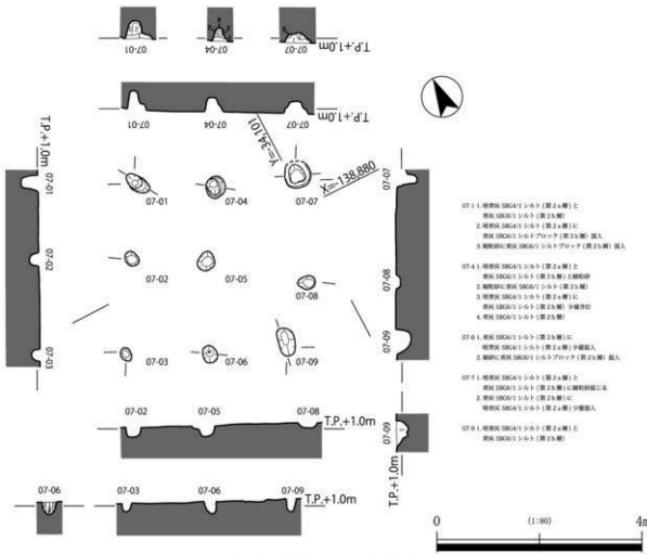


図51 建物7 平・断面図

小さいもので径30cm程度、大きいものでは径50cmを超えるが、おおむね円形を志向する形状をもつ。柱穴の深さにばらつきがあるが、検出土面からの深さは25~40cm程度のものが主体を占める。柱穴の埋土は第2a層、第2b層のシルトブロック間に、第3層の砂が混ざるものが多く、平面ではよくわからなかつたが、断面では柱痕跡の認められるものもある。柱穴06では柱痕跡に柱材の木質が残存していた。出土遺物としては図示できるものではなかったが、樹種はヤナギ属であった。これ以外には遺物はまったく出土していない。したがって遺物の面から帰属時期を知ることはできないが、他の遺構の時期を参考すると、古墳時代中期~後期に属するものと考えられる。

建物8（図52）

微高地 2 の南東縁付近に位置する掘立柱建物である。比較的遺構分布が希薄な箇所にあり、遺構の切合、重複はみられない。建物 9 とは中心距離で 5 m 程度の距離となるが、上屋を想定すると軒が近接する関係となる。

確認した柱穴は 5 基であり、これのみで構造を示すと 1 間 × 2 間の構造となるが、建物とするには柱穴を欠く構造である。規模は 3.3m × 1.8m を測り、面積は 5.9m² となる。建物の軸方向は座標北から 30° 西に振ったものである。各柱穴は比較的整った楕円形を示すが、深さにはばらつきがみられる。深いものでは検出面からの深さは 30cm を超えるが、浅いものでは 10cm に満たない。柱穴埋土は掘削土を用いた埋め戻しが推測されるもので、第 2a 層、第 2b 層を母材とするシルトのブロック間に砂の混じるものである。5 基の柱穴のうち、4 基の底には礎板とみられる板材が残存していた。樹種はいずれもスギであり、複数の材を並べて使用している状況が看取された。礎板の遺存状況は比較的良好であったにもかかわらず、平面、断面とも柱痕跡を確認することはできなかつた。このことからこの建物は建設途中において作業を中断し、柱穴を埋め戻したものである可能性が想起される。現状の柱配置によって建物を想定すると極めて小規模なものとなるが、北東側にさらに柱配置が展開する予定であったとすると、2 間 × 2 間の構造では面積が 11.8m² と、建物 7、建物 9 の面積に近い数値となる。建物ではない可能性をまったく否定することはできないが、建設途中の建物であるという案を主に、建物以外の構造物であったとする案を脳に置くこととした。柱穴からの出土遺物には、上記の礎板以外には、2 基の柱穴からそれぞれ上部器の極細片が出土したに過ぎず、それらの時期などは不明である。

建物9 (図53)

建物8の西南に位置する掘立柱建物で、切り合うピットなどはみられるが、重複する建物などの遺構

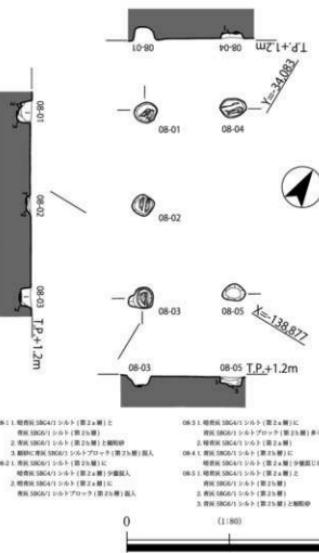


図52 建物8 平・断面図

はない。柱配置は2間×2間のもので、束柱を有する。比較的整った平面形を示し、柱間寸法も1.8mに近い数値に抑えている。建物規模は3.5m×3.6m、面積12.6m²を測り、微高地2で確認された建物の中ではもっと大きいものである。建物の方位は座標北から23°東に振ったもので、建物7に近い値であり、微地形の方向とよく合致している。柱穴は径60cm程度の円形のものが中心となるが、柱穴01は径90cmを越える大型のものである。深さにぼらつきがあるが、深いものでは40cm前後、浅いものでは10cm前後となる。柱穴平面では柱痕跡は明瞭ではなかったが、埋土の観察では柱穴01において柱痕跡の可能性のある断面が認められた。一方、他の柱穴では水平に分層可能な断面を示しており、柱の様相についてはよくわからない。礎板あるいはその可能性のある木質の残存する柱穴は6基あり、全体に遺存状態は不良であったが、柱穴09の出土ものはアカガシ亜属であった。必ずしも柱穴の床に接しているものばかりではなく、柱穴掘削後、若干の埋め戻しをした後、材を設置したものと考えられる。柱穴から埋納などの状況を示す遺物はみられず、柱穴01、柱穴09の2基から土器片が出土したのみである。唯一図示できたものは甕口縁部（図56-173）で、やや内湾気味に延び、端部内面をわずかに肥厚させる様相からは古墳時代中期頃のものと考える。

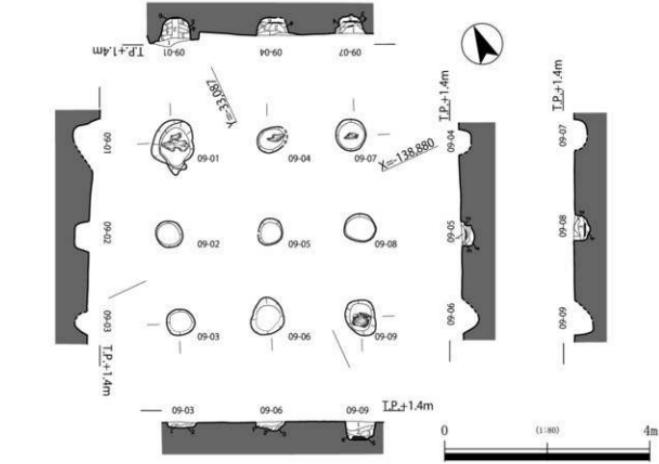


図53 建物9 平・断面図

井戸 2 (図54)

微高地 2 の北東縁に位置する井戸である。近接して建物遺構などはみられないが、西南には南北に並ぶ柱列があり、東西方向に延びる畦状の高まりの北に接する位置となる。井戸の構造は、板材を方形に組んで井戸側とするものである。検出面での掘方規模は東西1.6m、南北1.3mを測り、やや不整形な隅丸方形を呈する。井戸側は長方形の板を 3 段に積んだもので、平面プランはいびつな方形を呈し、おおむね正方位を指向する。規模は内法で南北70cm~75cm、東西75cm~85cmを測り、角の部分に組合せのための細工はみられない。最上段は高さ15cm、2段目、3段目は高さ20cm程度の材を用いている。2点について樹種を確認したが、ともにモミ属であり、他の材もすべて同じ樹種であったと思われる。井戸側は井戸最上部には達しておらず、廃絶時に一部が抜き取られた可能性がある。井戸 2 の位置したトレチは第 1 面以下の調査は行なわなかったので、断ち割りは行なわなかった。したがって井戸側の内側のみ

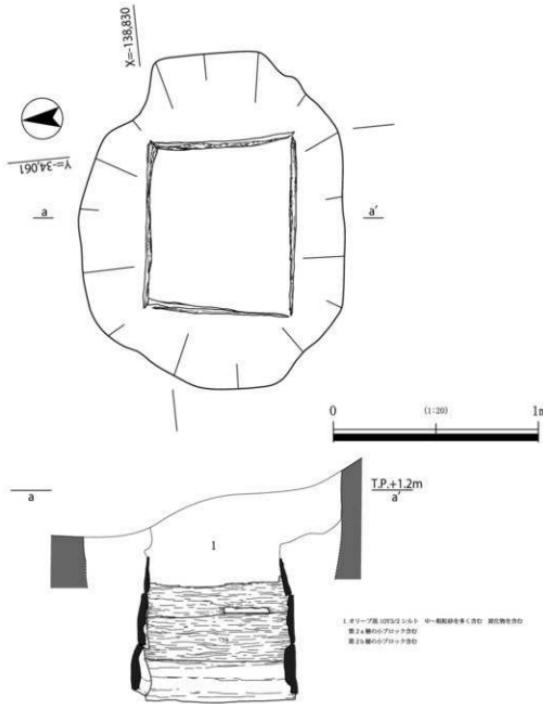


図54 井戸 2 平・立面図

を掘削したにとどまり、湧水も著しく、最下部の構造については十分な知見を得られなかった。図面等に記録はできなかったが、掘削時の所見では井戸側以下にも素掘りの部分が認められた。検出面から井戸側の最下段まで、深さ1.2m程度を測る。

出土遺物には須恵器細片が2点、土師器細片が14点、炭化物片が出土したのみで、土器類の投棄や埋納などの行為はなされたものと考えられる。したがって遺物から帰属時期を知るには至らないものであったが、微高地2における土地利用状況から推測して、古墳時代後期以降がその候補となる。位置関係からは、古墳時代に帰属すると考えられる他の建物遺構との有意な関連が想起されないため、積極的に古墳時代の居住域を形成するものとの評価を下しがたい。しかしこれ述べる井戸3においても位置関係としては、建物遺構などから距離を置くものであり、可能性について否定できるものではない。

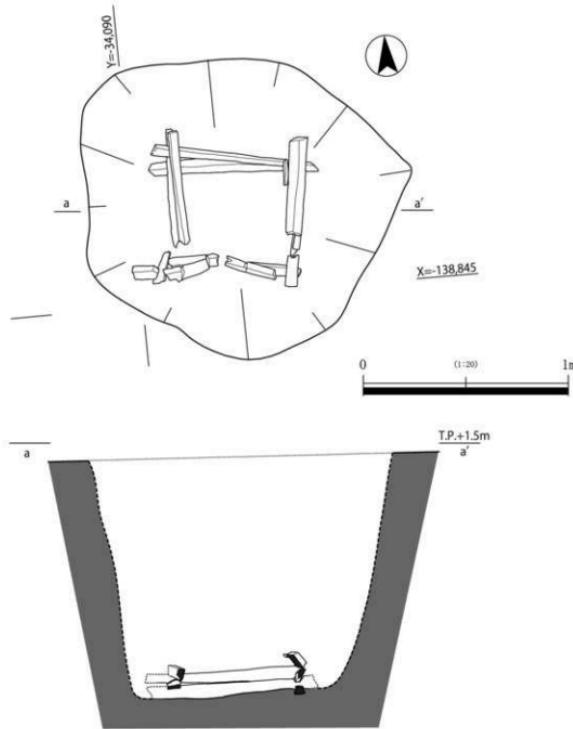


図55 井戸3 平・立面図

東西方向の畦状遺構との関係を重くみれば、古代以降の条里型地割を実行する開発段階に下る可能性も想定される。

井戸 3（図55）

微高地 2 の調査範囲北寄りに位置する井戸である。近接して建物遺構などはみられないが、東側にやや距離をおいてピット147・151を含む柱列が位置する。井戸の構造は板材を方形の井桁状に組んで井戸側とするものであるが、井戸側自体は最下段付近に一部が残存していたのみであった。検出面での掘方規模は東西16m、南北1.5mを測り、不整形な円形を呈する。調査時には井戸側がまったく確認できない状況で掘り下げたが、湧水が著しく掘削途中に掘方壁面の崩落があり、詳細に不明な部分が多い。掘方最下位付近に至り、ようやく井戸側が姿を現したわけであるが、これも本来の形状をとどめているものとは考えがたい。井戸の廃絶に際して井戸側の多くの抜き取り、埋め戻したものであるのか、井戸の掘削時、最下段の井桁のみ設置した段階で崩落、廃棄されたものかは不明である。残存する部分からの知見では井戸側は長さ70cm～80cm、高さ5cm、厚さ3～5cmの材を交互に組上げるもので、平面プランは正方形を志向し、規模は内法で50cm～55cmを測る。おおむね正方位をとる。角部分の細工は明瞭ではなく、結果的に井桁の材間に隙間が生じている。井戸側に用いられた材のうち3点について樹種を確認したが、スダジイ2点、ツバラギ1点という結果であった。湧水も著しく、最下部の構造については十分な知見を得られなかつたが、掘方の底に井桁が接する状態であったと考えられる。検出面から井戸側の最下段まで、深さ12m程度を測る。

遺物の出土状況としては、埋土上位にまとまる分布を示すが、調査時の壁面崩落の影響もあり、埋土中位以下の分布を記録できていない。それをふまえても、遺存状態の良好な遺物の出土は無く、井戸への意識的な遺物の埋納は想定しがたい。出土遺物の中で、団化し得たものを図56-174～181に掲出した。これら以外には土師器、須恵器、韓式系土器の細片が出土しているが、須恵器の割合が一割程度と目され、比較的少ない。174は須恵器、175・176・179は土師器、177・178・180・181は韓式系土器である。180は口縁端部直下にまで繩縫紋のタタキ痕跡を残す。181は鍋かとを考えられるが、体部にやや甘い沈線を施し、把手には上面からの切り込みと下面に刺突痕跡が残る。これらの遺物から詳細な時期を示すことは難しいが、おおむね古墳時代中期～後期の段階に帰属すると考えられ、微高地 2 上における古墳時代の中～後期の居住域利用に伴うものとみることができる。直近に建物遺構が存在しない点は、後章でも触れるが、集落における居住域形成の段階を示している可能性がある。

井戸 4（図57）

微高地 2 の南先端付近に位置する井戸である。直近に建物遺構は認められないが、北東10～20m離れて建物7～9が分布する。井戸の構造は扉の転用材を方形に立てて井戸側とするものであるが、上端部の遺存状態は悪いものであった。03-5-2トレチと03-5-8トレチの境界付近に位置しており、2トレチ調査時の側溝の掘削段階に確認した。このため、掘方の平面での確認ができない部分があるが、検出面での掘方規模は2.0m×1.6mを測り、長楕円形の平面形をもつものと考えられる。井戸側の構造は、方形の四隅に柱を設置し、その間を転用材である扉板で埋めるもので、柱が掘方底に打設されており安定している。その外側に板材を立て、掘方埋土により埋め戻し、固定している。個々の材に組み合わせのための細工はみられない。柱材の上端は板材に比して残りが良く、おおむね当初の形状を保っていると考えられるが、掘方検出面から井戸側上端まで、約50cmの深さがあり、この部分には当初から井戸側がなかったのか、あるいは腐蝕により失われたのかはよくわからない。後述するように、それぞれの扉



図56 微高地2 遺構 出土遺物1

材は個別の個体であり、当初の法量を復元すると検出面付近に達することから、本来、検出面付近まで井戸側が存在した可能性も考慮する必要があるが、そう考えると、廃棄の段階で井戸側上半部が打ち削られて撤去されたか、腐食により失われたかということとなるが、長期間の使用を認めがたい状況では前者の可能性がより高い。あるいは当初より2分割された扉材を用いていたのであれば、井戸側上部が不整形な状態であったこととなるが、転用材の加工の面から考えれば頗りがない。

井戸側に用いられている材については後述するが、組み上げられた井戸側は内法で40cm×45cm程度の正方形を指向する平面形をもち、深さは65cm程度を測る。平面形の軸方向は正方位からおよそ50°振れたもので、微高地の軸ないしは建物の軸方向に近い。井戸側に用いられた材については図58-188～195に示した。188は北東側に配された材で、かんぬき受けの残る側が外側になるように立てられていた。軸部分を含めた残存長67.9cm、幅33.3cm、厚さ3.9cmを測るが、本来の扉材を2分割したもので、かんぬき受け部分が扉の中央付近にあるという前提では、本来は110cm程度の高さが復元できる。かんぬき受けは基部が比較的広い形状をもつ。樹種はツバラジイである。189は南東側に配されたもので、残存長66.9cm、幅47.6cm、厚さ4.7cmを測る。かんぬき受けあるいは軸などの痕跡はよくわからないため、扉材とは断定し難いが、幅は後述の191に近い数値であり、同種の部材と考えられる。190は南西側に配された材で、やはりかんぬき受け側を外にして設置されていた。残存長70.3cm、幅34cm、厚さ4.7cmを測る。188同様、本来の扉を2分割したものと考えられるが、復元すると130cm程度の高さとなる。外面のかんぬき受け部分は削り取られており、扉本体より一段高まった基部のみが残るが、やはり幅広のタイプである。191は北西側に配された材であるが、軸部分が西側になるように設置されていた。かんぬき受けの痕跡はよくわからないが、削られた可能性がある。残存長70.9cm、幅47.2cm、厚さ3.4cmを測る。189～191の樹種はいずれもモミ属である。法量的には188と190、189と191が近似するが、それぞれが同一個体ではない。したがって4枚の扉材が用いられたこととなる。先述のように、残存する部材は元の材を2分割したものと考えられるため、かんぬき受けを中心で復元すると、本来の扉、言い換えると用いられた倉庫の入口の高さは1.1mと1.3mという数値が得られるが、かんぬき受けの残らないものについてはそれ以上になる可能性もある。扉2枚により構成される幅については70cmと95cmの二種類の数値が得られる。四隅に打設された柱はやはり転用材と考えられるもので、法量はまちまちであるが、いずれも先端を杭上に加工している。図60-192はシャシャンボ、193・194はツバラジイ、195はスダジイが用いられており、井戸3の用材に近い。なお、井戸側が設置された掘方底面からさらに30cm程度の深さの素掘りの部分が認められた。井戸掘方の掘削直後に砂で埋没したようであるが、この部分まで含めると井戸の深さは1.5mを測るものとなる。

側溝掘削時に取り上げられた遺物の存在は否定できないが、造構掘削時の遺物としては須恵器、土師器の細片が1点ずつ出土したのみである。また井戸側の一部として用いられていた可能性の高い木製品（図60-196）が1点、井戸側内部に立てかけられた、ないしは支柱的に配された棒材（図60-197）が1点みられた。ともに樹種はヒノキである。

井戸の位置、ならびに用いられた扉材の様相から、井戸4は古墳時代中期～後期にかけての微高地2における居住域利用に伴うものと判断される。しかしながら、埋土には、掘削直後に堆積したと考えられる最下部の素掘り部分に堆積した砂を除くと、井戸としての機能時の堆積物が不明瞭であり、ほぼ埋め戻しによると考えられるブロック土で満たされていた。井戸側上部が撤去されたという想定と合わせて、井戸として完成後、それほど時間をおかずに廃棄、埋め戻されたものと推測しておく。

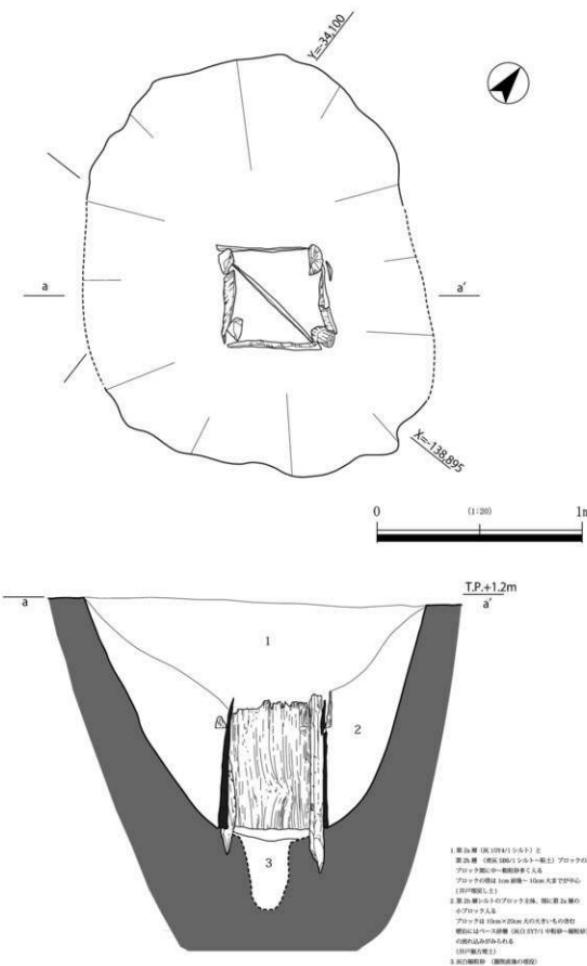


図57 井戸 4 平・立面図

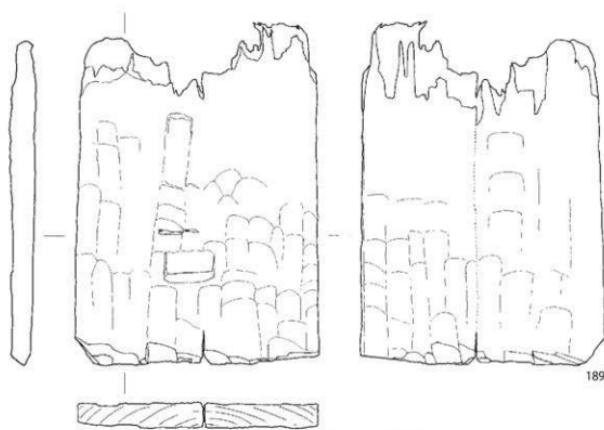
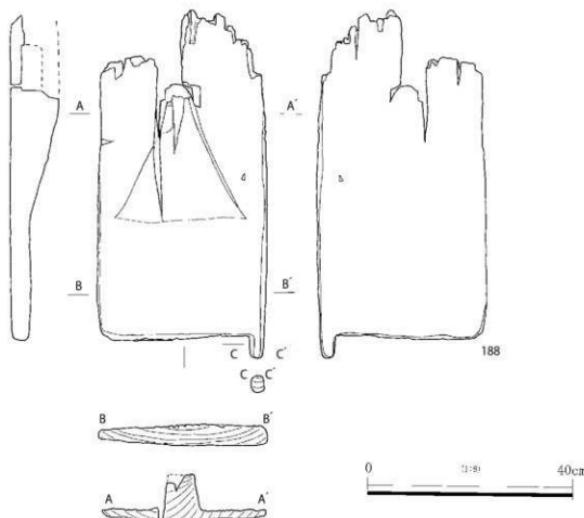


図58 微高地2 井戸4 出土物1

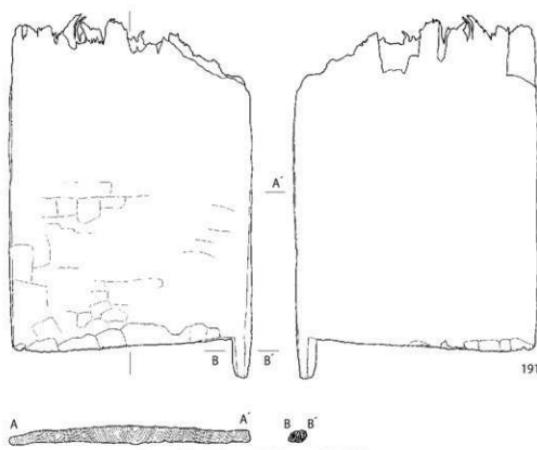
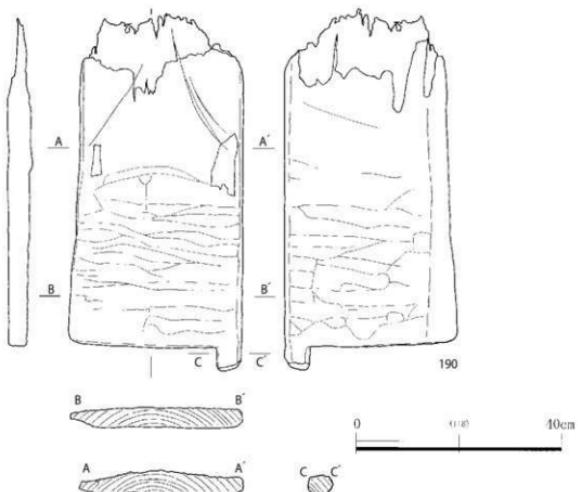


図59 微高地2 井戸4 出土遺物2

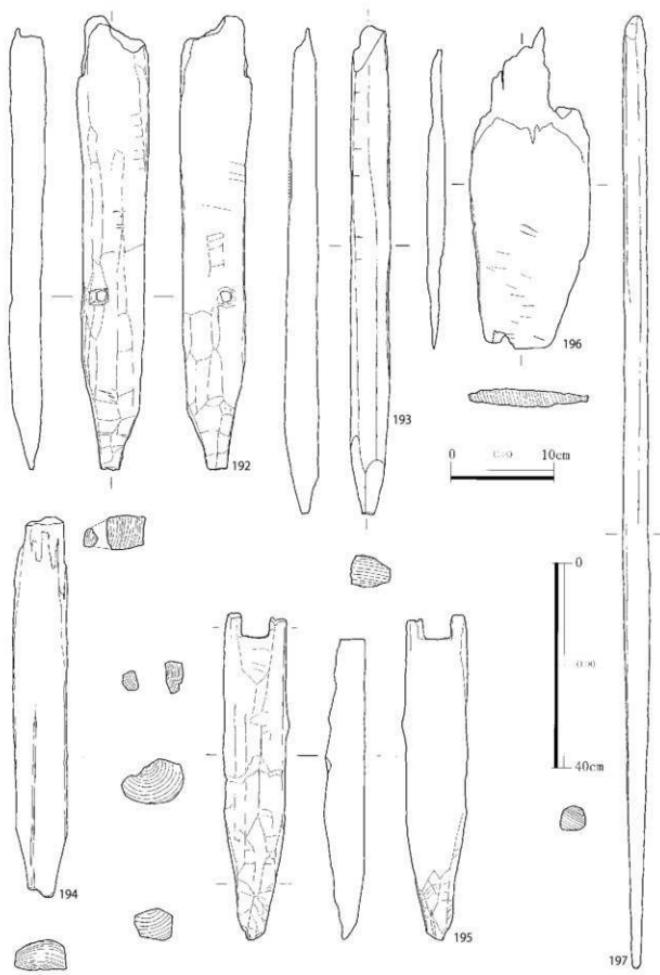


図60 微高地2 井戸4 出土遺物3

溝1

溝1は微高地2北寄りで検出した小規模な溝で、東西、南北に交差する形状をもつが、06-2-4トレーナーにおいて検出した範囲より南側については、03-5-8トレーナーの断面観察用筋掘りと重なり、確認できなかった。また、溝1に切られる落ち込み1の埋土との識別も不明瞭で、全体の広がりは不明である。遺物には須恵器細片が1点、土師器細片が3点出土している。時期については落ち込み1の埋没後ものであり、古墳時代より遡れるものと考える。

溝2

溝2は微高地2の南寄り、建物群に近い箇所に位置する小規模な溝である。ほぼ東西方向に延びるもので、幅30cm程度の規模をもつ。微高地の縁からさらに延びていた可能性もあるが、第1-5層による擾拌により失われていると考えられ、延長は5.5m分を検出した。埋土は第1-5層の下部に近い、炭混じりシルトである。出土遺物には土師器壺、高坏、韓式系土器把手があり、このうち把手を図56-185に示した。上面に切り込みの施されたものである。

溝3・4

溝3・4は溝2の北、約5mに位置する小規模な溝で、やはり東西方向に延びる溝であるが、地形の軸に直交するように、西側がやや北に振る形状をもつ。微高地の縁からさらに延びていた可能性もあるが、第1-5層による擾拌により失われていると考えられ、溝3では一部途切れるが、ともに長さ9m程度を確認した。溝3は幅40cm、溝4は幅40cm~110cmの規模をもつ。ともに埋土は第2a層と類似する土壤である。溝3からは土師器の細片が出土したのみであるが、溝4からは30片以上の土器片が出土し、内須恵器壺口縁（図56-186）、韓式系土器平底鉢（図56-187）を掲出した。186はやや丸みを帯びた口縁端部をもち、端部内側に強いナデを施し、端部直下に突帶をもつ。187は溝4出土土器片と第1-5層出土の土器片が接合した個体で、外面に格子タタキを施すものである。

溝5（図61）

溝5は微高地2を横断する溝である。調査範囲の北寄りに位置する。東端は06-2-4トレーナーにあり、微高地2と流路1の間にあたる。西端は調査範囲外へ延びる。東端から8m付近で切り合う箇所があり、再掘削された可能性がある。また微高地2上では溝群と錯綜する関係にあり、把握が困難な箇所もあるが、おむね連続する一条の溝であると考えられる。検出範囲での延長が35mを超える長い溝であるが、幅、深さともに小規模で、幅は30~50cm程度、深さは浅いところで15cm程度、深いところでも35cm程度である。断面形状は逆台形を呈する箇所が多く、一部に垂直に近い壁をもつ箇所もある。底のレベルは西端付近でT.P.+1.1m、東端付近でT.P.+1.02mを測り、やや東側に下がる傾向があるが、延長距離を考えると高低差の無い溝であるといえる。埋土は総じて炭化物や腐蝕を多く含むシルトであり、西側の深さのある部分では下層を中心にシルトブロックを含む埋め戻し土が観察された。全体を確認できたものではないが、土層断面から観察するかぎり、上部に再掘削の痕跡を見出すことができる。

遺物の出土状況には特記すべきものは無く、出土遺物には土師器、須恵器、韓式系土器の細片が主体を占める。器形の判るものでは土師器では壺、高坏、須恵器には流路1-2城出土の大甕片と接合したものもある。およそその割合では土師器が9割を占める。

出土遺物の様相から古墳時代に帰属するものである可能性が高いが、性格については考察の材料を欠く。仮に微高地2上の区画を示すものであるならば、溝5のすぐ北に井戸3が位置することも有意な関係である可能性がある。

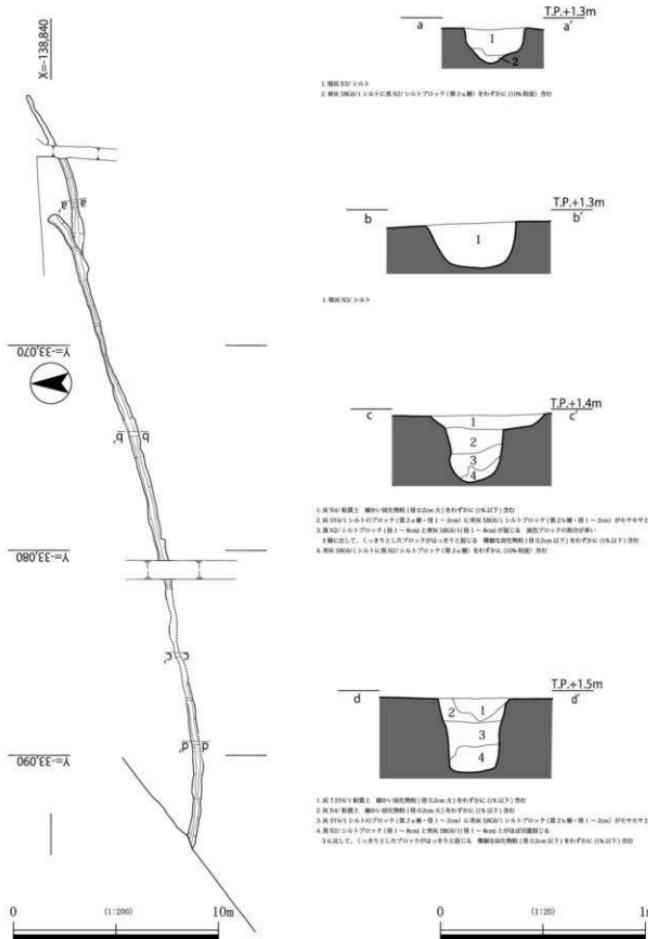


図61 溝5 平・断面図

微高地2では遺物が出土したピット141~166に遺構番号を付した。このうち、まとまった遺物の出土状況をみせるピット148・153を報告する。

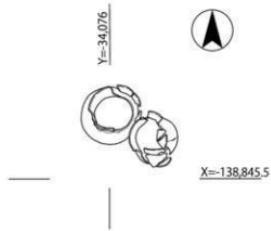
ピット148(図62)

ピット148は微高地2北西寄り、溝5の南に接して位置するピットである。落ち込み1と重複し、検出時に遺構の輪郭を確認することはできなかったが、落ち込み1掘削時に土師器小型壺2個体が並置された状態で確認された。そのため厳密には独立したピットであるか、落ち込み1内に土器を置き並べたものかは検証できないが、土器の遺存状態が良好であることから土器を意識的に埋め戻した遺構であると考え、独立した土器納遺構であると判断した。このため、遺構としての規模、法量についてはまったく知ることができない。ピット内部に埋置されたと想定する土器は図63-198・199であり、198が西側、199が東側に置かれていた。いずれも口縁の一部を欠損するが、打ち欠きではないとおもわれる。一方、体部から底部にかけては良好に残存するが、199には焼成後穿孔が内面からなされている。法量はともに口径10cm強、器高12cm前後という近似値をもつ。このような小型壺の時期的な位置付けは難しいが、体部内面の調整が不明瞭ながらもナデ調整であることから、古墳時代中期～後期段階の居住域利用に伴うものと考えておく。

ピット153(図62)

ピット153は微高地2の西縁部分に位置するやや大型のピットで、建物群に程近い位置にある。平面形はややいびつな円形を呈し、径55cm~65cmを測る。深さは10cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。検出面で確認した土埋は第15層の下部に近い、炭混じりシルトである。底部に接する形で窪(図63-200)

〈ピット148〉



〈ピット153〉

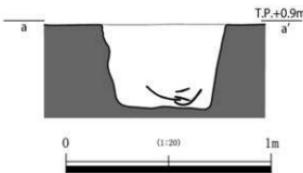
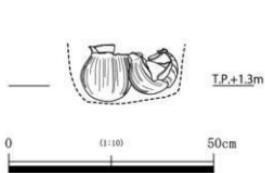
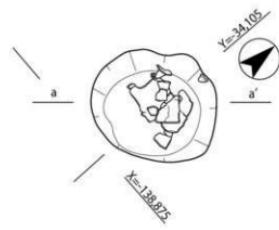


図62 ピット148・ピット153 平・立・断面図

の大型の破片が置かれていた。埋土上部にも同一個体の破片を含む土器片が含まれており、大型の破片の埋置後、他の破片などとともに埋め戻されたものと推測する。200は韓式系土器の瓶で、復元口径21cm、器高24.1cmを測る。体部中位に沈線一条を雜に巡らし、線上に一对の把手を配置する。把手は断面円形で端部を截断し面をもつ。底部は平坦で、1+6個の円形の蒸気孔が復元される。体部外面には格子タタキを施し、口縁付近、底部付近はナデ消している。胎土は非生駒西麓産である。これ以外の出土遺物には土師器の甕、高环、鉢、200とは別個体の格子タタキを残す韓式系土器などがあり、同化し得たものを図63-201・202に掲出した。これら遺物の時期を厳密に知ることは難しいが、瓶の諸特徴は初期須恵器段階に併行する時期の特徴を残すものと考えられ、古墳時代中期～後期段階の居住域利用に伴う土器埋納遺構を考えるもの、居住域の形成の初期段階、あるいは先行する時期においておきたい。

落ち込み1

落ち込み1は微高地2の東縁に位置する広い落ち込みで、微高地東縁を落ち込みの東側の方に揃えており、地形を意識した造構であると考えられる。東側の輪郭は比較的整っているが、西側は凹凸の多い不整形なものである。埋土は腐蝕を多く含む土壤であり、人為的な埋め戻しの痕跡は見いだせなかった。明瞭な出土状態を示す遺物の出土はみられなかったが、土器細片が出土しており、06-24トレンチの範囲で出土した図56-182・183の2点を図示することができた。182は韓式系土器平底鉢で、体部外面に平行タタキを残す。183は球形の体部をもつ土師器の中型甕で、内面にはナデ調整を施している。

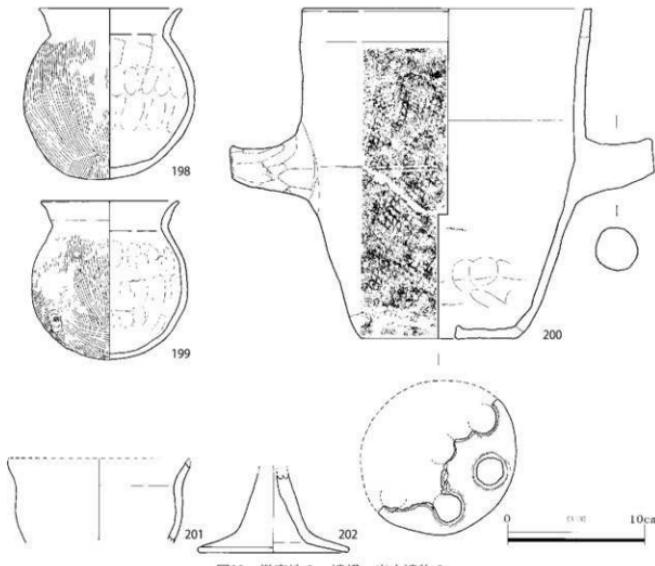


図63 微高地2 遺構 出土遺物2

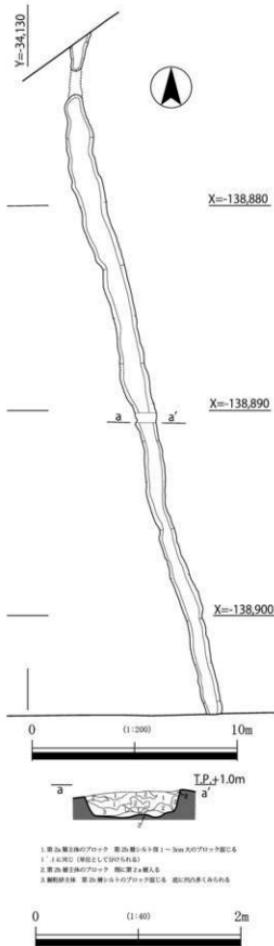


図64 溝9 平・断面図

土坑46～53

微高地2では、土坑46～53に遺構番号を付した。いずれも内部より遺物が出土したものである。土坑48～52は微高地2南端付近、建物群の北側にまとまって分布する。遺物は出土するものの、土師器、韓式系土器、弥生土器の細片に限られ、器種のわかるものでは壺、高环などがあるが、極少数である。それぞれの土坑の具体的な性格はわからないが、分布の面では、微高地の居住域使用にかかわるものと推測できる。

微高地3ではピット167、溝6～9、井戸5、土坑54～59に遺構番号を付した。以下、特徴的な遺構について報告する。

溝7

溝7は微高地2と流路1の間をつなぐように、南北方向を指向するもので、北、南とも端部の様相は分からない。内部より須恵器壺（図68～203）が出土している。203は流路1出土の破片と接合した。

溝8

溝8は微高地2南側に位置する溝で、東西方向を指向し、約50m北に位置する溝4と方向を同じくする。溝7に近いところまで、約35mの延長を測る。内部より、土師器高环（図68～204）が出土している。

溝9（図64）

溝9は微高地2の西側に位置する溝で、南北方向を指向する。南北端の様相は不明であるが、検出部分で延長35mを測る。広い部分では幅1.5m程度を測るが、深さは20～25cm程度と浅い。遺物には土師器、韓式系土器の細片があるが、摩滅が著しい。

井戸5（図65）

井戸5は微高地3の南東寄りに位置する井戸で、周囲には他の遺構がみられず単独で立地している。しかし、他の土坑や溝との位置関係を考えると、溝8の北側に分布する土坑群の東端に位置するとみることもできる。第1b面の検出時に遺構の輪郭を確認したが、埋土の確認が不十分であり、底まで確認できていない状態で下層の調査に着手したため、全体的な構造の把握はできなかった。調査時には井戸の存在は確認しなかったことから、素掘

りの井戸と考える。上位の埋土については詳細な観察はなしえなかつたが、下層については比較的小径のシルトブロックを含むものであり、植物遺体も多く含む。掘削時の残土や滞水時の堆積に加え、人為的な埋め戻しが想起される。底より20cm程度離れた位置に、韓式系土器長頸甕の底部（図68-205）が斜位におかれていた。205は残存高19.4cm、残存部分の胴部最大径20cmを測るもので、外面上位が細かく、下位にやや粗い2種類の格子タタキを残す。スス、コゲの付着が顕著である。これ以外には土器小片が出土したのみであり、機能時の土器の投棄などはみられない。井戸としての性格を第一義にみると、土器埋納遺構の性格を強くもつものと考えられる。井戸掘削後、一定期間滞水状態であったことは考えられるが、井戸として長期にわたって使用されたものではなく、韓式系土器を埋納し、埋め戻されたものと考える。井戸の埋め戻し時期については205の時期ということになるが、厳密には決しがたい。おおむね5世紀中頃とみておきたいが、ピット153同様、微高地2上における居住域利用の初期ないしは先行する段階に位置づけておきたい。

土坑54~59は溝8の北寄りを中心に、東西方向に分布する土坑群である。土坑58・59を西端に、土坑57・井戸5を東端とする、東西45m程度の範囲に適当に距離を置いて分布する。それぞれの規模はまちまちであるが、不整形な平面形を呈するものが多く、埋土の観察から掘削直後に埋め戻されたと推測される点で共通する。

土坑54

一連の土坑群の中央付近に位置する土坑である。不整形な長楕円形を呈し、長さ3.8m、幅1.7m、深さ10cm前後を測る。遺物には土師器の小片が出土したのみである。

土坑55（図66）

一連の土坑群の中央付近に位置する土坑である。不整形な円形を呈し、長軸2.2m、短軸1.7m、深さ35cm程度を測る。壁面、底部とも整った形状とはいいがたい。埋土には第2a層起源のシルトブロックを主体に、第2b層起源のシルトブロック、砂を含む。比較的大きいブロックを含み、掘削後、程なく埋め戻されたことが推測される。特徴的な遺物の出土状況はみられず、土師器片6片、須恵器片1片が出土したのみである。土師器は甕の体部、須恵器は波状紋を施す壺口縁部と考えられる。

土坑56

一連の土坑群の中央付近、土坑54の南側に位置する大型の土坑である。長軸7m、短軸3mを測るが、深さは20cm前後と浅い。平面形は不整形な長楕円形を呈する。細片が主体ではあるが、一連の土坑の中

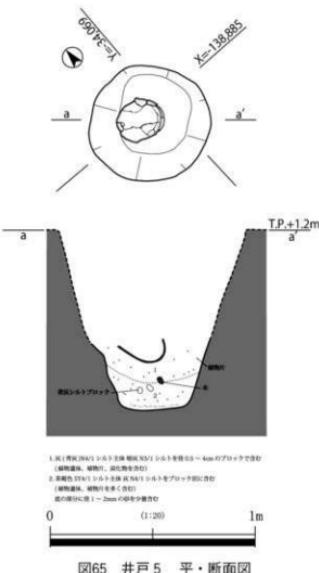
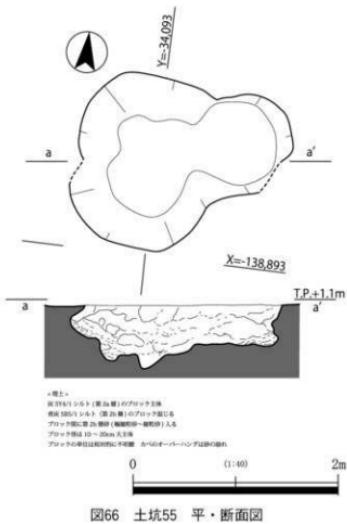
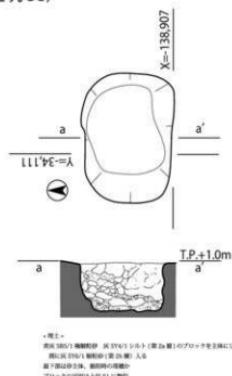


図65 井戸5 平・断面図



〈土坑 58〉



では比較的まとまった遺物の出土をみた。須恵器が少量で大半は土器である。圓化し得たものを図68-206~213・図69-214に掲出した。206は復元口径19.6cmを測る大型の高杯で、外面に放射状の暗文を施す。207・208は盤であるが、底部蒸氣孔付近がわずかに残存する。いずれも円形の蒸氣孔を周縁に配するものと考えられる。いずれも非生鉄西麓産の胎土と考えられる。209は壺、210は甕、211は鉢あるいは鍋、212は小型の壺、213は高环脚である。214は蔽石あるいは磨石で、欠損する箇所については不明であるが、下面、側面、前面、背面のいずれの面にも敲打痕が残る。石材は砂岩である。遺物からみて詳細な時期決定は難しいが、微高地2における居住域使用の段階のものと考えられる。

土坑57

一連の土坑群の東寄り、流路1の肩口付近に位置する土坑である。井戸5のほぼ南、8m付近に位置する関係となる。流路1との切り合は明確ではなかったが、流路1が土坑57を切つ

〈土坑 59〉

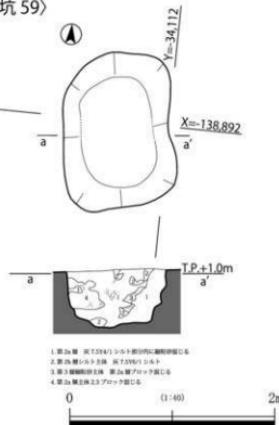


図67 土坑58・59 平・断面図

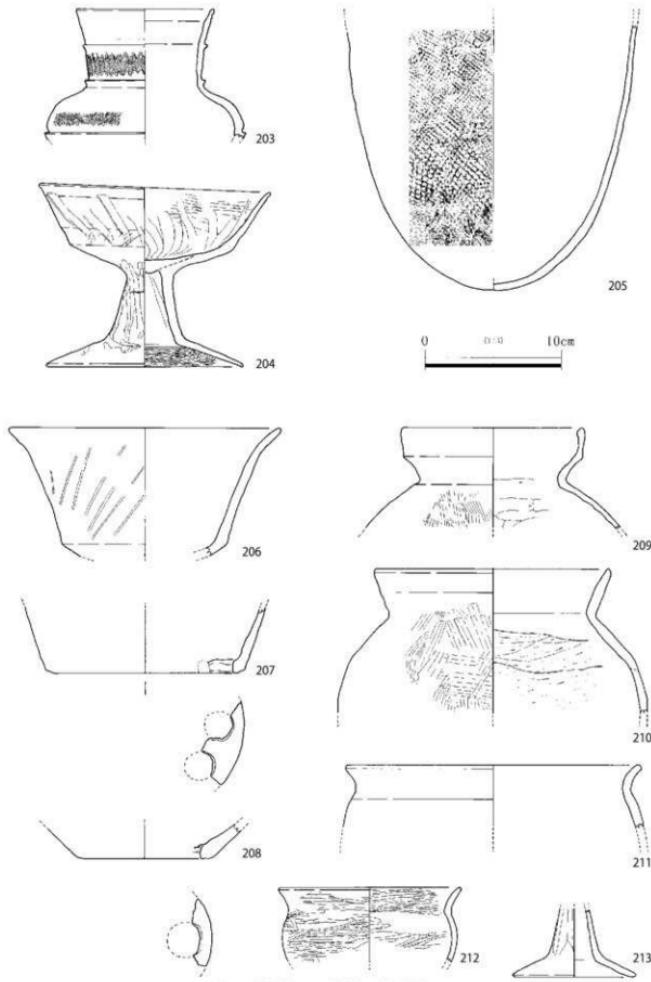


図68 微低地3 遺構 出土遺物1

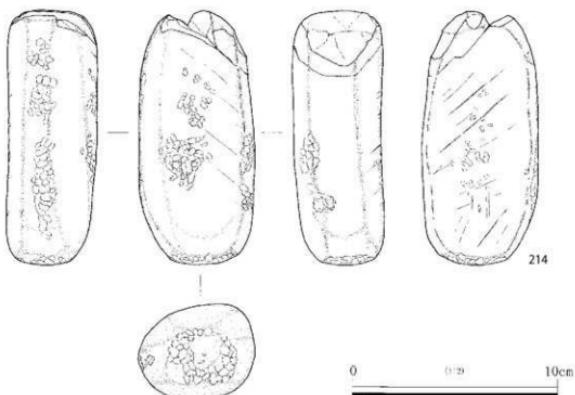


図69 微高地3 遺構 出土遺物2

ているようである。長さ22m、幅13mの不整規円形を呈し、深さは18cmと浅い。遺物は極少量が出土したが、土師器甕片、韓式系土器片が出土している。

土坑58（図67）

一連の土坑群の西端、溝8よりもやや南側に位置する土坑である。長さ1.25m、幅0.9mの隅丸長方形を呈し、深さ45cmを測る。断面形状は比較的整った形状を示す。埋土は第2b層起源のシルトブロックと第2a層起源のシルトブロックが混じり、その間に砂が入るもので、第2a層の土壤が形成されて後に掘削され、時間をおかずに埋め戻されたものと推測する。遺物には土師器小片が3点あり、甕の一部と考えられる。

土坑59（図67）

一連の土坑群の西端、土坑58の北約13m付近に位置する土坑である。隅丸長方形の平面形を呈し、規模は長さ1.6m、幅1.1m、深さ55cmを測り、比較的整った断面形状を示す。埋土は第2a層起源のシルトブロックを主体に、第2b層系のシルトブロック、第3層起源と考えられる砂が塊状に混じる。遺物はまったく出土せず、遺物からの時期推定はできない。

これら土坑群は分布のまとまりや埋土の共通性から、同様の性格をもつものと類推するが、掘削の目的については良くわからない。掘削直後の埋め戻しが想定される点が、推測の大きな材料となるが、発生土をそのまま埋め戻していると考えられることから、下層土壤の採取という目的は否定される。あるいは地表下における土層の確認という目的も想起されるが、定かではない。類似する土坑は流路1の南側にも分布することから、微高地2上の居住域にかかる遺構と見立てたとしても、その近接地にのみ分布するものでもない。同様の分布を示す井戸5については土器埋納行為がみられた点は前述のとおりである。時期についても詳細を知ることはできないが、おむね古墳時代中～後期に帰属すると考えられ、その時間幅の中でも初期に位置するか、先行する可能性を指摘しておきたい。

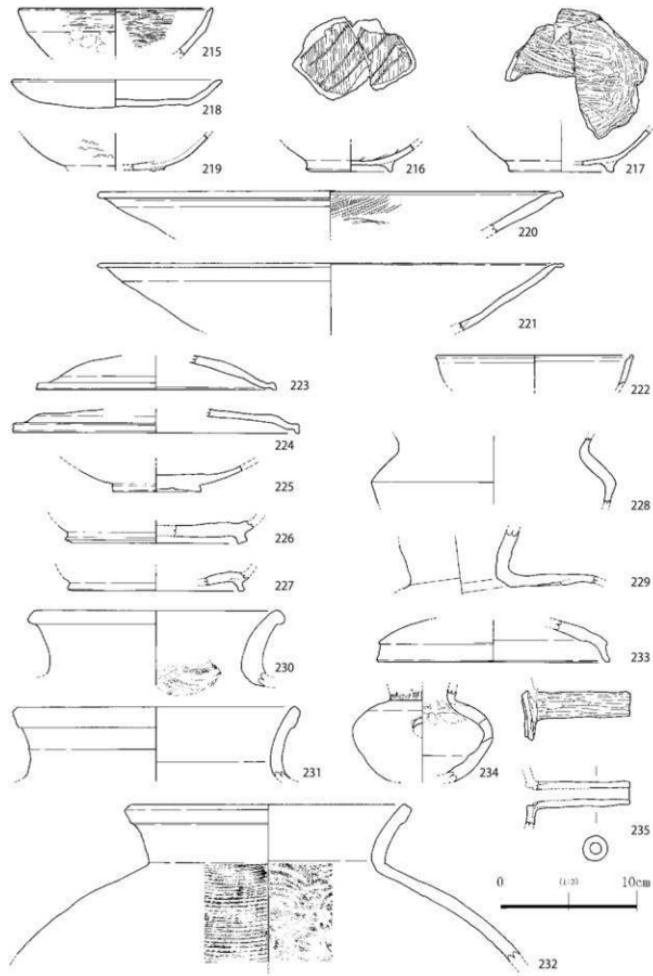


図70 微高地2・微低地3層出土遺物1

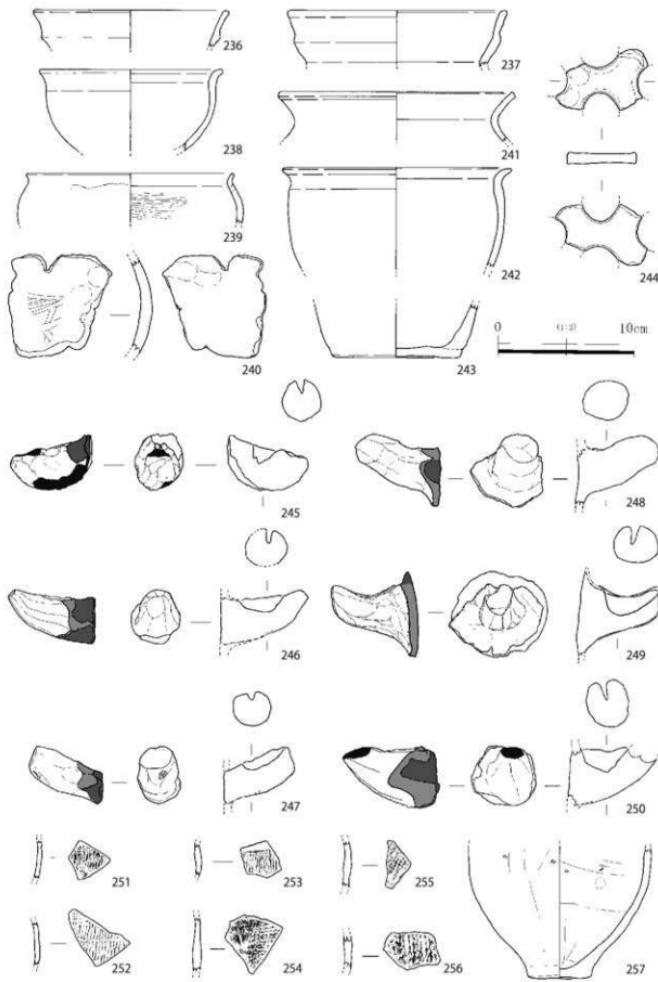


図71 微高地2・微低地3層出土遺物2

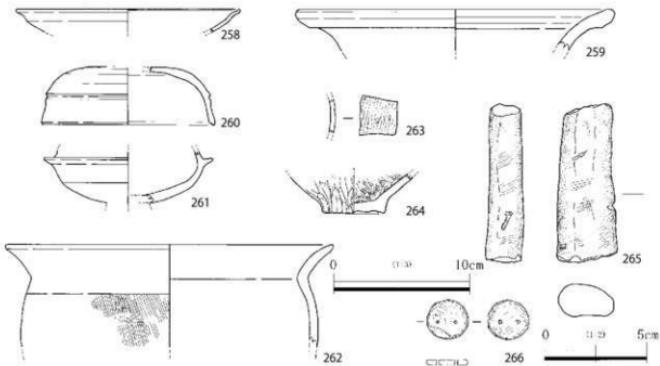


図72 微高地2・微低地3層出土遺物3

微高地2・微低地3層出土遺物(図70~74)

微高地2・微低地3に相当する範囲の第1層～第2a層出土遺物について報告する。微高地2はおおむね03-5-8トレンチ・06-2トレンチの調査範囲に相当するが、両トレンチとも、第1層の細分を行わずに掘削したため、ほぼ第1-3層～第1-5層に相当する層準から出土した遺物を、第1層出土遺物として認識している。また遺構検出面である第1b面は第2a層を除去することで検出した。一方、微低地3に相当する03-5-9トレンチでは、第1層としては第1-5層のみを人力掘削の対象とした。このような作業過程に従い、図70・71には03-5-8トレンチ・06-2-4トレンチ第1層出土遺物を、図72には03-5-9トレンチ第1-5層出土遺物を、図73・74にはそれぞれの第2a層出土遺物を原則的に配置した。

微高地2では明確に時期をおさえることのできる古代の遺構は確認できていないが、第1層からは古代以降、中世にかけての遺物も出土する。215・216は瓦器椀、217は黒色土器椀の高台付近である。内外面とも黒色処理を施したものである。218は土師器皿、219は土師器壺で、わずかに高台の痕跡を残す。220・221は土師器の盤で、いずれも復元口径30cmを超えるものである。222は土師器壺で、残存状態は極めて悪く、内外面の調整も観察できない。223・224は須恵器の蓋で、口縁端部を下に折り曲げる。225は縄文陶器の底部で、前出し高台をもつ。227は須恵器の高台である。228は須恵器壺Hの、229は平瓶の頸部である。230～232は須恵器壺の口縁部から体部であるが、極めて部分的な残存である。233は須恵器高壺の蓋と考えられるが、初期須恵器段階に位置づけられる。234は須恵器壺で、口縁部の波状紋がわずかに確認できる。235は須恵器樽形壺の注口かと思われるもので、やはり初期須恵器段階のものであろう。表面は細かいヘラミガキで平滑に仕上げられている。236・237は土師器壺で古墳時代前期のものか。238は鉢、239は短頸の壺で、240は製塙土器かと考えられる個体である。241は遺存状況が極めて悪いが、韓式系土器の長胴壺頸部、242・243は平底鉢である。245は壺の底部で、円形の蒸気孔が配される。245～250はいずれも把手であり、248を除くといずれも上面に切込みがみられ、韓式系土器の範疇に含まれる。251～255は須恵器あるいは陶質土器の表面にタキ痕跡を残すもので、251～253は平行タキ、254は繩席紋タキ、255には格子タキが残され、251・252には螺旋状沈線も認められる。256は韓式系土

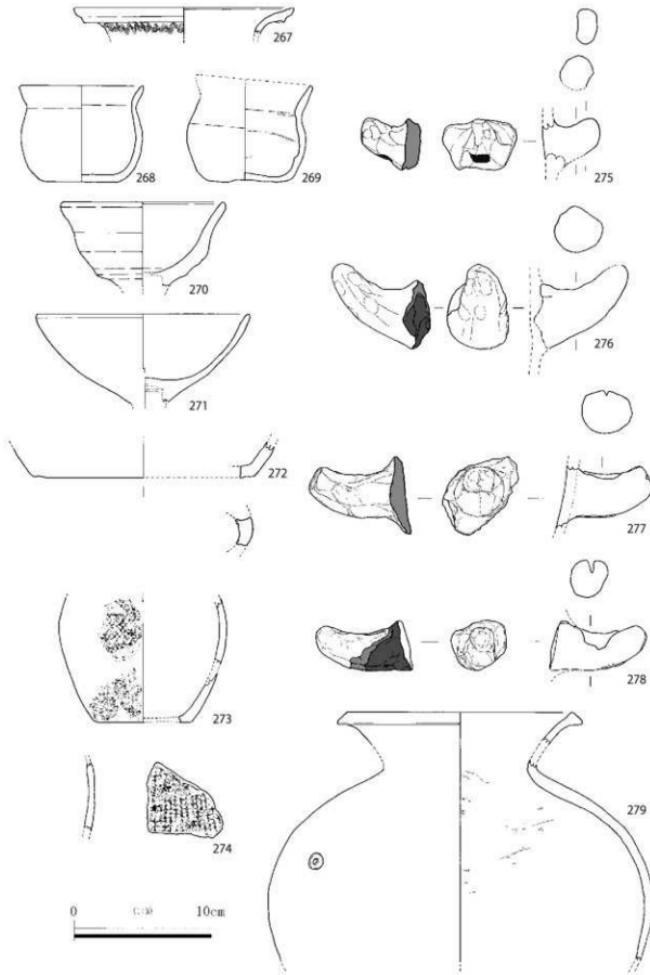


图73 微高地2・微低地3 层 出土遗物4

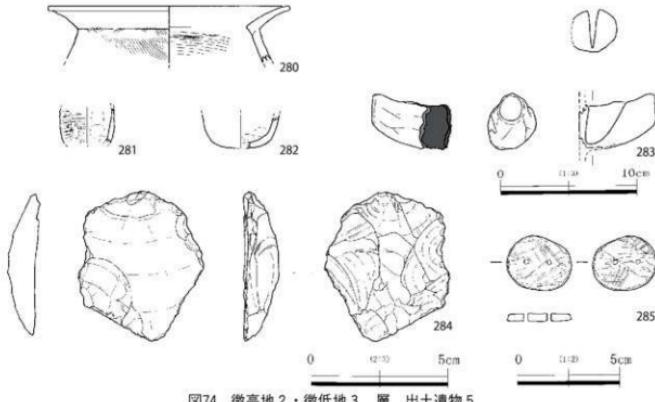


図74 微高地2・微低地3層出土遺物5

器の細片で、外面に繩席紋を残す。257は弥生土器の体部から底部にかけての個体である。

03-59トレンチ第1層出土遺物は少なく、国示し得たものもわずかである。図72-258は土師器皿、259は須恵器壺口縁、260は須恵器蓋、261は有蓋高杯と考えられる。形態的に流路1-1城出土の図105-418に類似している。262は土師器甕、263は須恵器の外面に平行タタキと沈線が認められるもので、261とともに初期須恵器の範疇に含めよう。264は弥生土器の壺底部と考えられる。265は微低地3にかかる03-5-2トレンチの第2a層出土のもので、砂岩製の石杵欠欠かと考えられる。266は03-5-8トレンチ第1層出土の滑石製双孔円板で、比較的整った形状を示す。法量は長さ20cm、幅1.9cm、厚さ0.25cmを測り、重量は18gである。

図73には第2a層出土遺物を掲げる。267は須恵器壺で口縁直下に突帯を巡らし、頸部には波状紋を巡らす。268・269は土師器の小型の壺で、平底を呈する特異な形態をもつ。つくりは絶じて粗い。270・271は土師器高杯で、271は接合部の杯部底面に刺突痕が施される。272は土師器甕の底部である。極一部の残存であるが、円形の蒸氣孔が認められる。273は韓式系土器平底鉢で、体部外面には格子タタキを残す。274も韓式系土器片で、やはり外面に格子タタキを残す。275-278は把手で、278は上面からの切り込みがあり、韓式系土器の範疇に属する。279は弥生土器ないしは土師器の壺で、残存状況は悪いが、外面に竹管紋が認められ、内面にはヘラケズリないしは板ナデによる砂礫の移動が認められる。

図74-280は土師器甕、281・282はコップ形の製塙土器、283は韓式系土器把手である。いずれも第3層掘削時に採取された遺物であるが、本来は微高地2・微低地3に帰属する資料と目される。280は頭部内面に比較的鋭い稜をつくりだすもので、口縁端部に面をもたせる。281は外面にタタキ痕跡を残すが、282はナデ調整である。283は先端を垂直に裁断し、上面から深い切込みが施される。284・285は微低地3にかかる03-5-2トレンチの第1層出土のもので、284はサスカイトの剥片である。長さ5.5cm、幅4.6cm、厚さ1.3cmを測る比較的大型の剥片であり、重量は27.6gである。285は滑石製双孔円板で、266と比べるとやや大振りの個体である。

第0-5面の遺構と遺物（図75・76）

第1面の遺構面が相対的に低いところでは第1.5層と第2a層はそれぞれ層厚をもち、第0-5面、第1面に帰属する遺構の分別も可能と考えられるが、実際には第0-5面に帰属すると考えられる遺構のはほとんどは、微高地1、微高地2の範囲で検出され、遺構の多くが地形とのかかわりで営まれたものであることが想起されるとともに、第1面帰属遺構との分別は難しいものとなってしまった。とりわけ遺物には第0-5面の遺構出土のものにおいても、第1面との関連を想起させるものが多く、ここでは微高地1・2上で検出した第0-5面に帰属すると考えられる遺構と遺物を報告する。

溝群1

微高地1の北半分、03-5-6～03-5-7トレーニにかけて分布する溝群である。北西側は微高地とともに調査範囲外へ延びるので、全容は把握できない。微高地の幅が約30mの箇所で、溝群の分布幅は約25mと、微高地の縁辺を除き、まんべんなく覆っている。原則的に微高地の軸方向に延びる縱溝と、微高地を横断する方向の横溝とが交差する形で構成される。個別の溝の輪郭は不明瞭な部分が多く、縱溝の溝が交差する箇所においても切り合い関係を明確に捉えることはできない。同様に横溝同士が斜めに交わる箇所もみられるが、それらが溝の分岐であるのか、切り合い関係をもつのかは判らない。また後述する溝群3において、溝4が単独で抽出されたように、本来溝群1とは異なる性格のものが錯綜している可能性も否定できない。それぞれの間隔を比較では、縱溝間の方が横溝間より間隔が広い。個々の溝は幅20～30cm、深さ5～10cm程度の小規模なものである。埋土は灰色シルトが主体であり、ベースとなる第2b層シルト層との境界が不明瞭であった。出土遺物には細片が多いが、図化したもの図75・図77に示した。286～288は須恵器環身で、6世紀末～7世紀のものか。289は須恵器高环脚で、長脚2段のものと

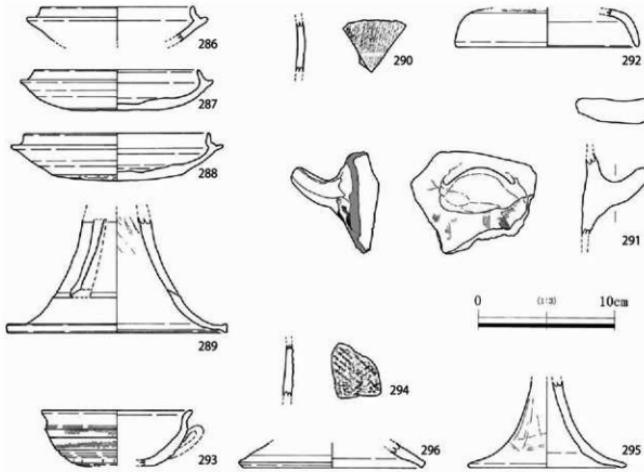


図75 第0-5面 遺構 出土遺物1

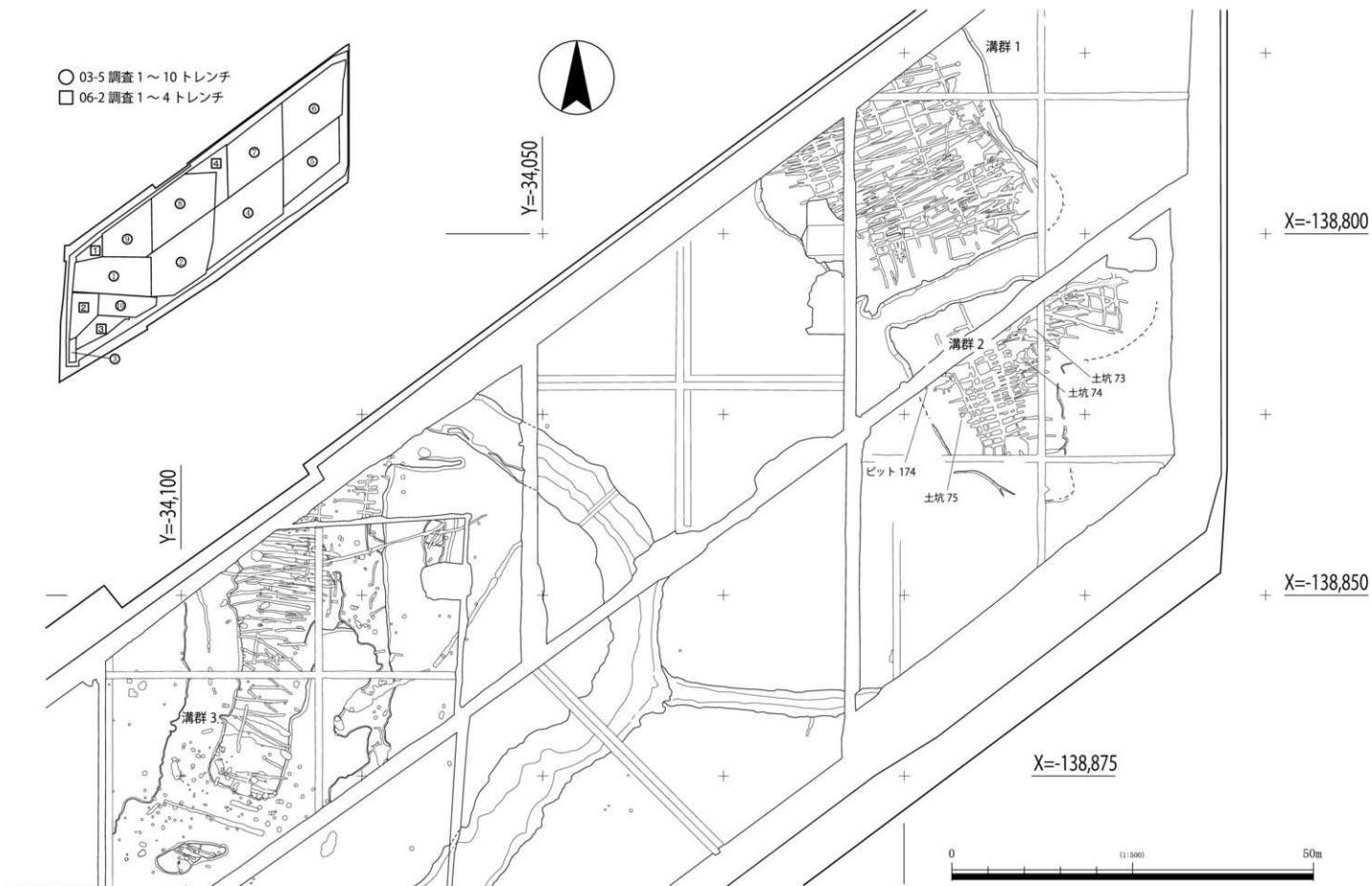


図76 第0-5面・第1面 溝群分布図 (s=1/500)

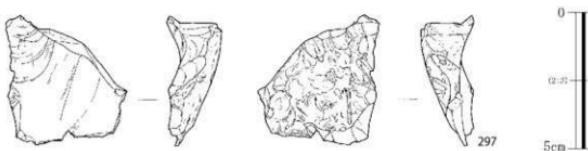


図77 第0-5面 遺構 出土遺物2

考えられる。290は須恵器あるいは陶質土器の破片で、外面に縦溝紋タタキの上に沈線を巡らす。291は土師器の把手で、扁平な部類に属する。図77-297はサスカイトの剥片で、重量は27.1gを測る。

溝群2

微高地1の南側、03-5-5～03-5-6トレンチにかけて分布する溝群である。おおむね調査範囲内に全体が収まっている。微高地が東側に張出す部分にも溝群は延びており、縁辺部を除く全域をまんべんなく覆っている。溝群1同様、原則的に微高地の軸方向に延びる縱溝と、微高地を横断する方向の横溝とが交差する形で構成される。西側の範囲では比較的縱横の関係が良好に把握できるが、東側の張り出し部では縱横の方向、交差の角度などもやや整然さを欠く。個別の溝の輪郭が不明瞭であることや、交差部分において切り合いが不明瞭であること、溝群1に同様である。溝の間隔は縱溝のほうが横溝より相対的に広い点も同様であるが、個々の溝のスパンが狭いことと、溝そのものに幅の広い部分が多いことで、溝群1より溝の占める面積が広い状況をみせる。言い換えると溝に囲まれた範囲の狭さが目立つ。個々の溝は幅20～30cm、深さ5～10cm程度の小規模なものである。埋土は灰色シルトが主体であり、ベースとなる第2b層シルト層との境界が不明瞭である点も溝群1と同じである。出土遺物には細片が多く、図示したものは図75～292に示した須恵器壺蓋のみである。溝群1出土の須恵器と同時期のものと考えられる。

溝群3

微高地2上、03-5-8トレンチ、06-2-4トレンチにかけて分布する溝群である。北側は調査範囲外へ延びるため全容は不明である。溝群1・2同様、微高地上をまんべんなく覆うが、落ち込み1の範囲では埋土の識別が難しく確認できなかった。また、微高地縁辺にまで溝が達している箇所が多いが、特に南よりの部分では微高地縁辺部分における第1-5層の削平により失われている部分も多いものと思われる。06-2-4トレンチの範囲では縱溝と横溝の交差が確認できたが、03-5-8トレンチ部分では横溝が顕著であり、縱溝が希薄である。横溝の間隔は粗密があり、北寄りでは狭く、南よりでは広い。

このような溝群1・2との差異を溝群掘削の施工段階の差に起因すると考えると、溝群は數度にわたる掘削により形成されたもので、溝群3においては溝群1・2ほどの施工がなされなかつたとみることができる。さらに微高地1に比べ、微高地3において第1-5層による削平が顕著に認められる点も、両者とも微高地上の地形変更過程を示すものと考えれば興味深く、溝群の掘削による変更が進んだ微高地1と、溝群の掘削を中途で終わり、第1-5層による削平が広く行われた微高地2との差異とみることもできる。その差が微地形環境に起因することも、微高地2がより低湿な環境であることから指摘し得る。

土坑73～75・ピット174

いずれも第0-5面調査時に確認した遺構の中で、遺物の出土がみられたものに遺構番号を付したもので

ある。調査時は第0-5面検出時に確認した遺構であるが、後に第0-5面、第1b面両面の遺構が錯綜する形で同一面において確認されるとの認識が進むにつれ、帰属面の厳密性は低下した。原則的に埋土の特徴から帰属面を判断したわけであるが、第1b面に属するものである可能性は否定できない。土坑73・74は微高地1南寄りに位置する大型の土坑、土坑75は小型の土坑であるが、いずれも浅く、特徴的な遺物の出土状況を示すものではない。ピット174は微高地1西縁付近に位置する小ピットである。これら遺構からの出土遺物のうち、図化し得たものは図75-293~295（土坑74）、296（土坑75）で、293は須恵器把手付鉢、294は外面に格子タタキの残る韓式系土器、295は土師器高杯、296は須恵器高杯の脚である。

溝群の性格については上述のとおり、第1面廃絶後の土地改変に伴うものと考えられるが、微高地1については少なくとも奈良時代まで居住域として利用されており、古代以降の土地に対する働きかけと考えられる。この点で各遺構出土遺物の年代観との齟齬が生じるわけであるが、第0-5面遺構出土遺物については、すでにその地に存在した遺物を巻き込んだものと理解しておきたい。

第5項 微高地3・微高地4

概要（図78）

調査範囲中央を流走する流路1の南岸に位置する微高地を微高地3、南寄りに流れを変える流路1の西側に位置する微高地を微高地4とする。両微高地とも今回の調査範囲にかかる部分は極めて限られたものであるが、やはり他の微高地同様、弥生時代の堆積層をベースとする微高地である。微高地3は北東から南西への細長い範囲を検出したが、北東部分で標高T.P.+13m、南西部部分で標高T.P.+1.0mを測り、微高地1、微高地2と比較して必ずしも標高が高いわけではないが、母材の影響か、比較的安定した微高地である。微高地4は南北に伸びる範囲を検出したが、南端で標高T.P.+0.95m、北端で標高T.P.+0.9mを測り、南に高く、北に低い地形である。

微高地3ではほとんどの範囲に第2a層が遺存しており、これを除去することで第1b面を検出した。したがって現代の攪乱を除くと上層からの遺構との錯綜は無く、おおむね面への帰属が理解しやすい検出状況であった。検出範囲が限られているため、全般的な遺構分布については不明であるが、微高地の縁辺部分を地形に即して選る複数の溝（溝12~18）、検出範囲北東部で、溝群よりさらに流路に近い位置、ないしは流路に重複する位置にある土坑（土坑60~63）、検出範囲南西部で、流路の肩付近に比較的まとまって分布する土坑群（土坑64~72）など、といった遺構の分布状況を認めることができる。相対的にいずれの遺構からも遺物の出土はまとまってみられたが、建物や井戸といった居住に直接かかわる遺構は認められない。北東部に位置する土坑60~63は、微高地3において検出されたものと同様の土坑であり、掘削直後に埋め戻された痕跡を残す。微高地3検出の土坑と比べて、整った形状をみせる。溝12~18については部分的な切り合いもみられ、数度にわたり掘削されたもので、微高地縁辺を画する位置にあることは事実であろうが、調査範囲南側の土地利用が定かではないので、性格についてもあいまいである。比較的まとまって土器の出土がみられた遺構であり、また、次項で述べる流路1-4域への遺物の投棄を行なった主体として、調査範囲南東側の微高地に居住域などの存在が想定される。土坑64~72については、径1m未満の土坑がまとまって分布するもので、それぞれに土器の出土が顕著な点が特徴的である。意識的な埋納が主体を占めると思われる。また土坑70は大型の土坑であるが、炭化物の集中と製塙土器のまとまった出土が特筆される。土坑71からは完形の須恵器、土師器がまとまって出土した。

微高地4では北寄りの部分に溝（溝21~23）が、南寄りの部分には浅い落ち込み（落ち込み2）が分

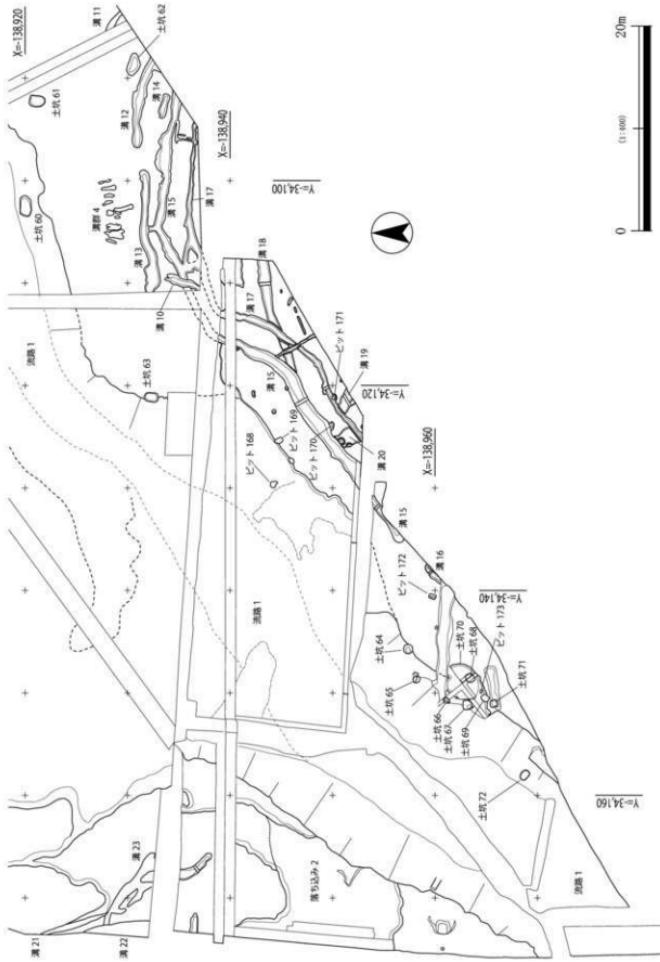


図78 第1面 微高地3・微高地4 遺構分布図 (s=1/400)

布する。目立った遺物の出土は無く、いずれも性格を考える材料に欠ける。なお、落ち込み2の埋土を中心地震による変形構造が顕著に認められた。遺構の埋土に対して変形作用が強く働いたものか、変形によって遺構状を呈するようになったものかは判断できなかった。

以下、微高地3・4にかかる遺構・遺物を個別に報告する。

土坑60(図79)

土坑60は微高地3の調査範囲北東部、流路1と重複する形で位置する。西側に約10m離れて土坑61が、南西側に約22m離れて土坑63が位置する。平面形状は長さ1.85m、幅1.05mの隅丸長方形を呈し、東西方向に長軸を置く。深さは50cmを測り、断面形状は比較的整ったU字形を呈するが、西寄りの底部が一段深くなる形状をもつ。埋土は第2a層～流路埋土、第2b層を起源とするシルトブロック間に砂の混じるもので、ブロック土の角が良く残っていることから、掘削後、時間を置かずに埋め戻されたものと考えられる。内部から土師器、須恵器が出土したが、出土状況に特記する点は無い。割合としては土師器が須恵器よりやや多い。図化し得たものを図85～298に示した。小型の土師器壺で、口縁、体部の一部を欠く。

土坑61(図79)

土坑61は微高地3の調査範囲北東部縁辺、土坑60の西に位置する土坑である。平面形状は長さ1.5m、幅1.1mの隅丸長方形を呈し、南北方向に長軸を置く。短軸方向の断面形状は比較的整ったU字形を呈し、深さは60cmを測る。埋土は第2a層～流路埋土、第2b層を起源とするシルトブロック間に砂の混じるもので、ブロック土の角が良く残っていることから、掘削後、時間を置かずに埋め戻されたものと考えられ

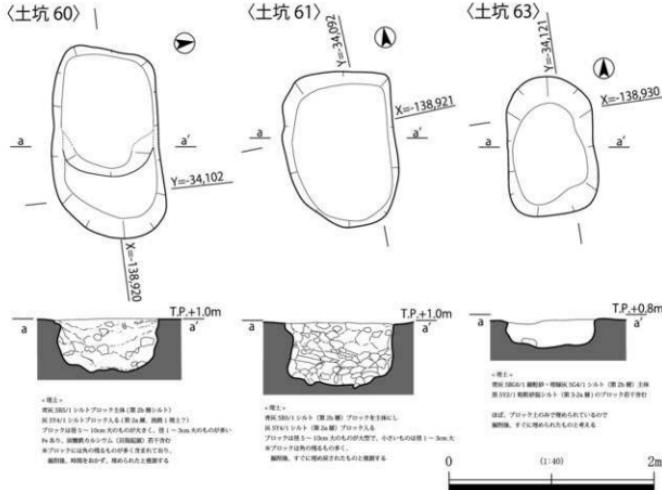


図79 土坑60・61・63 平・断面図

る。内部から土師器、須恵器の細片が少量出土したが、図示し得るものは無い。

土坑62

微高地3における調査範囲の東寄りに位置し、溝群に近い位置にある。長さ2.2m、幅1.2mの不整な長楕円形の平面形をもち、深さは10cmと浅い。遺物には土師器の小片が1点出土したのみである。形状から土坑としたが、溝群と一連の遺構である可能性が高い。

土坑63（図79）

土坑63は微高地3の調査範囲北東部縁辺、土坑60の西に位置する土坑であり、流路1の肩部に位置する。流路1との関係は、流路1の肩部が一定埋没した後に、土坑の掘削が行われたようである。平面形状は長さ1.35m、幅0.85mの隅丸長方形を呈し、南北方向に長軸を置く。断面形状は比較的整ったU字形を呈するが、底にやや凹凸が見られる。深さは25cmを測る。埋土は第2b層、第3-2a層を起源とするシルトブロック間に砂の混じるもので、土坑61・62同様、掘削後、時間を置かずして埋め戻されたものと考えられる。遺物は土師器細片が1点出土したのみである。

土坑64（図80）

土坑64は微高地3調査範囲の南寄りに群集する土坑群の1基であり、群の中では北端に位置する。流路1の肩部より内側に位置するが、流路埋没との先後関係については不明である。直径がほぼ0.9mの円形の平面形をもち、深さは50cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、底は比較的平坦である。埋土はほぼ水平に分層ができるもので、最下部には掘削時に堆積した可能性のある砂があり、これより上位は砂粒を多く含むシルト層で満たされる。明確なブロック土はみられないが、人為的な埋め戻しによるものと考えられる。遺物は比較的多く出土しているが、輝石安山岩製の砥石（図93-376）が北東側の壁に接して出土した点が注目される。それ以外の土器類については埋め戻しの際に投棄されたものと考えられる。土師器、須恵器の破片が主体で、完形に復元できるものはない。図化し得たものを図85-299-305に掲出した。299は須恵器壺蓋で、口縁部を欠く。内部の土壤を洗浄したところ、植物の微細遺体が認められたが、詳細は不明である。300は須恵器杯蓋、301・302は須恵器壺身である。303・304は須恵器壺の口縁部であり、305は土師器壺である。なお299・300には天井部外面にヘラ記号が認められる。土器類以外では桃核1点が出土している。遺構の時期は須恵器の形態からMT15型式段階のものかと推測する。

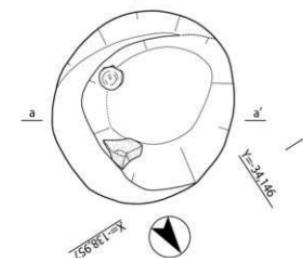
土坑65（図80）

土坑65は土坑64の西に約3mの距離をおいて位置する土坑で、同様に流路1の肩部分にかかる位置にある。流路肩付近の流路内堆積物を除去後、土坑の輪郭を検出したことから、流路の最終埋没以前に掘削、埋没した土坑かと考えられ、土坑埋土の削平の様子も、土坑の埋没後に流路肩が形成された様相を示唆する。平面形状は径0.7~0.8mの円形を呈し、深さは40cmを測る。断面形状は逆台形であり、壁ならびに底面は整っている。埋土は基本的に水平方向の分層が可能な様相をみせ、最下位にはしまりの悪いシルト～極細粒砂の堆積があり、その上位に植物遺体層の堆積がみられる。これ以上は植物遺体や炭化物を含む砂で埋没しており、人為的な埋め戻しと考えられる。遺物の出土状況は特徴的なもので、最下位の砂層とその直上の植物遺体の堆積後、土坑の中央付近に完形の須恵器高壺蓋（図85-307）と、口縁の一部のみを欠く土師器小型壺（図85-308）を意図的に配置したようである。これらの土器以外には須恵器高壺蓋（図85-306）、須恵器片、土師器片が少量みられた。また製塙土器の細片が一定量出土し、重量93gを測る。土器以外の出土遺物としては桃核4点以上、ヒヨウタンの仲間の果皮などが出士した。高壺蓋307はTK47型式段階と考えられ、土坑65は該期の埋め戻しが想定される。

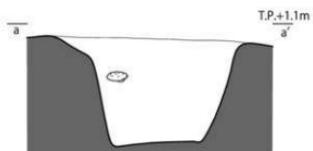
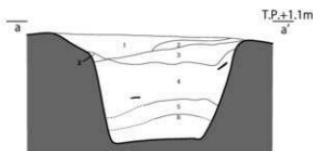
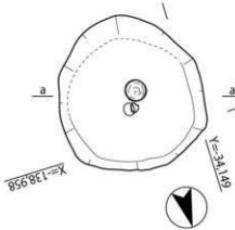
土坑66(図81・82)

土坑66~68は土坑70の埋没後に埋土上面から掘削された土坑である。土坑66はその北寄り、流路の肩付近に位置する。平面形は径0.6mの円形を呈し、深さは40cmを測る。埋土は水平の堆積をみせ、シルト、あるいは砂混じりシルトで埋没する。人為的な埋め戻しがなされたと想定するが不明瞭である。土器の出土は土師器、製塙器の細片のみであるが、図93~383に示した石器が埋土最上層から出土した。383は砂岩製の敲石で、四辺の敲打痕とともに、前面、背面のくぼみも顕著であり、多様な機能を有したものと考えられる。重量1.2kgを測る。土坑66は古墳時代の遺構であると考えられるが、383は下層の弥生時代の遺物が混入した可能性がある。

〈土坑64〉



〈土坑65〉



1. 埋土
2. 土
3. 土
4. 土
5. 土
6. 土
1. 埋土
2. 土
3. 土
4. 土
5. 土
6. 土
1. 埋土
2. 土
3. 土
4. 土
5. 土
6. 土
1. 埋土
2. 土
3. 土
4. 土
5. 土
6. 土
1. 埋土
2. 土
3. 土
4. 土
5. 土
6. 土
1. 埋土
2. 土
3. 土
4. 土
5. 土
6. 土

1. 埋土
2. 土
3. 土
4. 土
5. 土
6. 土

1. 埋土
2. 土
3. 土
4. 土
5. 土
6. 土

1. 埋土
2. 土
3. 土
4. 土
5. 土
6. 土

1. 埋土
2. 土
3. 土
4. 土
5. 土
6. 土

1. 埋土
2. 土
3. 土
4. 土
5. 土
6. 土

図80 土坑64・65 平・断・立面図

土坑67（図81）

土坑67は土坑66の南に約2mの距離をおいて位置する土坑である。土坑70の埋土を切る関係にあるが、遺構の輪郭は不明瞭であり、あるいは土坑70の埋土の一部である可能性も残される。不整形な円形を呈し、直径約1mを測る。埋土は土坑70との傾別が難しいもので、炭化物、砂礫を多く含むシルトを主体とする。特徴的な遺物の出土状況はみられず、図85-309・310に示した須恵器壺身、高环脚のほか、須恵器壺口縁（図86-331）、須恵器細片、土師器細片が出土している。310は側外面にカキメを施すが、透し穴を有しない。331の須恵器壺は土坑70出土の個体と接合したことから、両遺構の同時性を示唆する。

土坑68（図81・82）

土坑68は土坑67の東に位置し、土坑70と重複する。平面的に遺構の輪郭を確認した際には土坑70との関係が不明瞭であったが、土坑70の埋土を切り込んで掘削されたこと、土坑68の埋没後、さらに土坑70の埋没が進んだことが確認された。この点からは、一連の時間幅の中で両遺構が営まれたものと考えられる。平面形は隅丸方形を呈し、長さ0.9m、幅0.75mを測る。深さは土坑70の底からは50cm、土坑70の上面からは80cmを測る。壁面に顕著なオーバーハングがみられ、調査時の所見からも、掘削時の漏水により壁面が崩落したものと考えられる。埋土もこの想定を支持するもので、砂とシルトの小ブロックにより構成される単位がほぼ水平に堆積する。このような埋没過程によるものか、内部から遺物の出土はみられなかった。

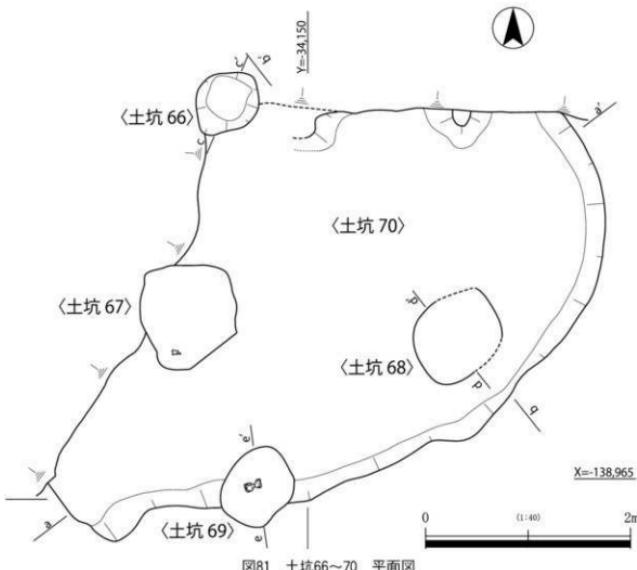


図81 土坑66～70 平面図

〈土坑70〉



1. 美濃 1075(?) 槌打跡 槌打跡に多 亂れ物、陶土、灰面に名
2. 美濃 52(?) 20~30cm 壁土、土壁上に名
3. 美濃 1075(?) 10~20cm 槌打跡に多 亂れ物、陶土に名
4. 美濃 1075(?) 10~20cm 槌打跡、シルトブロック層じと、美濃 1075(?) 槌打跡ブロック入名
5. 美濃 1075(?) 10~20cm 槌打跡、シルトブロック層じと、美濃 1075(?) 槌打跡ブロック入名
6. 美濃 1075(?) 槌打跡

7. 稲葉 1074(?) シルト層 槌打跡 サークル跡が多く見じと(第3段階初期の段土)
8. 稲葉 1074(?) 10~20cm 大きな輪郭のブロック層じと
9. 稲葉 1074(?) 10~20cm 大きな輪郭のブロック層じと
10. 稲葉 1074(?) 10~20cm 大きな輪郭のブロック層じと
11. 稲葉 1074(?) 10~20cm 大きな輪郭のブロック層じと
12. 稲葉 1074(?) 10~20cm 大きな輪郭のブロック層じと
13. 稲葉 1074(?) 10~20cm 大きな輪郭のブロック層じと
14. 稲葉 1074(?) 10~20cm 大きな輪郭のブロック層じと

〈土坑66〉



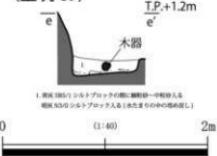
1. 美濃 1075(?) シルト 槌打跡中に多
2. リーフ 2325(?) シルト・細砂
3. オリーブ 373(?) シルト

〈土坑68〉



1. 稲葉 1074(?) シルト 稲葉 1074(?) 槌打跡中に多
2. 稲葉 1074(?) 10~20cm 大きな輪郭のシルトブロック層じと
3. 稲葉 1074(?) 10~20cm 大きな輪郭のシルトブロック層じと
- (おまけ) 10~20cm 大きな輪郭のシルトブロック層じと

〈土坑69〉



1. 稲葉 1074(?) シルトブロック層じと(底) 一軒跡入名
2. 稲葉 1074(?) シルトブロック入名(おまけの中央地盤)

図82 土坑66・68・69・70 断面図

土坑69(図81・82)

土坑69は土坑66、67の南に位置し、土坑70と重複する。土坑70を平面的に検出した際には輪郭が把握できなかったが、土坑70を掘り下げる過程において土坑69の輪郭を確認した。土坑68において確認したように、土坑70の埋没は、土坑68、69の掘削と埋没を間に挟みながら進行したものと考えられ、最終的に炭層で覆われるまでは土坑68、69は埋まっていたものと考えられる。土坑69はいびつな円形の平面形を呈し、径0.3~0.4mを測る。深さについては60cmを測り、土坑70の底からは10cm程度を測る。土坑70を掘り下げた段階で土坑69を確認したことから、土層断面も土坑70の底面以下についてのみ、記録することができた。土坑掘削時に発生したシルトブロックと砂が混ざるもので、土坑68に類似する。土坑の掘削からそれほど時間をおかずには、水に溜まった中で埋没が進んだものと考えられる。土坑上位の出土遺物については土坑70のものと区別できないが、下層からは木製の鍤(国85-311)が1点出土したのみである。確たる根柢を示すことはできないが、出土位置と、ただ1点のみの出土であることから、意図的に納められたものと推測する。土坑のはば中央、底からはやや浮いた位置で出土しており、土坑の掘削後、間もない段階で納められたものと考えられる。311はコナラ属アカガシ亜属を用いた鍤で、中央が明瞭にくびれる典型的な形態を示す。長さ16cm、最大径8.6cmを測る。

土坑70（図81・82）

土坑70は土坑66～69と重複する大型の土坑である。第1b面における遺構検出作業では当初、炭や灰の顯著な広がりが認められたため、炭化物の堆積としての認識をもって調査にあたったが、調査を進めた結果、一定の深さをもつ大型の土坑であることが判明した。しかしこれまでも記載したように、土坑68・69との切り合い関係は複雑である。土坑70がある程度埋められた段階で、その埋土上面から土坑68・69が掘削され、両土坑が埋没した後に、その埋土を覆う形で土坑70は最終的に埋没する。最終的な埋め戻しには炭や灰が多く投入され、当初認識した炭層を形成する。流路1との関係には不明瞭な部分が多いが、土層断面からは流路1により北側が侵食されている様相をみることができ、流路1の最終的な埋没以前には土坑70は埋没していると考えられる。このため検出した土坑70の形状は流路側の一部を欠いたものであると考えられるが、残存部分では長さ6m、幅4mを測る。壁面の立ち上がりは比較的整ったものであるが、底面には凹凸が顯著な部分が多い。深さは深いところでも20cm前後であり、広くて浅い土坑である。埋土は汚れた砂を主体に砂混じりシルトなどが混じるもので、比較的しっかりした土壤も介在するが、層相から人為的な埋め戻しがなされたものと推測する。遺物の出土状況に特徴的なものは無いが、須恵器、土師器、韓式系土器、製塙土器などの破片が多数出土した。図化し得たものを図86～312～図87～345に掲出した。特徴的な遺物としては341～343のU字形板状土製品、344の韓式系土器平底鉢などがあげられる。また337の土師器羽釜は鈎の全容は不明であるが、その取り付け位置が頭部でも上寄りにあり、古相を呈する資料である。また製塙土器は細片と化したものが多く、図版320～3014にその一部を掲載するにとどめるが、重量では約700gを測る。石製品には滑石製白玉（図93～379）、有孔板

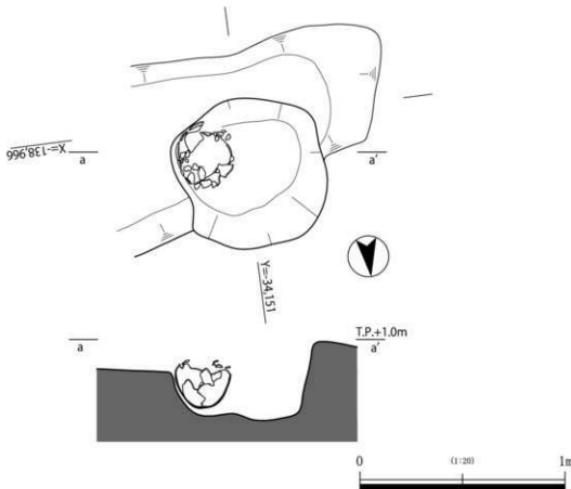


図83 土坑71 平・断面図

(381)、砂岩製石杵の一部 (382)、弥生時代の遺物と考えられる石鏃 (図94-384)、楔形石器 (385)、剥片 (386) がある。植物遺体としては桃核50点以上、スマモ核3点が出土している。遺物の時期は須恵器がTK47型式段階に比定され、この時期の遺物を主体とすると考えるが、遺物の出土量は多いものの、完形のものが含まれていないことから、製塙土器や植物遺体、炭なども含めた廃棄土坑と考えられる。

土坑71 (図83)

土坑70の南に接する位置にある土坑で、現代の擾乱により上部を失っている。不整形な円形を呈し、径0.7m、深さ40cmを測る。東端に土師器長胴壺 (図88-346) が正位置で据えられており、意図的に埋納されたものと考えられる。埋置段階で既に底の一部を欠いていたと考えられる。これ以外には須恵器、土師器の細片がみられた。346は器高39cmを測るもので、内外面ともハケ調整が施され、ケズリはみられない。5世紀後半以降のものと考えられる。

土坑72 (図84)

土坑72は土坑70からは南西に約6m離れた位置にある土坑で、流路1と重複する。調査段階では流路1の埋土を掘り下げている段階で、遺物の出土を確認したが、最終的には流路の斜面を検出した段階で平面形状を確認した。遺物の出土位置などから勘案して、流路1が一定程度埋没した段階で掘削されたものと考えられるが、土坑の底はT.P.-0.9mを測り、流路上面よりは2m程度の深さとなることから、土坑の掘削は流路の最終埋没以前の段階であったと考えられる。平面形は隅丸方形を呈し、長さ1.0m、幅0.7mを測る。北寄りの底が一段深くなっている、検出面 (流路斜面) からの深さは60cm程度である。埋土は腐食の強い泥質のシルトが主体で、植物遺体も多く含むことから、滲水環境の中での埋没、あるいは埋め戻しが推測される。上位から下位までまとまりをもって完形の土器類が出土しており、段階的に意識的な埋設がなされたと推測される。最下位には須恵器高壺 (図88-350)、土師器壺 (354) があ

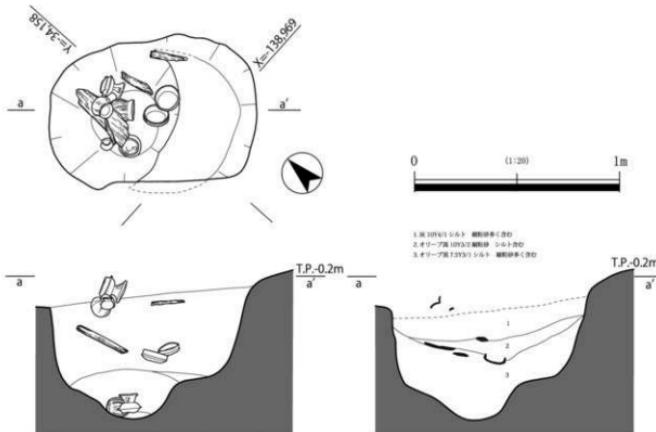


図84 土坑72 平・断・立面図

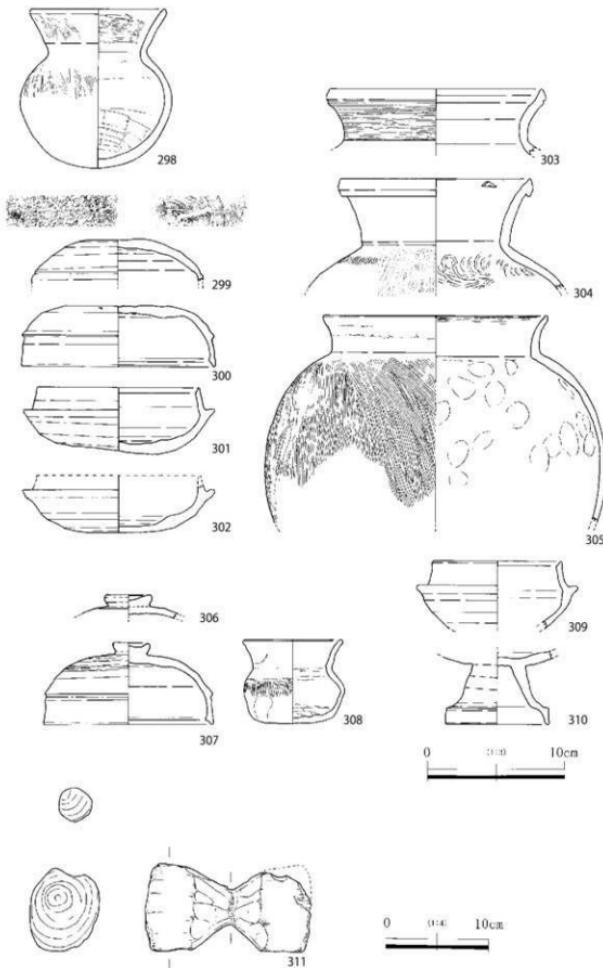


図85 微高地3 遺構 出土遺物1

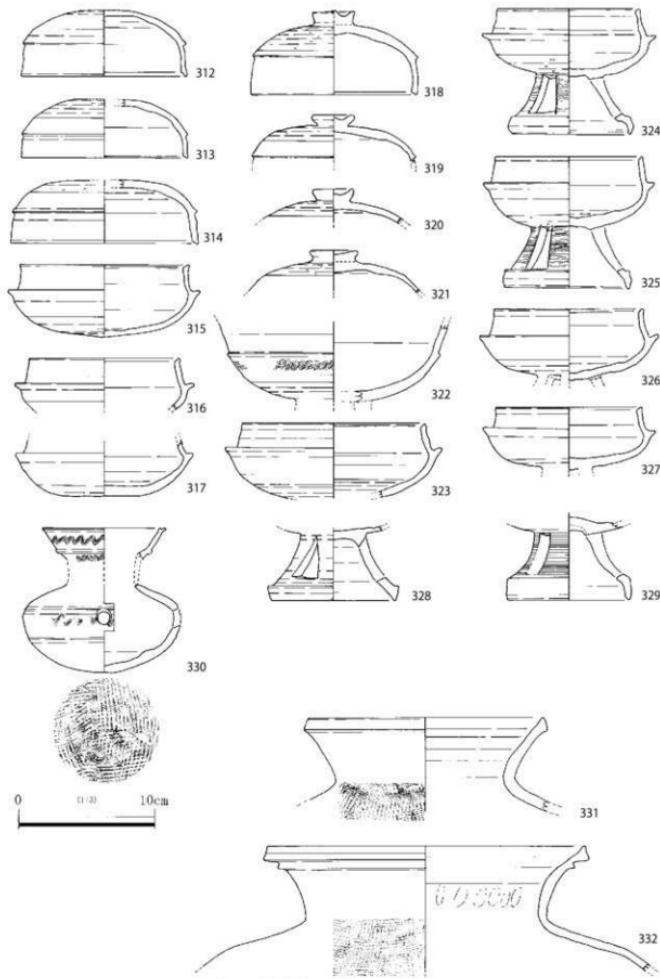


图86 微高地3 遗構 出土遺物2

り、中位には須恵器坏蓋（347・348）、上位には須恵器高坏（351）、土師器壺（353）小型壺（352）がみられた。この点から3度にわたる埋め戻しと土器埋納が繰り返されたものと推測するが、全体としては短時間の行為であろう。図示し得たもの以外には、土坑最上位に伏せられていた須恵器中型壺の体部片や壺口縁、土師器、須恵器の細片、製塙土器片（6g）などが出土した。植物遺体としては桃核38点や、スモモ核2点が出土しており、さらに、遺存状態は極めて悪いものであるが、植物質の籠（図版318-2997・2998）が出土したことは特記される。六つ目の底部が確認できる。須恵器高坏2個体は脚端部の形状など、類似する特徴をもつものであり、TK47型式段階に比定される。土坑64～72はまとまった分布をみせるものであるが、形成された時期もほぼ同時期と考えられ、遺物の出土が多い点、製塙土器や桃核といった特徴的な遺物の出土傾向にも共通点が多い。しかしながら性格については不明である。

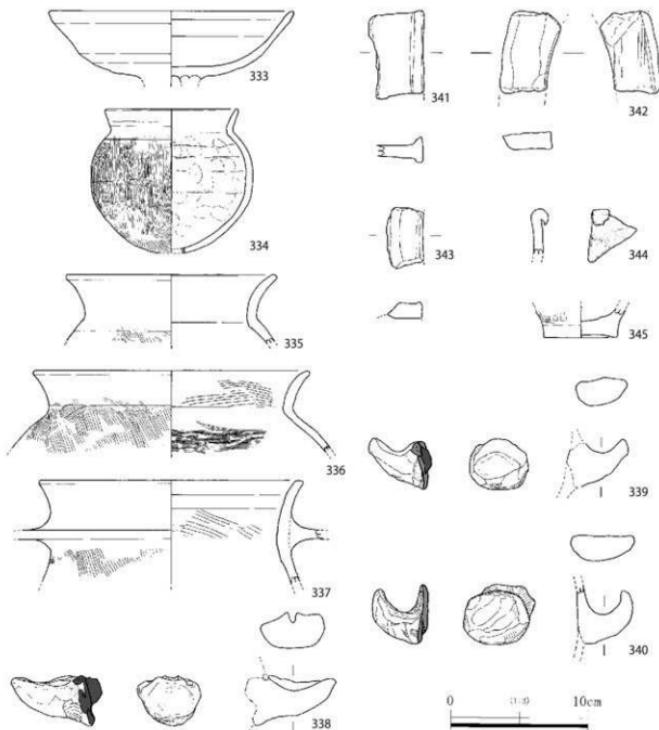


図87 微高地3 遺構 出土遺物3

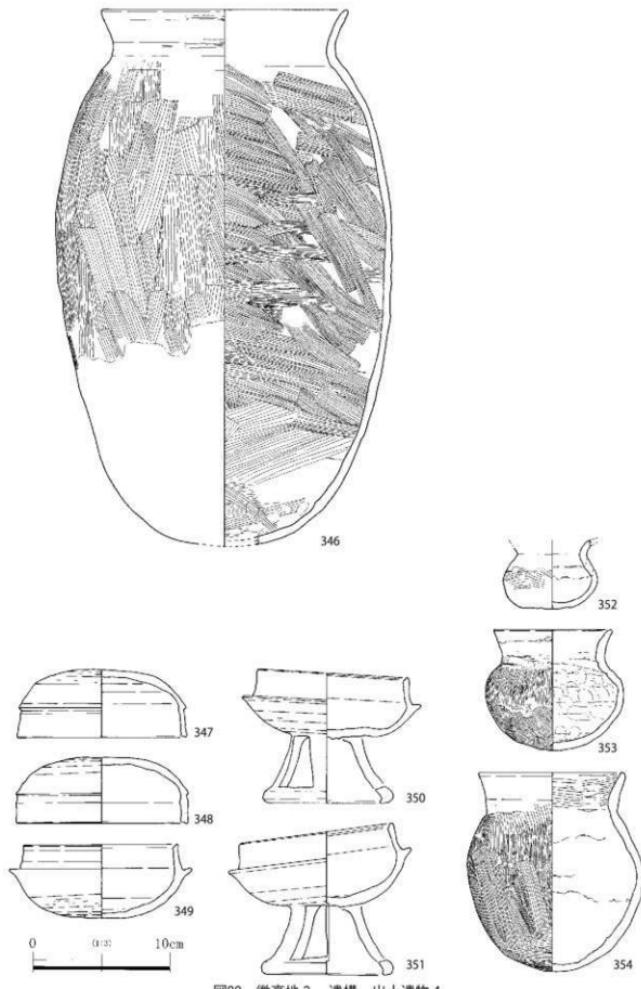


图88 微高地3 遗构 出土遗物4

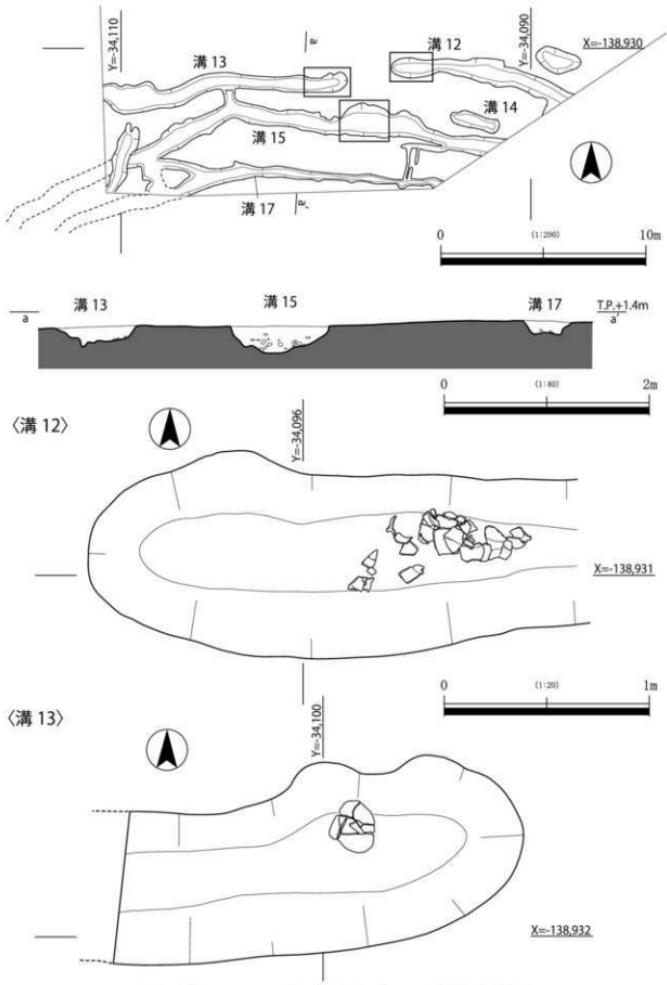


图89 满12~15・17 平・断面図 满12・13遺物出土状況図

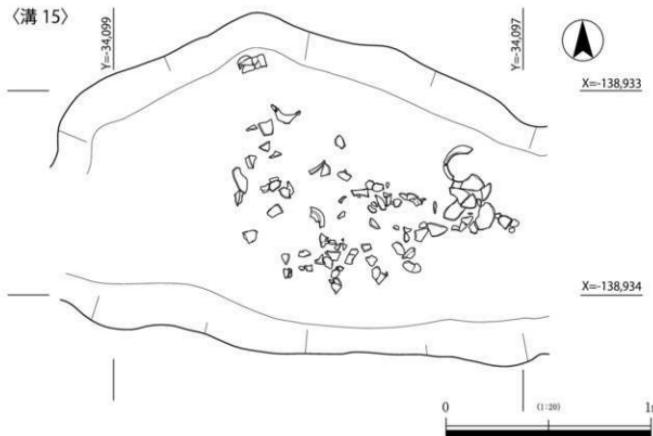


図90 溝15 遺物出土状況

溝群4

溝群4としたものは、微高地3の北縁部、流路1の南岸付近に位置する小規模な溝の集まりで、その南に位置する溝13~18などの関連が想起される。特に、東端が後述する溝13の東端部と合致しており、計画的な配置が想起される。幅0.2m程度の溝が、一部を連結し10条程度並ぶものであり、遺物の出土はみられない。小規模な遺構とされるものに類似するが、性格は不明である。

溝10

溝10は微高地3の北寄り、03-5-2トレーナーの南西隅において確認した溝で、溝15・17を切る関係にある。幅0.8m、深さ約10cmの規模で、トレーナーの境にかかることから南端の様相は不明ながら、南北方向の小規模な溝であると考えられる。遺物には土師器細片が2点出土したのみである。

溝11

溝11は調査範囲内における微高地3の北端に位置する溝で、幅0.5m前後、深さ15cm程度を測る。部分的な検出にとどまったが、溝12などと同じ方向をもち、一連の遺構群の可能性がある。遺物には土師器細片が1点出土したのみである。

溝12（図89）

溝12は微高地3北縁付近に平行して流走する溝群のひとつで、ゆるやかな弧状を描く溝である。約2mの間隔をあけて溝13に連なるものと考えられ、両者で溝群の北縁を構成する。幅0.6~0.9m、深さ15cmを測り、比較的まとまった遺物の出土をみた。遺物検出状況の一部を図89、図版32に示すが、土師器甕、壺、須恵器甕、坏身、坏蓋、滑石製白玉などが出土した。完形のものはなく廃棄されたものと考えられる。図化したもの図91-355~360、図93-377・378に掲出した。土師器甕360は赤褐色の特徴的な胎土・焼成をみせるものである。須恵器の年代はMT15型式段階に比定される。

溝13（図89）

溝13は溝12と一連のものと考えられるもので、西端がトレンチ境にかかるが、長さ約15m、幅0.8m前後、深さ10cm程度の溝である。溝15と連結する部分があるが、切り合いの有無は確認できなかった。図89に示したように東端部において須恵器壺の体部片がまとまって出土したほか、縁、坏、土師器壺の破片が出土した。須恵器が7割程度を占める。図示し得たものは須恵器縁の口縁部（図91-361）のみである。溝12と同時期の遺構と考える。

溝14（図89）

溝14は溝12と溝15の間に位置する小規模な溝で、長さ2.5m、幅0.7m、深さ10cmを測る。遺物は土師器細片が出土したのみである。

溝15（図89・90）

溝15は溝12・13の一列南側に位置する溝で、さらに南側に位置する溝17とは一部で連結し、平行する形状をもしながら流走する。3つのトレンチにまたがり確認したが、検出総長は50mを超える。幅や深さは一様ではないが、広いところでは1.3m、深さ20cmを測る。図90に出土遺物を示した以外にもまとまった遺物の出土をみせるが、完形のものはみられない。須恵器壺、甕、坏、高坏、土師器壺、甕などがあり、土師器が6～7割を占めるようである。図化し得たものは図92・図93に示した。366は須恵器坏蓋、367～370は坏身、371は土師器壺口縁、372は高坏である。373は中型甕、374・375はそれぞれ形態の異なる複合口縁の甕である。須恵器の年代はMT15型式段階に比定され、溝12・13と同様である。図93-380は滑石製有孔板の一部で、被断面に穿孔が認められる。

溝16

溝16は溝15の南西側に、約3mの間隔をあけて連なるもので、さらに南西方向、調査範囲外へ延びる

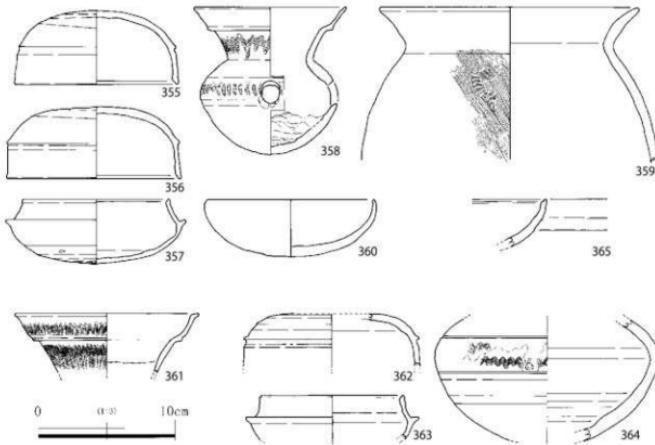


図91 微高地3 遺構 出土遺物5

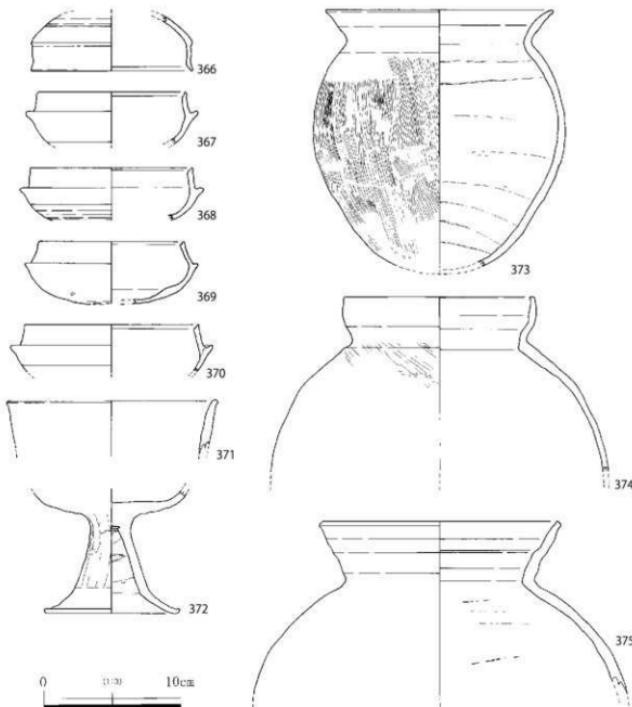


図92 微高地3 遺構 出土遺物6

ものと考えられる。須恵器、土師器の細片が出土しているが、図示できるものはない。

溝17

溝17は溝15の南側に平行して位置する溝で、屈曲の形状など溝15とはほぼ同じ形状をもつ、相関度の高いものと考えられる。調査範囲外へ延びるものであるが、検出部分においても総延長40mを超える。幅0.5m、深さ10cmを測り、規模はやや小さい。03-5-10トレーニチにおいて検出した範囲では比較的まとまった遺物の出土をみた。土師器壺、甕、須恵器壺、壺、甕などの破片が主となるが、そのうち図化し得たものを図91-362~364に示した。362は須恵器壺蓋、363は壺身、364は甕の体部である。他の溝と同様の時期と考える。

溝18

溝18は溝15から分岐するのか、あるいは切り合うかは詳細に確認できなかったが、溝17には切られる

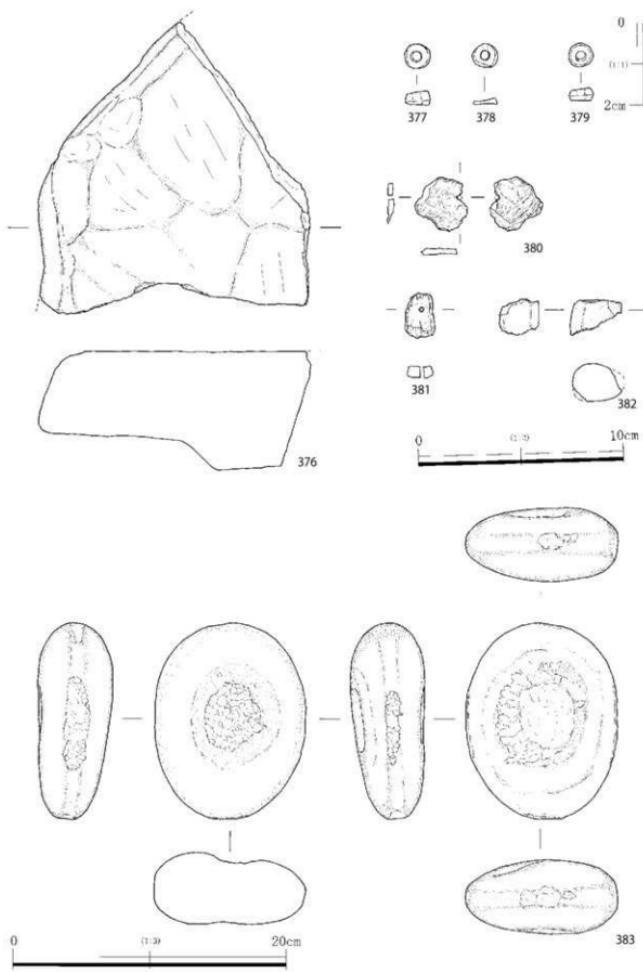


図93 微高地3 遺構 出土遺物7

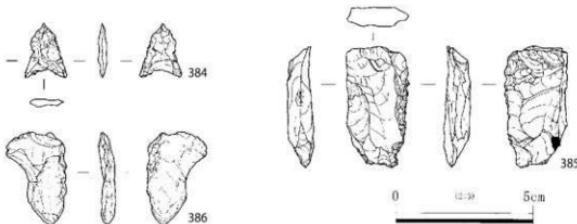


図94 微高地3 遺構 出土遺物8

関係になる溝である。他の溝と基本的に平行する関係にあり、溝15が溝17とともに再掘削されたと仮定すると、その前身の溝であった可能性がある。規模は幅1.1m、深さ20cmを測る。遺物には土師器、須恵器の細片があるが、図示し得るものはない。

溝19

溝19は微高地3北縁の中央付近に位置する溝で、溝15などに直交する方向をとる。北端で溝17に切られており、南側は調査範囲外へ延びると思われる。幅は1m前後、深さは15cmを測る。遺物は土師器の細片が1点出土したのみである。

溝20

溝19の西側に近い方向をもって位置する溝である。北側を溝15に、南側を溝17に切られており、長さは2mを超える程度の規模であったと推測する。幅1.8m、深さ10cmを測る。出土遺物もわずかであり、須恵器、土師器の細片がそれぞれ1点出土したのみである。

ピット168～173

微高地3ではピットは散漫な分布を示し、有意の組み合わせは想定されない。流路1や溝17と重複するものもある。ここでの遺構として特徴的なものは認められず、遺物が出土したものについて遺構番号を付した。ピット168からは図91-365に示した土師器壺ないしは高杯の口縁部が出土しているほか、土師器壺、須恵器壺の細片が出土している。ピット169からは土師器細片が1点、ピット170からは土師器壺の細片が5点、ピット171からは土師器壺の細片、ピット172からは土師器、須恵器の細片が17点、ピット173からは土師器、須恵器の細片が7点出土しているのみである。

微高地4の中心は今回の調査範囲より西側、03-6調査範囲にあるものとおもわれ、極一部を検出したにとどまるとおもわれるが、検出範囲においては顯著な遺構の分布はみられず、北寄りに溝数条、南寄りに浅い落ち込みを確認したのみである。遺構の性格については不明な部分が多いが、遺物の出土をみた溝21～23、落ち込み2に遺構番号を付した。

溝21

溝21は調査範囲西端において検出した南北方向の溝で、幅0.2～0.8mを測る。遺物には須恵器壺身、壺、土師器壺、壺などの細片が出土した。

溝22

溝22はやはり調査範囲西端において検出した南北方向の溝で、西側の肩が側溝にかかり、幅1mを測

るものと推測する。遺物には須恵器壺の体部片が出土した。

溝23

溝23は南東から北西へ延びる溝であり、溝21を切るが、溝22に切られる。複数の溝が重なり合う可能性があるが良くわからない。検出長12mを測るが、部分的な規模はまちまちである。遺物には須恵器壺、甕、土師器壺などの細片がある。

落ち込み2

落ち込み2は微高地3南寄りにおいて検出した浅い落ち込みで、平面形は東西方向に流れる流路状を呈していたため、当初、流路1に流れ込む小規模な流路かと推測したが、土層断面などの確認により、浅い落ち込みであることが判明した。南北幅11mを測るが、深さ10cm前後と浅い。埋土と第2a層との区別も不明瞭である。遺物には大型の砥石(図192-1561)のほか、土師器、須恵器の細片が出土したのみである。1561は流紋岩製の砥石で、長さ29.9cm、幅10.8cm、厚さ7.7cmを測る。重量は3.45kgである。落込み2は遺構として認識するものの、概要において先述したように、形成要因に地震の影響を考慮する必要がある。砥石についても落ち込み2との関係は消極的にとらえるほうが良いとおもわれる。

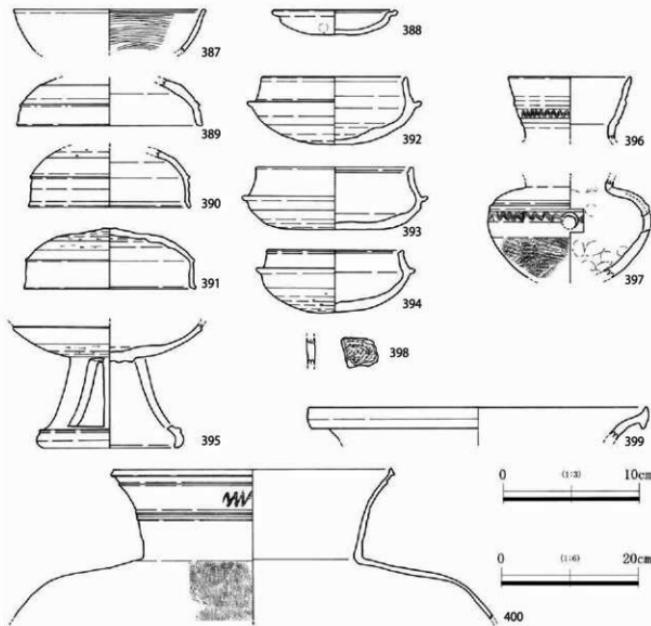


図95 微高地3層 出土遺物1

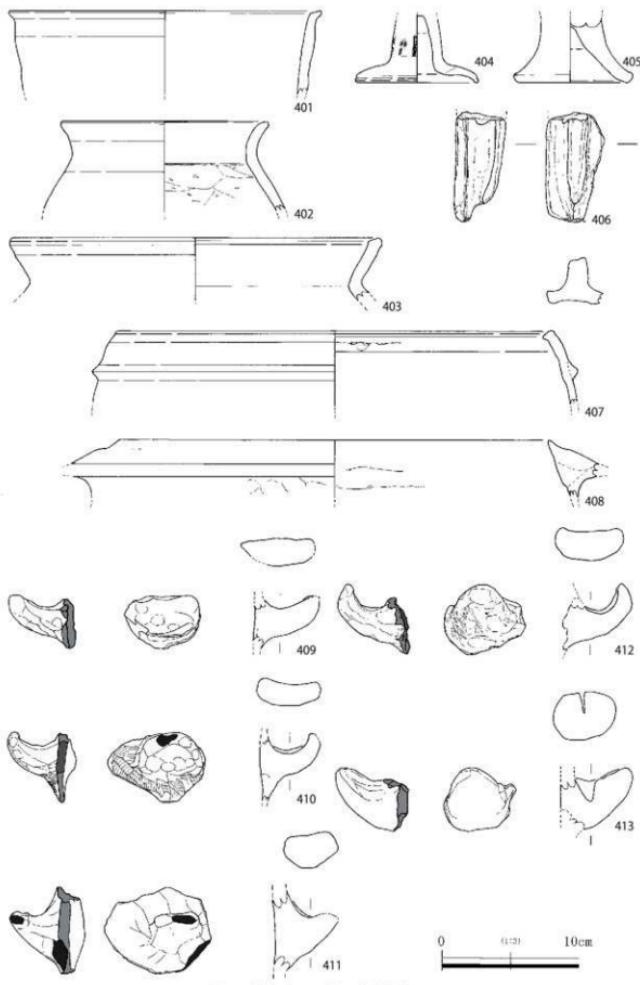


図96 微高地3層出土遺物2

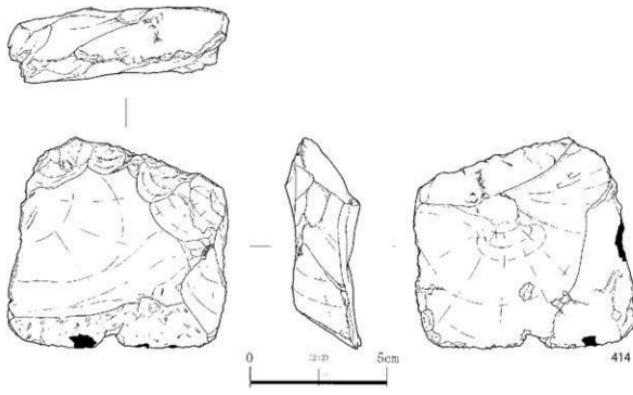


図97 微高地3・4層出土遺物3

微高地3・4層出土遺物（図95～97）

微高地3・4に相当する範囲の第1層～第2a層出土遺物について報告する。微高地3・4が位置する調査範囲は03-5.2（南半）・03-5.10・06-2.2・06-2.3トレンチに相当するが、それぞれの調査範囲において流路1の占める割合が高く、厳密に微高地3上層の遺物と流路1上層の遺物を区別することはできない。したがって、微高地3・4の層出土遺物として、03-5.2（南半）・03-5-10トレンチにおいて、流路1からやや距離をおいた範囲から出土したものを掲げる。

図95～387は瓦器甌、388は「て」の字状口縁をもつ土師器皿である。389～391は須恵器杯蓋、392～394は須恵器身、395は無蓋高壺である。方形の透かしを3方向に配置する。396は須恵器壺、ないしは甌の口縁部で、397は須恵器甌の体部である。5世紀後半から6世紀前半の時期が主体となる。398は須恵器甌の体部片と考えられるが、外面に格子タタキを施すものである。399・400は須恵器甌で、400は比較的大型の個体である。なお392には底部外面にヘラ記号が認められる。

図96～401は土師器甌の口縁部で、端部を短く外側に聞く。402は土師器の甌であるが、内面にヘラケズリを施すが、器壁は厚い。403も土師器の甌で、残存率が低いため口径の復元には不安があるが、口縁端部に内傾する面をもち、内面の肥厚がわずかに認められる。404・405は土師器高壺脚である。406は移動式竈の付け庇の基部と考えられる。ごく一部の残存であり摩滅も著しいが、竈底面より下方へ突出する形状のものと考えられる。407・408も極めて残存率の低い個体であるが、特異な形態を示す土師器の羽釜と考えられ、掲げる。407は内傾する口縁部外面に、鍔としての機能を有さない極めて短い鍔を貼付けるもので、口縁端部内面は内側に肥厚する。408は短く摘み上げた口縁からつながる鍔の下部に体部を接合し、その隙間に粘土を充填しているようである。口縁部自体は内傾する。409～412は土師器把手、413は韓式系土器の把手である。

図97～414はサスカイトの剥片である。長さ7.8cm、幅8.1cm、厚さ2.7cmを測る大型の剥片で、重量は187.5gを測る。背面、腹面とも大きな剥離痕が残り、背面からはさらに小型の剥片を取ったようである。

第6項 流路1

概要（図99）

調査範囲中央を流走する流路1は、今回の調査において規模の面でも出土遺物の量からも、最大の遺構である。調査範囲中央北寄りの03-6-4トレンチから調査範囲内に入り、03-5-7トレンチ、03-5-4トレンチ、03-5-2トレンチ、03-5-1トレンチ、03-5-10トレンチ、06-2-2・3トレンチ、を流走し、調査範囲南西端の03-5-3トレンチから調査範囲外へ抜ける。調査範囲外北側の様相はまったくの推測となるが、微高地2との関係を考えると蛇行する形状が想定される。一方、調査範囲南側については、やや距離をおいた地点での調査になるが、薄屋北遺跡の西側において南北に軸をおく流路が確認されているおり、これにつながる可能性が高いものと推測される。人為的な加工が加わっているものの、基本的には自然に形成された流路であると考えられ、調査範囲内では微高地間の低地域を縫うように流走する。弥生時代以来の微地形形成の過程において生み出された流路であると考えられる。

調査の工程上、流路1は複数のトレンチに分割して調査したこととなったが、調査当初の層位認識の混乱により、流路の把握に問題が残された箇所がある。今回の調査において最初に着手した03-5-1トレンチでは流路1の本来の検出面である第1b面（調査時には第11層上面と呼称）において流路1の南東肩を確認したものの、北側の輪郭を押さえることができなかつたため、第11層として流路の堆積物と北側の第2b層を同時に掘り下げてしまった。その掘削作業の過程で比較的まとまった遺物の出土と、流路状の遺構輪郭を断片的に確認したことから、続く03-5-2トレンチの調査に際しては第1b面における流路の確認に注意を注いだところ、調査環境の改善の効果もあり、比較的容易に流路の輪郭を平面的に断面においても確認することができた。そして03-5-1トレンチにおける調査成果を振り返ると、平面的な確認はできなかつたわけであるが、センターラインの土層断面図などの記録から、流路の存在を確認することができ、第11層として取り上げた遺物の帰属についてもある程度、復元することができた。

このような経緯があり、流路1について、特に03-5-1トレンチに位置する部分については推定を含む復元により、その範囲を図示することとしたが、把握が難しい状況も残された。一つは規模の問題である。03-5-2トレンチにおいて検出した部分では流路幅は約10m、深さ1mの規模であるが、03-5-1トレンチにおいて復元される流路は幅約25m、深さも14mと相当に大規模なものとなる。また03-5-1トレンチにおけるセンターライン土層断面に流路の北岸がかっておらず、センターラインの北側に肩があるとすると、03-5-2トレンチにおいて検出した北岸の輪郭とスムーズに連続しない。第二に流路内堆積物の様相も大きく異なっている。後述するように03-5-2トレンチより上流側の土層断面においては流路の再掘削とも言うべき状況が認められるが、03-5-1トレンチ以南においてはそれがみられず、逆に流路内堆積物の細分が明確になる状況が認められた。第三に遺物の出土量が大きく異なつていて、後述するように03-5-1トレンチ以南では、それ以外の箇所と比べて圧倒的に多種多様な遺物の出土をみる。これは流路自体の様相というよりは、直近の土地利用とのかかわりが反映した可能性が高いが、これら観点を総合すると、流路1については03-5-2トレンチより上流側と、03-5-1トレンチ以南との不整合を認めざるを得ない。位置関係として一連の流路であるとはおもわれるが、両者には切り合い関係をもつ可能性も推測しておきたい。しかしながらこのような評価を客観的に検証することできる記録を作成できていないことは事実であり、悔やまれる結果となったことは反省しなければならない。

流路1は今回の調査範囲内では検出長235mを測り、上記の箇所以外にも、各所において様相も異なる。以後の記述においては流路1を4つの部分に分割し、それぞれを流路1-1域～流路1-4域

と呼称することとする。それぞれの部分の規模については、最上流側となる1～1域で幅7m～8m、1～2域で幅7m～10m、1～3域で幅7m～10mを測り、徐々に幅が広がる傾向をみることができる。先述のように1～4域にはいると幅は飛躍的に大きくなるが、最南端付近では幅20メートルを超える部分もあるようである。深さについては1～1域で検出面から85cm程度、1～3域においても90cm程度と大きくは変わらない。流路底の標高も断面図作成部分の数値となるが、1～1域でT.P.+0.12m、1～2域でT.P.+0.11m、1～3域でT.P.+0.18mとほとんど勾配をもたないが、1～4域では深いものとなる。

流路内堆積物（図98）

流路1～1域～流路1～3域において記録した、流路1の横断方向の土層断面を図98に掲げる。堆積物の詳細については個々の図面、注記を参照されたい。流路1～1域～流路1～3域においては平面で検出した際にも確認できたが、流路の埋没と再掘削、さらに最終的な埋没という状況が認められる。図に網掛けで表示した部分が再掘削部分と考えるが、それらは流路の蛇行の外側に位置しており、下流側にいくほど深く、大規模になっている。再掘削以前の流路内堆積物には比較的砂が多く含んでおり、ある程度流水による堆積が推測されるが、再掘削部分の堆積物は水成堆積と考えられる粘土～シルトであり、比較的よどんだ環境で泥が堆積したものと考えられる。最終的な流路充填堆積物は埋没時の環境を示すものであり、必ずしも掘削時の様相を示すものではないことから、再掘削が人為的なものであるか自然作用であったのかについては判断できない。自然作用による流路の再掘削という状況は、下流側の低い地形の存在が前提となるともわれるが、先述のように流路1～3域と流路1～4域の不整合についての理解ができていないため、不明瞭である。なお、出土遺物の面から当初の堆積時期と再掘削部分の堆積時期を限定することはできない。詳細については後述するが、流路からは5世紀中ごろから6世紀にかけての比較的の時期幅のある遺物が出土する。しかし再掘削部分にも相対的に古い時期の遺物も入り、当初の堆積物に古い時期の遺物が集中するという傾向も認められない。

流路内の遺物の出土状況（図100）

流路1からは非常に多くの遺物が出土した。実際の調査作業においては流路内堆積物を掘り下げる過程において、土器類を中心とする遺物の出土を見るわけであるが、特定の箇所にまとまって分布するという出土状況を示すものはほとんどみられなかった。流路内堆積物の上層から下層まで満遍なく分布していたが、やや下層において遺物量が多い傾向が認められた。とはいってもその破片の大きい固体が下層に集中するというのではなく、上層のシルト層にも大型の破片や完形に近い遺存状況を示す個体が含まれている。また流路内堆積物を分層した際の層理面にまとまるという状況もみられない。印象的な表現になるが、流路底付近に沈んでいるものと、泥の中に浮いているものといった状況を示すものが主体を占めている。流路内への土器、木器などの投棄という状況を推測しておきたい。図100には流路底付近においてみられた、比較的まとまった出土状況を示す。03-5-2レンチから03-5-4レンチに分布するものであるが、これ以外のものを含む出土状況については、図版35～図版45に写真を掲出した。

全体的な遺物出土状況の傾向とは別に、流路1～4域においてみられた土馬の出土状況は特徴的なものであった。土馬（図165～1184）は流路1の最上層に分布し、部体を横たえて出土したことから投棄されたというよりは据え置かれたものと考えられる。また正確な範囲は不明であるが、土馬の周辺、およそ10m四方に滑石製の白玉の分布がみられた。垂直分布を厳密に検討したわけではないが、流路内堆積

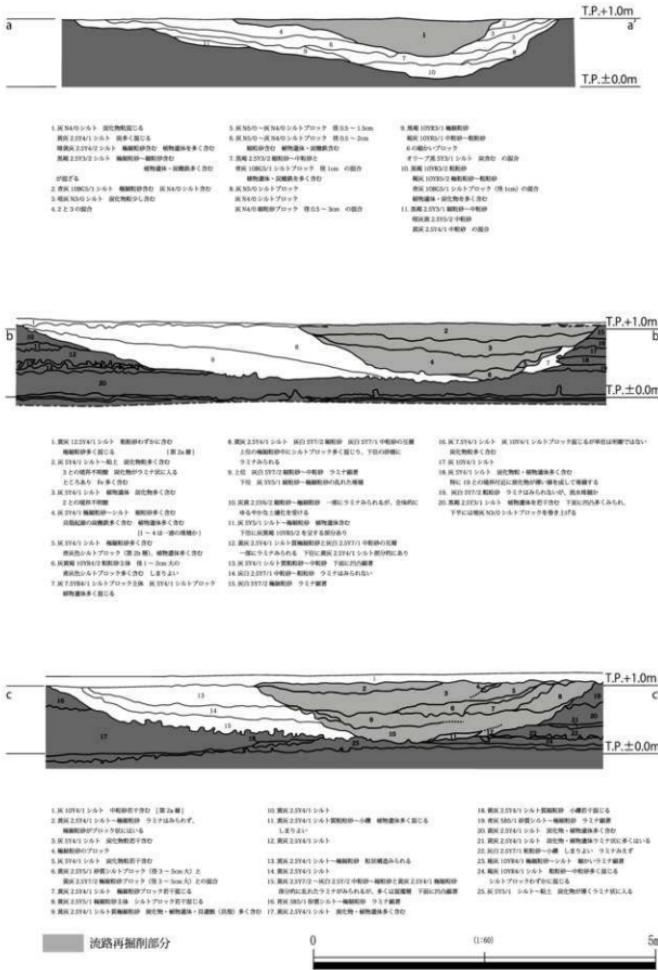


図98 流路1 断面図

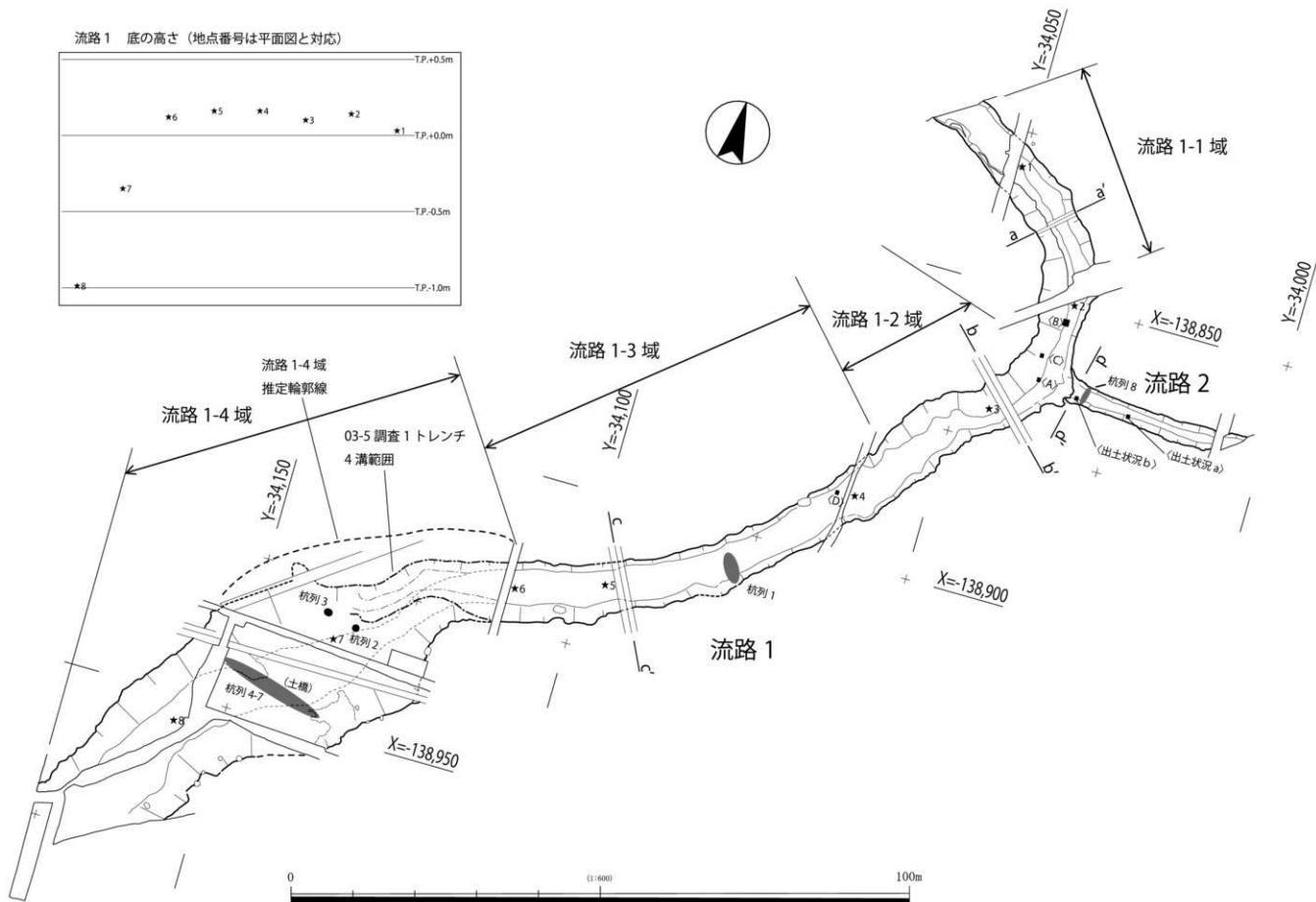


図99 流路1・流路2 平面図 ($s=1/600$)

〈出土状況 A〉



〈出土状況 B〉



〈出土状況 C〉



X=138.859



〈出土状況 D〉



図100 流路1 遺物出土状況図

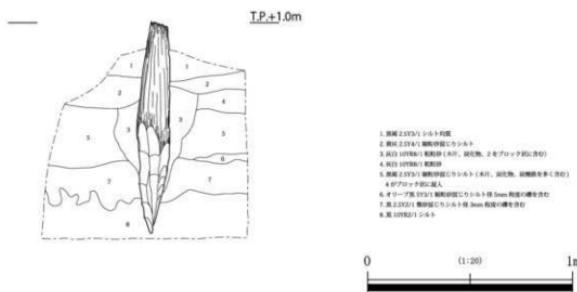
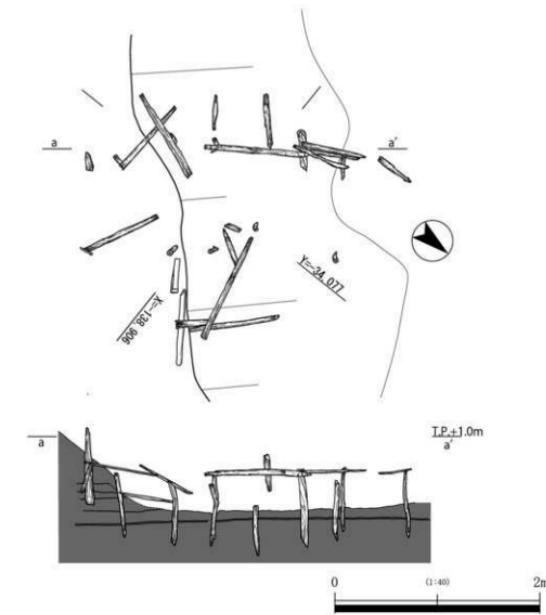


図101 流路1内杭列1・2 平・立面図

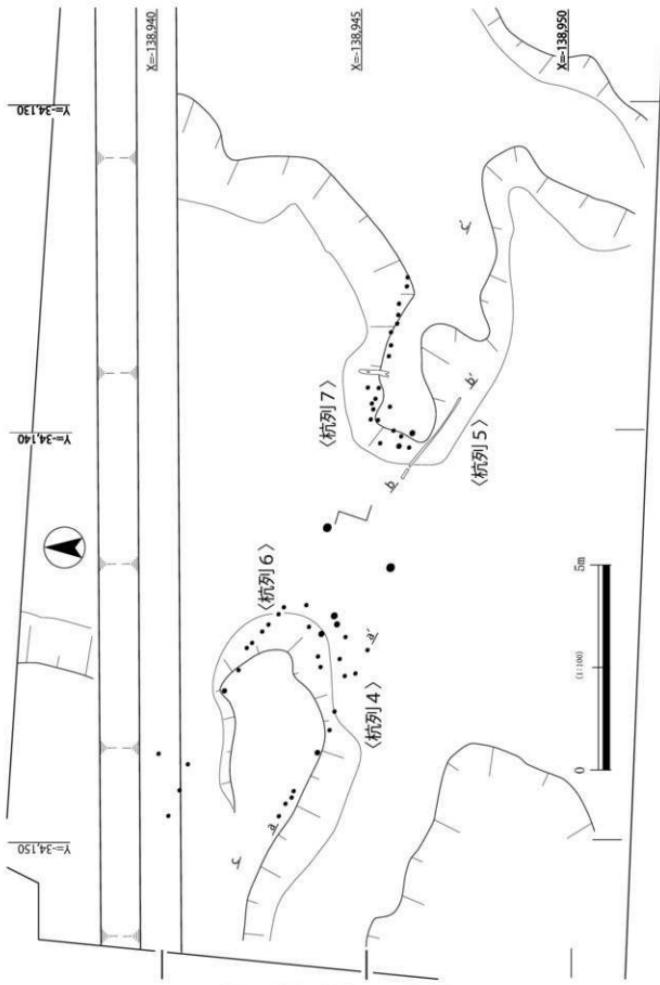


图102 流路 1 杭列 4 ~ 7 平面图

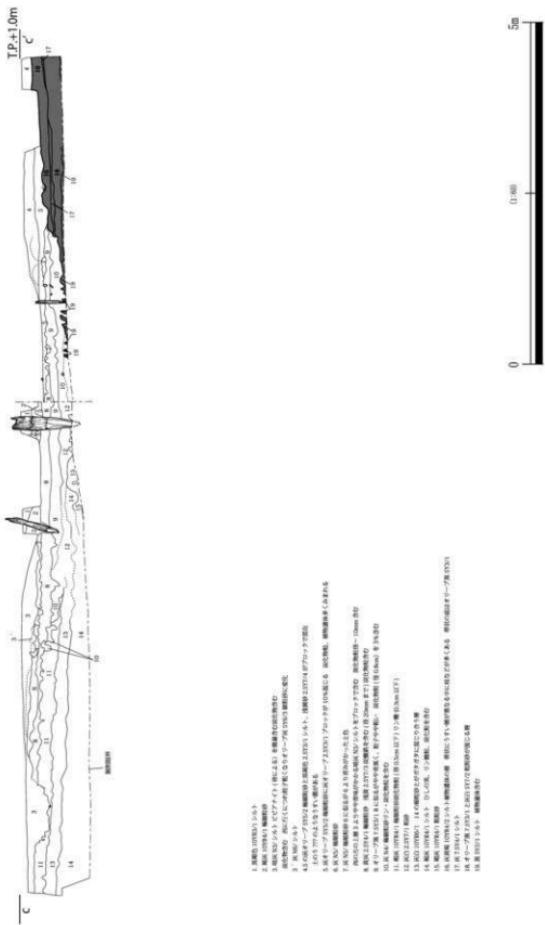
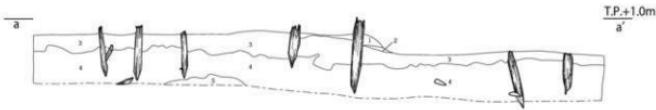


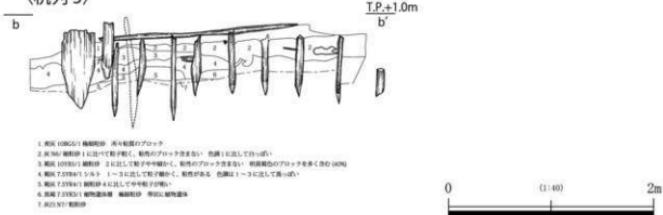
図103 杭列6・7 断・立面図

〈杭列 4〉



1. 横木 (10GJ) リムト サー鋼製錆びた合板 上部に埋められたらしい。
2. 砂層
3. 破片 (50GJ) 鋼製錆びたリムト サー鋼製錆びたアクリル (5cm×15cm 大) 岸に近く地表層
4. 横木 (50GJ) 一般土 50GJ リムト サー鋼製錆びた木
5. 横木 (50GJ) リムト 地下構造物錆びた木の入った船内 很多い木塊
6. 横木 (50GJ) リムト 地下構造物錆びた木の入った船内 很多い木塊

〈杭列 5〉



1. 横木 (10GJ) リムト 黄色い錆びたアクリル
2. 横木 (10GJ) リムト 黄色い錆びたアクリル、他のアクリルブロックを多く、船艤に混じて付いていた
3. 横木 (10GJ) リムト 2本以上でアクリルが複数、船艤のアクリルブロックを多く含む (60G)
4. 横木 (10GJ) リムト 1-3と混じて付けて置く、黒色がる 色は黒い→3に混じて置かれていた
5. 横木 (10GJ) リムト 黒色がる 黒色がる
6. 横木 (10GJ) リムト 黒色がる 黒色がる
7. 横木 (10GJ) リムト

図104 杭列 4・5 立・断面図

物掘削時の所見では、ほぼ水平方向に広がる分布を示すようである。このような状況から、流路の埋積の最終段階近くに、堆積物の上面に土馬を安置し、その周辺に滑石製白玉を散布するという行為があつたことが推測される。なお、白玉の分布域については可能な範囲で土壤を採取し、土糞袋およそ700袋に及ぶ試料の水洗を行った結果、滑石製白玉779点以上、管玉1点、有孔板2点、赤玉質流紋岩製白玉1点、ガラス製小玉1点などを検出した。ちなみに流路1～1域の流路内堆積物についても土壤洗浄を試みた。正確な試料数は記録していないものの、相当量の土壤を洗浄したが、滑石製白玉4点、ガラス製小玉1点の検出にとどまった。流路1～4域における土馬周囲の玉類の在り方と対照的である。

流路内に設置された遺構（図101～104）

流路1内には流路に伴う各種の構築物が確認された。特定の意図をもたずして流路内に投棄された木材の集積と考えられるものもあるが、杭列や土橋のようなものも營まれている。杭列1（図101上段）は流路1～3域の中央付近、南岸に接して設置されたもので、流路の横断方向に岸から10本程度の縦杭を打設し、その上部に横木を渡すものである。縦杭のスパンは30～50cmであり、まばらな印象を受ける。本来、検出部分より北側に続いているかどうかはわからないが、残存部分では岸から約3m程度を測る。このような構築物については堰の可能性が想起されるが、取水口がみられないことから流路からの取水を目的とするものとは考えられない。漁撈関連、あるいは流路1における船の使用を仮定すると、船の接舷にかかる施設の可能性を想定しておく。杭列2（図101下段）は流路1～4域の中央付近に打設されたもので、杭列としたが単独の杭である。流路の埋積がある程度進んだ段階に、堆積物の上面から打

設されている。使用されている材はヒノキで、残存長1m、最大径15cmを測る大型の杭である。柱などの転用材ではないかと考えられ、先端を加工し、杭として用いている。用途については推測の域を出るものではないが、流路1における船の使用を前提とすれば、船の係留用の杭の可能性も指摘できる。杭列3は杭列2の西に約5mはなれて設置されたもので、同様に、ある程度流路の埋積が進んだ段階で打ち込まれた、大型の杭2本と小型の杭3本で構成される。南北方向の列を意識して打設されているようであるが、機能については杭列1、2同様、明確にしがない。

杭列4～7（土橋）は流路1～4域に位置する施設で、流路の東西両岸からそれぞれ延びる2列の杭列と、それを取り込む形で造成された盛土による遺構である（図102）。杭列のまとまりは厳密には把握しがたいところもあるが、盛土の南側の列のうち、西岸に取り付くものを杭列4、東岸に取り付くものを杭列5とし、盛土北側の列についても同様に杭列6、杭列7とした。いずれの杭も流路底部にある程度の堆積が進んだ上から打設されているが、後述する盛土との先後関係は明瞭ではない。想定する杭列の機能からは、杭列を先行して打設し、それを取り込む形で盛土を施したと推測しておく。杭列4、5は杭のスパンを比較的広く取り、中型の杭材を用いており、杭列5では縦杭の上に横木を渡している。杭列6、7は比較的小型の杭材を間隔おかずして打設している。さらに両杭列の間にビーカーに杭列を取り込む形で盛土を施し、流路両岸から延びる土橋状の構造物を造成している。盛土を構成する土壤はブロック土を含むものがあり、さらにわずかな痕跡ではあったが、土壌状の単位を想起させる有機質の薄い膜のようなものも認められた。盛土は流路堆積土との区別が難しい土質であったため、明瞭に把握できただものではないが、流路中央付近には盛土の及ばない部分があり、流路を完全に分断する形ではなかったようである。その盛土の間際部、杭列中央部には大型の杭が単独で打設されているが、あるいは橋が架構されていたのかもしれない。杭列に用いられる材は小型のものは杭材、中型、大型のものには転用材が含まれていると考えられる。唯一図示した杭列5の流路中央よりの材（図205～1610）は、残存長80cm、幅33cm、厚さ7.6cmを測る大型の材で、湾曲する形状から船材の可能性を想定しておきたい。樹種はスギである。これ以外の杭材については杭列4から10点、杭列5から9点、杭列6から16点、杭列7から18点、杭列間の大型の材から3点の計66点について樹種同定を行った。詳細については別掲（第5章第2節）するが、ツブライジやスダジイなどの用材が特徴的である。

流路1出土遺物

流路1からの出土遺物は直上の層出土遺物も含め、図示したものに限っても1254点を数える膨大なもので、それらを一括して記載することは難しい。したがって先に示した便宜的な流路の区分にしたがって、分割して記載することとした。また流路1の区間的な特徴や遺物の出土状況についても、適宜補足する。

流路1－1域出土遺物（図105～図114）

流路1－1域は03-5-7トレンチ、06-2-4トレンチの範囲で検出した部分で、おおむね検出長30mを測る。流路1の検出部分では最も規模が小さい上流側ということになる。図版36下段に出土状況の写真を示したが、底付近に大型の木材などとともに土器類が散在する状況が見てとれた。相対的に遺物の出土量は少ないといえる。図化した遺物については土器類、木製品類、石器、ガラス製小玉を掲出したが、写真のみ掲載したものとして滑石製臼4点（図版264～2117～2120）、樹種同定のみ行った木材6点がある。木材の樹種については別掲（表1）。また動物遺存体7点が出土している（一覧表参照）。

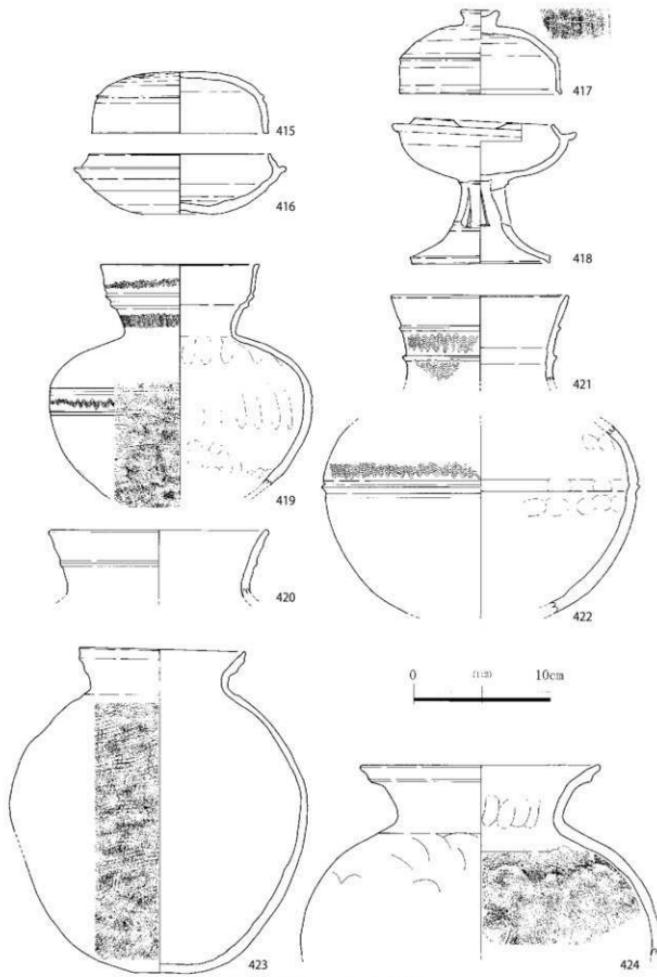
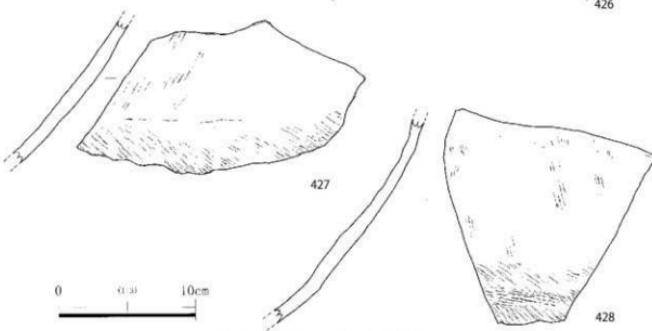
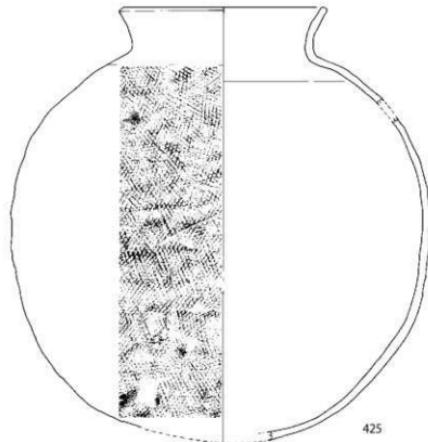


図105 流路1-1域 出土遺物1



0 10cm

図106 流路1-1域 出土遺物 2

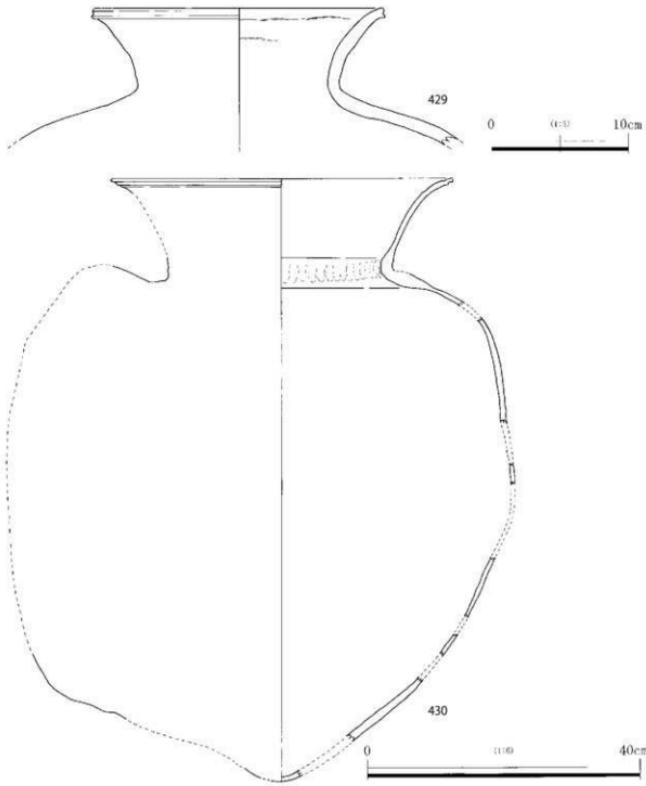


図107 流路1-1域 出土遺物3

図105～107には須恵器を示す。415は須恵器坏蓋、416は坏身、417はヘラ記号のみられる高坏蓋であるが、416は流路出土遺物の中では相対的に新しい時期に帰属する。418の須恵器有蓋高坏は口縁の一部を欠くものの、遺存状態のよい個体であり、土釜状の坏部にラッパ上に広がる脚をもつ。坏部と脚部の接合部分に1条、脚の中位に2条の突带を配し、その間に三角形透かしを3方向に配置する。坏部はともかく脚部に伽耶地域の土器の形態を強く残すもので、流路1出土遺物の中でも最古相を呈するものである。419～425は壺類で、421と422は同一個体の可能性が高い。423は外面上に格子タタキをのこすもので、土師器的な口縁の形態からみても韓式系土器を須恵器窯において焼成したものと考えられる。424は内面

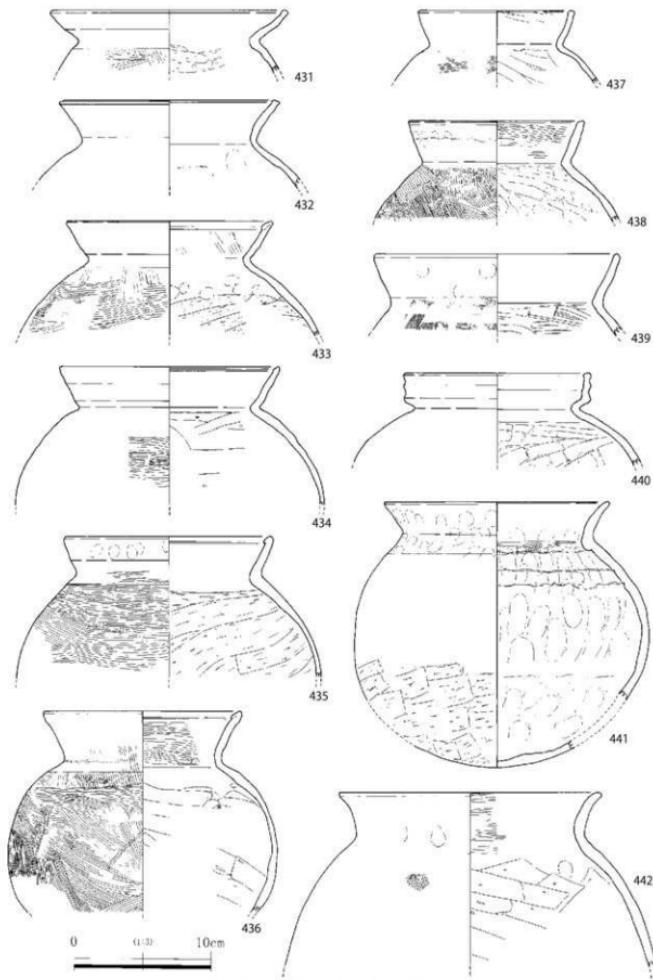


図108 流路1-1域 出土遺物4

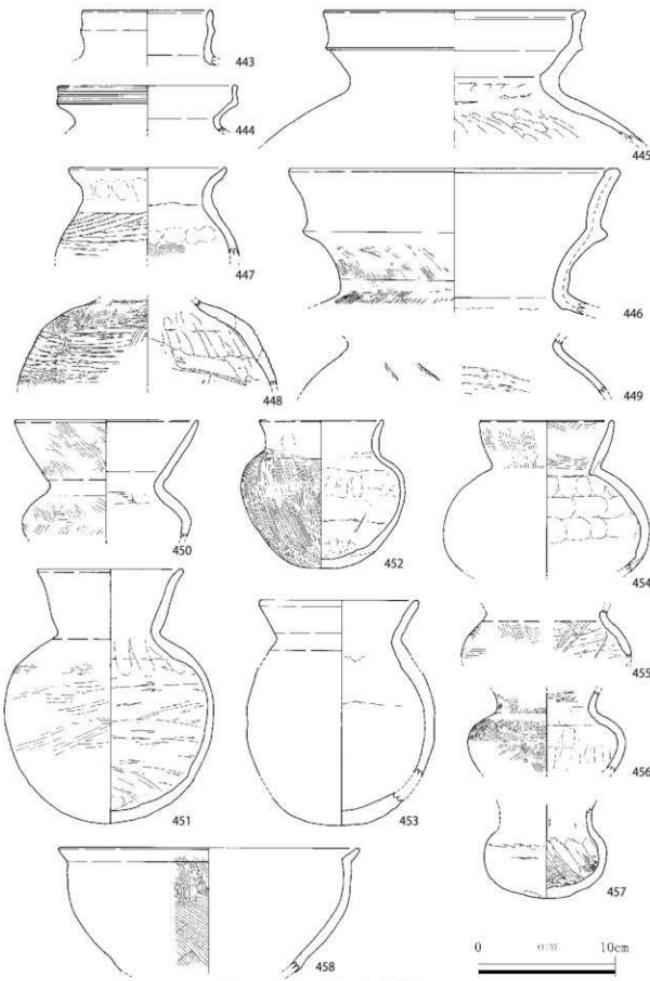


図109 流路1-1域 出土遺物5

に無紋当て具の痕跡を良く残している。425は球形の体部外面に格子タタキを施すもので、陶質土器に近い形態を残す須恵器であろう。426～430は壺で、426～428は同一個体である。体部外面には平行タタキの後、スリケシを施している。褐灰～浅黄色を呈し、焼成はあまり。430は復元口径50cm、復元高90cmを測る大壺で、大きく開く口縁端部には面をもち、直下に突帯を1条配する。体部は焼けひずみの大きいもので、外側の最終調整にスリケシを施すが、部分的に格子タタキの痕跡が認められる。体部は薄く、焼成は堅致である。底付近の外側には焼き台に使用されたと考えられる別固体の体部片が溶着する。

図108～110には土器飾を配した。431～442は壺類である。口縁部分の残るものを中心化可能なものを抽出したが、図示し得たものも多くの残存率の低い個体である。口縁部形態では端部内面を肥厚させるもの（431～436）、内窓気味に延びた口縁端部に面をもつもの（437～439）、複合口縁風のもの（440）、外反するもの（441・442）がある。内面調整にはケズリのみられるものが多いが、441は内面をユビオサエで調整し、体部外面下半にケズリ調整を施しており、体部の形態とも特徴的である。442は長胴壺と考えられるが、外側はハケ、内側はケズリ調整を施す。おおむね、布留型壺の特徴を残す個体と、韓式系土器の影響を受けたと考えられる個体が混在するようである。448～457は壺類であるが、器種を分類しがたい個体も含んでいる。中型の個体では口縁形態には多様なものがあり、444、446などは他地域の土器の影響を想起させる。447、448は体部外面に弥生土器第V様式に特徴的な粗いタタキを残す個体である。弥生土器であるのか土師器であるのかも判然としないが、器種についても特定しがたい。449は肩部外面に刺突を巡らすもので、古式土師器に散見される装飾かと考えられる。残存率が極めて低く、復元径も定かではない。450は口縁部の長い小型壺、452は口縁部の短い小型壺である。451は長頭壺につながる器形かと考える。453は全体的に厚ぼったい作りで、外側の調整も粗い。図128～739に示した製塙土器に近いものかもしれない。458は小型の鉢である。459～471は高杯で、坏部の形状が塊形を呈するもの（459～466）、坏部の口縁部と底部の境に稜をもつもの（467～471）に大別できる。細部の形状や外側の調整は多様で、脚部の残らない個体も多いことから、細別区分は難しい。個体としての残存率は低いが、破片としての遺存状況は良好なものが多く、坏部と脚部の接合方法を確認することのできるものも多い。462は脚接合部の坏部外面に刺突の残るものである。

図111～472～483は韓式系土器である。472は中型の壺で、外反する口縁端部には面をもち、体部外面には格子タタキ、内側にはナデを施し、底付近の内面は丁寧なスリケシを施している。473～475は平底鉢であるが、473は逆鉢彫形の形態、厚く僅の小さい底、外側の粗いハケメ調整、ゆるやかに外反する口縁部など、韓式系土器の特徴をそれほど残さない個体である。474は残存率の低い個体であるが、外側の格子タタキ、底付近のケズリ、ハケ、口縁部のナデ調整などの特徴をよく残し、底付近にはいわゆるゲタの痕跡を残す。底部投影は図291に別掲する。476～483は韓式系土器の特徴を残す細片である。476は外側に縦席紋と沈線をナデに置き換えた痕跡の残るもので、体部の渋曲から瓶などの把手付近の部位と考えられる。477は平行タタキに沈線を施す個体、479～483は格子タタキを施すもので、479は外側にコケの付着が認められる。いずれも酸化炎焼成されたものであるが、480や483は非常に硬質に焼成されており、登り窯で焼成された可能性がある。

図111～484はガラス製の小玉で、径4～4.5mm、厚さ2.5mmを測る。色調は薄い青色を呈する。流路内堆積物の土壤洗浄により検出した固体であり、同じ作業で出土したものに、滑石製白玉4点（国版264～2117～2120）がある。2117～2119は外形径が近似値であるが、孔径は2118～2120が2mmで同じである。2117の孔径は1.5mmと、白玉全体の中でも最も小さい数値を示す。485は砂岩製の敲石で、全体に平滑な

表面をもち、側面に平坦面や敲打痕が認められる。重量は336.5 gを測る。

図112～114には木製品を示した。流路1－1域からは用途のわからない材や、自然木などとともに木製品が出土している。製品として認識が可能なもののが特定の出土状況を示すのではなく、他の材などと同じ状況で出土していることから、遺存状態は個体ごとに異なるものの、破損品ないしは余剰の部位などが投棄されたものと考えられる。

486は耳杯である。残存長13.2cm、残存幅6.9cm、残存高4.7cmを測るが、復元すると長さ16cm、幅11cm

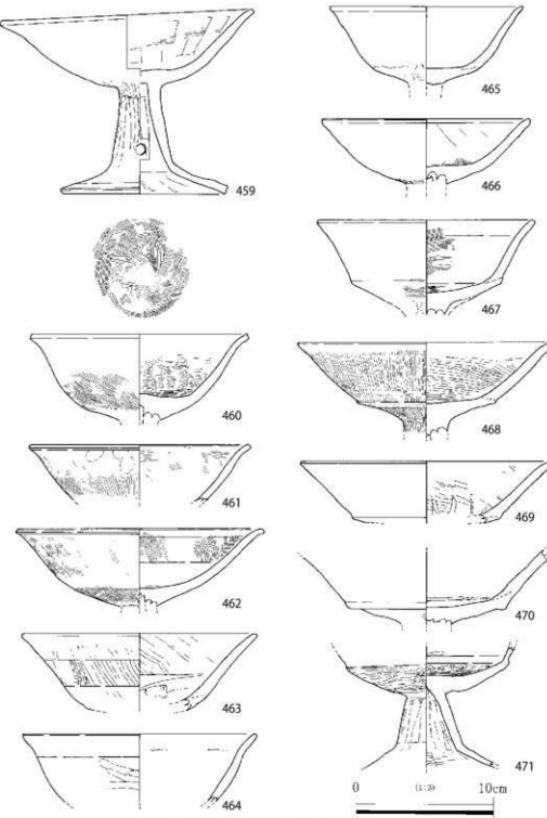


図110 流路1-1域 出土遺物6

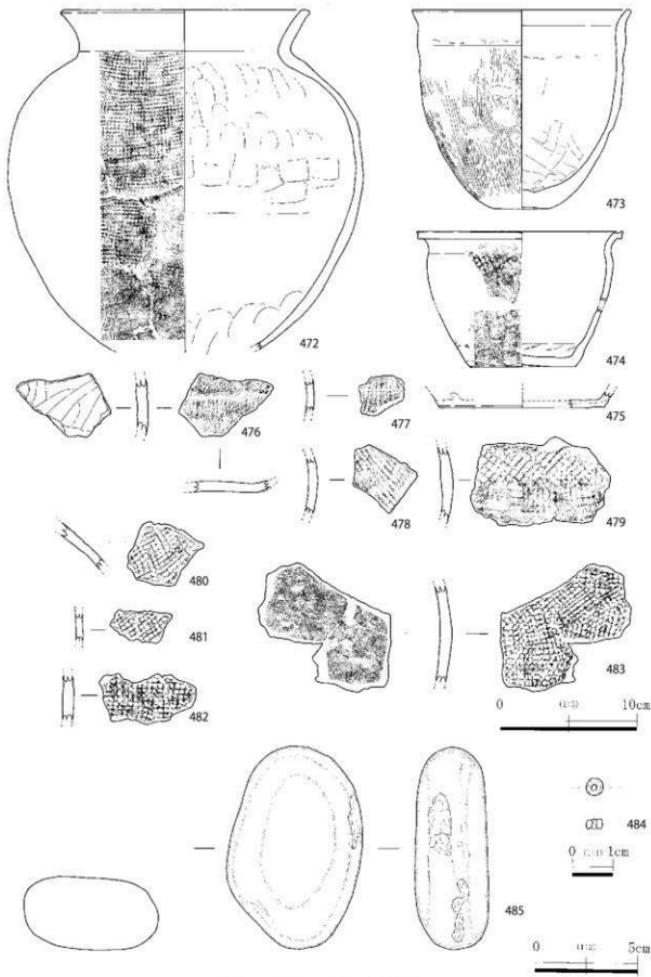
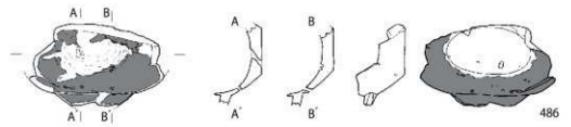
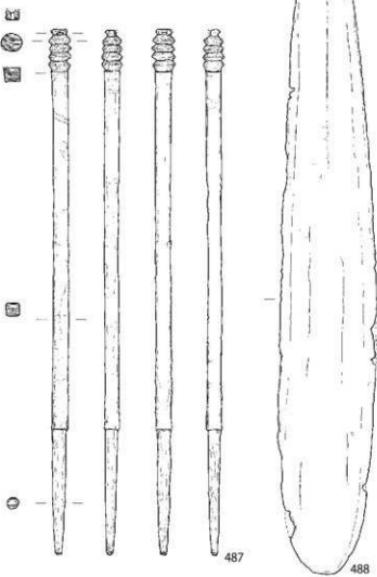
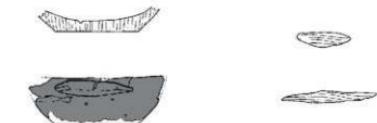


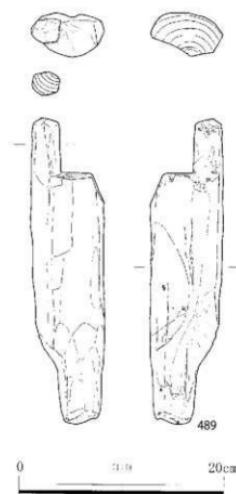
図111 流路1-1域 出土遺物 7



486



488



489



图112 流路1—1域 出土遗物 8

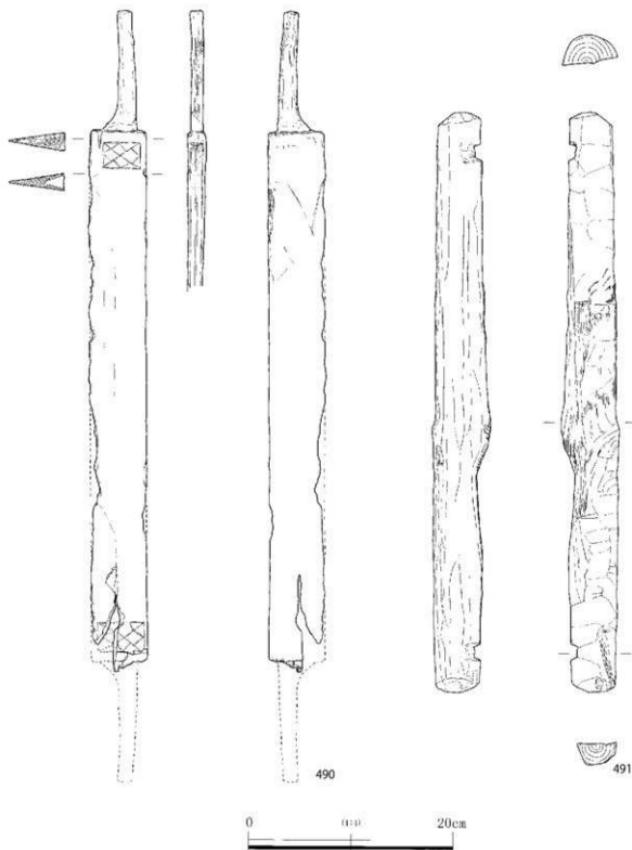


図113 流路1-1域 出土遺物 9

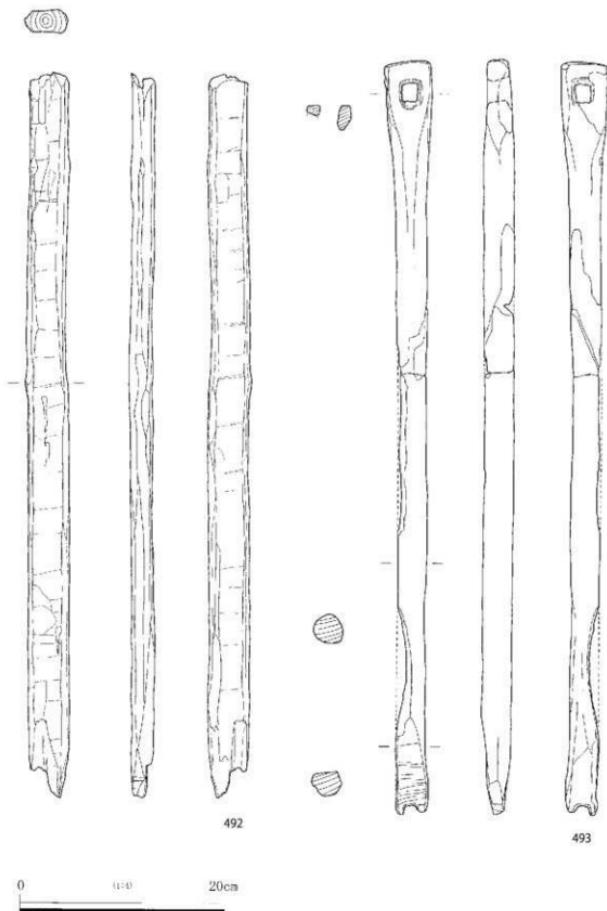


図114 流路1-1域 出土遺物10

程度の法量を有するとおもわれる。欠損する部分が多いが、梢円形の坏部長辺に台形の耳のついた平面形をもち、側面觀は縱横とも逆台形を呈する。サクラ属の一本の例物であり、底は平坦で厚く、全体的に表面は平滑に仕上げられている。数ヶ所に孔が認められるが、植物の侵食などによるものと考えられ、当初からのものではない。底部を除く内外面に黒色塗布物（黒漆？）の残存がみられる箇所があり、本来は黒色を呈するものであったと考えられる。かかる耳杯については類例を知らないが、形態は異にするものの初期須恵器にみられる器形であり、韓国鳳納土城からの出土品などの存在を考慮しても、古墳時代中期段階の百濟地域とかかわりのある容器と推測しておきたい。

487は仮に儀仗と呼称するが、具体的な用途のわからない棒状の木製品である。断面正方形の棒部分を主体にし、一方の端を断面円形に細く削り出して整え、反対側の端には算盤玉形の造形を4段重ね、さらに先端には貫通孔のある頭部を削りだす。法量は方形の棒部分が長さ35cm、厚さ、幅とも1.5cm程度、断面円形の削りだし部分は長さ12cm、先端付近の径0.6cm程度を測る。装飾豊かに加工された部分は長さ4.0cm、算盤玉部分は径2cm程度を測り、全体の長さは51cm強となる。頭部の貫通孔部分に軋擦れとおぼしき痕跡がみとめられ、方形棒状部の端部付近にも細かな傷が確認できる。これらをふまえても具体的な用途は不明であるが、円形棒状に加工した部分を別の部材に差し込むことで、立脚的に用いられた可能性を指摘しておきたい。用材はヒノキである。

488は船の櫂と考えられるもので、残存長63.9cm、最大幅9.4cmを測る。全体に薄く、レンズ状の断面形態をもつが、基部に近い部分ではわずかに棱を作り出している。用材はコナラ属アカガシ亜属で、硬い樹種を用いている。

489も用途不明の木製品で、片方の端部に軸を削りだし、他の部分を平滑に仕上げている。扉などの大型の部材の軸部分を残して再加工されたものかとも考えたが、木取りからはその可能性は低いと考えられる。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

490は機械具の構成材である組合せ式経送具の一部と考えられる部材である（東村2008）。遺存状態もさることながら残存率が低く、全形は復元によらざるを得ないが、復元長75cmの部材で、幅5.5cm、厚さ1.8cmを測る。断面形を三角形に作り出した本体部分の長さは52cmを測り、その背面にやはり断面三角形の溝を掘り、組み合わせ部としている。本体からは両側に断面円形の把手状の突起がのびるが、残存する部分では長さ12cmを測る。本体部の両端付近に方形の紋様枠を配し、その内部は直線を組み合わせた紋様でうめられる。樹種はサカキである。

491は用途不明の材である。半裁した棒状を呈し、表面は非常に円滑に整えられているものの、中央附近に材の節に起因する段差があり、いささか不整形な形状を示す。両端部付近に幅1cm弱、深さ0.5cm程度の切込みを同じ方向に配置する、さらに内側寄りに傷のような痕跡が対称的に認められる。切込み間の距離は約50cm、傷間の距離は約21cmを測り、50cmという数値は490の本体部分の法量に近い。断定はできないが、絹（布）巻具など、紡織に関する部材の可能性を指摘しておきたい。樹種はマキ属である。

492は断面長方形の棒材で、用途は不明である。幅4cm、厚さ2cm、残存長70cm程度を測り、表面には工具による調整痕跡をよく残すが、平滑である。両端を欠損する。樹種はマキ属である。

493は用途不明の棒状の材である。中央部分の断面系はほぼ円形を呈するが、両端部は平坦に加工し、方形の孔を穿つ。一方の端部は欠損するが、残存部から推測し、対称形をもつものと推測する。残存長73.7cmを測り、穿孔部の芯々距離は約70cmとなる。穿孔部は一辺2cm程度の方形であり、別の材との組合せを想起させる。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。なお図206-1615については別記する。

流路1－2域出土遺物（図115～図136）

流路1－2域は03-54トレンチの範囲で検出した部分で、検出長はおおむね40mを測る。先述のように、流路1については一旦、埋没した後の再掘削が認められるが、流路1－4域では平面での検出段階に流路1の重なりが認められた。また、東側から流走する流路2を切る関係にあるが、流路1の再掘削時の肩が流路2を切っており、流路1の当初段階に流路1と流路2が連結していた可能性が高い。遺物の出土状況は、図化したものを図100に示したほか、図版39に写真を掲出した。図、写真による記録は底付近のものが主となるが、堆積物の中位、上位からも遺物の出土を見る。土器類のみならず、木製品、木材、獸骨など錯綜して分布しており、何らかの目的をもった配置は見出せない。また完形に復元できる資料もないことから、破損品などの投棄という状況を想定しておきたい。図化し得た遺物については土器類、木製品類、石器、鉄器を掲出し、石製遺物4点は写真のみ掲載した。さらに動物遺存体16点、樹種同定のみ行った木材23点がある。動物遺存体の同定結果については巻末一覧表に、報告書に掲載していない木材の樹種については第5章第2節、表1に掲載する。なお堆積物の洗浄は行っていないため、微細遺物の有無については不明である。

流路1では2段階に分けられる流路内堆積物を分離して掘削したが、流路1－2域ではそれぞれに一定量の遺物があったことから、土器については分離して図示することとした。図115～119に最終埋没時における堆積物からの出土遺物を、図120～130に当初の埋没時における堆積物からの出土遺物を配した。遺物の量は当初の埋没に伴う堆積層出土のものが多い。

図115～494～505には須恵器を示す。494～497は須恵器壺蓋、498は高壺蓋、499は壺身、500は有蓋高壺、501は無蓋高壺である。494は時期的には6世紀後半のものと考えられ、流路1の最終埋没時期を示す可能性がある。逆に497や498は比較的古相を呈するもので、初期須恵器の範疇に含まれるかと考えられる。502～505は壺類で、504は平底の小さい体部から、複合口縁状に上方へのびる口縁部をもつ。

図115～506～図116～527には土師器の壺類を示す。法量、口縁形状とも多様である。506は大径の口縁部で、頭部内面に強い稜が割りだされる。509は体部内面にヘラケズリを施すが、器壁はそれほど薄くなっていない。512～516は布留型壺の口縁形状をもつものである。512、513、516は端部を折り曲げて内面を肥厚させるが、514は口縁端部上面に面をもたせる形で内面に肥厚させ、515はわずかに内面に肥厚する程度である。517、518は「く」の字に外反する口縁部をもつもので、518は端部を欠くが、517は端部をやや上方へつまみあげるようである。520は小ぶりの体部に比して、大型の口縁部をもつ個体で、頸～肩部分が分厚く、不整合な印象を受ける。524は逆に口縁部が体部に比して小さめであり、ヘラケズリを施しているにもかかわらず、分厚い体部を呈する。胎土の様相も他の土器とは異質である。525は分厚い口縁端部をもつものであり、甕かどうかは判然としない。526は複合口縁をもち、全体に薄いつくりである。527は小型の甕であるが、頸部のくびれはみられず、内外面をハケで調整する。

図117～528～538は土師器壺類を示す。528、529は新しい法量をもつ長頸甕である。口頸部外面には縱方向の細いミガキを施し、体部外面には横方向のミガキを施す。胎土、焼成も類似する。531～538は小型の甕で、口縁と体部のバランスは多様である。531は体部上半の内面にヘラケズリを施す点で、特徴的である。537、538は厚い体部を呈するもので、手づくねに近いものかもしれない。特に538は指頭の圧痕を多くのこし、底はやや突出気味の平底を呈する。539は小型の長頸甕で、薄い仕上がりであるが、焼成後穿孔が認められる。540、541は小型の鉢である。542は復元径から極小型の甕かと考えられるが、口縁部の形態は541に類似する。

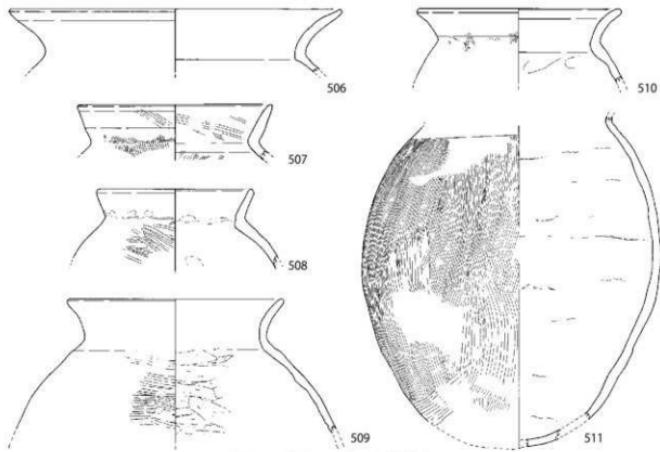
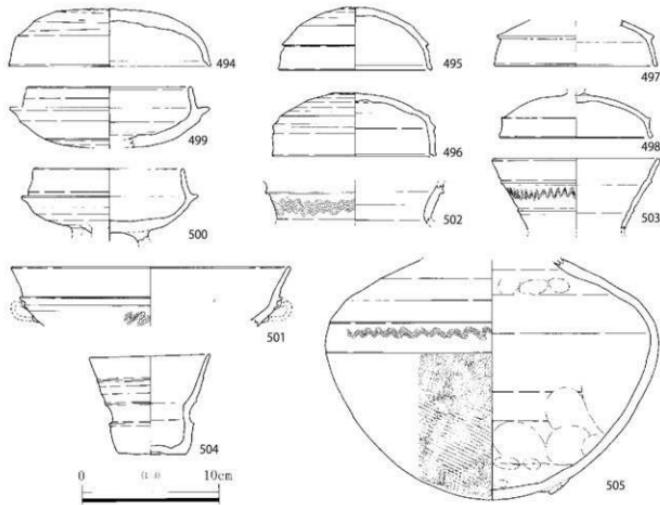


図115 流路1-2域 出土遺物1

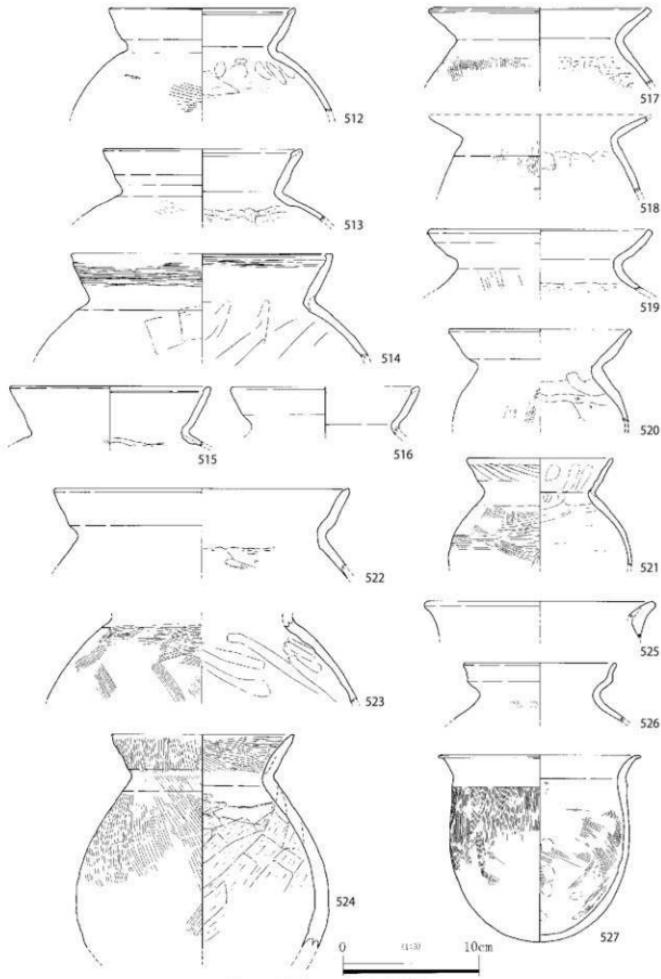


图116 流路1—2段 出土遗物2

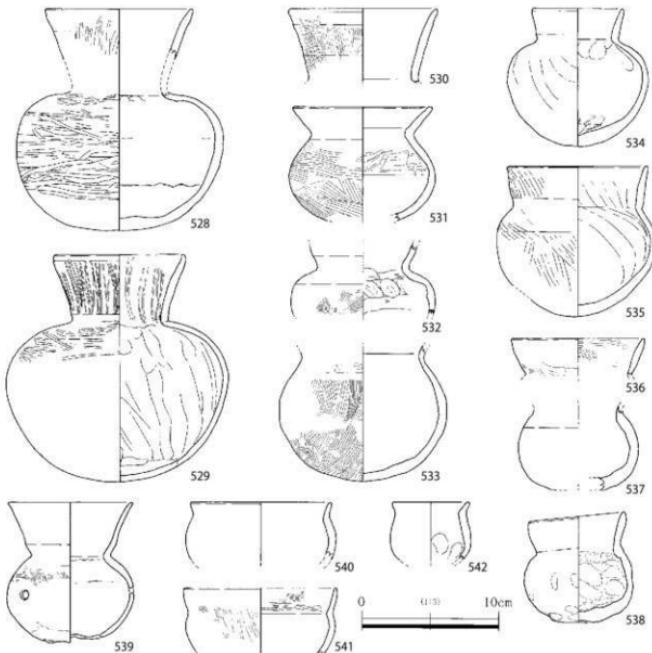


図117 流路1-2域 出土遺物3

図118～543～図119～573には高坏を示す。坏部から脚部までの形を知ることができる例は稀であり、残存率は低いが、残された部位の遺存状態は良い。坏部については546～548が壇形のものと考えられるが、ほかは底部と口縁部の境に稜をもち、比較的屈曲のきついものが多い。口径と坏部高さの比率は多様である。555、556は明瞭な接合箇所はないが、おそらくは同一個体と考えられる。外傾する口縁端部面に沈線を1条巡らし、厚い体部をもつ。脚部との接合部は径が大きく、脚部の剥離部分には沈線が認められる（図版120）。脚部は短く、坏部との剥離面にはやはり圓線を巡らす（図版123）。流路1～2域の当初に埋没した堆積物に含まれる、図127～704、705ともども特徴的な器形を示す。脚部の形態も多様である。ゆるやかに広がる558は接合部に近い中空部分に、脚側から粘土を充填し、中実化をはたしている。561も接合部は中実のつくりであるが、同様に脚側からの粘土充填の可能性がある。外面にカキメのような調整痕跡を残す。565は脚柱部と脚端部の接合痕跡の調整が不十分で、内面に脚端部が大きく突出する。569は中実の接合部をみせるが、中央に穿孔があり、坏部に刺突痕跡の残る例と関連する痕跡であると考えられる。総じて透かしの確認できる例は少ないが、571では一ヶ所に円形のものが認められる。

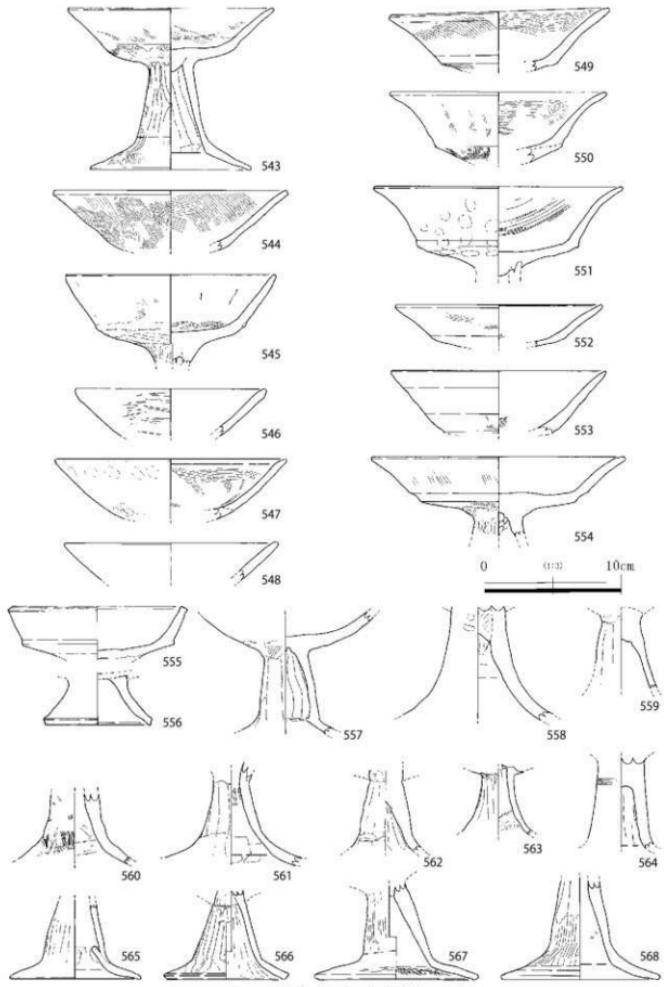


图118 流路1—2线 出土遗物 4

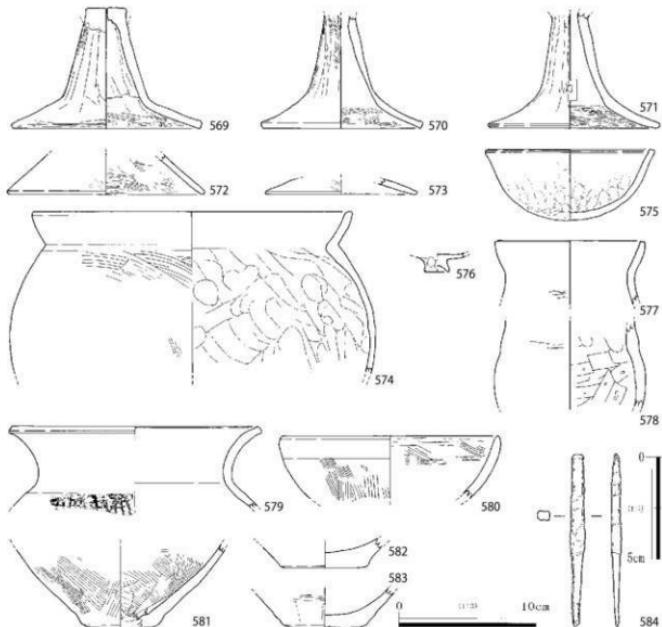


図119 流路1-2域 出土遺物5

脚柱部の内面調整にも各種認められるが、シボリ痕跡を残すものもあれば、ケズリ、あるいは工具によるナデを施したもののが認められる。

図119-574は大型の壺あるいは鍋、575～578は製塩土器と考えられる。576は小型の脚台のみが残る例、575は小型の塊形を呈するもので、口縁端部に丁寧な造形をみせる。図47に示した土器集中1出土例との類似から製塩土器である可能性を想定するが、一部に橙色の変色が認められる。577、578は壺形の製塩土器で、粗雑な形態、調整を残す。やはり外間に橙色の変色が認められ、製塩行為による変色かと推測する。579は韓式系土器の長胴壺で、外反し、端部に面をもつ口縁部から肩付近の部位が残存する。体部外面上には格子タタキを残す。580は土師器の壺、あるいは高坏の坏部で、口縁端部を丸く收める。581～583は平底の底で、弥生土器かともわれるが、583は輪台状を呈する。

図119-584は鉄鍊で、長頭鍊に分類されるかともわれるが、いわゆる方頭を呈し、鍊身部の側面は直線で先端に横一文字の刃部をもつ。長さ8.4cm、幅0.7cm、厚さ0.5cmを測り、計測時の重量は6.2gであった。流路1-4域において出土した鉄製品と比較するとやや、全体に銹化がみられるが、それでも遺存状態は良好といえる。

図120～130に当初の埋没における堆積物からの出土遺物を配した。図120～585～587は須恵器である。585は有蓋高壺の壺部で、図105～418に類似する形態をもつ。外面調整は残存部分までヨコナデで、ケズリの痕跡は確認できない。底近くに透かしを施す際の傷が残る。586は中型の壺で、体部中位と頸部に突帯一条を巡らす。それぞれ突帯の上位に波状紋を施している。587は大型の壺で、球形の体部に直立する口縁部をもつ。口縁部にゆるやかな突帯を2条巡らし、頸部ならびに突帯と頸部間に、米粒状の痕跡を連接する波状紋を施す。体部の外面には平行タキを施す。

図11、図122に土師器壺類を示した。全体的に残存率は低いが、残された部位については遺存状態の良好なものがある。口縁部分の残るものと主体に固化し得たものを掲出した。

図121～588～601は古式土師器の特徴をもつものである。590は外反する口縁端部を上方に丸く肥厚させるもので、庄内型壺の影響を残すものと考えられる。これ以外は布留型壺の特徴を見せる。口縁形態は多様で、内湾気味にのびるものが多いが、端部については内面に丸く肥厚させるもの、内傾する面をもつもの、端部に水平な面、あるいは外傾する面をもつものなどがある。頸部の形状では外面をナデにより丸く成形するものと、やや尖り気味に成形するものがあり、内面には強い棱を残すものと、やや幅をもった面を形成するものがある。体部の外面調整はハケメを残すものがほとんどで、肩～頸部付近より上位をナデにより整える。体部内面にはケズリの痕跡を残すものが主体であるが、頸部付近に達するもの、あるいは頸部との間にやや幅を残して納めるものがある。ケズリの効果とも関連するとおもわれるが、598、599などは器壁は厚い。

図122～602～604は外反する口縁の端部を尖り気味に丸く収めるものである。605は分厚く肩の張った肩部にやはり分厚い口縁部をもつものである。606は複合口縁をもつもので、肩の張った体部をもち、頭

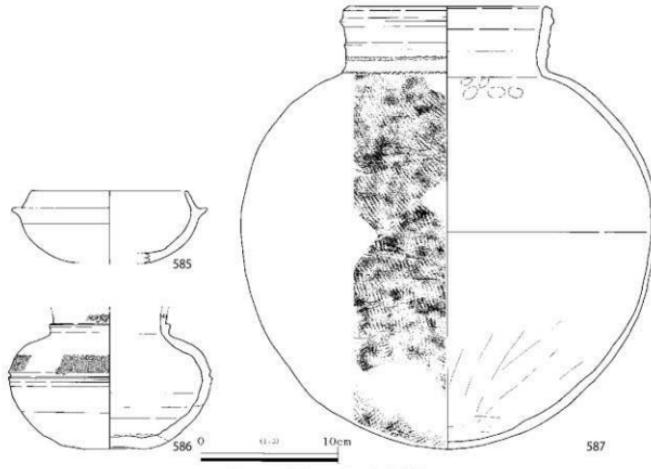


図120 流路1-2域 出土遺物6

部の内外面を丸く成形する。体部内面にはハラケズリを施すが、肩部の内面は縱方向のユビオサエが顯著に認められる。607は外反する口縁端部の外面に面をもつもので、頸部内面には強い後を示す。608は頸部内面に接合痕を残すが、体部内面のケズリは体部下半に留めている。609は頸部内面を丸く、外面を段上に成形するもので、比較的上位にまで、体部内面のケズリを施す。611は複合口縁をもつもので、口縁部上位は短く直立する。614は口縁端部を上方へつまり上げ、外面に面をもつもので、体部外面にはハケ、内面は押圧による成形、調整を施す。617は肩部に穿孔があるが、孔の周囲にハケなどの工具痕跡が残り、焼成前に施されたものと考えられる。

図123、124は土師器壺、鉢類を配した。甕同様、残存率の低い個体が多く、完形のものはないが、小型のものでは比較的全容を知ることができる。

図123～621はラッパ状に広がる口縁部をもつ甕と考えられる。頸から肩部にタタキの痕跡を残すが、縱方向にナデ消している。内面下位にはケズリの痕跡が残り、外面にススの付着も認められ、煮沸に用いられたものと考えられる。622は体部に比して小さい口縁部をもつもので、621同様、撫肩の体部をもつ。体部内面にはケズリを施すが、上位には粘土紐の接合痕跡をそのままに残す。624、625は複合口縁をもつ、比較的大型のものであるが、624は外面に段差を残す程度のものである。630、631は小型の鉢である。636、637は卵形の体部をもつ小型の壺で、体部外面には縱方向のハケ、内面は板状工具によるナデが施される。

図124～639は形態の上では土師器の長頸甕であるが、須恵器として焼成されたものである。全体をナデ調整により仕上げるが、肩部には別個体の調整痕が転写された可能性のある痕跡や、体部下半にはナデ調整の静止痕跡などがあり、全体的にいびつである。また焼台の融着痕跡も残る。640は639と同じ形態をもつ土師器の長頸甕である。641は体部がやや扁平であり、底も平底を呈する。642～641も同様の小型甕であろう。645、647は体部外面の下半にケズリを施すもので、頸部を比較的強いナデにより成形、調整し、体部内面には粘土紐の接合痕を残しながら、ナデにより調整する。648～665は小型甕である。体部より口縁部が大きく広がる656は比較的古相を呈するものと考えるが、全体的に多様な形態、調整技法により仕上げられている。655は底付近の体部内面に明瞭な粘土紐接合痕を残すとともに、底部にはシボリメガが残され、成形技法の一端を知ることができる。また665は小型甕の形態をもつが、残存する肩部にわずかながら焼成前に施された円孔の痕跡を認めることができ、須恵器における肩に近い形態をもつものと考えられる。残存部位からの復元ではやや上向きの円孔である。

図125～128には土師器高杯、鉢、製塩土器などを配する。

図125～666～図126～693には、口縁部と底部の境が明瞭であるものを示す。比較的高杯の出土量が多い流路1～2域においても、完形のものがないことはもとより、坏部から脚部までの様相がわかる資料も限られている。坏部形態の類型化により同じ類型に属するものにおいても、さらに法量による細分も可能なようであり、おおむね口径が20cmを超える大型のもの、15～17cm程度を主体とする中型のもの、10～12cm程度の小型のものに分けられるようである。ただし口径と坏部高の比は必ずしも同じではない。坏部と脚部の接合方法には上方から粘土を充填したもの（675、678など）、坏部外面に中空の脚を貼り付けたもの（666など）、中央の脚を貼り付けたもの（668、669など）などがあり、接合後に脚内部側から刺突を施すもの（672、677、682など）もみとめられる。外面の調整はハケあるいはナデ調整が主体を占めるが、ミガキを施すものもあり、隙間なく緻密に施すものや、放射線状に施すものがある。

図127～694～697は口縁部と底部の境が不明瞭で、口縁部がまっすぐのびるものを示す。やはり完形の

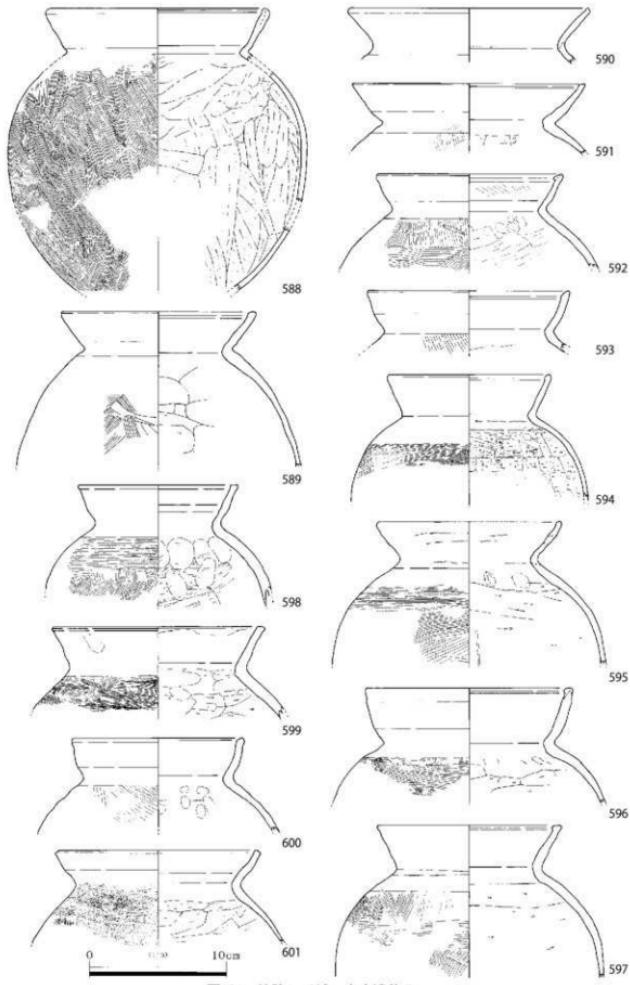


図121 流路1-2域 出土遺物7

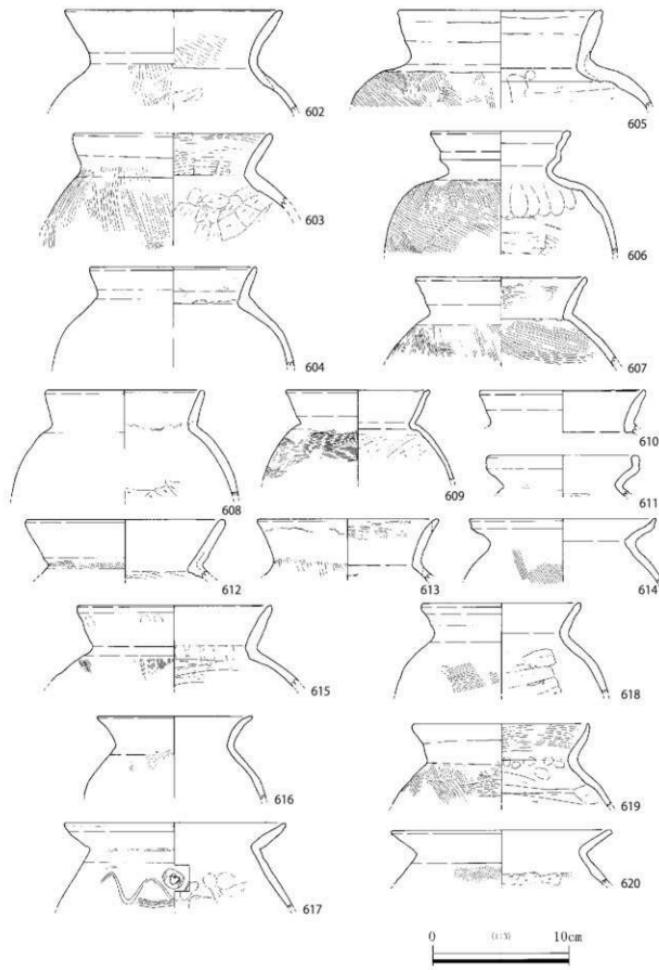


図122 流路1-2域 出土遺物 8

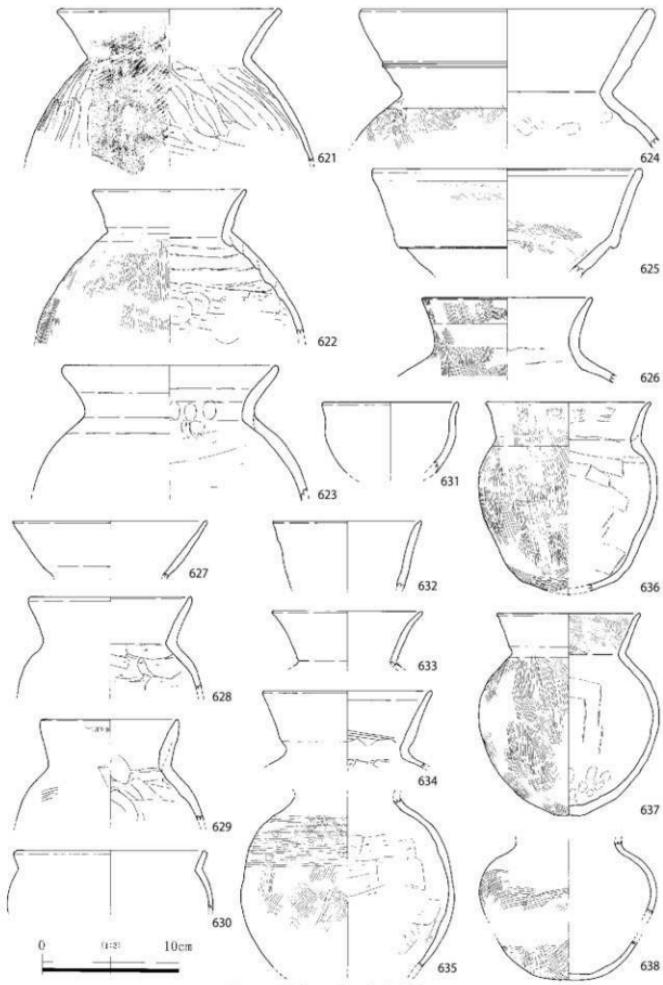


圖123 流路1-2域 出土遺物 9

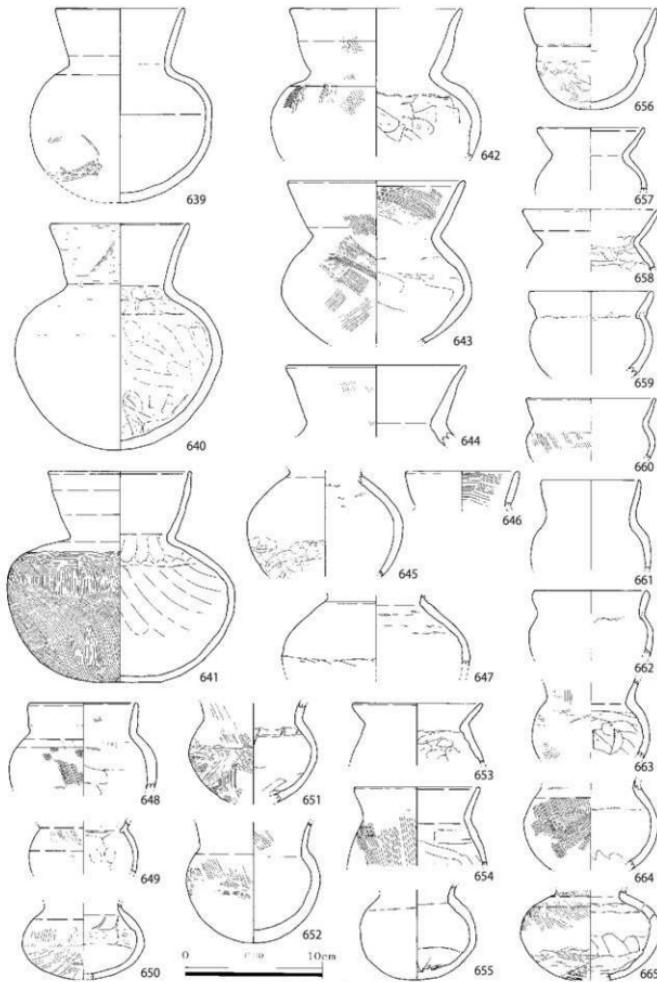


図124 流路1-2域 出土遺物10

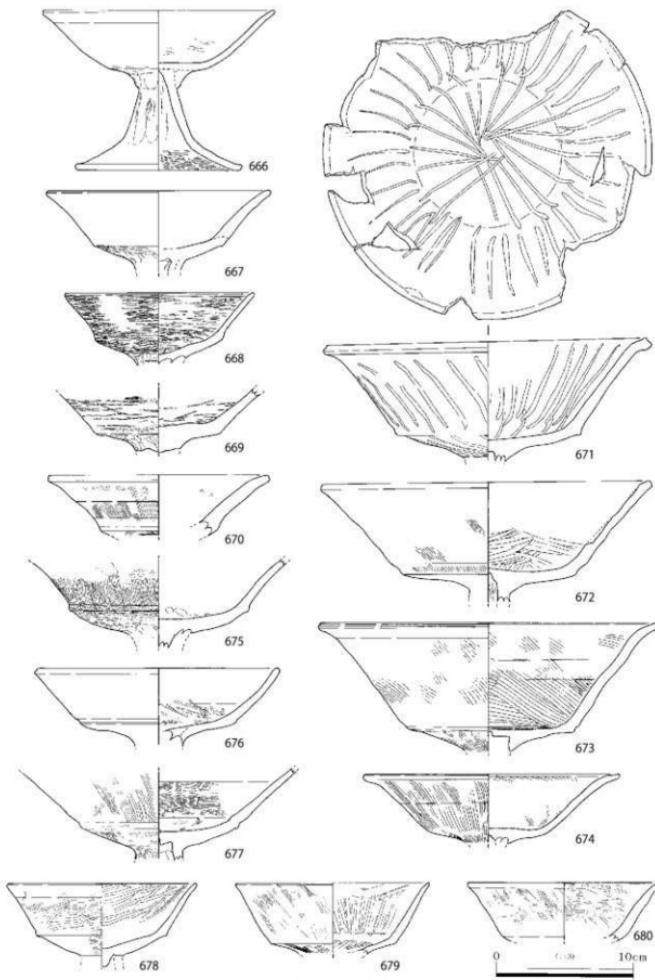


図125 流路1-2域 出土遺物11

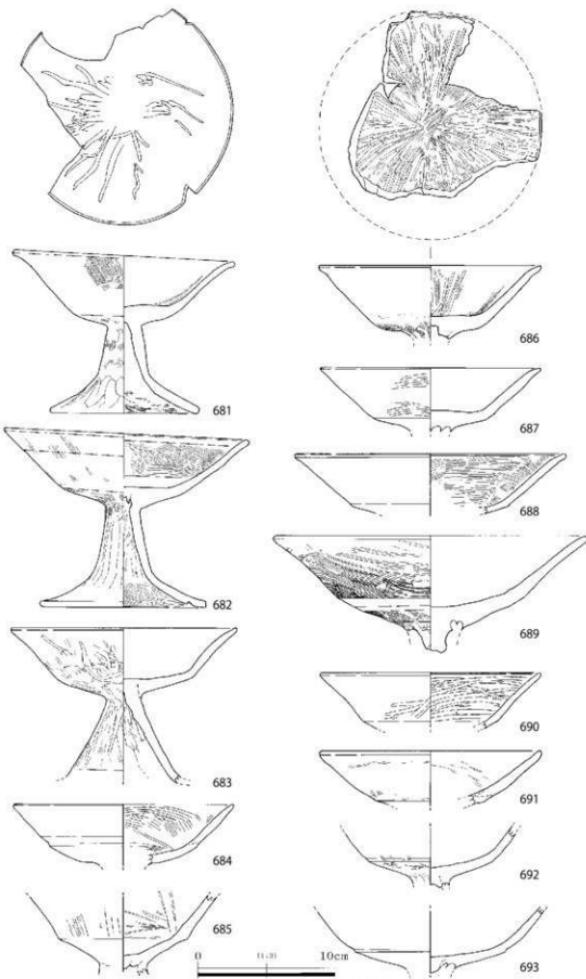


図126 流路1-2域 出土遺物12

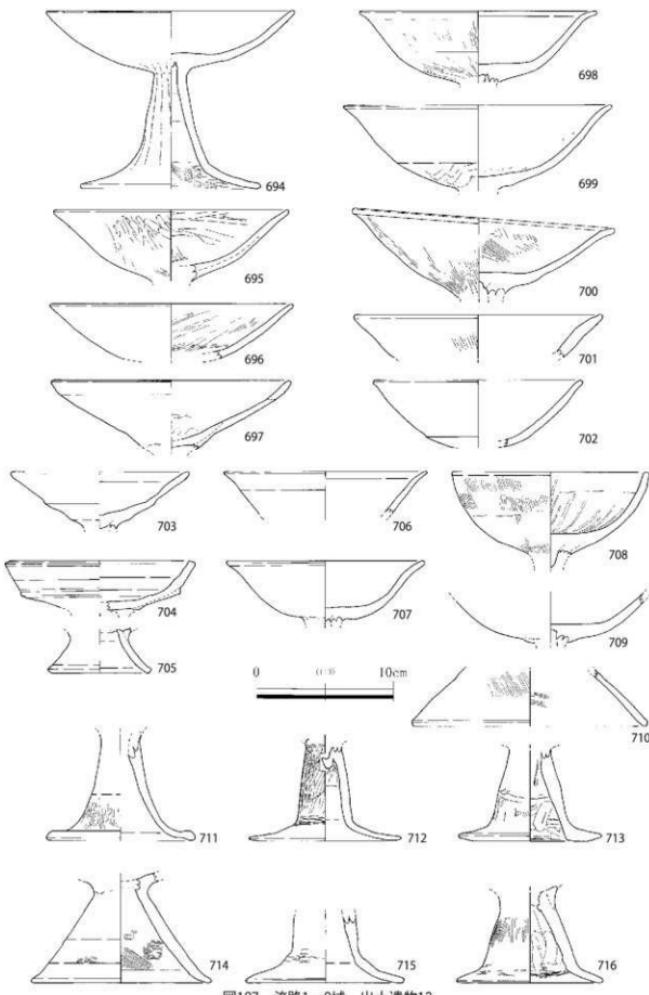


圖127 流路1—2域 出土遺物13

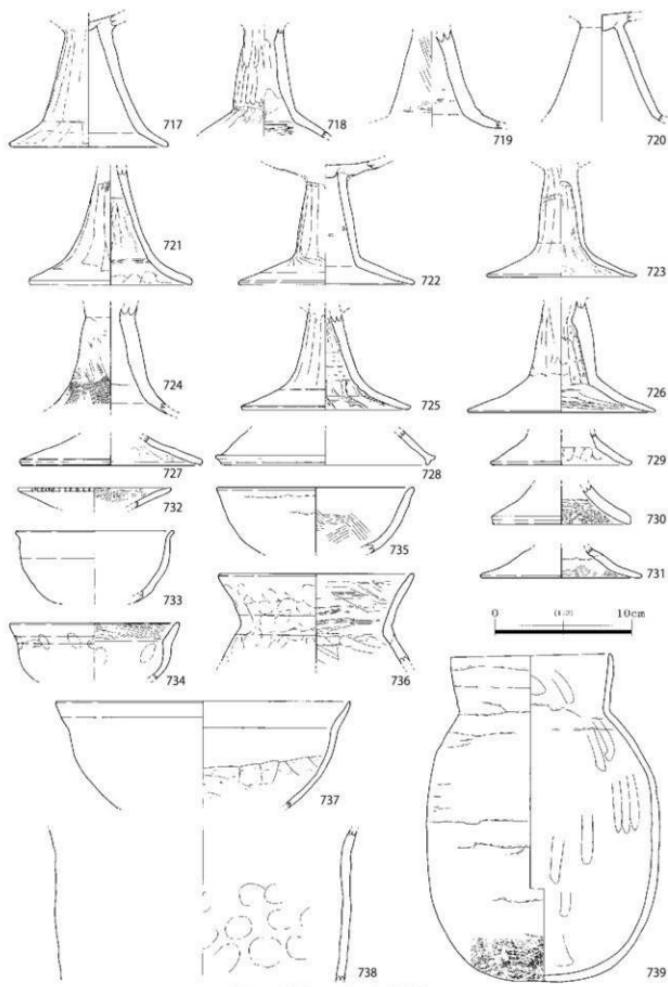


図128 流路1-2域 出土遺物14

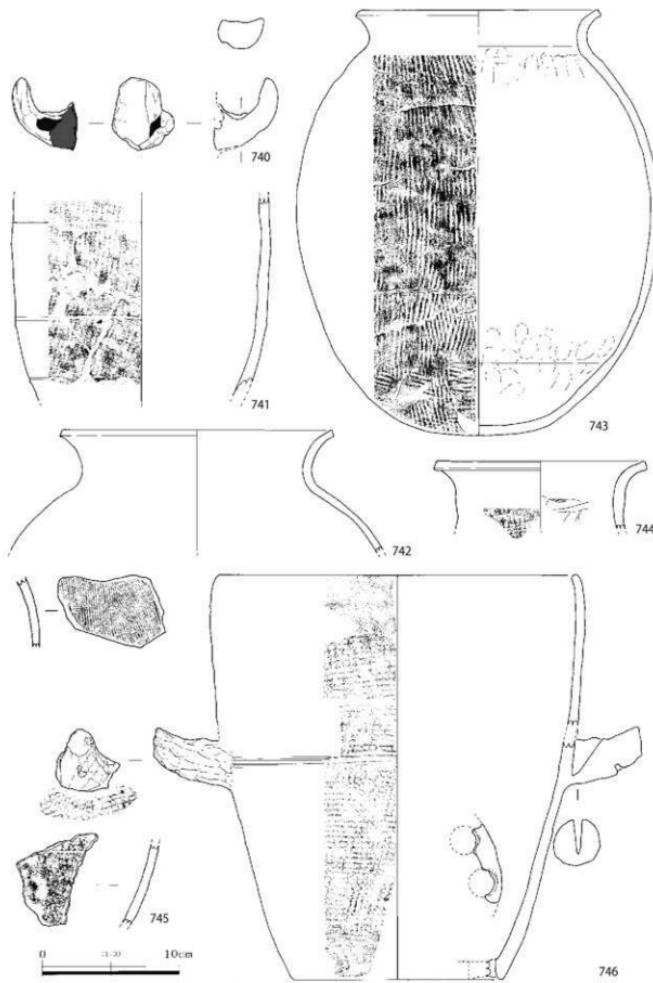


图129 流路1—2段 出土遗物15

ものはない。法量的には中型のものが多い。

697~702、706、707には口縁部と底部の境界が不明瞭で、口縁部が外反するものを示す。中型~小型のものがみられる。

703は坏部外面に段をもつものであるが、段は内面における口縁部と底部の境に対応しており、明瞭な境をもつものといえる。

704、705は同一個体の可能性の高いものである。704坏部の底と口縁部の境は明瞭に屈曲し、短い口縁端部には面をもち、沈線を巡らす。短い脚との接合部分には圓線を施している。705は短い脚部であり、坏部との接合箇所の外側に貼り付けた補強粘土の痕跡を良く残す。707は塊形の坏部をもつものである。

図127~710~図128~731には土師器高坏の脚部を示した。形態的に類別が可能であるが、主体をなすものは「ハ」字状に広がった後、端部付近で屈曲し、大きく開く中空の脚である。脚の長さには長短があり、短脚のものに釣鐘型の脚柱をもつものがある。ゆるやかに湾曲し、屈曲が明瞭でない711や、接合部からまっすぐ開く714などは少数である。

図128~732は大きく開く口縁端部にキザミを施したもので、小型の器台かと考える。733、734は小型の鉢、735は小型の碗である。736はやや長胴の甕かと思われるが、煮沸に供された痕跡をもつ。にぶい黄橙色を示すが、変色によるものであるかは判別できない。737は銅で、体部内面の下半にはヘラケズリを施す。煤の付着が認められる。738は瓶かと考えられるが、遺存状態が悪く判然としない。特に外面には発泡かとも思われる痕跡をみせる。739は長胴の甕形土器であるが、製塙土器と考えられる。内外面とも非常に粗雑なつくりであり、外面においても粘土紐の接合痕跡も消されない部分が多い。また底付近にタタキの痕跡を残す。色調は白色や橙色を呈し、製塙作業に伴う加熱による変色かと考えられる。

図129~740は土師器把手である。単獨で抽出した。断面形状はやや扁平な部類に属する。741は韓式系土器長胴甕の体部で、口縁、底とも欠損するが、体部外面には格子タタキを施し、間隔のまばらな沈線を巡らす。残存部位は限られているが螺旋状ではないと考えられる。742は須恵器あるいは陶質土器の甕で、外反し、端部に面をもつ口縁部が特徴である。同一個体の体部と考えられる742'外面には純密紋がみられ、内面に当て具痕は残さない。このような口縁形態をもつものは基本的に初期須恵器における器種には含まれていないと考えられることから、陶質土器の可能性が高いと考えておく。743は韓式系土器の長胴甕で、一部を欠損するがほぼ完形に復元することができた。外部外面の調整には平行タタキを施し、螺旋状沈線を巡らす。スス、コゲの付着が著しい資料であり、遺存状態も良好である。744は韓式系土器の平底鉢かと考えられるもので、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。体部外面には格子タタキを施し、内面には当て具痕跡を一部に残す。745は韓式系土器甕の体部で、把手の接合部に近い部位かと考えられる。体部と把手の接合部分の被覆粘土を一部に残し、不鮮明ながら格子タタキと沈線が確認できる。746も韓式系土器の甕で、残存部位が限られているものの、ほぼ全容をしらべることができる。逆裁頭甕彈形の体部に平坦な底をもち、円形の蒸気孔を多数配置するものと考えられる。円柱上の把手には上面から切り込みをいれ、下面には刺突痕を残す。体部外面には格子タタキを残し、把手の位置に雑な沈線

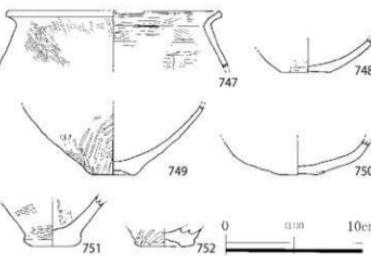
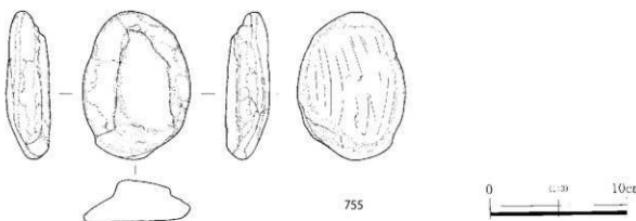
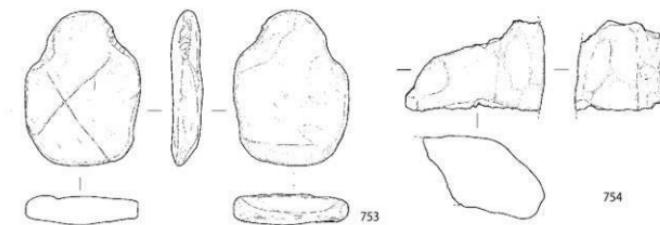


図130 流路1~2域 出土遺物



755

0 1:30 10cm

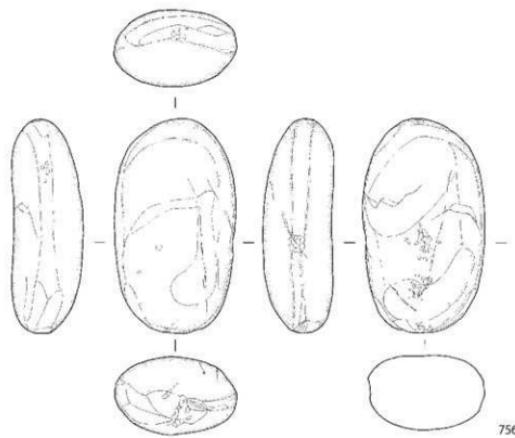


圖131 流路1—2域 出土遺物17

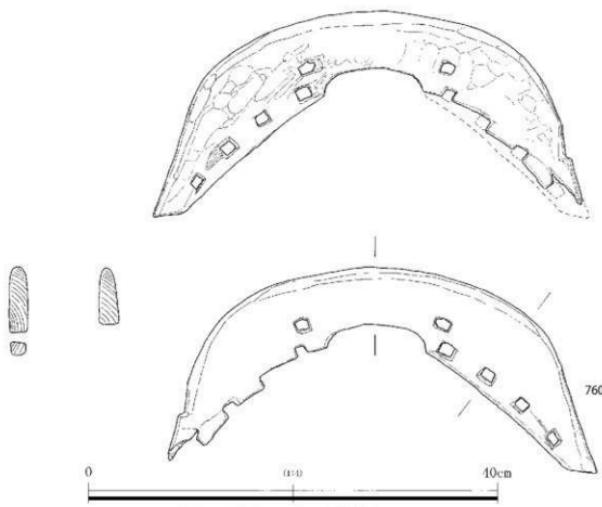
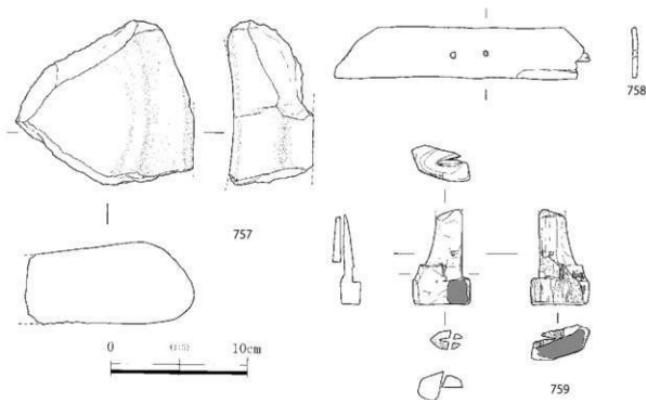
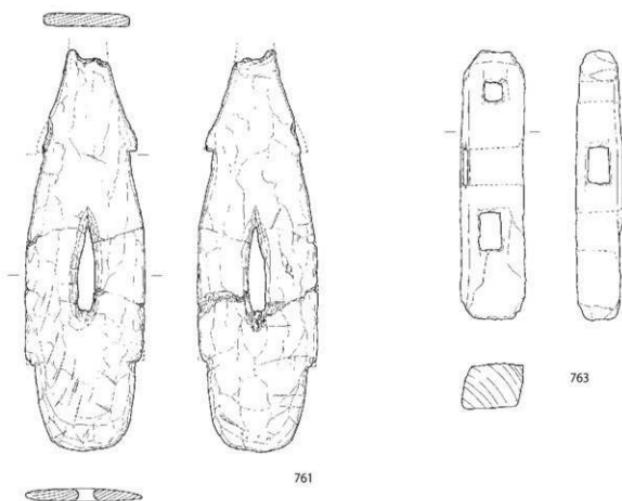
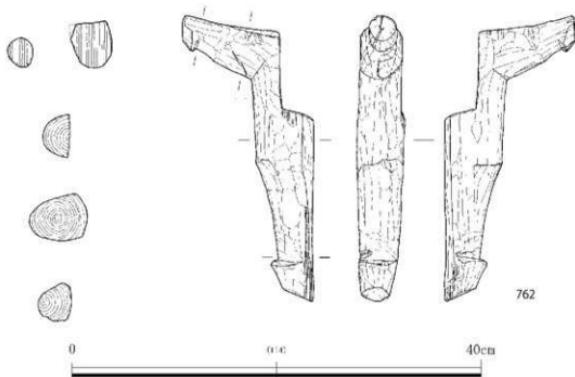


図132 流路1-2域 出土遺物18



761

763



762

圖133 流路1—2域 出土遺物19

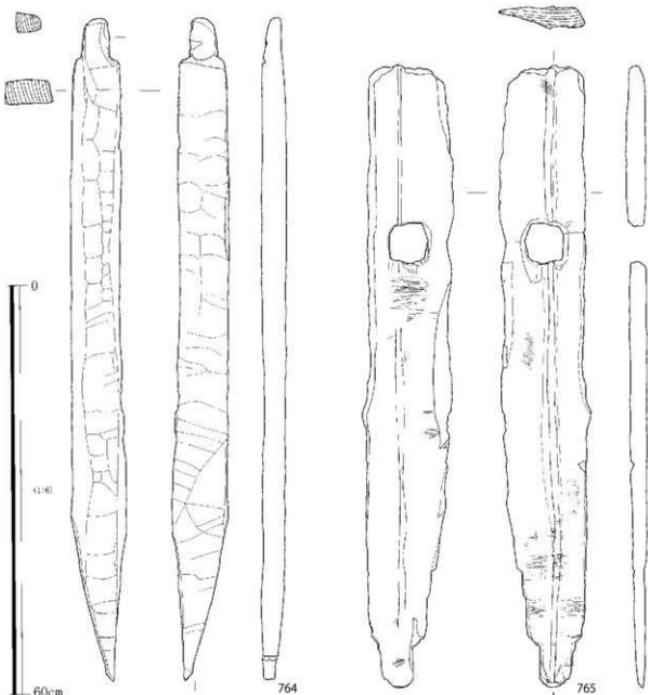


図134 流路1~2域 出土遺物20

を施す。底付近はケズリにより成形した後、ナデにより調整を施している。

図130には弥生土器かと考えられるものを示す。残存率は極めて低い。

図131~図134には石製品、木製品を示す。図131~753は敲石あるいは磨石、754は砥石あるいは台石、755は磨石かと考えるが、先端に黒色物の付着が認められる。756は敲石で側面と前面に敲打痕が認められる。図132~757は砥石と考えられる。石材は754が角閃石岩である以外はすべて砂岩である。

図132~758は薄い板状の材で、中央に2ヶ所の穿孔がある。樹種はヒノキである。759は刀装具のひとつである把頭で、一部に赤色顔料（赤漆？）が残る。樹種はクルミ科である。760は鞍橋で、ウマの背にあたる部分の角度から後輪と考えられる。一部を欠損し、紐を通す穴にバリが残り、使用された痕跡がないことから、穿孔工程中の破損により投棄されたものと推測する。樹種はヒノキである。図133~761はナスビ形彫で、U字形彫先の装着されるものである。中央にスリットが設けられる。樹種はアカガシ

亞属である。762は背負子の部材と考えられる。樹種はヒノキである。763は柱状の材にはぞ穴を穿ったもので、用途は不明である。樹種はモミ属である。図134-764は杭であるが、頭部にはぞ状の加工があり、建築材などの再利用かと考えられる。樹種はモミ属である。765は用途不明の材であるが、戸口装置の一部、けなしの可能性を推測する。樹種はアカガシ亜属である。

図135、図136には流路1-2域の上層に当たる第1-5層、第2a層出土の遺物を配した。直接流路の掘削に伴い出土した遺物ではないが、流路の遺物を含む可能性が高いことから、ここに示すこととした。基本層序としては流路堆積物の直上層は第2a層となるが、第2a層が第1-5層により削平を受けている部分も

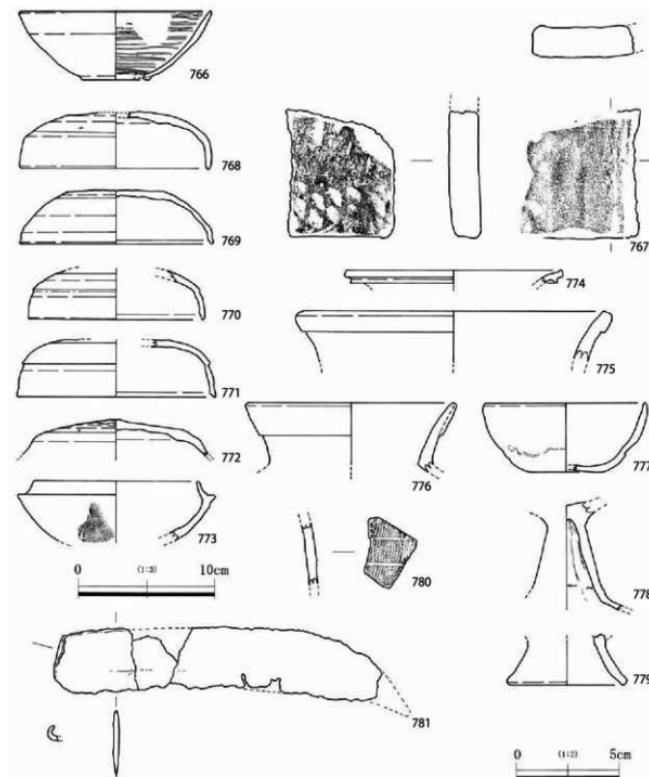


図135 流路1-2域 上層出土遺物1

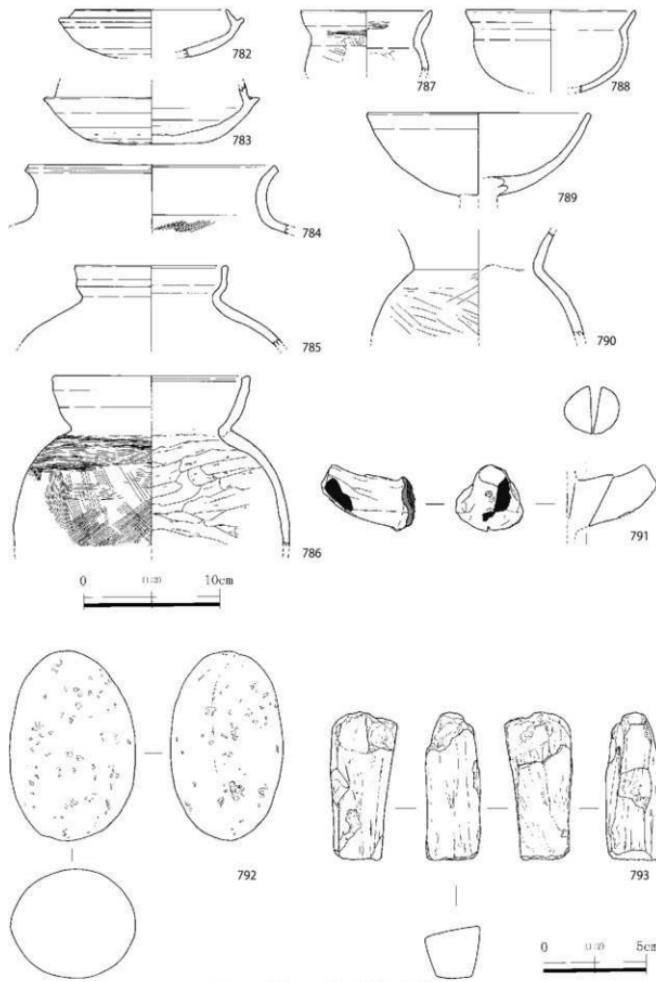


図136 流路1-2域 上層出土遺物 2

あることから、併せて掲出する。図135～766は瓦器椀、767は平瓦であり流路に伴うものではない。768～773は須恵器杯類、774は須恵器壺、775は須恵器甕である。773にはヘラ記号が認められる。776は土師器壺、777は土師器の椀である。778・779は土師器高环の脚で、779は556、705に類似する。780は須恵器あるいは陶質土器の細片で、外面に繩席紋タタキと沈線が認められる。781は鉄製曲刃鎌で、遺存状態は極めて悪いが、基部の上方角を折り曲げている状況を確認できる。

図136は第2a層の遺物を配した。782、783は須恵器杯身、784は須恵器あるいは陶質土器の壺で、742に類似する形態をもつ。785、786は土師器甕、787は小型壺、788は小型鉢、789は高环の杯部である。790は739同様の製塙土器かと考えられ、灰白色を呈する。791は韓式系土器の把手で、上面からの切り込み、下面の刺突が認められる。792は輝石安山岩製の敲石あるいは磨石である。表面は非常に円滑に整えられ、細かい敲打痕が認められる。793は流紋岩製の砥石である。

流路1－3域出土遺物（図137～図146）

流路1－3域は03-5-2トレンチの範囲で検出した部分で、検出長はおおむね55mを測る。ウマの下顎骨が流路底から出土したが、出土状況を図100に示し、図版41に写真を掲出した。遺物の出土量は相対的に少なく、全体的な出土状況も他の区域より散漫な印象があるが、やはり堆積物の中位、上位からも遺物の出土を見る。土器類のみならず、木製品、木材、獸骨など錯綜して分布しており、何らかの目的をもった配置は見いだせない。また完形に復元できる資料もないことから、破損品などの投棄という状況を想定しておきたい。園化し得た遺物については土器類、木製品類、石器、鉄器を掲出したが、ほかに動物遺存体8点、樹種同定のみ行った木材6点がある。動物遺存体の同定結果については巻末一覧表に、報告書に掲載していない木材の樹種については第5章表1に掲載する。なお堆積物の洗浄は行っていないため、微細遺物の有無については不明である。

図137～図138には須恵器を示す。794は須恵器杯、795、796は高环の蓋である。797は有蓋高环かと考えられる。体部外面に波状紋を施す。798、799は縁で、口縁部を欠くが、体部の残存状態は良好である。いずれも頸部が比較的細く、無紋で、ヘラ記号をもつ共通点がある。798は底面に近い底部をもち、器壁は薄い。800は把手鉢である口縁部直下に2条の突帯を巡らし、体部下半にも1条の突帯を巡らす。底部付近は静止ハラケズリを施し、平底である。801、802は壺の頸部、口縁部の細片で、突帯と波状紋が確認できる。803は直口壺で、比較的径の大きい頸部からやや外上方へ口縁部がのび、突帯と波状紋で飾る。804は外へ開く壺口縁、805は比較的肩の張る体部から外反する頸部をもつもので、口縁端部を欠く。突帯を巡らすが、無紋である。806、807は比較的類似する形態の口縁をもつ壺であるが、806は無紋である。808、809は陶質土器かと考える体部片で、別個体と考えるが、外面には同じように繩席紋と沈線が認められる。810は壺で、口縁部にひずみが著しいが、比較的体部の復元がかなつたものである。球形の体部に複合口縁をもつもので、器形は土師器の壺に類似する。底部内面にはユビオサエの痕跡を残し、土師器の成形技法を用いた可能性がある。体部の成形には平行タタキを施すが、ナデ消して調整し、無紋に仕上げている。

図139～図142には土師器を示す。811～825は高环で、环部形態からは椭形の环部をもつもの、口縁部と底部の境に稜をもつものに大きく類別でき、稜をもつものの中ではゆるやかに外反する口縁部をもつものが多いが、817は内湾させた後に口縁端部付近のみ、外反させる。脚部の形態からは、比較的ゆるやかに外反するもの（825）と内面に稜を作る形で明瞭に屈曲し、端部にいたる二者があり、後者が多い。

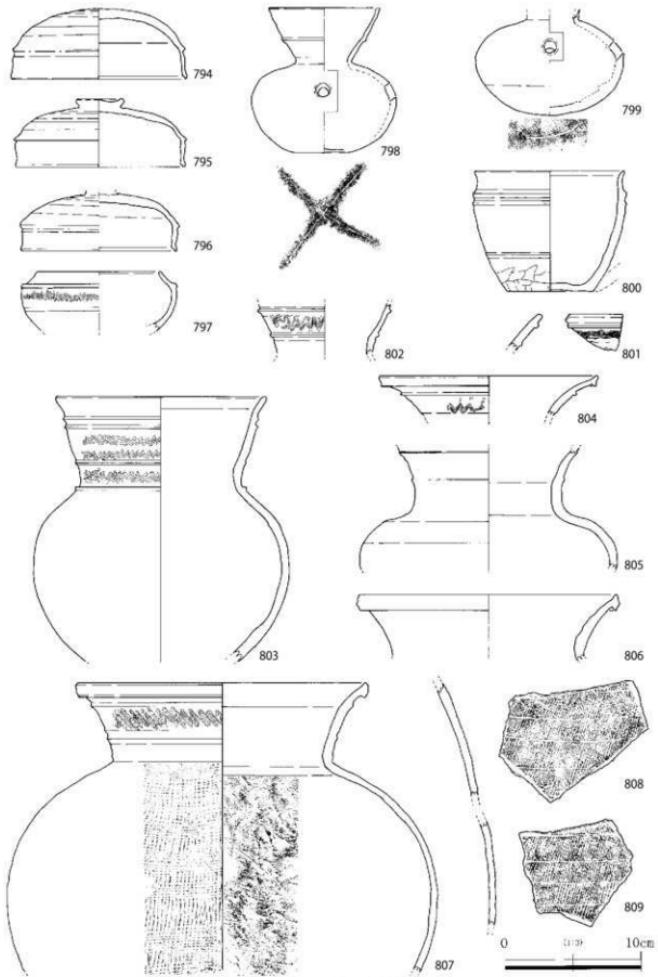


図137 流路1-3域 出土遺物 1

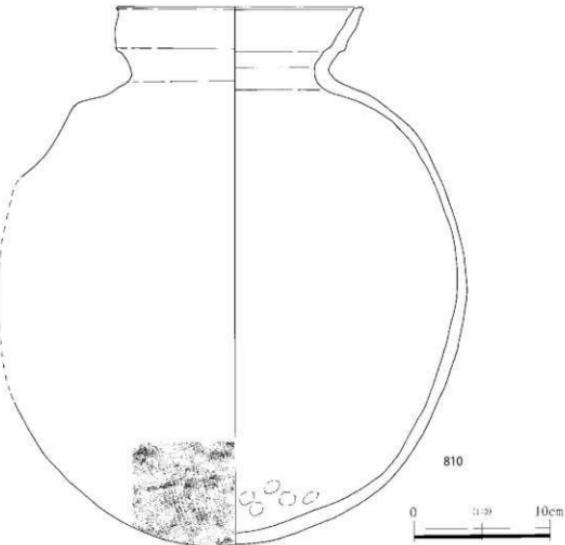


図138 流路1-3域 出土遺物2

図130-826は丸底の製塙土器で、残存率は低いが、外面にタタキが見てとれる。827は把手で、ほぼ円形の断面形状をもつ。

図140-828~836は土師器壺で、小型のものに限られるが、形態は多様である。837は小型の鉢である。838は土師器壺で、口縁部を内側に折り曲げて肥厚させる布留型の特徴をもつが、内面にヘラケズリを行わず、ユビオサエによる成形、調整である。839は撫肩の体部に小ぶりの口縁部をもつ壺で、形態は622に近いが、839は頸部付近にまで内面のヘラケズリが及ぶ。840は径の大きい頸部から短く外反する口縁部をもつ壺である。841、842は壺で、841は内面に放射状のミガキが施される。流路1-4域出土の図147-905~907の壺部も同様の形態をもつが、胎土、色調が赤褐色を呈する特徴的なものである。842は高壺になる可能性がある。

図141-843、844は長胴の壺である。843は端部をゆるく上方へつまむ口縁をもち、体部外面にはハケ調整を、内面にはナデ調整を施すが、内面には粘土紐の接合痕跡を多く残し、調整は雑といえる。844は口縁端部の形態を除くと843に類似する形態をもつが、体部の内面調整は横位のケズリである。845~847は布留型壺の特徴を残す壺で、845は体部内面にケズリを丁寧に施すが、846、847はユビオサエによる成形、調整を行っている。848~850も土師器壺である。

図142-851は大型の壺で、平底風の底部から最大径を上位におく体部に至り、頸部から直線的に聞く口縁部をもつ。外面の調整は基本的にハケを基調とするが、底部付近にはハケの後、ケズリが施される

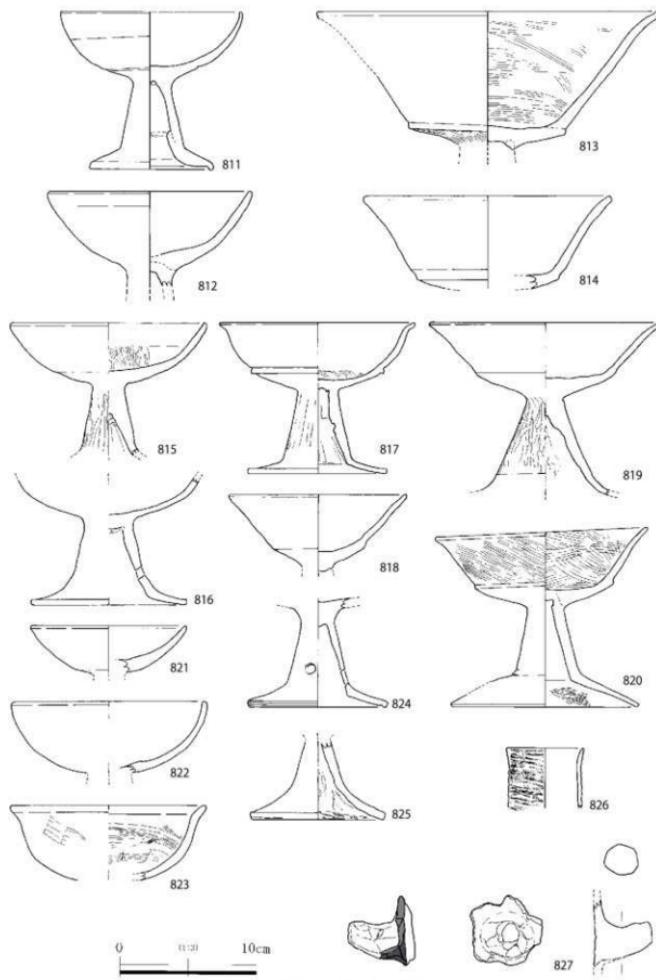


図139 流路1-3域 出土遺物 3

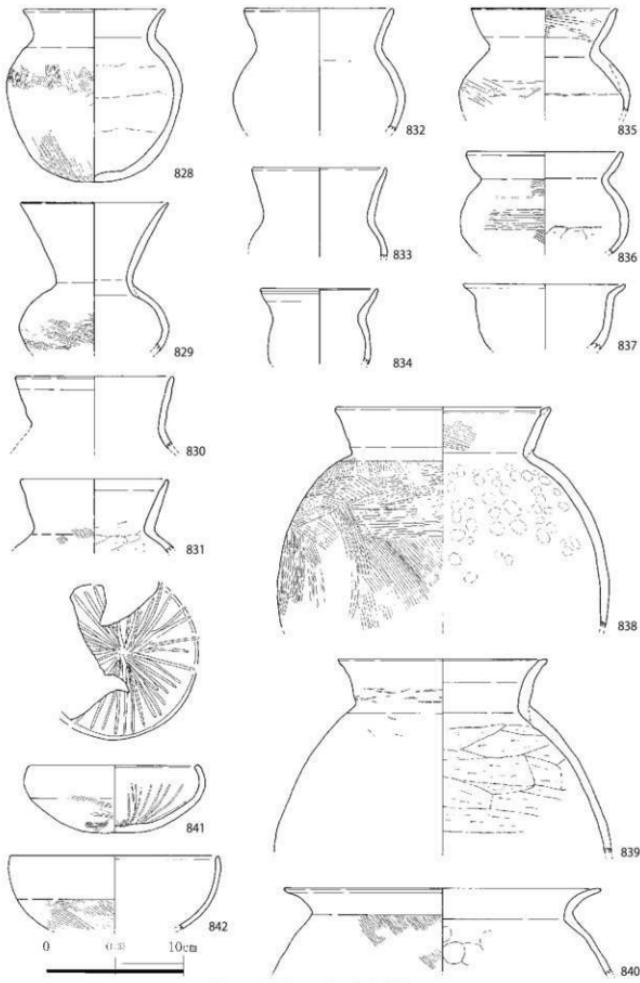


図140 流路1-3域 出土遺物4



図141 流路1-3域 出土遺物5

箇所があり、底部については明瞭な調整痕跡を残さない。内面調整はハケである。大型の個体ではあるが、外面にススの付着がみとめられ、煮沸に供されたものと考えられる。

図143には韓式系土器を配した。852~854は把手で、852は上面の切込み、853はタタキと沈線の残る体部、854は先端下面の刺突によりそれと判断した。855~861は平底鉢である。855は小型のものでハケ調整である。口縁部の残る856、858は格子タタキ、857は縦席紋タタキをそれぞれ体部外面に施している。底の残る859、861はナテ調整であるが、860は格子タタキが残される。859の底外面にはゲタ痕跡を残すが、拓影を図291に掲出した。862~864は韓式系土器の蓋で、863は長胴の体部をもつものと推測する。862、864は平行タタキ、863は格子タタキをそれぞれ体部外面に残す。865は円筒形の体部をもつ蓋もしくは蓋で、残存率は低く、口縁部、底部については不明である。体部成形、調整は外面に格子タタキを施した後、沈線を巡らし、内面は最終的に板状工具によるナデで調整するが、同心円圧痕を残す。形態からの機能推定は難しいが、外面にススが付着することから煮沸に供された可能性がある。

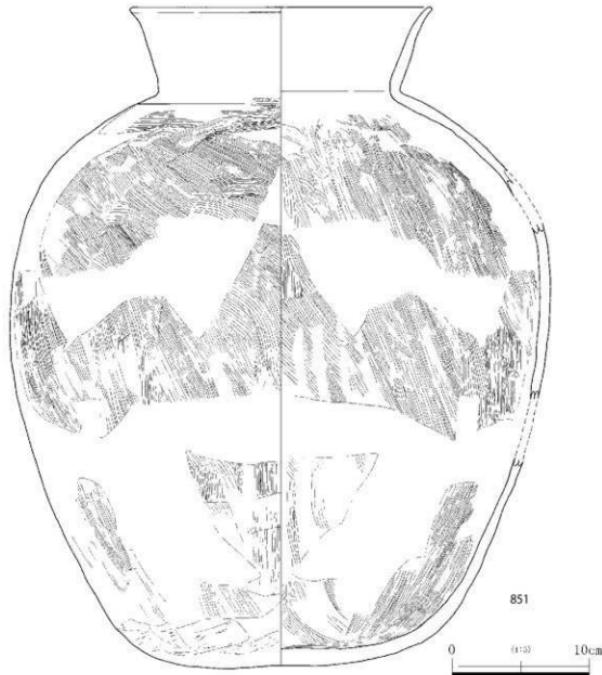


図142 流路1~3域 出土遺物6

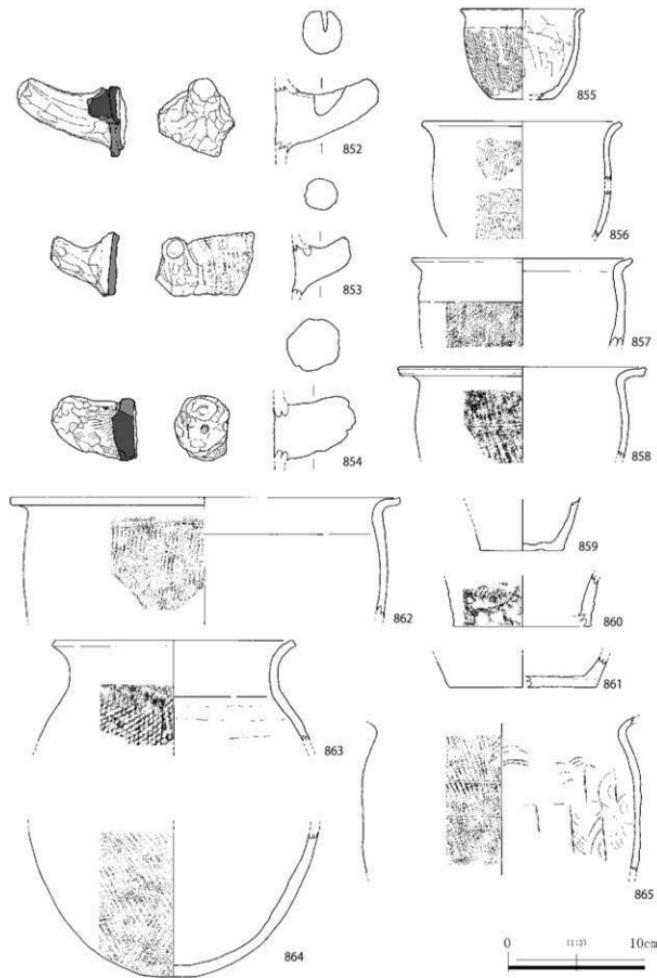


図143 流路1-3域 出土遺物 7

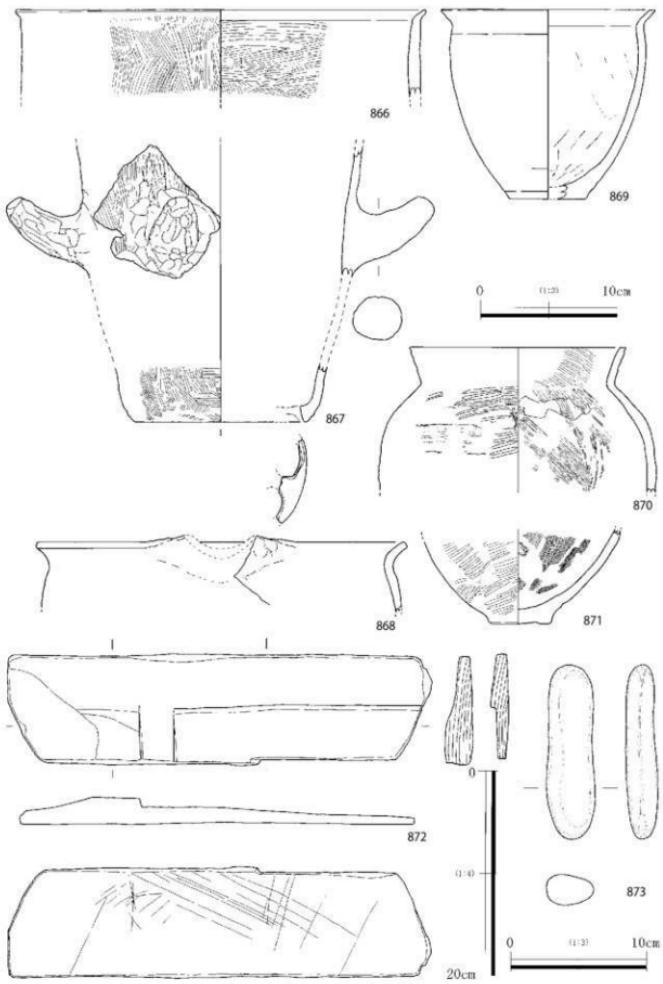


図144 流路1-3域 出土遺物 8

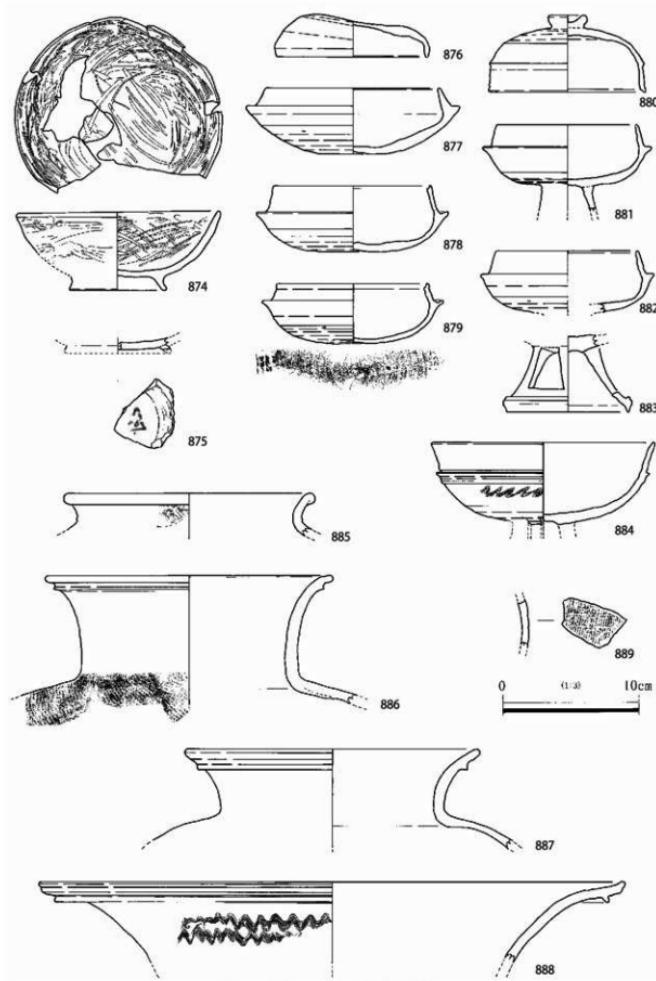


図145 流路1-3域 上層出土遺物 1

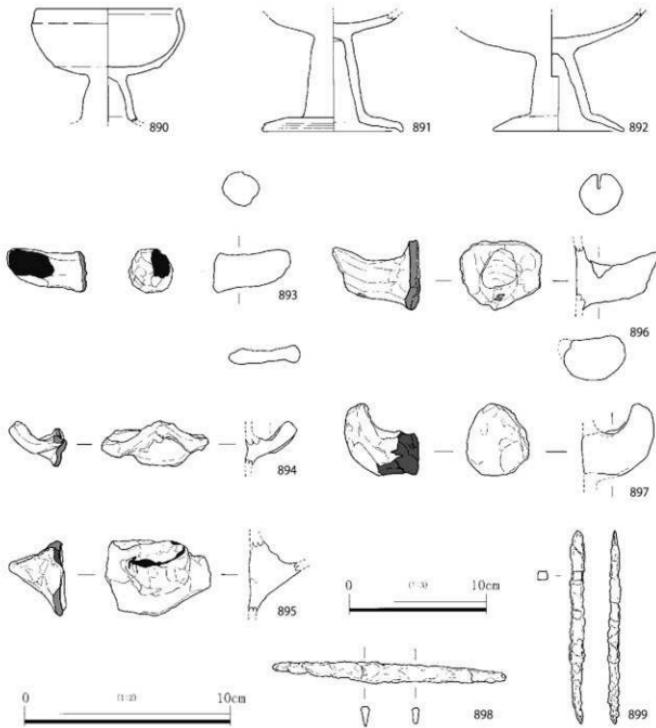


図146 流路1-3域 上層出土遺物 2

図144-866は土師器瓶の口縁部かと考えられる。867は瓶の底部と把手付近の部位である。868は土師器の鉢で、わずかな部位からの推測ではあるが、片口になる可能性がある。869は平底をもつ壺で、韓式系土器平底鉢の影響を受けた土師器であるのか、弥生土器の形態を残すものであるのかについて判断に迷う。870、871は外面にタキを残す壺で、弥生土器である。

872は板状の木製品で、用途は不明である。片面は平坦であるが、一方の面に複雑な段差を削りだす。端面などに二次的な加工がなされた可能性があり、何らかの建築材などの転用材かと考えられる。樹種はヒノキ科である。

873は石製品で、用途は不明である。自然石の可能性もあるが、基本的に自然石が流路堆積物中に混ざる可能性は低いと考えられ、自然遺物ではないと考える。石材は砂岩である。

図145、図146には流路1～3域の上層に当たる第1-5層、第2a層出土の遺物を配した。

図145～874は黒色土器A類の椀で、比較的の残存率が高い。875は土師器椀の高台部分と考えられ、底面外面に墨書きがみられるが、判読できない。874・875は流路に伴う遺物ではないと考えられる。876～879は須恵器壺で、5世紀後半から7世紀のものを含む。876の蓋は口径11cm程度のもので、流路埋没後のものである可能性が高い。879は底部外面にヘラ記号がみられる。880～883は須恵器有蓋高杯で、881は脚接合部の径が小さい特徴をみせる。884は須恵器無蓋高杯である。885は須恵器甕で、短く外反する頸部外面にヘラ記号がみられる。886～888は中～大型の須恵器甕で、口縁端部には初期須恵器の特徴を残す。889は須恵器あるいは陶質土器の細片で、外面に網状紋タキと沈線が認められる。

図146～890～892は土師器高杯である。893～897は把手で、896は韓式系土器、ほかは土師器である。

898は鉄製の刀子で、残存長11.4cm、幅1.0cm、厚さ0.45cmを測る。全体的に鋸歯化が著しく、残存率も低いと考えられる。899は鉄鎌で、やはり鋸歯化が著しく詳細は観察しがたいが、柳葉の鎌身をもつ長頭鎌と考えられる。全長は9.4cm、幅0.7cm、厚さ0.4cmを測る。鎌身長は5.5cmで、側面は直線を呈する。

流路1～4域出土遺物（図115～図136）

流路1～3域は03-5-1、03-5-3、03-5-10、06-22、06-23トレンチの範囲で検出した部分で、検出長はおむね95mを測る。流路1の細分は調査単位を基準にした機械的なものであるが、結果的に流路1～4域は最も広い範囲を含むこととなった。また冒頭に記したように、この区間の様相は流路1～1～1～4域と比較し、規模等において大きく異なるものである。また遺物の出土量も多く、直上層出土のものも含め、794点の遺物を図示することとなった。図示した流路1全体の出土遺物数における割合では6割を超えるものであり、検出長と流路幅が大規模であるとはいえ、一区間においての出土量としては多いものとなる。実際の出土状況も非常に多くの遺物が出土するものであり、逐一の記録が及ぶものではなかった。したがって出土状況の記録についても、図示し得るものはなく、特記すべきものについては写真を図版45に掲出した。冒頭に記した土馬と滑石製白玉の分布は特徴的であり、祭祀行為の痕跡であると推測するが、他の遺物については祭祀にかかわるもののが含まれていたとしても、流路内への投棄という状況を想定するにどまるものである。流路のほかの区域同様、完形土器の出土はみられず、破損した遺物がほぼ全体を占める。図化した遺物については土器類、木製品類、石器、鉄器を掲出したが、ほかに写真のみ掲載した石製遺物が6点、滑石製白玉781点がある。さらに種を同定した動物遺存体46点、樹種同定のみ行った木材66点があり、動物遺存体の同定結果については巻末一覧表に、報告書に掲載していない木材の樹種については第5章第2節表1に掲載する。

図147～153には03-5-1、03-5-3トレンチの範囲に属する土器を示す。

図147には03-5-1トレンチにおいて流路1～4域において堆積物の掘削中に確認した溝（流路）出土の遺物を配する。流路1～4域の堆積物を切る形で埋積する流路であり、最終的には流路1の再掘削にかかる遺構であり、一連のものと理解するが、遺物については分離が可能であることから別掲する。900は須恵器の把手付鉢であるが、把手を欠失する。体部外面中位を突帯と波状紋で飾る。901は須恵器あるいは陶質土器の甕で、外反し、端面をもつ口縁部を有する。頸部に装飾はみられない。902は須恵器の甕で、頸部外面には突帯と波状紋により加飾する。903、904は土師器甕口縁部で、古式土師器の特徴を残すものである。905は小型の土師器鉢である。906～909は土師器高杯で、905も併せて比較的類似する、赤褐色の色調をみせる。楕形の杯部の内面には精緻な放射状のミガキを施しており、丁寧なつくりとい

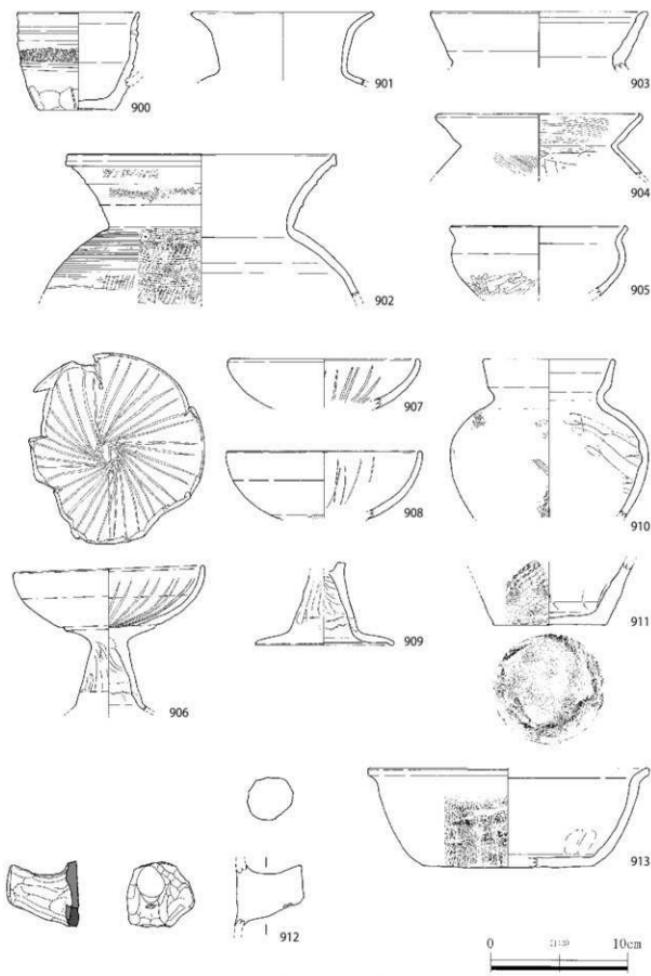


図147 流路1-4域 出土遺物1

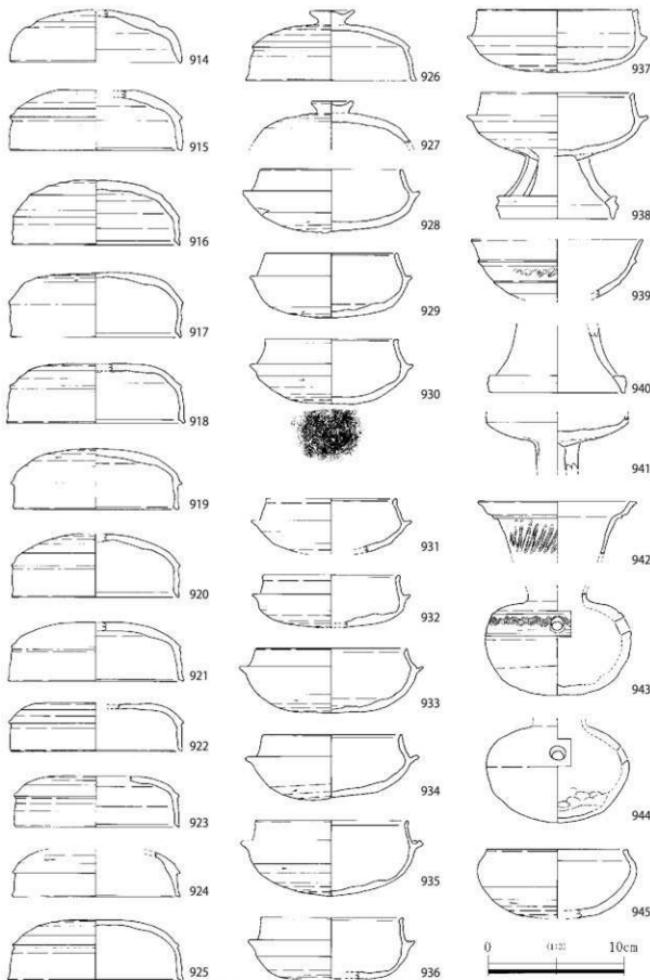


図148 流路1-4域 出土遺物2

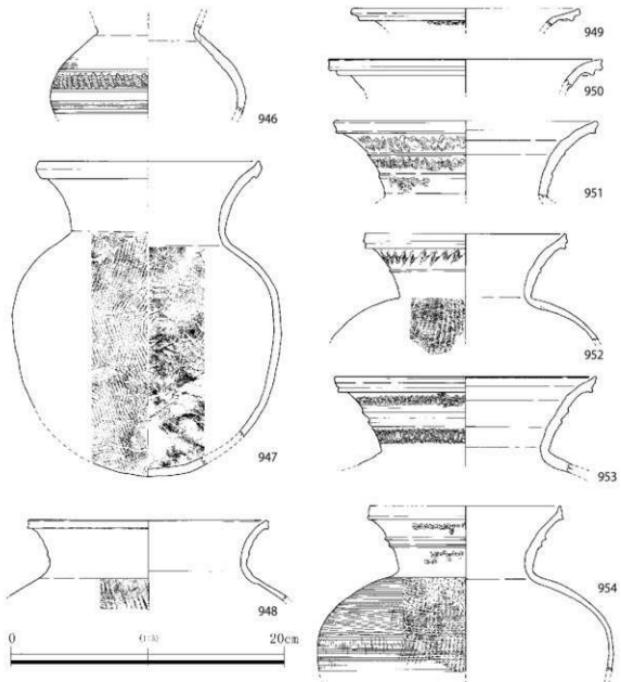


図149 流路1-4域 出土遺物3

える。910は土師器壺で、複合口縁状に直立する口縁をもつ。911は韓式系土器平底鉢で、底部付近のみの残存であるが、体部外面に格子タタキを施し、底部外面にゲタの痕跡を残す。912は韓式系土器の把手で、断面形は円形を呈し、下面に刺突痕跡を残す。913は韓式系土器の浅鉢で、器高に比して、口径が広い形態をもつ。体部外面には繩縫紋タタキを施し、底部外面には不明瞭な台の痕跡を残す。底部の拓影については図291に掲出する。

図148～図149には須恵器を示す。914～925は壺蓋、926・927是有蓋高坏の蓋である。918の天井部内面には同心円当て具の圧痕が残されており、拓影を図292に掲出する。929～937は壺身で、930の底部外面には針状の繊細な工具による線刻がみられる。938是有蓋高坏、939は無蓋高坏であり、把手の痕跡が認められる。940、941は高坏の脚である。941は長脚のものと推測され、スリット状の退化した透かしが3方向に施される。942～944は須恵器壺で、943は底部内面に同心円当て具の圧痕がみられ、944には底部内面に突き出しの痕跡が認められる。945は須恵器の鉢で、片口かと考えられるが、残存率が低いためや

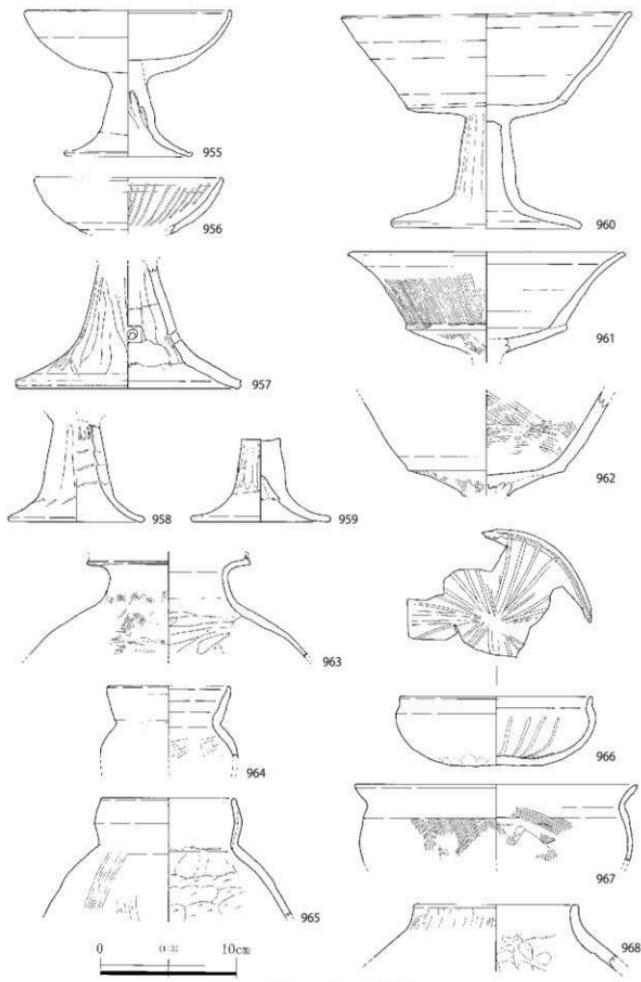


図150 流路1-4域 出土遺物 4

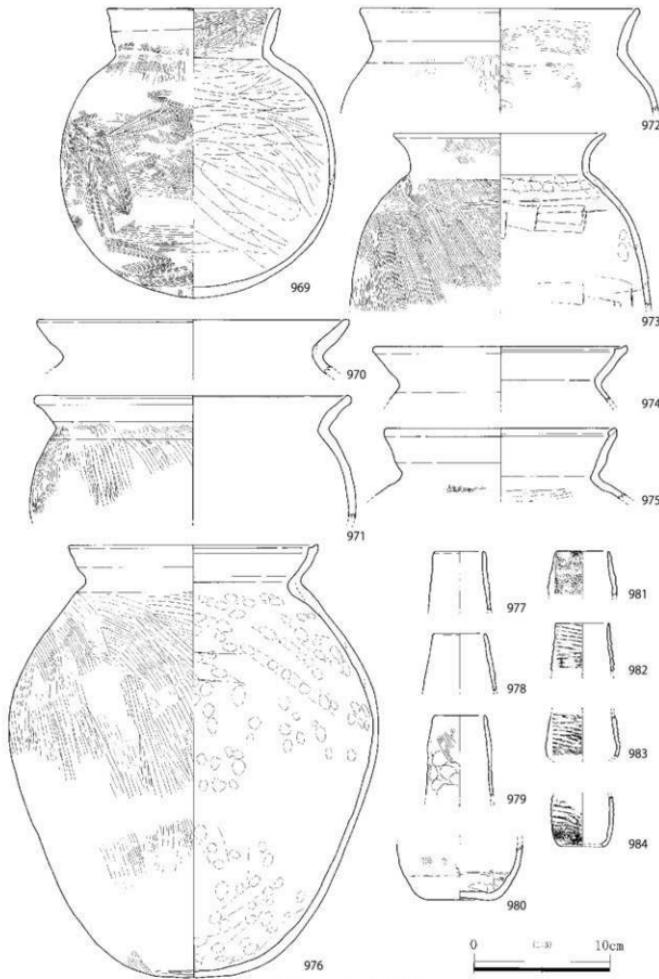


図151 流路1-4域 出土遺物5

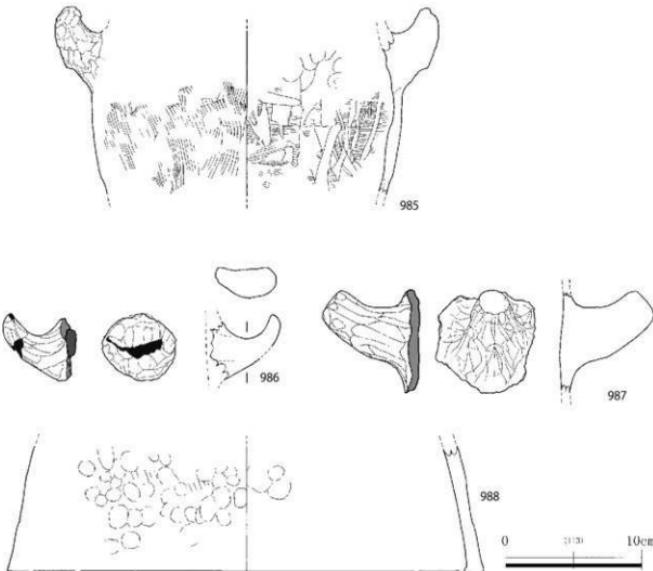


図152 流路1-4域 出土遺物6

けひずみの可能性も残る。図149~946は須恵器壺の体部片で、2条の沈線によって画される紋様帶に刺突列点紋を施す。947も須恵器壺で比較的良好に復元することができた。体部外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕を残す。948~954は須恵器壺で、口縁部付近の残存するものである。948・949は比較的薄手で精緻なつくりである。

図150~図152には土師器を示す。955・956は壺形の壺部をもつ高坏で、956の内面には放射状のミガキが認められ、906などと同じ類型に属する。957~959は高坏の脚部である。957は大型の高坏脚で、円形の透かしを4方向に配する。脚端部内面に布压痕がみられ、製作時の痕跡かと考えられる。959は脚柱部上位が中実である。960は口縁の一部を欠くが、比較的全容がわかる形で復元ができたものである。961・962とも高坏の壺部であるが、961は外面の、962は内面のハケメが目立つ。964は小型の壺で、965は残存率の低い個体であるが、ゆるやかに屈曲する口縁部をもつ壺である。内面にヘラケズリを施す。966は壺で、底部の調整には一向向へのヘラケズリを施している。内面に放射状のヘラミガキが施されるが、胎土や色調は同じように放射状ミガキを施す907などとは異なっている。967は中型の鉢であるが、煮沸に供された可能性がある。968は無頸壺で、特異な形態である。

図151~969は中型の壺で、まっすぐにのびる口縁部をもち、体部内面は頸部付近にまでケズリを施し、外表面はハケで調整する。スコケの付着が顕著かつ、その残存状態の良好な個体である。970~972は比

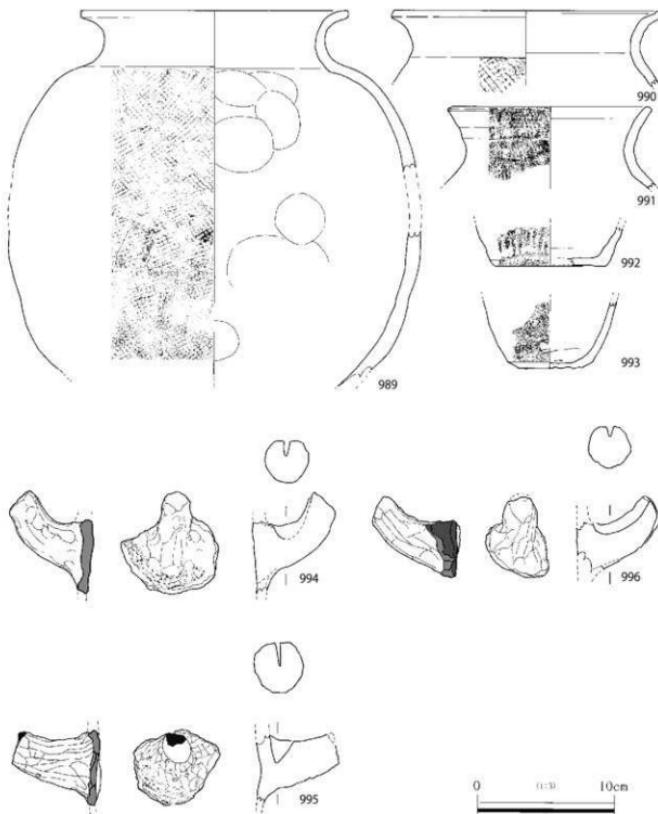


図153 流路1-4域 出土遺物7

較的口径の大きい甕で、口縁部付近の残存である。973は長胴甕の体部から口縁部で、外面には密にハケを施し、内面には板状工具によるナデの痕跡がみられるが、肩部付近では接合痕跡もよく残る。974・975は古式土師器の特徴を残す口縁部をもつ甕で、口縁端部内面の肥厚が認められる。976は長胴甕と布留型甕の折衷形態ともいえる甕である。全形は復元によるため正確さを欠く可能性があるが、比較的長胴ではありながら、体部最大径をその上半におき、やや尻すぼみの形態をもつ。口縁部は内清気味にのび、端部内面を肥厚させる。体部の外面はハケで調整し、内面には指頭圧痕を残し、ケズリによる調整

はみられない。977～979・981～984は製塙土器で、977～979・981は外面をナデにより調整する丸底のもの、982～984は外面にタタキ調整を施す丸底のものと考えられる。980は平底を呈するが器種は良くわからぬ。外面にハケ、内面に板状工具によるナデを施すが、つくりは絶じて粗い。

図152～985は把手付の鍋かと考えられる。内外面ともハケ調整を基調とする。968・969は土師器把手で、986は体部との接合関係を良好にしることができる資料である。988は移動式竈の裾部と考えられる。

図153には韓式系土器を配する。989～991は甕で、体部の外面には989・990には格子タタキを、991には繩巻紋タタキを施す。992・993は平底鉢で、両者とも外面上には平行タタキによる成形・調整が施され、993はさらにそれをナデ消しているようである。994～996は把手で、994は上面からの切込みがあり、下面に刺突は無いが、何らかの工具が当たったような圧痕がみられる。995にも上面からの切込みと下面に刺突痕跡が複数認められる。

図154～図167には03-5-10レンチの範囲から出土した土器を示す。

図154～図159には須恵器を示す。997～1020は坏蓋で、997～1000がほかのものとやや断絶して相対的に新しい時期のものである。999の天井部外面には「井」字状のヘラ記号が施される。拓影は図292に掲出する。1021～1027は有蓋高环の蓋で、大きな時期差はみられない。つまみの形状は1021のものは中央が盛り上がる形をとるが、ほかのものは周囲が盛り上がる形をとる。1028～1044は坏身で、坏蓋同様、1028のみがやや隔絶した新しい時期を示す。1030・1033・1035・1036の底外面にはヘラ記号が認められる。図154・図155に示していない拓影も含め図292に掲出する。1045～1066には高坏を示す。比較的まとまった時期に属するものが主体となるが、1064は陶質土器に近い形態をもつ初期須恵器かと考えられ、時期的にさかのばると考えられる。1060・1061は直線的に延びる短い脚部をもつもので、特徴的である。1065・1066は須恵器として掲出するが、焼成は酸化焼成であり、土師器同様の色調を示す。焼成のみならず、1065は脚端部形状もやや特異である。1067～1086は甕、あるいは甕で、規模・形態ともバリエーションに富む。頸部外面にヘラ記号を施すものに1075・1082があり、頸部内面にヘラ記号を施すものに1084がある。1087・1089は把手付鉢で、法量に違いがあるが基本的なプロポーションは共通する。樽形の体部の中位付近にゆるやかな突帯をもって紋様帶を巡らし、この内外部に波状紋を巡らし、加飾する。把手付鉢、有蓋高环とも把手自体の遺存する例に欠けるが、1088はこれらに付くべき把手であろう。細かな面取りにより表面を調整する。1090は小型の甕で、残存部位が少ないため口径の復元も難しいが、短く外反する口縁と体部外面を飾る波状紋が特徴的である。1091は鉢で、体部から一連に内湾する口縁端部を丸く取める。形状は945に近いが端部の形態は異なるものである。1092～1096は甕で、小型のものと大型のものがある。穿孔部付近の装飾には波状紋を施すものと、列点紋を施すものがある。1093は底部外面にヘラ記号がみられ、1095の体部肩付近には別個片体の溶着がみられる。1097～1099は短頸甕で、1099は比較的甘い焼成で、底部外面にタタキの痕跡を、内面に當て具の痕跡を残す。1100は樽形縁で、比較的残存部位が多く、口縁部を除く全容をしることができる。体部の閉塞は片側の小口面をふさぐことでいい、わずかな接点のみで接合している。口縁部直下の体部内面に自然軸の付着がみられ、口縁を上にした形で焼成したものと考えられる。外面の加飾は沈線を4条巡らすことにより体部を5分割し、中央寄りの3条に波状紋を巡らし紋様帶としている。1100の破片の多くは流路1～4域からの出土であるが、接合する小口の破片が03-5-10レンチの第1-3層から出土しており、およそ200m離れた場所からの出土となる。1101は鉢かと考えられるもので、口縁端部に内傾する面をもち、やや内側に肥厚する。残存率が極めて低いもので詳細は不明であるが、口縁部内面には粘土紐の接合痕跡を残す。1102も小片

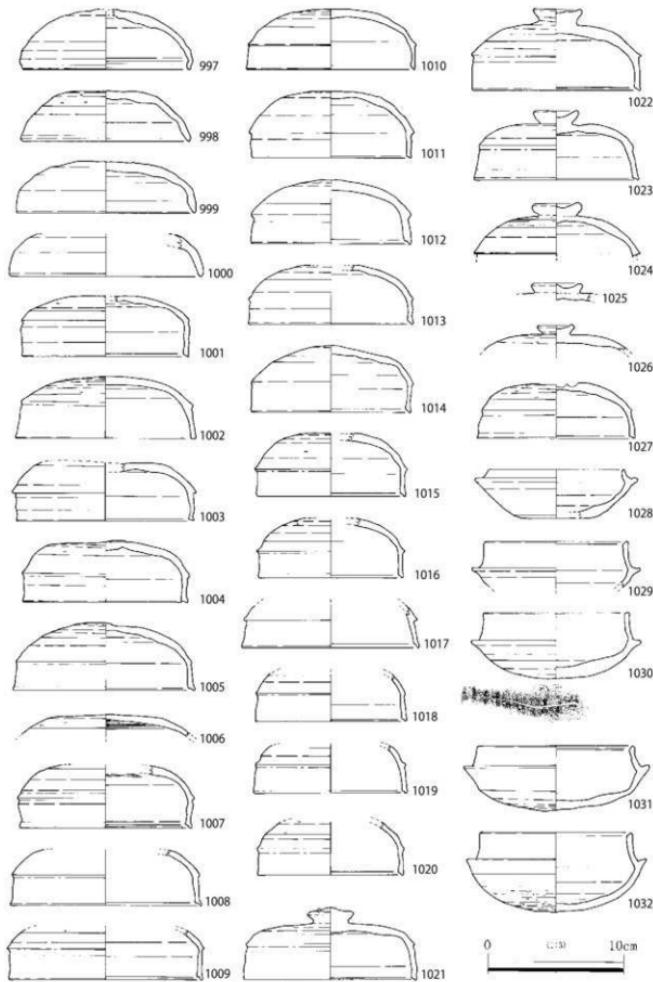


図154 流路1~4域 出土遺物 8

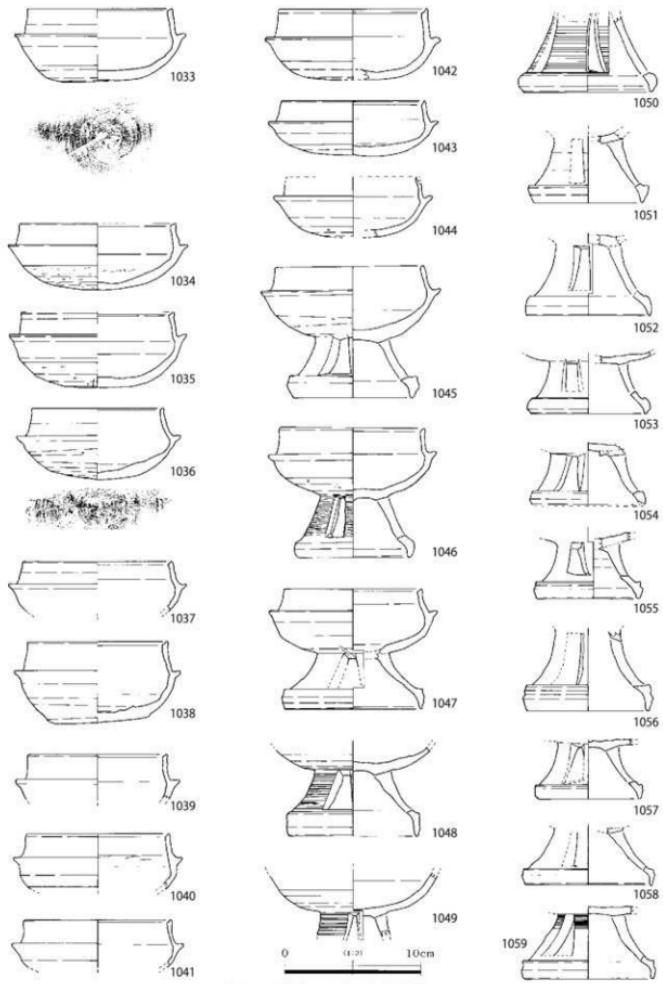


図155 流路1—4域 出土遺物 9

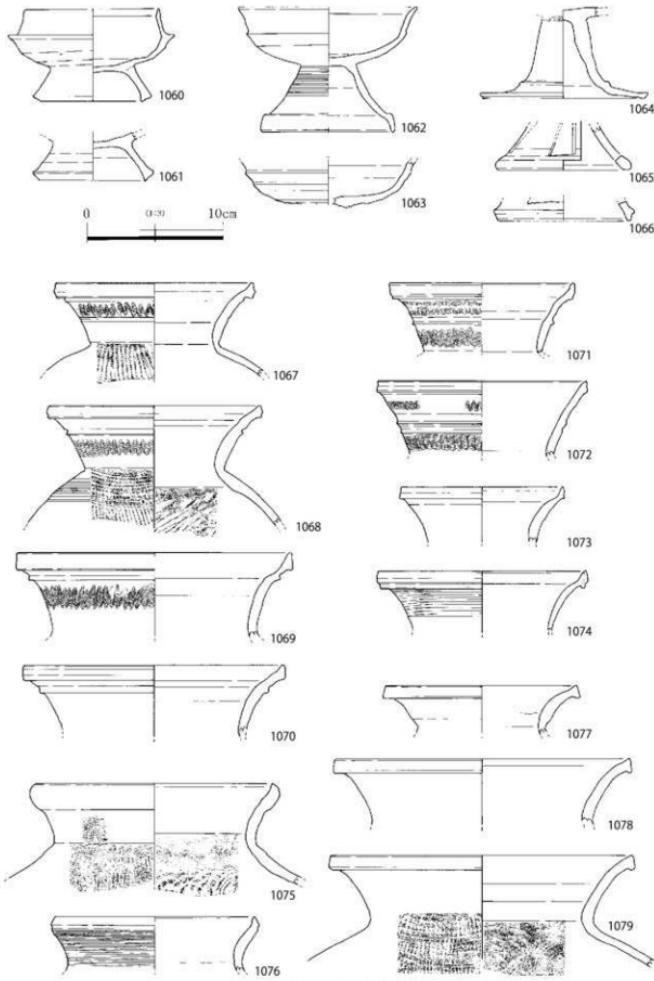


図156 流路1-4域 出土遺物10

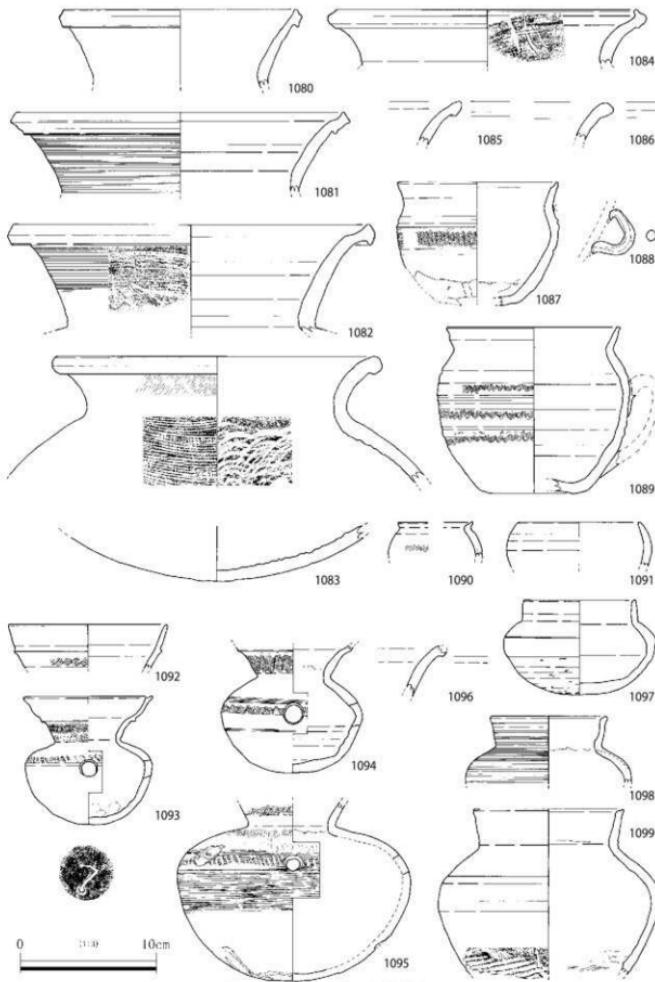


図157 流路1-4域 出土遺物11

のみ確認できる個体で、やや外反する体部外面に突帯を巡らし、その間に波状紋を巡らし紋様帶とする。高杯形器台の杯部かと考えられる。1103はやはり高杯形器台の杯部と脚部の接合部分で、脚部側には三角形の透かしが認められ、接合部突帯にはキザミメを施し装飾とする。今回の調査範囲では須器器台の出土は極めて少数であり、注目される。1104・1105は大甕で、残存部位が限られることから全容は不明であるが、体部最大径は45cmを超えるものである。体部調整はいずれも外面にはタタキ痕跡を残すが、内面の當て具痕について、1104は良く残るが、1105は半スリケシ程度のナデを施している。

図160～図165には土師器を示す。1106～1123は高杯である。法量や形態がバラエティーに富む。1106は杯部の底部と口縁部を画るように沈線を施すが、本来は境界に施していた後の痕跡であろう。脚部も接合部が広めで、寸胴な印象がある。1110・1111は塊形の杯部で、同一個体の可能性もある。口縁端部に面をもち、端部内側は内面に小さく肥厚する。1113は大型の高杯で、残存率が低いため部分的な特長の可能性もあるが、口縁端部が受け口状に開く。脚との接合部には放射状のキザミを施していることが、脚部の剥離部分に観察される。1116は小型の高杯であるが、塊形の杯部に短く開く脚部をもつ。やや雑なつくりである。1119・1120は接合部付近の脚部が中央のものである。1121は脚端部を欠くが、909などと同じ形状かと考えられる。1124は鉢かと考えられるが、赤褐色の胎土・焼成をみせるもので、906～907などと類似する。

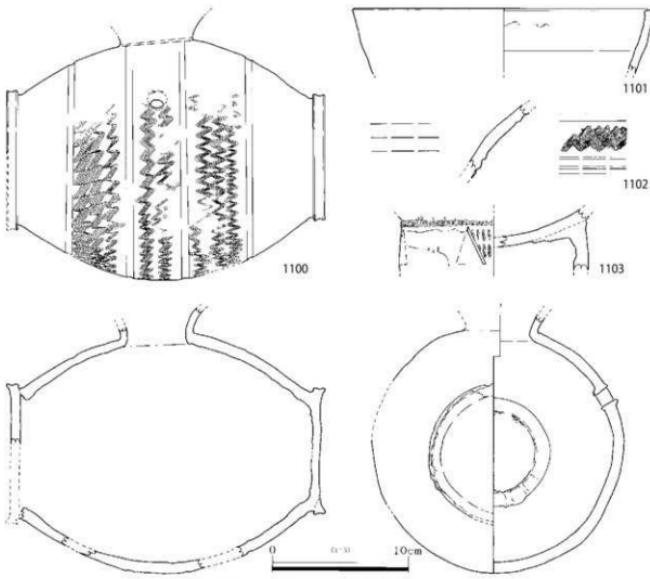


図158 流路1-4域 出土遺物12

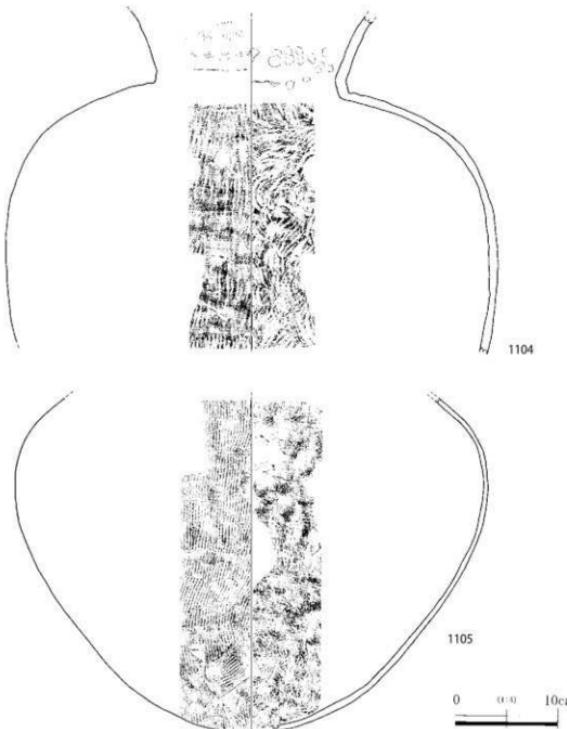


図159 流路1-4域 出土遺物13

図161-1125~1141には甕類を配した。1125は球形の肩部から短く外反する口縁部をもつもので、頸部内側に明確な稜を成形している。1126・1127も同様の頸部を示す。1131はやや外反した後、内溝し、端部を上方に丸く收めるもので、体部内面にヘラケズリを施しながらも器壁は厚く、古式土師器の影響を残す新しい時期の甕であろう。1132は口縁端部を上方へつまみ、体部内面に縱方向のヘラケズリが施される。1133は短く開く口縁部の内面に粗いハケを施し、平底に近い下彫れの底部をもつもので、高さは良くわからないが、流路の土器群の中では後出するものと考えられる。1138は頸部から肩部にかけての破片で、内面にはヘラケズリを施し、外面にはハケメがみられるが、刺突痕跡のようなものが限られて破片においても2ヶ所、認められる。1141は外反する口縁端部に比較的のしっかりとした面をもつものである。

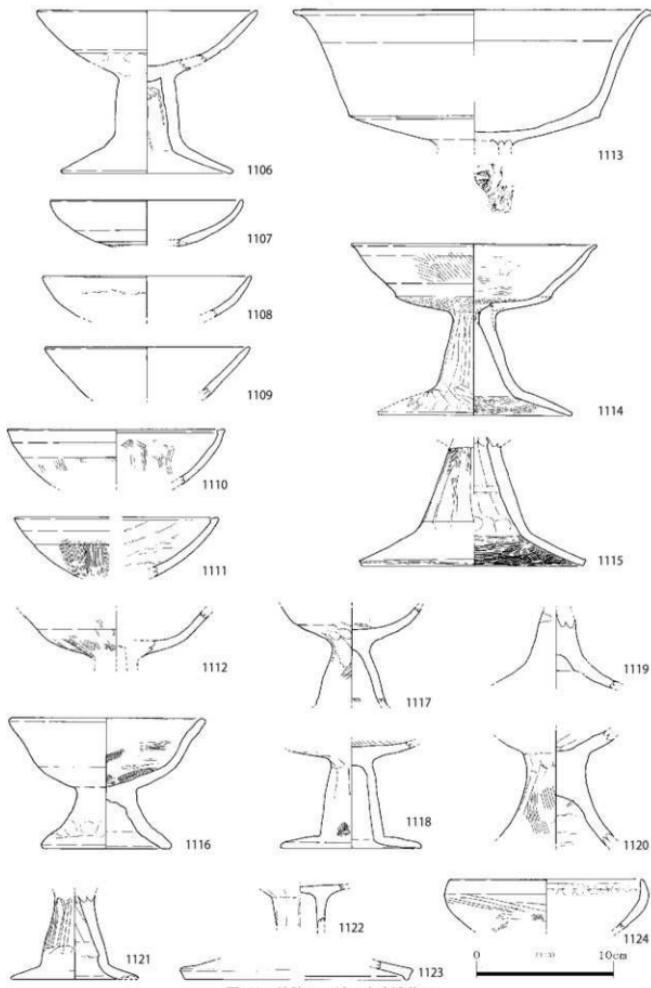


図160 流路1-4域 出土遺物14

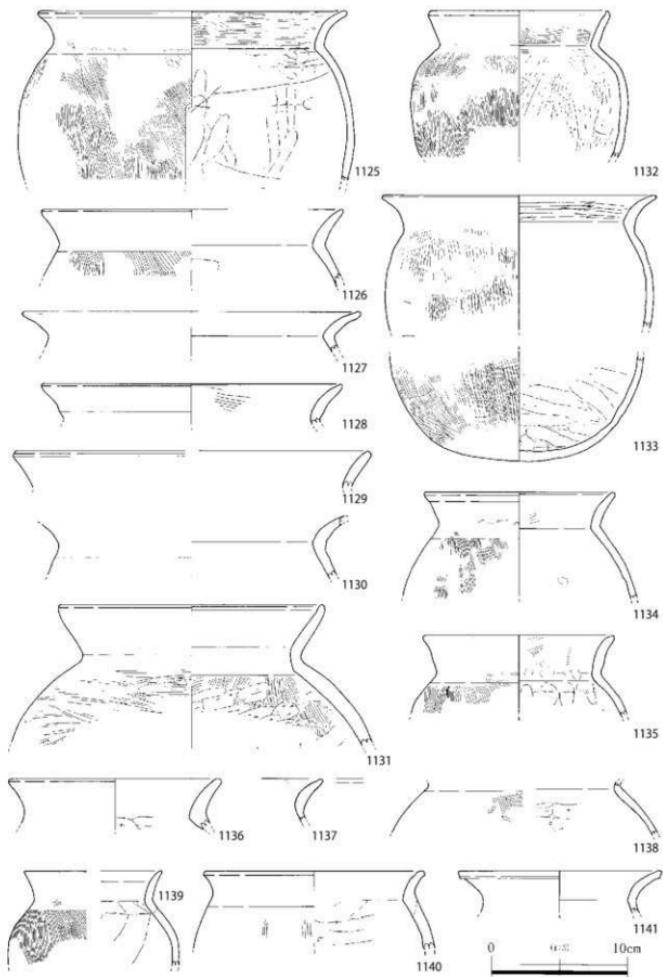


図161 流路1-4域 出土遺物15

図162～1142～1157には土師器の壺類を配した。壺類には体部まで遺存するものが少なく、口縁部の破片が中心となる。甕あるいは壺の分別が難い個体も多い。1142は真っ直ぐのびる口縁部で、外面には縱方向のハケメを密に施し、中位付近に工具によるナデが施される。1143は上外方にのびる口縁端部に面をもち、沈線を巡らす。中型のものではゆるやかに外反するものと、直口のものがあるなかで、1147は厚い器壁をもち、短く外反する口縁をもつ特徴的なものである。小型のものでは1154～1157は手捏ね風ではあるが、粘土紐の接合痕跡を残し、簡便なつくりである。1158・1159は瓶で、1158は残存率の低さから口径は不明である。1159の蒸気孔は中央に円、四方に梢円を配するものである。1160・1161は壺で、1160は内面に工具によるナデ痕跡が残り、1161は外面に棱をもつ特徴をもつ。

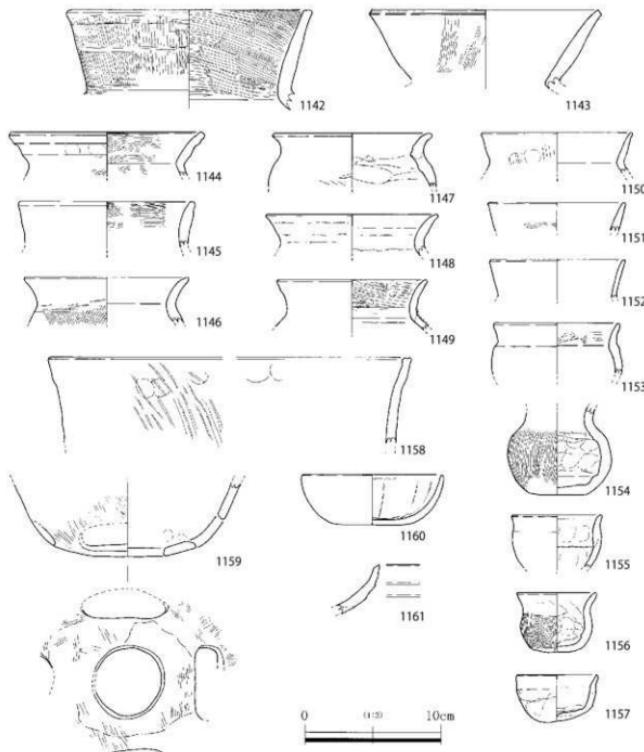


図162 流路1～4域 出土遺物16

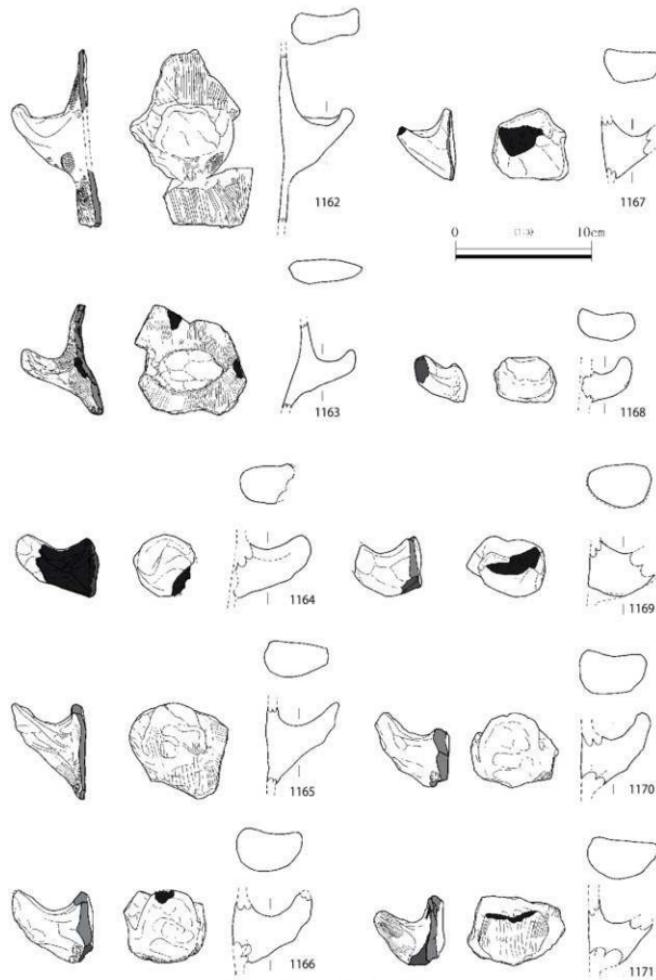


図163 流路1-4域 出土遺物17

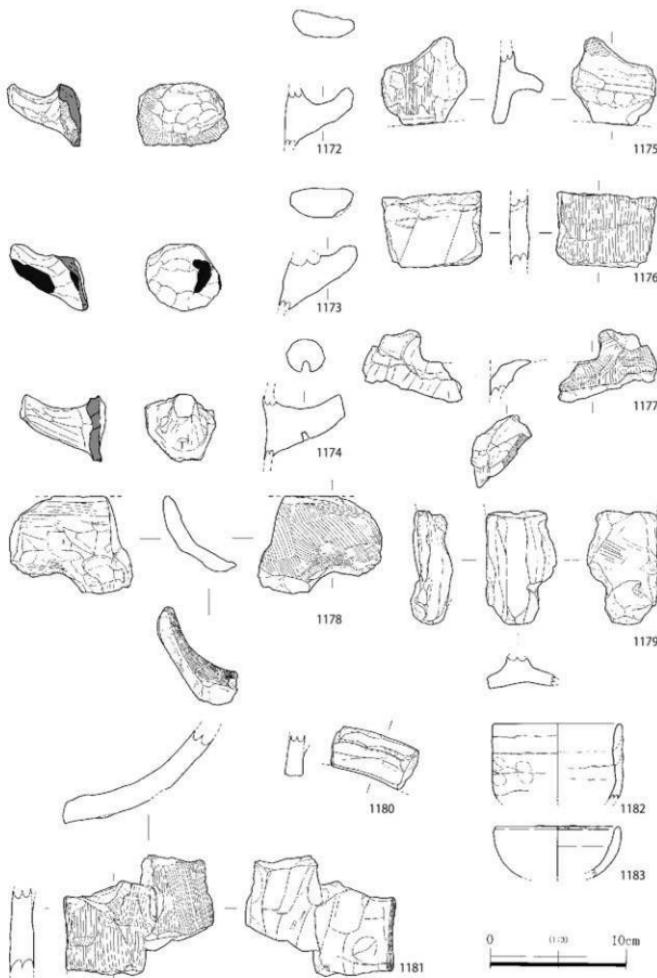


图164 流路1—4域 出土遗物18

図163～1162～図164～1173には土師器把手を示した。断面形状では扁平なものから、やや厚みをもつものまでみられる。1174は下面に刺突がみられ、韓式系土器か。1175～1179・1181は移動式竈である。一般的な竈の規模から考えるとごく一部のみ遺存したものばかりであるが、庇、突帯、焚口などがあり、1177は把手の接合部が剥離したとすると剥離面が整っており、断定はできないが、煙出し孔の可能性も指摘しておきたい。1180はU字形板状土製品の一部か。1182・1183は製塙土器かと考えられる。

図165～1184は廻り馬の土馬である。体部は中空で、頭部、四肢、尾、馬具の一部を欠くが、馬具には手綱、鞍、下鞍、力革、鎧の基部、尻繁などが見てとれる。腹に2ヶ所と尻に円孔がある。脚の破断面には深さ3mm程度の貫通しない穴がみられ、古い穴が新しい穴に押しつぶされたように見えるものもある。焼成前に施されたものであり、成形時に脚の補強を行った痕かと考えられる。1185は1184と直接接

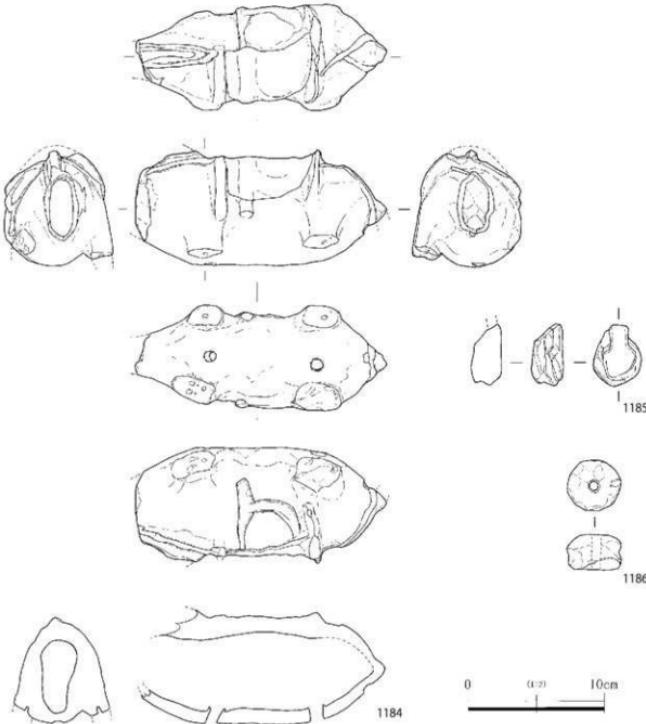


図165 流路1～4域 出土遺物19

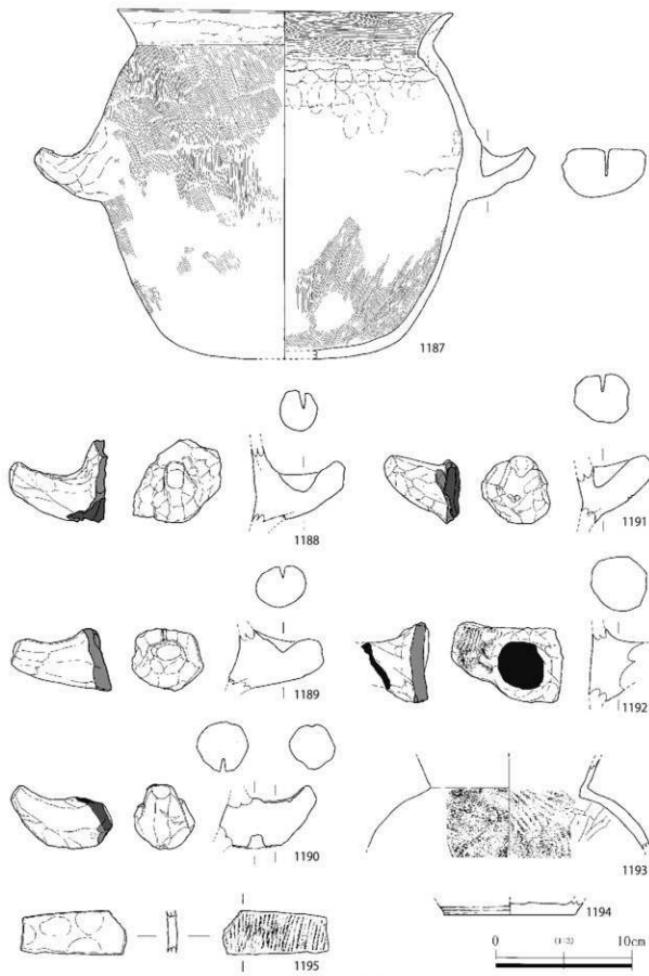


図166 流路1-4域 出土遺物20

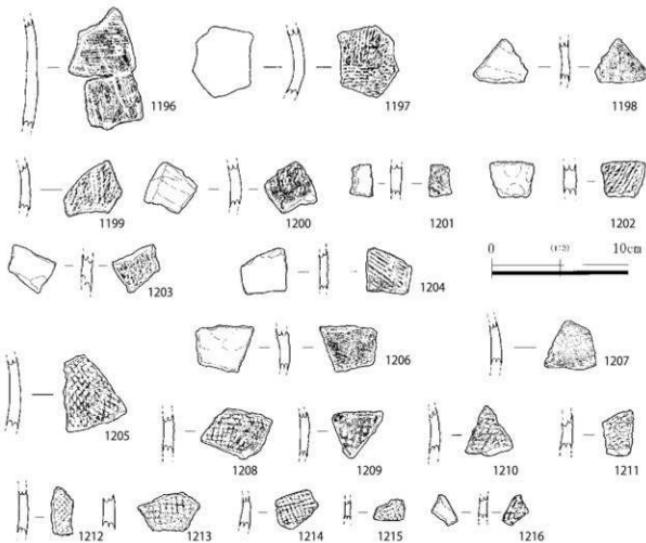


図167 流路1~4域 出土遺物21

合はないが、鍾の部分かと考えられる。1186は土鍾で、流路1からは1点のみの出土である。

図166~1187~1194には韓式系土器を示す。1187は把手付の鍋であるが、断面形状が半円形の把手上面から切込みが施される。把手は片側のみの遺存である。肩部には外面とも粘土紐の痕跡をよく残す。1188~1192は把手で、切込みのあるもの、刺突のみられるもの、体部にタタキ痕跡の残るものがある。1193は壺かと考えられ、体部内面には当て具痕が残ることから成形にはタタキが用いられ、すり消されたものと考えられる。灰白色を呈し、焼成・色調とも異質である。1194は平底鉢の底部で、底部外面の痕跡は不明瞭である。1195は陶質土器あるいは須恵器の体部片で、外面には繩縫紋タタキを施す。図167~1196~1216は極細片ばかりであるが、韓式系土器の体部片である。外面には繩縫紋、平行、格子のタタキを施し、内面に当て具痕の残るものもある。

図168~図186には06-2トレンチ、06-3トレンチの範囲で出土した土器を掲げる。図168~図174は須恵器である。1217~1233は壺蓋で、1217はほかのものと隔離して新しい時期を示す。1234~1246は有蓋高环の蓋で、これらは大きな時期差はみられない。1239は天井部に列点紋を施している。また1244の内部を充填していた流路堆積物から滑石製白玉1点(図版195~1245)が出土した。当初より土器内に納められていたものではないと考えるが、遺物番号は連番とした。図169~1247~1277は壺身で、壺蓋同様、やや時期をあけて新しいもの(1247~1250)が若干含まれる。1277は特異な形態をもつもので、位置付けは難しい。1258~1259~1269~1270には底部外面にヘラ記号がみられ、ここに図示したもの以外

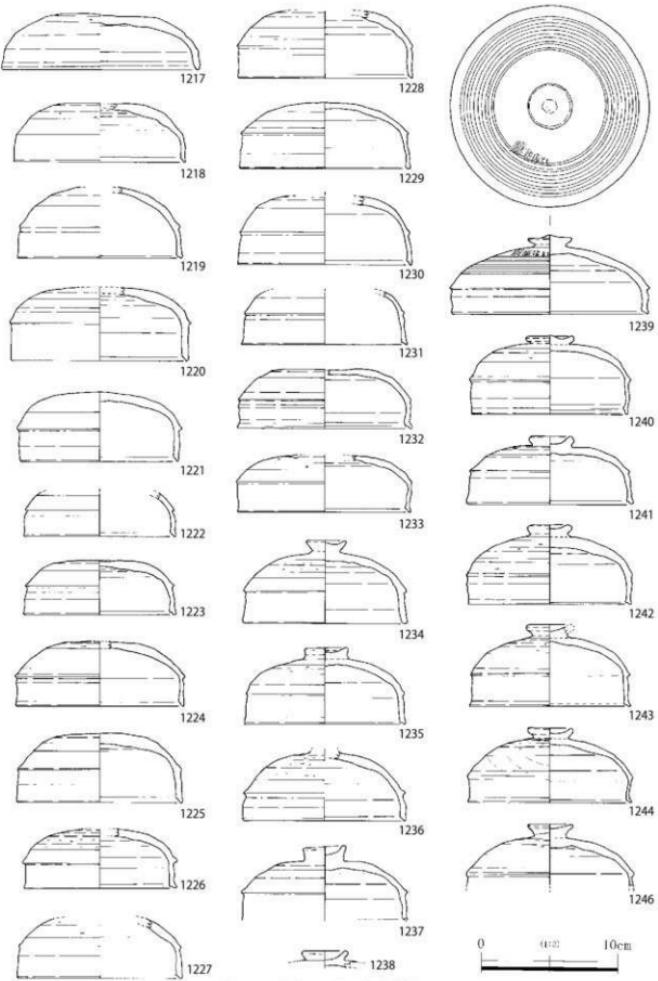


図168 流路1-4域 出土遺物22

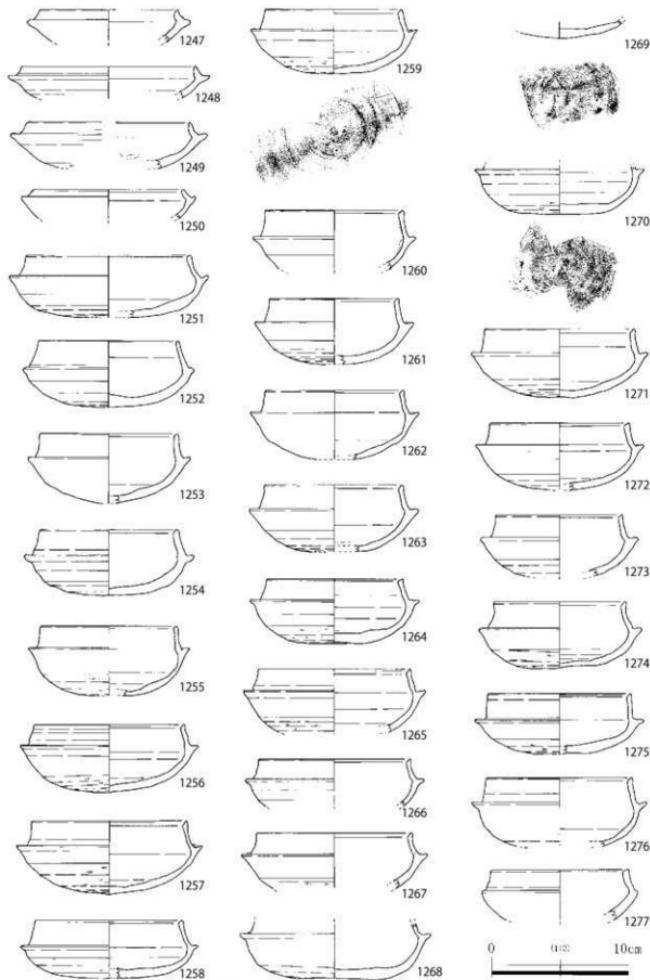


図169 流路1-4域 出土遺物23

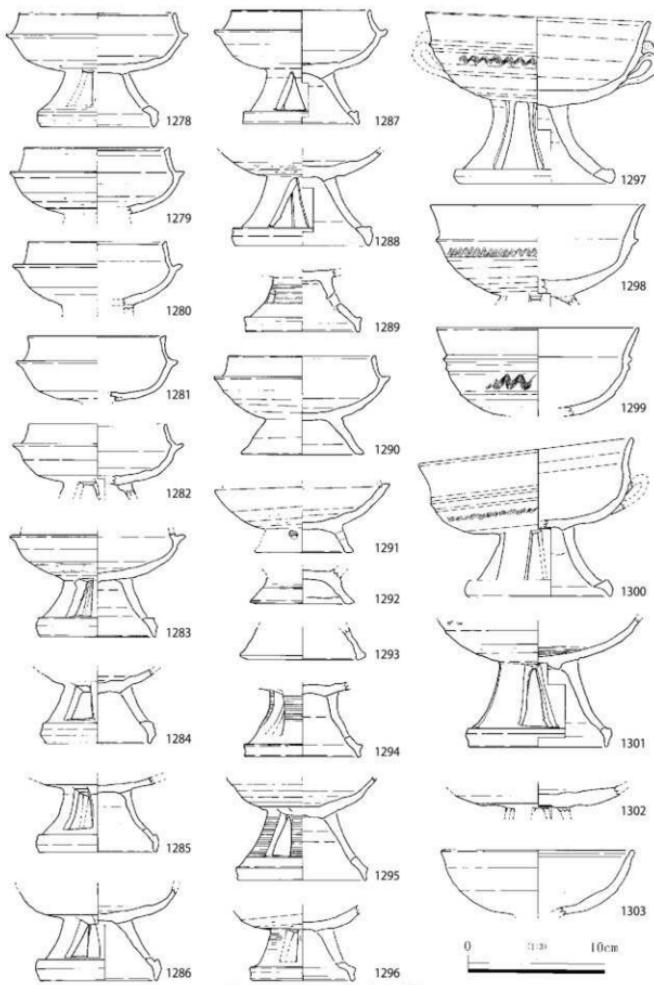


圖170 流路1—4城 出土遺物24

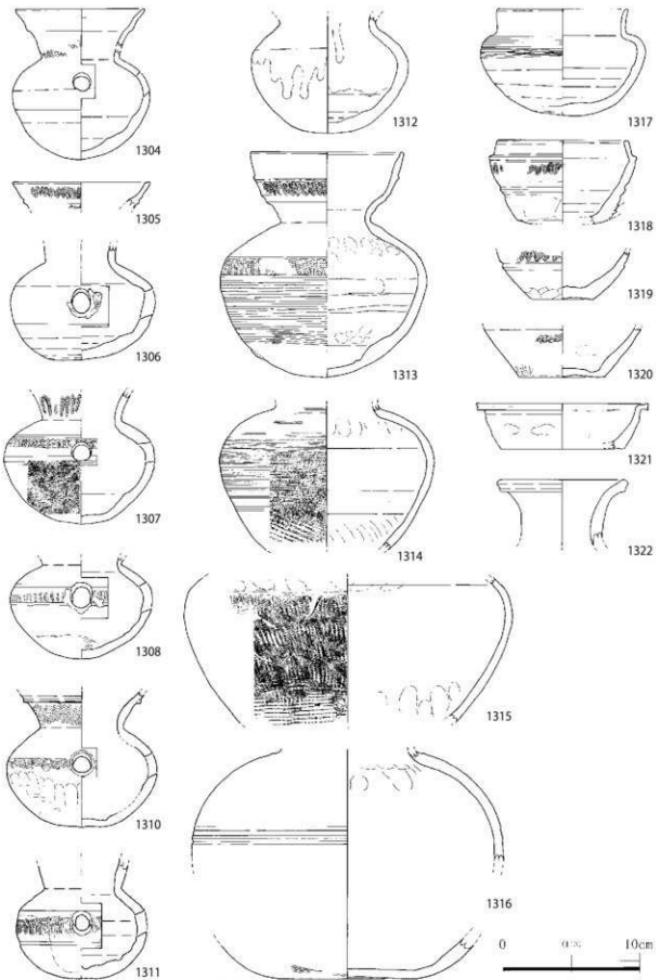


図171 流路1-4域 出土遺物25

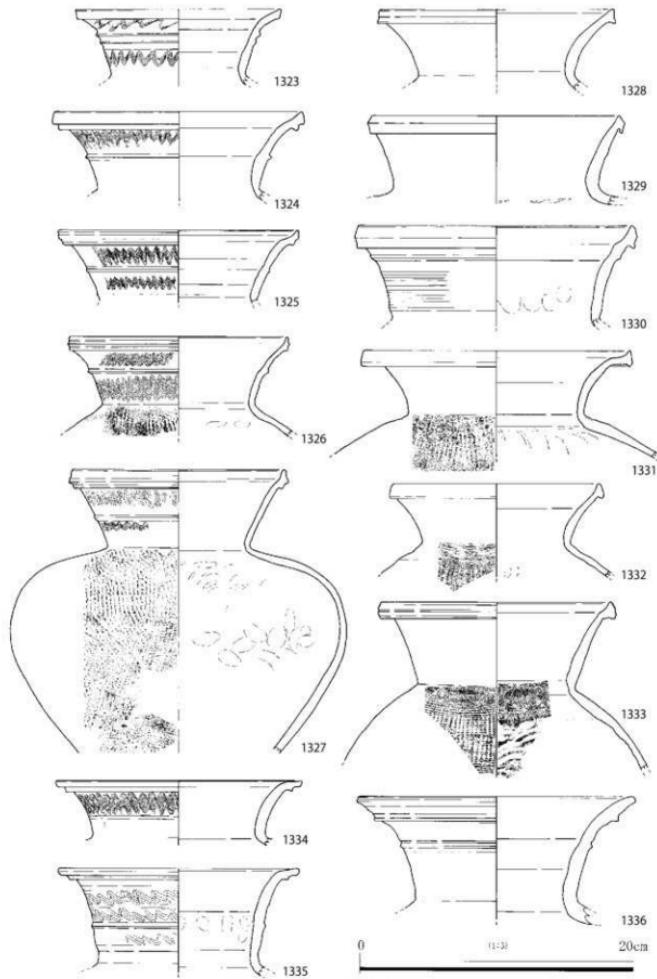


圖172 流路1—4域 出土遺物26

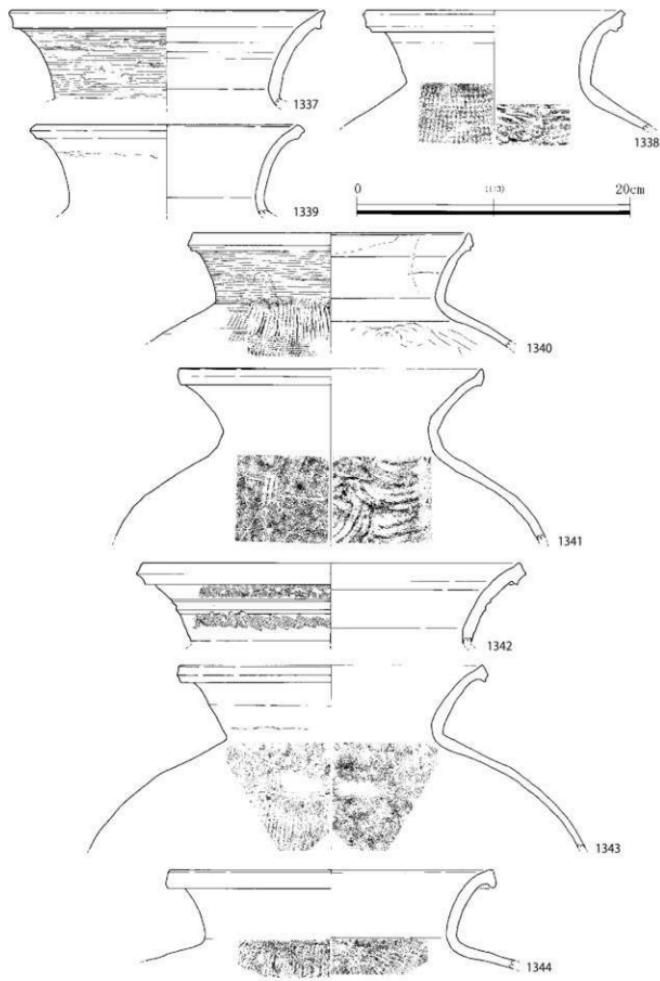


図173 流路1-4域 出土遺物27

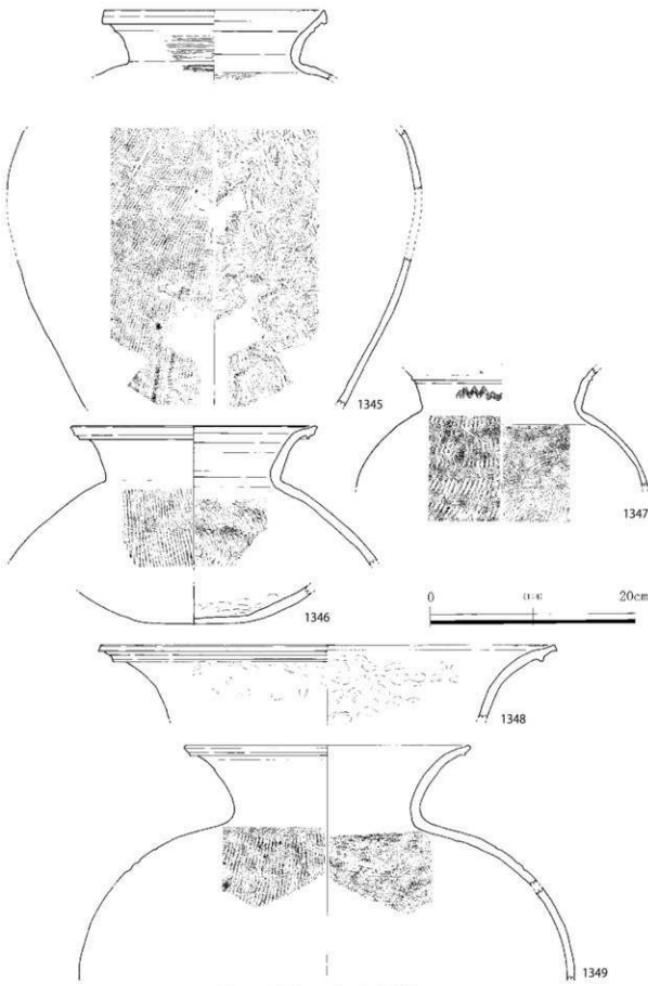


図174 流路1-4域 出土遺物28

も併せ、図292に掲出する。図170～1278～1296は高杯である。それほどとの時期差をもたない。脚部の透かしは長方形のものが多いが、1287・1288は三角形のものを、1289は小さい方形のものを配している。1290～1292は低脚の特徴的なもので、1060・1061などと同じ形状をもつ。1291には円形の透かしの痕跡が認められる。1297～1301には無蓋高杯を配した。いずれも波状紋で外面を飾る。また1297には片方だけではあるが、把手が遺存する。1302は杯部の形態は不明であるが、方形の透かしを5方向に配しており、初期須恵器に属する可能性がある。1303は無蓋高杯ではあるが、杯蓋を逆転させたような杯部をもつ特徴的な個体である。図171～1304～1311には縁を示す。頸部外面と円孔の周間に波状紋や列点紋を施すものと、円孔の部分には装飾を施さないものがある。1304には底部外面にヘラ記号がみられた。拓影は図292に示す。また1309の内部を充填していた流路堆積物から滑石製白玉1点（図版201～1309）が出土した。当初より土器内に納められていたものではないと考えるが、遺物番号は連番とした。1312～1315は壺としておくが、1313・1315は残存部位も少なく、縁の可能性もある。1312は体部が完存する壺で、外面にかかる自然釉が美しい。1313は残存率が1/2以下であるが、口縁から底までの復元が可能である。1316は壺と考えるが、平底をもち、体部上位にゆるやかな沈線、あるいは突帯を巡らすもので、陶質土器、あるいはその特徴を残す須恵器かと考えられる。1317は短く直立する口縁部をもつ直口壺で、口縁の一部を欠く以外は遺存状態がよい。1318～1320は須恵器の把手付鉢で、外面を突帯、波状紋により加飾する。底付近の外面は静止ヘラケゼリにより調整する。1321は須恵器あるいは陶質土器浅鉢で、各部位の造形は精緻である。韓国全羅道地域に起源をもつ（寺井2002）。1322は提瓶の口縁部と考えられるものであるが、提瓶・平瓶とも流路からの出土数は極めて少ない。図172～1323～1336は壺で、口縁部の遺存するものが主体である。口縁端部の大雜把な分類では、上方に尖り気味に拡張するもの（1323～1227）、上下に尖り気味に拡張するもの（1228～1333）、水平に開いた端部直下に突帯を巡らすもの（1334・1335）、端部は方形に収め、直下に突帯を巡らすもの（1336）に類別ができる、頸部における波状紋による加飾との対応関係をみることができる。図173～1337～図174～1347は壺あるいは甕で、中型から大型のものである。1348・1349は大甕で、1348は大きく開いた口縁端部に面をもたせて收め、直下に突帯を配置するものの、1349は尖り気味に収めた端部直下に突帯を配するものである。

図175～図183には土師器を示す。06-2-2トレレンチ、06-2-3トレレンチの範囲における須恵器の出土量にして土師器の高杯、甕、壺類の出土点数は少量である。逆に移動式竈や瓶、それらに付帯する把手などの出土点数が多い。1350～1354は高杯で、口縁部と底部の境に接をもつもの（1350）、塊形のもの（1351・1352）という杯部がある。脚部は4個体それぞれに異なる形態をみせる。1357～1368は甕で、口縁部付近が遺存するものである。口縁部の形態はそれぞれに特徴をもつが、古式土師器の影響を残す1360には体部外面のヘラケゼリが確認できる。1363は複合口縁をもつもので、直立し、上端に水平の面をもつ口縁端部形状をもつ。1364は壺で、比較的整った形態と外面には丁寧なハケ調整がみられる。1365は長頸甕で、口縁端部にやや細かな造作を施すが、頸部と胴部の接合部分はほぼ未調整のままである。1366・1367は小型の壺口縁で、それぞれに異なる特徴を示す。1368は赤褐色を呈する大型の口縁部で、内外面ともハケ調整の後、縱方向のヘラミガキをやや間隔をあけて施している。形態から高杯の杯部口縁の可能性も考慮したが、径と器高の関係、器壁の厚さなどから大型壺の口縁部と考える。

図176～1369は小型の壺で、口縁の一部を欠くが残存率は高い。1370～1373は小型の壺で、内外面、特に内面に粘土縫の接合痕を残す。1373は平底であり、法量は異なるが1154に類似する形態をもつ。1374は小型の鉢で、口縁端部を尖らし、内側や下がったところに明瞭な棱を作り出す点が特徴的である。

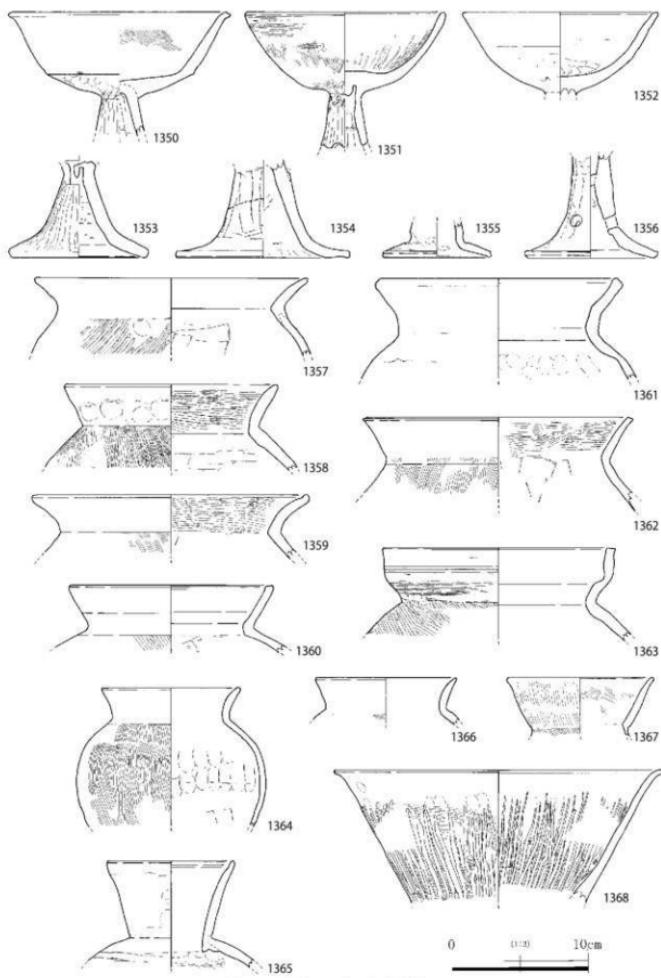


图175 流路1—4域 出土遗物29

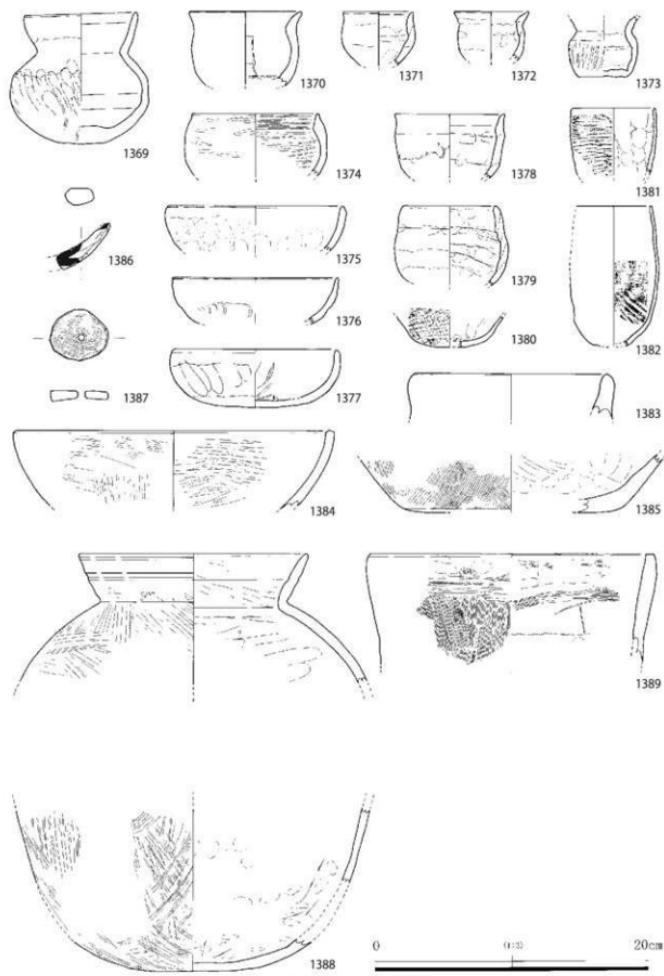


図176 流路1-4域 出土遺物30

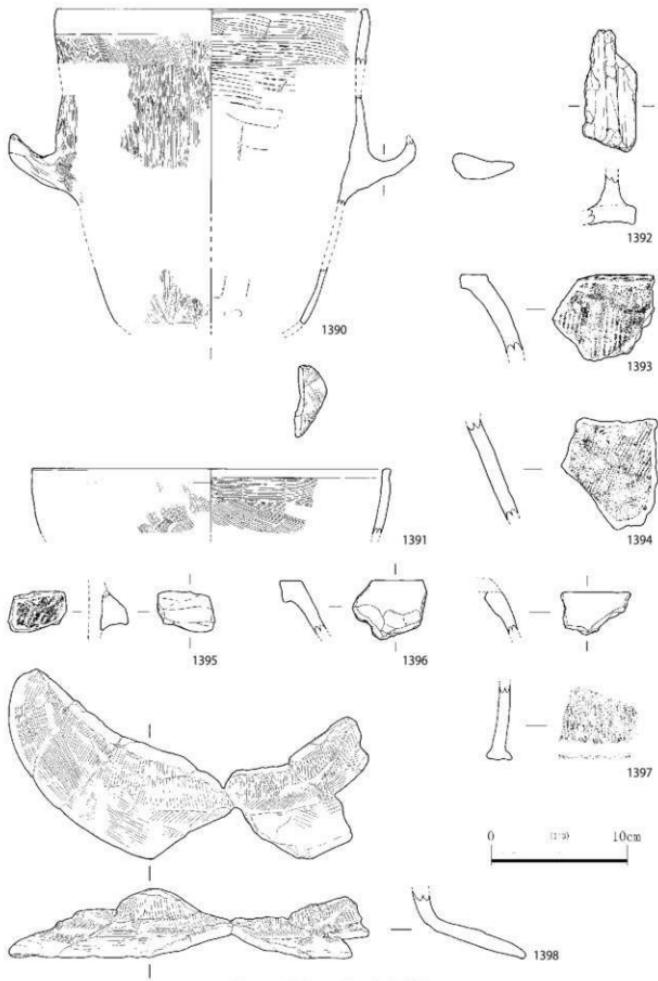


图177 流路1—4域 出土遗物31

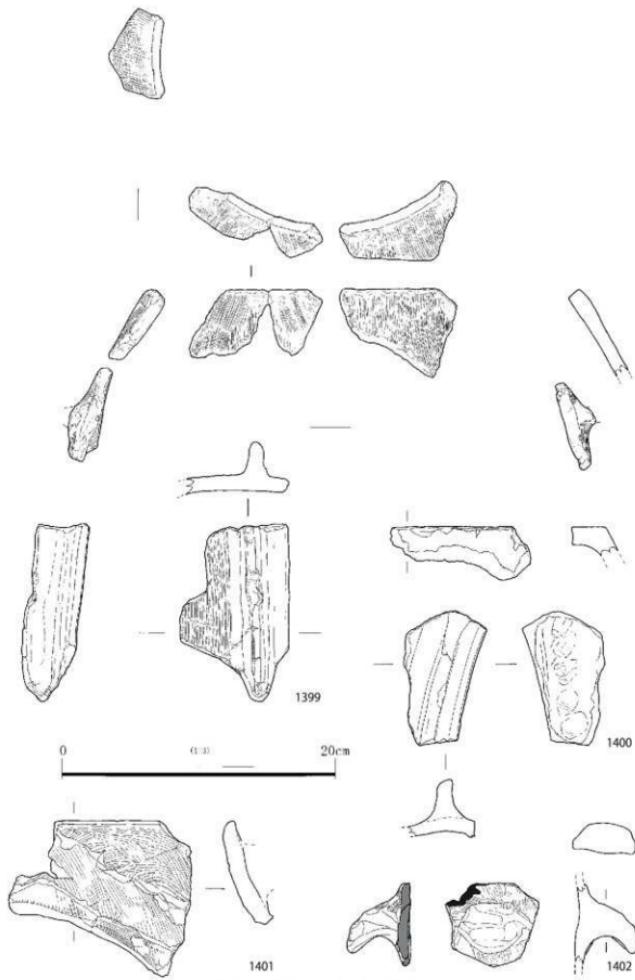


図178 流路1-4域 出土遺物32

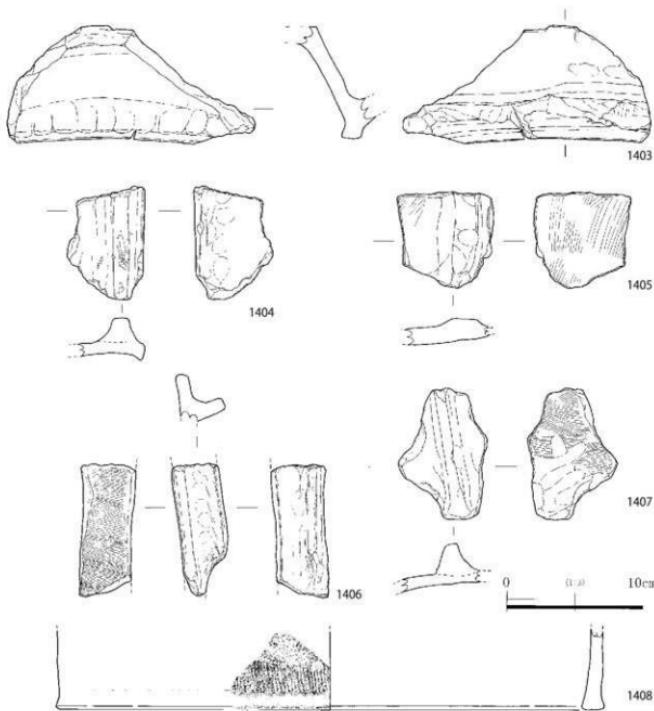


図179 流路1-4域 出土遺物33

内外面には丁寧なミガキが施される。1375~1377は壺で、1377を除き残存率は低い。1378~1383は製塙土器かと考えるものである。1378・1379は壺形を呈するもので、1380~1382は丸底のコップ形、1383は器壁の厚い壺形を想定する。1379は凹凸の著しい成形がなされ、調整も粗い。コップ形の中では1380はやや大型の部類に属するもので、外面には格子タタキが残る。1384は大型の鉢、1385も鉢かと考えるが、平底風の大型壺の底部の可能性もある。1389は壺の口縁部で、外面にはハケ調整のち、板状工具によるナデを横方向に施し、内面にも同様の調整を施すが、粘土紐の接合痕も残る。1386は把手付壺の把手部分、1387は体部片を再加工した有孔円板と考えられる。1388は平底風の底をもつ壺で、口縁部には突起ともいえないゆるやかな段をもち、部の外側調整には傷のようなハケメの痕跡を残す。図177~1390・1391は土師器壺で、1390は丸底で、4方向に楕円形の蒸気孔を配置するものと考えられる。1392~1398は移動式竈の小片である。破片個々が同一個体の部位であるかどうかは判然としない。1393・1394・1397

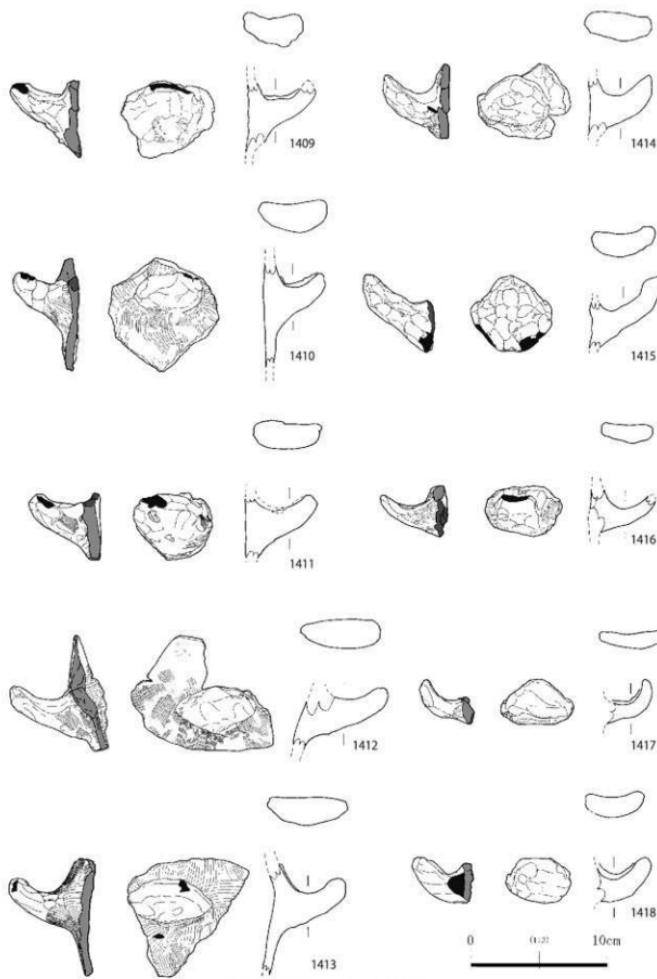


図180 流路1-4域 出土遺物34

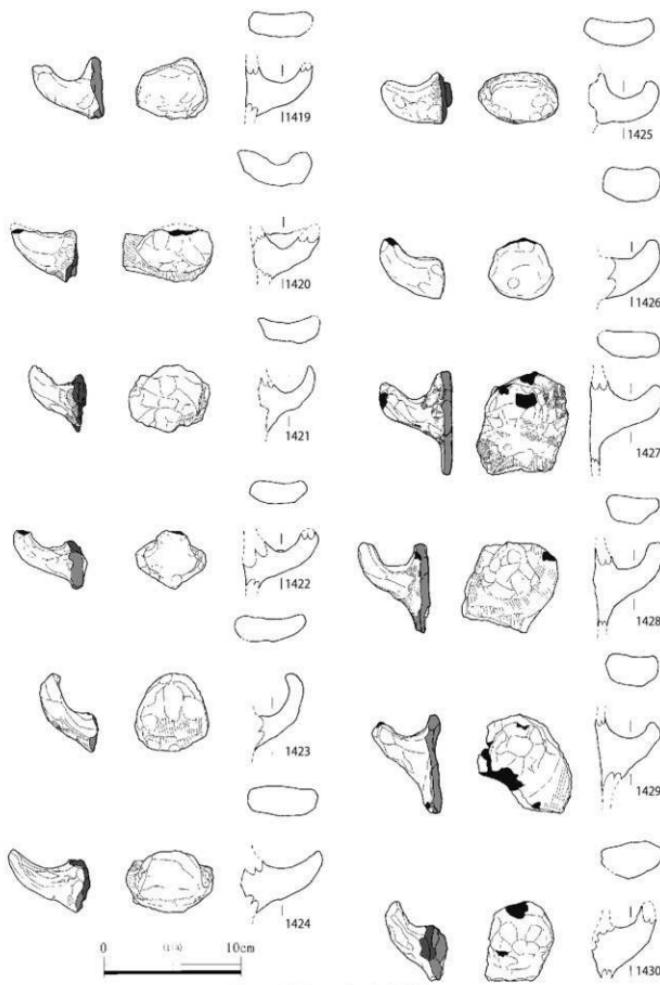


图181 流路1—4域 出土遺物35

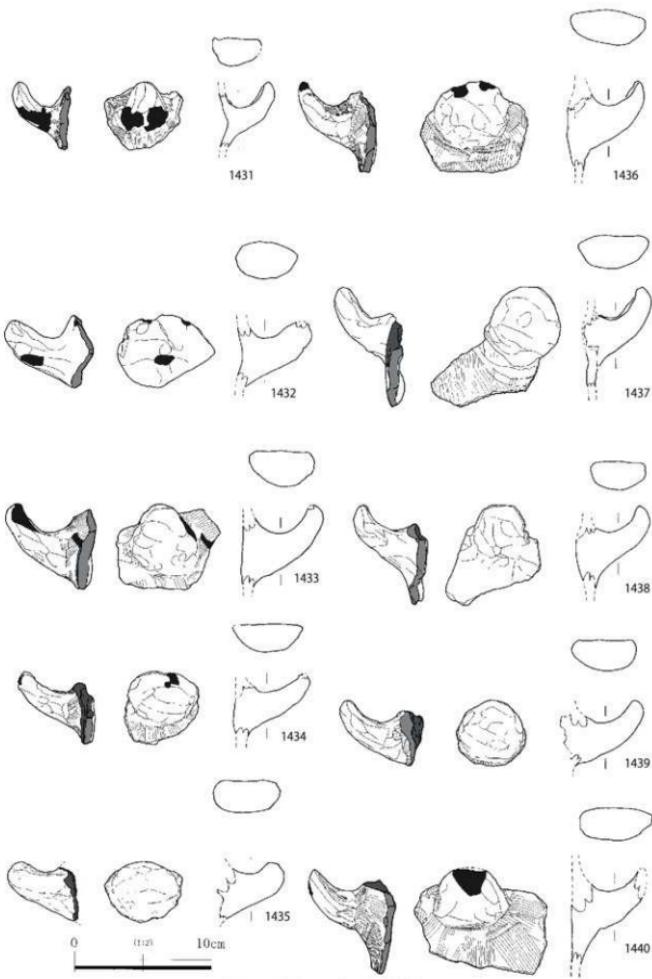


図182 流路1-4域 出土遺物36

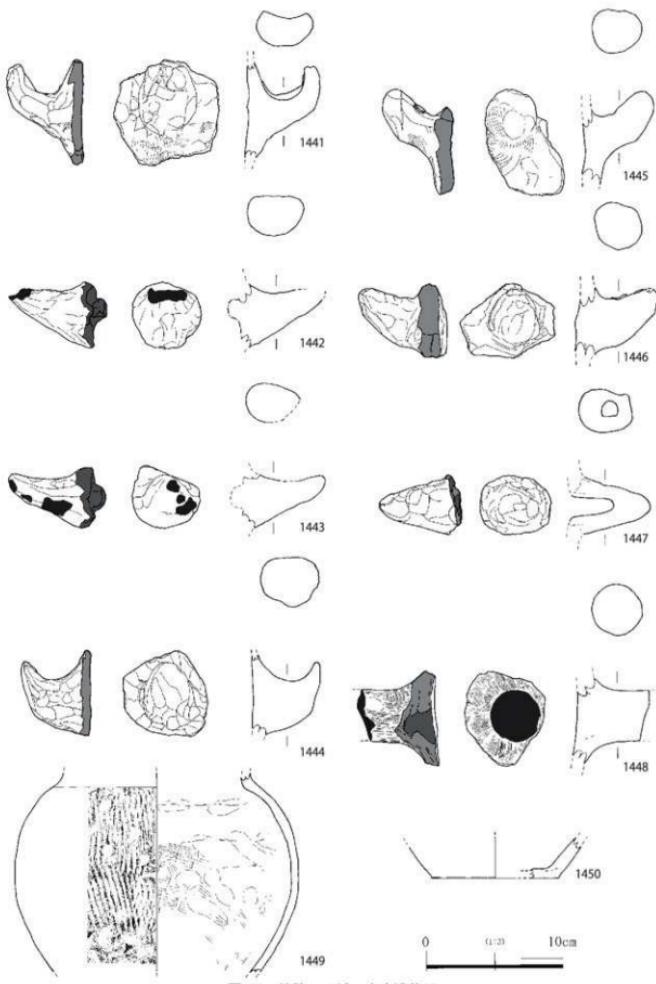


图183 流路1-4域 出土遗物37

は外面調整に平行タタキが用いられており、韓式系土器に分類すべきものである。遺存する部位は焚口、突帯、釜孔、底の部位があるが、1393・1396・1397の釜孔部は体部より内側にやや水平の部分をもつもので、1392は付け底、1398は曲げ底である。図178・図179-1403-1408にも移動式竈を示す。1399の釜孔部は体部の上端部に内傾する面をもつもので、底は付け底がつく。1401は付け底の剥離部分が残るもので、底を付ける以前の外面調整であるハケメが剥離部分に観察される。1402は1401と同一個体の可能性がある把手である。1403も付け底の基部付近であるが、1401とは調整や焼成の雰囲気が異なり、硬質である。図版213-3017は当初、鋳造などにかかる土製品の可能性を考慮していたものであるが、具体的な用途が不明であり、移動式竈の底基部の可能性も指摘されたことから、図版のみ竈とともに掲出する。図版180-1409-図183-1448には把手を示す。断面形状からは扁平なもの、やや厚みをもつもの、円形（棒状）のものに類別できる可能性があるが、それぞれの中間形態を示すものもある。側面観では上方に湾曲するものがほとんどである。1447・1448は他のものとまったく異なる形態をもつ。1447は尖頭状の形態をもち、内部が中空である。1448は断面が正円に近く、中実である。いずれも明確に把手とする根拠は少ない。

図183-1449-図186-1472には韓式系土器を示す。1449は甕と考えられるが、口縁、底部を欠き、全形はうかがい知れない。頸部に強いナデを施し、内面でも頸部と体部との境は明瞭である。外面には平行タタキの痕跡が残るが、内面には粘土紐の接合痕を残す。外面にはススコケが厚く付着する。1450は平底鉢で、わずかな残存であるが、精緻な成形が認められる。図184-1451は卵形の体部をもつ甕で、比較的分厚い器壁をもつ。外面には格子タタキに沈線が巡る。1452は瓶の口縁部であるが、外面には平行タタキが残る。1453は甕の底部付近かと考えられる低い器形のもので、外面には格子タタキが施され、コゲの付着が認められる。1454は鉢かと考えられる低い器形のもので、外面には格子タタキが施される。1456は瓦質の焼成がなされた小型の壺で、肩部には細い沈線と波状紋により紋様帶を構成する。1457も瓦質の焼成がなされた壺で、外面の加飾も1456に類似する。1458は韓式系土器の瓶、体部は土師器と同様の調整を施すが、比較的扁平な把手に上面からの深い切込みが施される。1459も瓶であるが、外面には平行タタキが認められる。1460は直接接合する箇所はないが、1459と同一個体の可能性が高い。また瓶の蒸器高に近い部位である1461も1459と同一個体の可能性がある。1462・1463は体部片であり、いずれも外面に網状紋タタキが認められ、内面には当て具痕が確認できる。1464-1472は把手で、上部からの切込みや、下面の刺突痕跡がみられるものである。1466・1467は上面からの切込みが下面にまで達しているもので、1467については切込みにより二分割された状態で出土した。切込み内面の観察ができたため、写真図版（図版219）にも内面をみせる形で示した。

図186-1473-1477はU字形板状土製品の細片である。特定できるものは突帯あるいは突帯の付属する部位に限られる。出土個体数は復元できないが、流路1においては1-4城において特徴的に出土する。

図187-1487-1486に示した土器は、03-5-10トレンチにおける調査で、弥生時代の層を掘削中に出土したものである。厳密に出土位置の再検証はできていないが、層位的には流路1の堆積土の残存を誤認して掘削した可能性が高く、ここに示すこととした。1478は須恵器壺蓋、1479は須恵器壺身片で外面にヘラ記号がみられる。1480・1481は土師器甕、1482は頸部にまでタタキの痕跡を残す甕である。1483は土師器瓶、1484は韓式系土器の甕である。1485-1486は韓式系土器の把手で、1485は上面からの深い切込みがみられ、1486は体部に平行タタキが認められる。

図187-1487-図189-1539には流路1-4城から出土した弥生土器を示す。後節で報告するように、

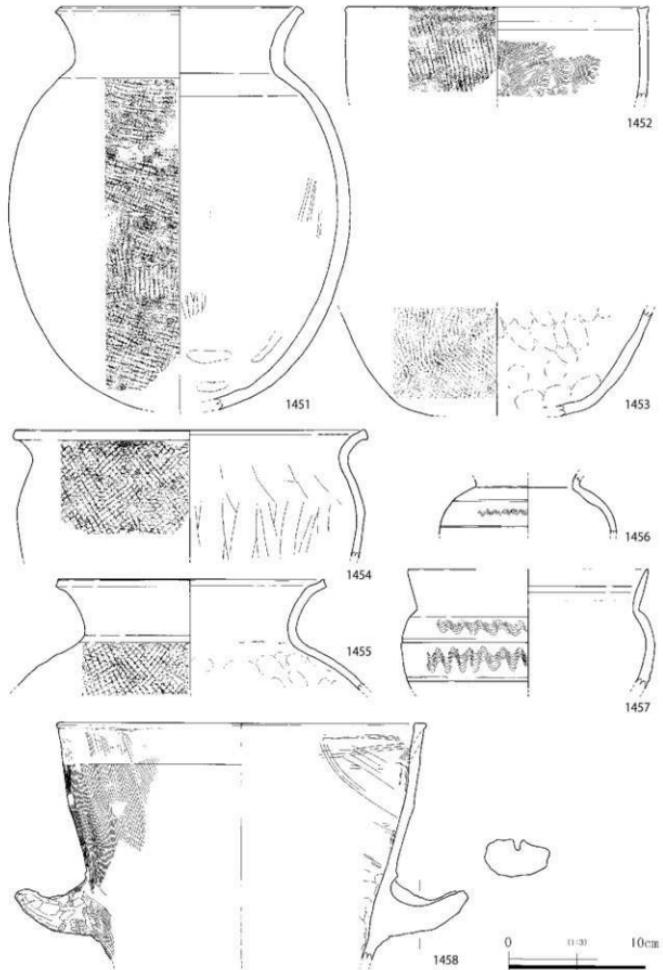


図184 流路1-4域 出土遺物38

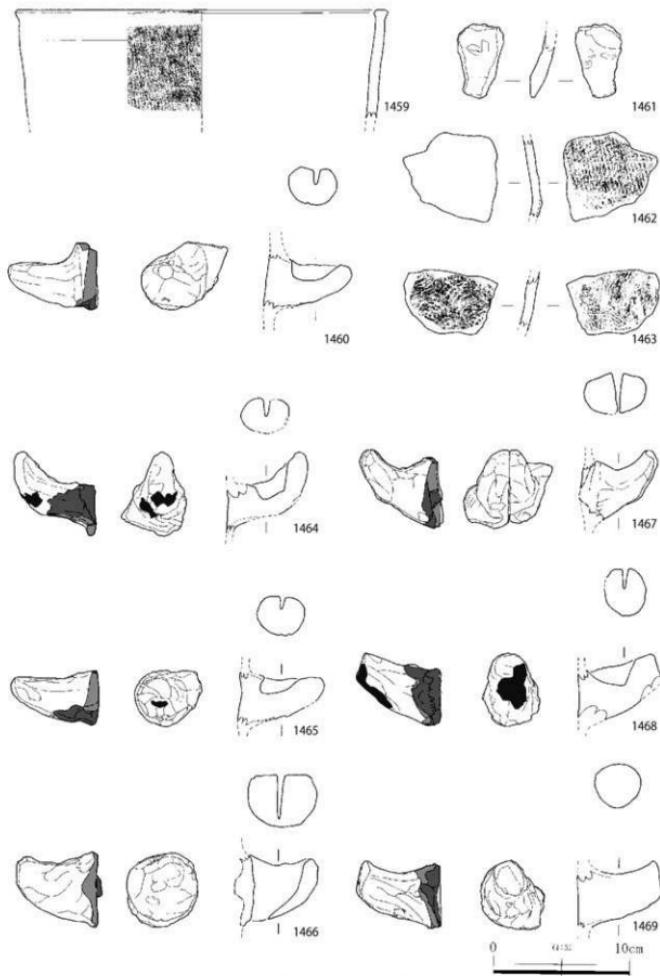


図185 流路1-4域 出土遺物39

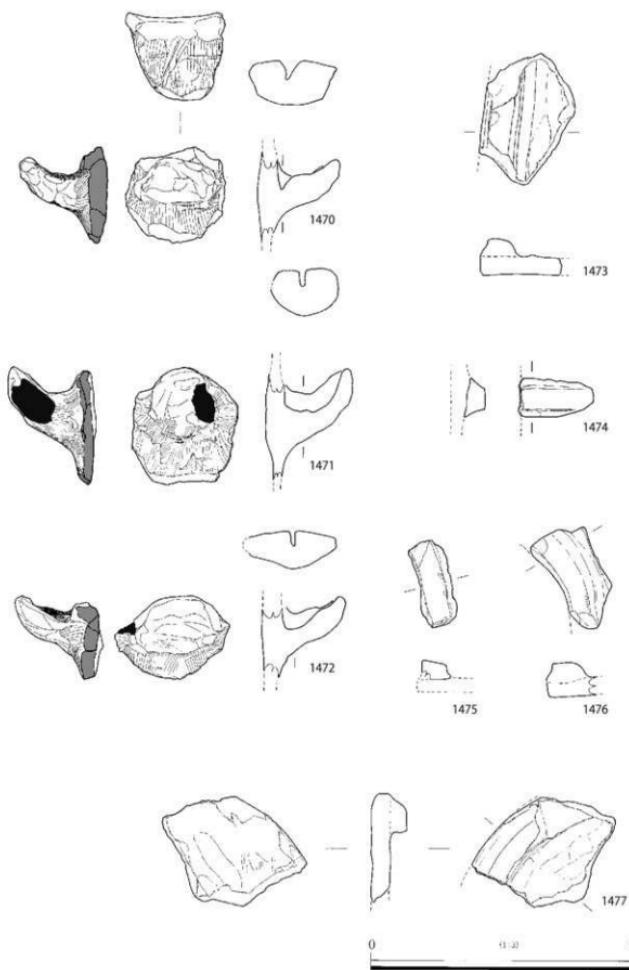


图186 流路1-4域 出土遗物40

流路1～4域南岸の下層には弥生時代中期の遺構面があり、遺構内や地表面に伴う土壤からは多くの弥生土器が出土している。ここに掲出する弥生土器は、流路1の侵食により流路内堆積物に含まれることになった弥生土器であると考えるものである。いずれの個体も残存率は非常に低い。図187～1488～図188～1503は甕で、口縁部ならびに底部付近の遺存する個体を図示し得た。短く外反する口縁部をもつものが多い。1487・1488は弥生時代後期の甕で、後期の土器は極少数である。1489は口縁部の接合痕が良く残るもので、口縁端部には工具によるナデの痕跡が残る。外面にスヌの付着が顕著である。1492はややおおぶりのもので、口縁端部外面にキザミを施す。1495・1497は口縁端部を上方につまみあげる形態をもつ。1496は短い口縁部をもつものであるが、頸部内外面を工具によるナデにより調整するが、粘土紐の接合痕を消す工程であり、結果外面には接合痕は残らないものの工具痕跡を多く残し、内面には接合痕が多く残されたままとなっている。1498は部分的な残存であるが、口縁部、底部が同一個体と考えられる。底部外面には葉脈痕が残される。1499も同じように極部分的な残存部位から口縁部、底部を認識した。肩部外面には器壁の剥離が多くみられる。1501は受け口状の口縁をもつものと考えられる。1504～図189～1516は甕で、1504・1505・1506は後期のものかと考えられる。1509は無頸甕で、口縁端部付近に穿孔がみられるが、残存率が低く、個数はわからない。1510は体部の破片で、外面の上位に櫛描直線紋、波状紋による加飾を行い、下半には丁寧なヘラミガキを施す。1512・1513は長頸に広口甕頸部の破片で、外面には櫛描直線紋が施される。1514も甕の頸部と考えられるが、外面には櫛描直線紋、葉状紋が認められる。1515も細片であるが、わずかに櫛描紋が認められる。1516も極細片ではあるが、算盤玉形の体部をもつものかと考えられ、屈曲部の外面には突帯を巡らし、突帯上に右下がりのキザミを、突帯下端の対応する位置に右上りの刺突を施し、合わせて絞形紋風の装飾をしている。1517～1534は底部のみ残存する個体である。1519・1520は後期のものであろう。1523は上げ底のもので、底自体の厚さは薄い。1518・1532も底部径に比して薄い底をもつ。1527・1528は輪台風の底をもち、外面には葉脈と思われる痕跡を残す。上げ底の部分にも痕跡が残る点は製作工程を考える上で興味深い。1534～1536は高环の环部かと考えられるもので、1543は口縁部の端面外側にわずかにキザミを巡らし、1536と外側を丁寧なヘラミガキで調整する。1357は椀で、外面はタキ調整を残す。後期のものかと考える。1538・1539は高环の脚部で、それぞれ短脚、長脚のものである。

図190には流路1～4域で出土した鉄器を示す。流路内出土の鉄器には錯化の進んでいないものが多く、酸素から遮断された埋没環境であったものと推測する。1540は釣り針である。長さ7.6cm、幅2.4cmを測り、軸部の厚さは0.3cm、腰曲げ部、先曲げ部の厚さは0.2cmを測る。腰曲げ部から先曲げ部にかけてわずかなねじりがみられる。軸部の下半から湾曲部にかけての断面形状について、湾曲の内側が隅丸方形状を呈し、外側が方形であり、湾曲に適した形状をもっているのではないか、という指摘を村上基通氏よりいただいたが、微細な形態であり、図面において表現はできなかった。表面に薄く錯が覆うが、比較的残存状態の良好なものである。1541は小型の鉢と考えられるもので、刃部をほぼ直角に折り曲げている。復元される残存長は11.6cm、刃部の幅は1.4cm、袋部の幅は1.5cmを測る。流路出土のものとしては比較的錯が進行している。1542は刀子で、出土時には鹿角の柄に装着された状態で出土したが、鹿角について劣化が急速に進み、一部を写真において示すのみである(国版262)。鉄器部分の残存長8.8cmを測る。刃部は茎部に比べ残存部位が少ないようで、劣化の進行が進んだものと推測する。茎部は系を格子状に巻いた痕跡が残り、柄との接合を強化する工夫と考えられる。刃部は上から見て右方向に曲げられており、1541・1543とともに祭祀的な行為を想起させる。1543は短剣と考えるものであるが、鉗との区

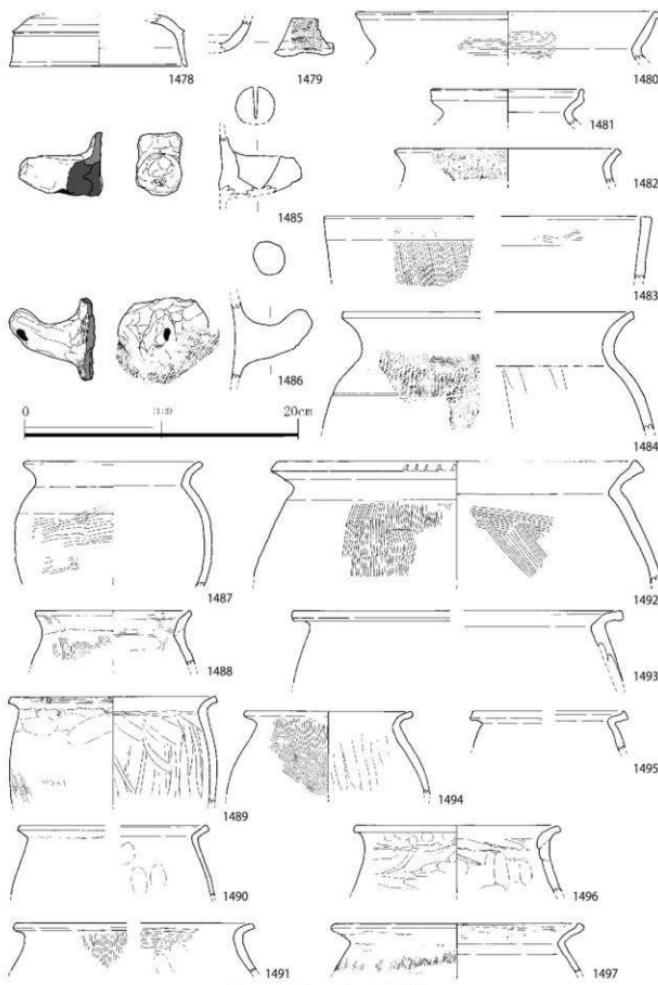


図187 流路1-4域 出土遺物41

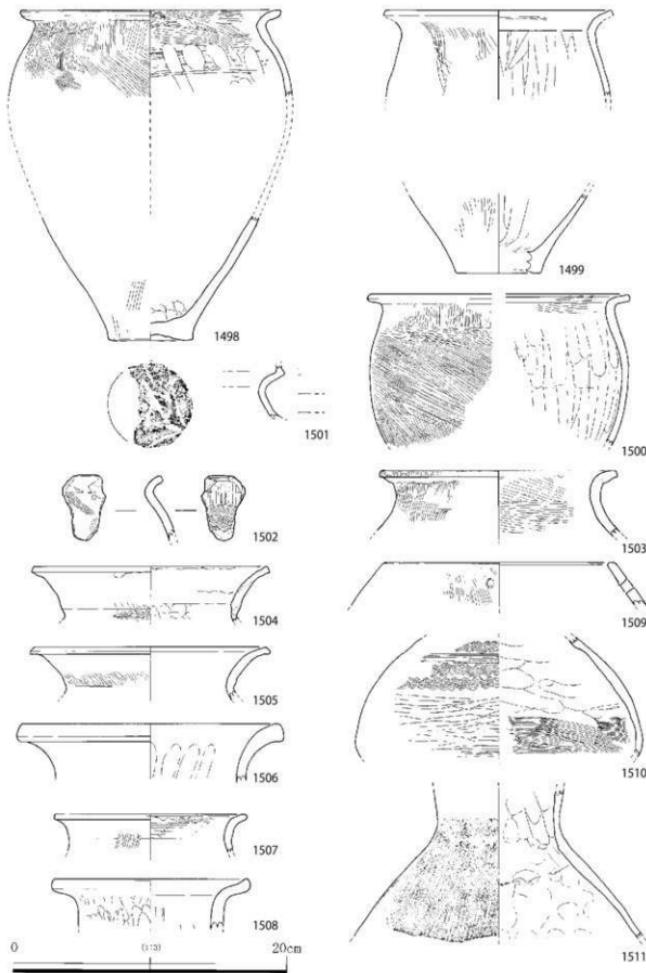


図188 流路1-4域 出土遺物42

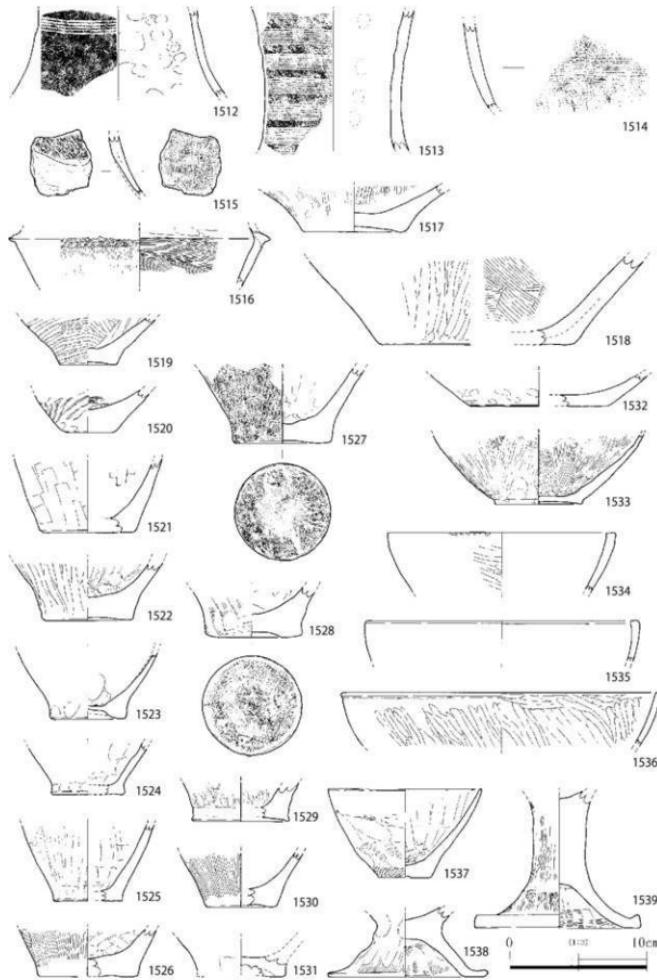


図189 流路1-4域 出土遺物43

分は難しい。残存長26.7cm、最大幅3.4cm、刃部の厚さ0.5cmを測る。茎は長さ2.8cm、幅1.7cmで、レントゲン撮影によると先端から1.1cmの部分に径3mmほどの目釘孔が確認できる。口巻きに使用された糸が残存しており、この保存処理、付着土のクリーニングが未実施のため、残存の有無も含め、把の構造について詳細な観察はできていない。刃先から16cm付近で約20度、曲げられているが、全体には鉄化のみられない遺存状態をみせる。1541は長頸鎌で、残存長7.6cm、鎌身部の幅1.2cm、厚さ0.3cmを測る。茎が短く折損した可能性があるが、全体的に遺存状態は良好で、鉄化はほとんどみられない。刃部は両側に刃をもつが、上からみて左側の刃には研ぎ出された痕跡があるが、右側の刃はやや膨らんだ刃面の断面をみせ、研ぎが明瞭ではない。関部には鍛造時にたたいた際のバリが段差として残されていることが確

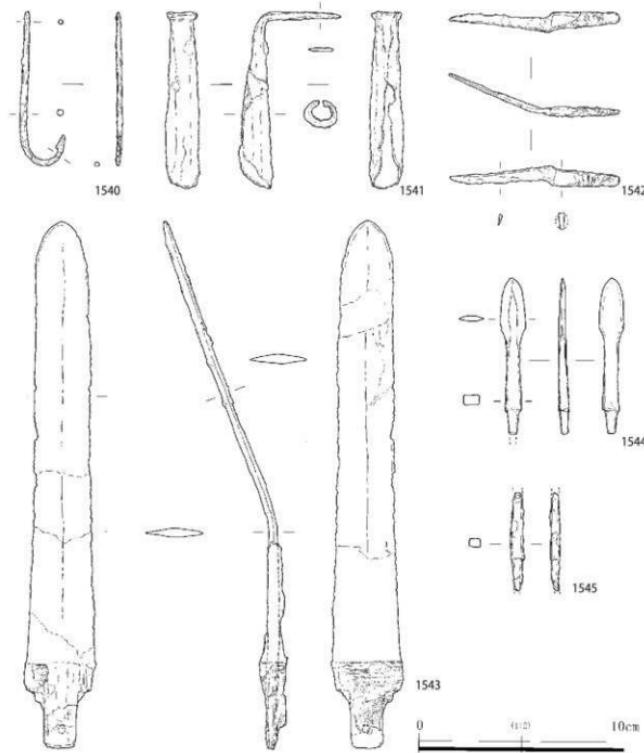


図190 流路1-4域 出土遺物44

認できる。1545も長頸罐と考えられるが、罐身部を欠く。残存長4.8cm、幅0.65cmを測る。やや鋸化の進んだものである。

図191～図199には流路1～4域で出土した石器、石製品類を示す。古墳時代のものを中心とするが、土器類同様、下層の弥生時代のものが流路の侵食により堆積土に混入したと考えられるものがある。また流路堆積層の洗浄により検出した玉類については、多くを写真のみの掲載としたが、滑石製管玉、ガラス小玉、赤玉質流紋岩製の白玉についても図示した。

図191～1546・1547は滑石製軽輪で、いずれも線刻により装飾を加えるものである。1546は、上面は無紋で、側面の斜部分に圓線と鋸齒紋を配置するが、線も細く、鋸齒紋の上下端が圓線を越える箇所があるなど、粗雑な施紋である。1547は上面に圓線と星形紋のモチーフを見て取ることは可能ではあるが、本来の意匠を残しているとは言いがたい。側面の斜部分には鋸齒紋を配するが、断片的であり、ほぼ形骸化しているといえる。また1547には線刻に赤色顔料の残存がみられる箇所がある。1548は滑石製子持勾玉の下端部と考えられ、側面の「子」が一部残存する。1549～1551は滑石製有孔板で、やや不整形なものである。1552は滑石製の模造品かと考えるが、候補となる器物は斧かとも推測するがよくわからない。1553～1555は滑石製の管玉で、1554は白玉などとともに土壤洗浄で検出した。1556は青色をみせるガラス製小玉で、外径、厚さともに4mmを測る。同じ色調をみせる流路1～1域出土のガラス製小玉（図111～485）と比べると、外径にはほとんど差は無いが、厚さは1556が厚い。1557は赤玉質流紋岩製白玉で、700点を超える滑石製白玉の中に1点のみ含まれていた。1556・1557ともに土壤洗浄により検出したものである。同時に検出した滑石製白玉については写真のみの掲載としたが、色調の分類、法量、形状の分類については別表にまとめた。石材の詳細な分析は行わなかったが、複数の材が認められ、それに対応した法量の分布を示す可能性がある。形状や製作技法については材に対応した特徴的な分布を示すことはないと考えられるが、複数の製作地において生産されたものが混在している可能性は高いと考えられる。また破片と化した白玉も60点ほど検出している。この破損が、白玉の使用時にそうであったのか、調査時、あるいは土壤洗浄時に破損したものであるのかについては判断できないが、白玉が連の形で使用されたのではなく、散布行為におもきがあったのであれば、破片のものであっても十分その役割を果たしたものと推測する。同様の理由で、不定形有孔板と呼ぶべき滑石製品（図版264～2121～2123）もわずかではあるが、混ざっているものと考える。

1558・1559は流紋岩製の砥石で、1559は極一部が使用された段階で投棄されたものと考えられる。1560は砂岩製の砥石である。図192～1562は砂岩製の敲石、1563は砂岩製の砥石で、線刻状の使用痕を残す。図193～1564～図196～1571も砥石と考えられる石材で、1564・1569はざくろ石黒雲母流紋岩、1565・1568・1570・1571は砂岩、1566は輝緑岩、1567は頁岩である。1565は玉砥石か、太い線状の使用痕が残る。1570・1571は砥石として使用されたと考えられる研磨面と敲打痕の残る部分があり、多様な用途に使用されたものと考えられる。1572は砂岩製で、明瞭な使用痕は確認できないが、磨石として使用されたものと考えられる。1573は砂岩製敲石で、敲打痕が認められる。図197～1574～1578は円礫の形状をもち、わずかな敲打痕、擦痕が縁辺にみとめられる。敲石あるいは磨石かと考えられるが、自然礫を含む可能性も否定できない。石材は1557が黒雲母流紋岩である以外は砂岩である。1579も砂岩製で、大型の材の破片であるが、一部に赤色顔料？が残る。1580は頁岩製のもので、錐状の形態をもつ。一方の端部に剥離、破損痕跡があり、使用痕の可能性がある。磨石として用いられたものかと考えられる。図198～1581は台形状の整った形態をもつもので、下端面は滑らかな曲面をみせる。玄武岩製で、磨石と考

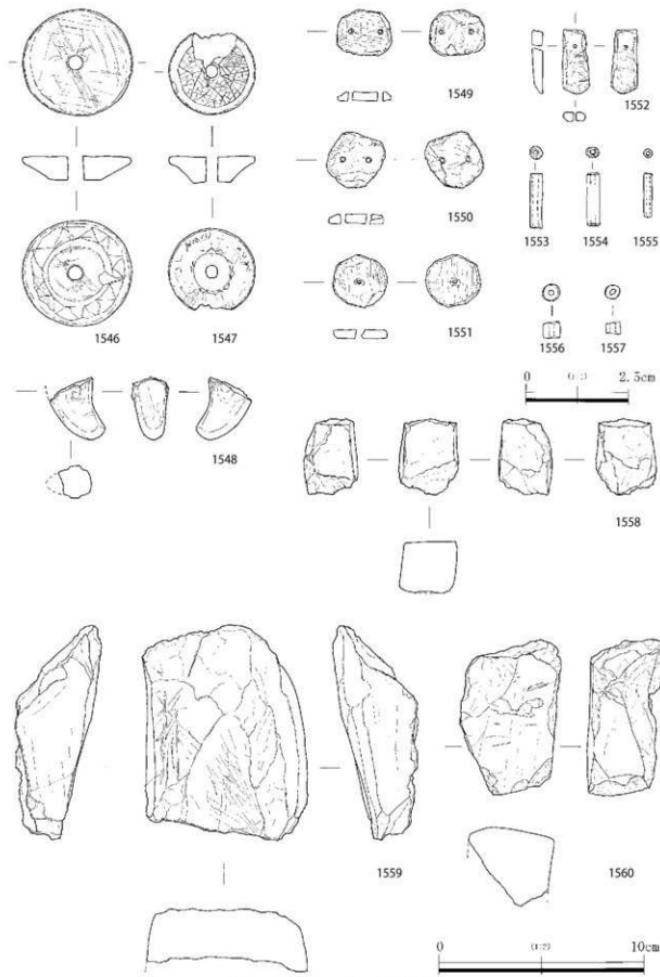
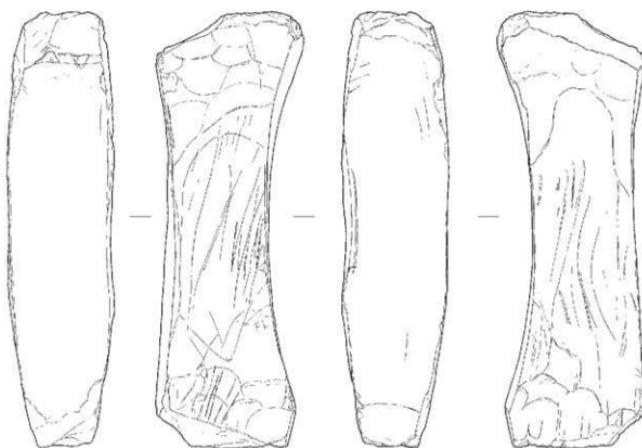
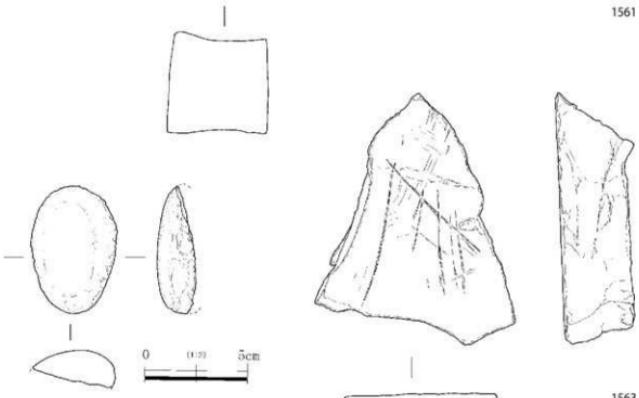


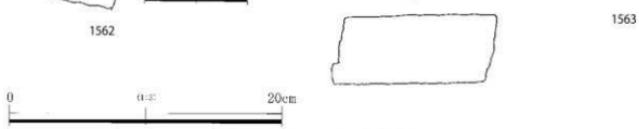
図191 流路1-4域 出土遺物45



1561

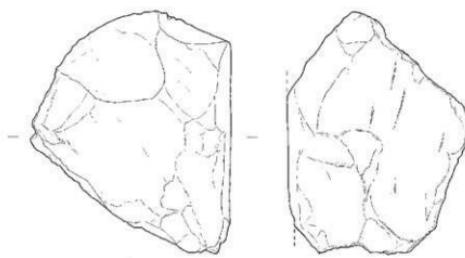


1562

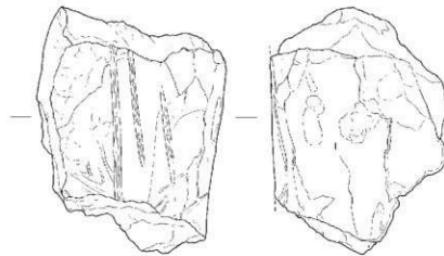
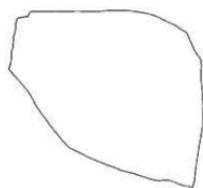


1563

圖192 流路1-4域 出土遺物46



1564



1565

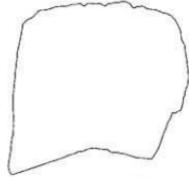
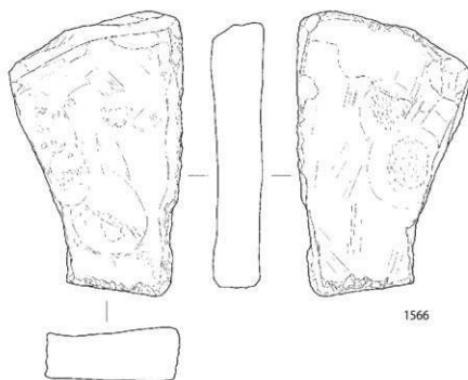
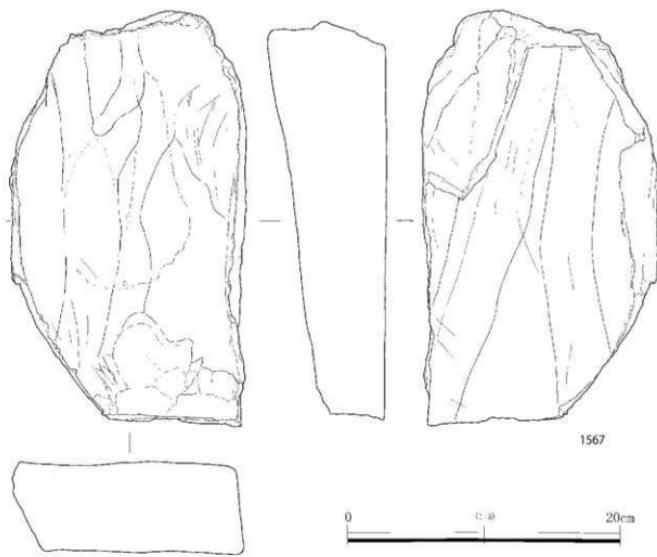


図193 流路1-4域 出土遺物47



1566



1567

0 10 20cm

図194 流路1-4域 出土遺物48

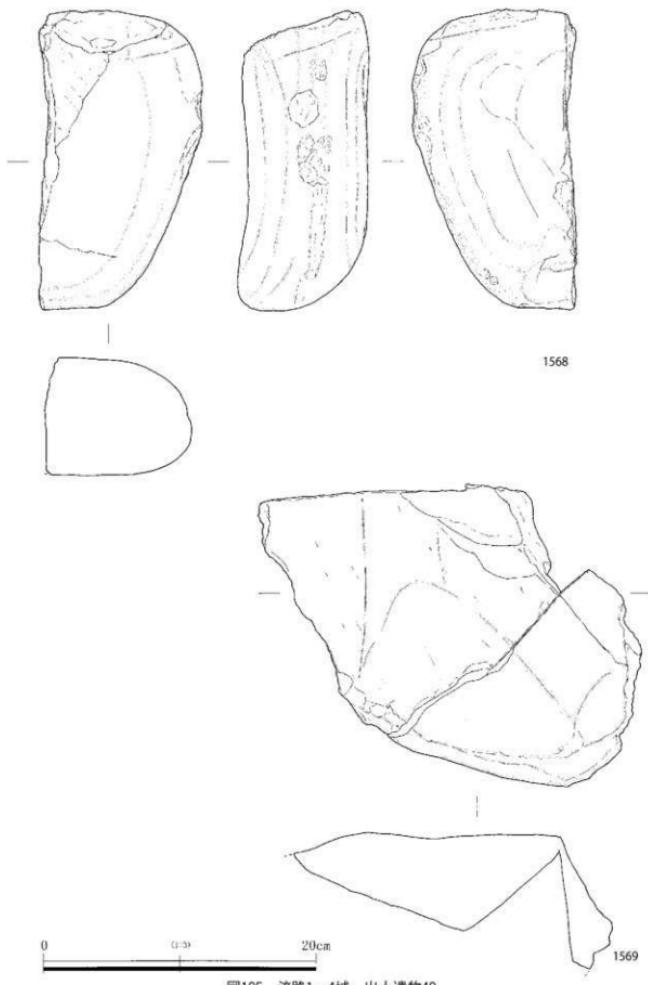


図195 流路1-4域 出土遺物49

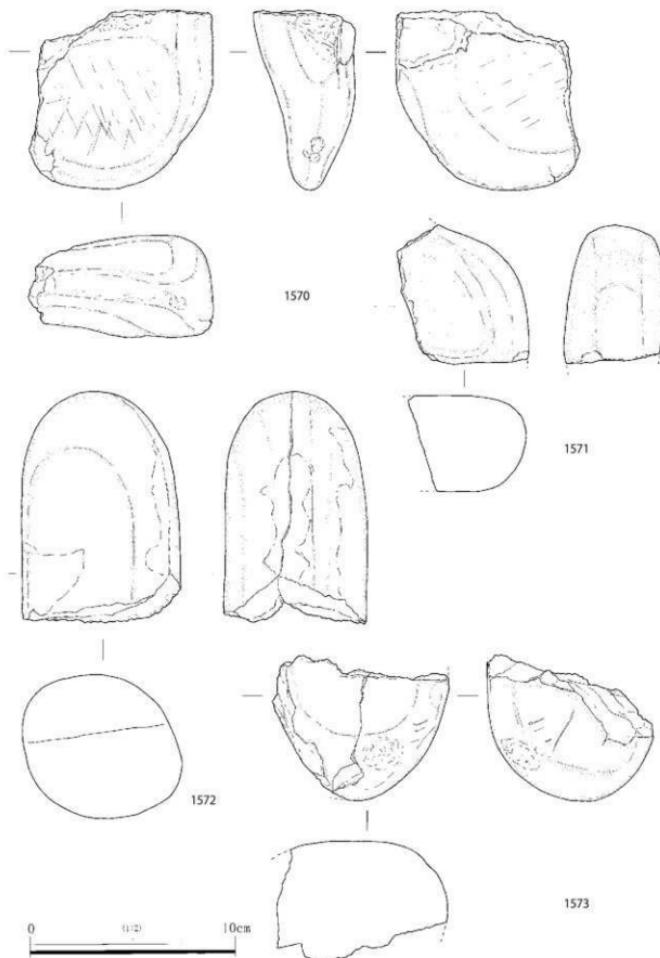


図196 流路1-4域 出土遺物50

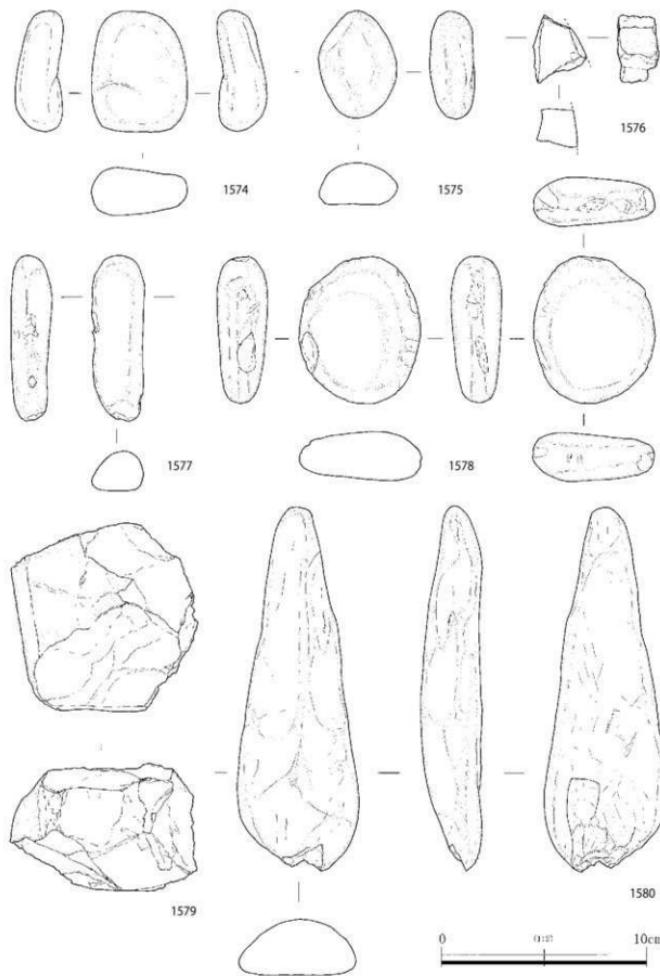
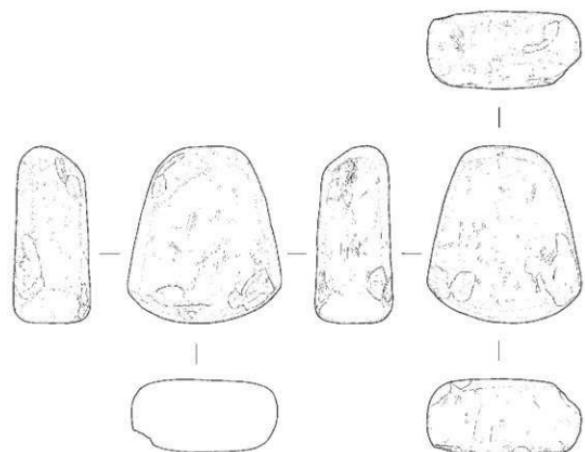
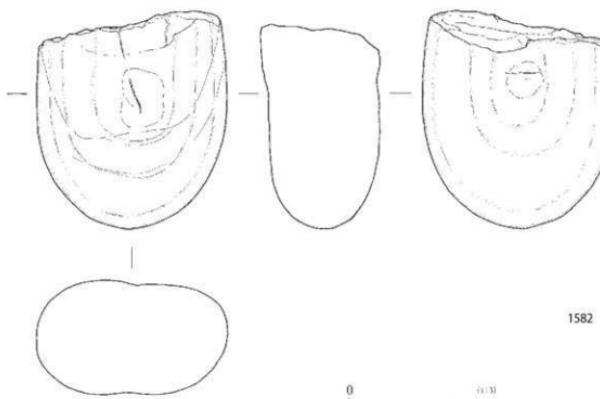


図197 流路1-4域 出土遺物51



1581



1582



図198 流路1-4域 出土遺物52

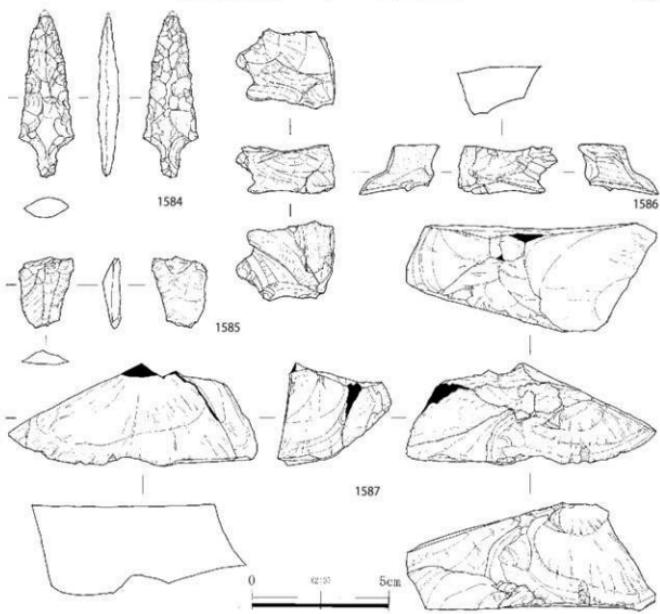
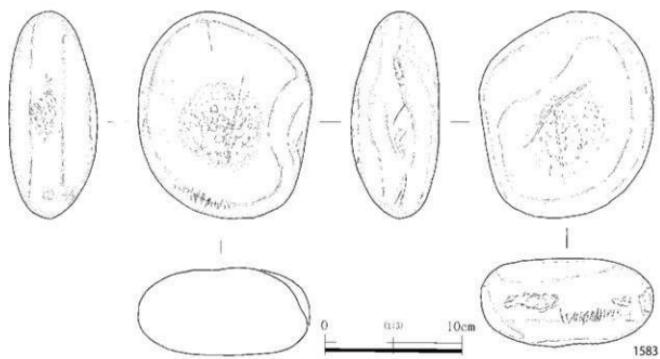


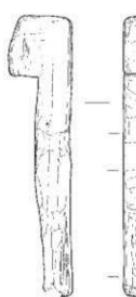
図199 流路1-4域 出土遺物53

える。1582ははんれい岩製の凹石かと考えられるもので、一部の残存であるが、上面下面にくぼみがみられる。図199～1583は砂岩製の凹石で、上面と下面にはくぼみが形成され、周囲3辺に敲打痕や擦痕がみられる。多様な用途に供されたものと考えられる。1584はサスカイト製の有茎式石錠で、先端の一部を欠くが、残存長5.9cm、最大幅2.0cm、最大厚0.8cmを測る。重量は6.9gで、大型の石錠である。1585はサスカイト製の剥片で、主要剥離面がよく残るものである。重量は2.6gを測る。1586もサスカイト製の剥片で、重量は14gを測る。1587は長さ3.7cm、幅9.2cm、厚さ4.1cmを測る。大型の剥片で、重量は106.3gを測る。1585・1586・1587はともに、斑晶の発達、風化面、リング・フィッシャーの発達などの面において熱処理された剥片に特徴的な痕跡が認められ、被熱の可能性が指摘される。

写真のみ掲載した石製の遺物は49点あるが、細片と化したものが多く、厳密に用途を特定できないものも多い。砾石には2904・2905・2913・2918・2922・2970がある。2904は頁岩製で、残存長約30cm、厚さ約10cm、重量9kgに及ばずかという大型のもので、上面には線状の傷を含む使用痕跡が顕著である。2905も残存長25cm、厚さ9cm、重量8.9kgのものであるが、使用痕の残る範囲は比較的狭い。台石と考えられるものに2906～2908・2910・2911・2914～2916・2917・2969・2976がある。2906は大型の台石で、残存長21.0cm、幅15.5cm、厚さ10.3cm、重量6450gを測る。上面に敲きによる痕跡が残る。敲石かと考えるものに2919・2920・2921があるが、敲打痕の残るものにも磨石として使用されたものも含まれていると考える。明瞭な使用痕跡の認められないものを自然石と称するが、元々、礫類の堆積する環境とは考えがたいこともあり、もち込まれて投棄されたか、何らかの用途があったものかと考える。2924・2925・2954・2957～2961・2963・2968・2972・2973・2980・2981・2985～2993・3001がこれに該当すると判断した。また、剥片には2966・2967があるが、2966はホルンフェルス化した頁岩、2967は無斑晶ガラス質安山岩である。いずれも路流に伴うものの、下層の弥生時代の構造に伴うものが混在すると考える。

図200～図206には木製品を示す。製品として理解できたものを中心に図示するが、これ以外に樹種同定のみ行った杭などの材については第5章第2節に表1において記載する。

図200～1558はコナラ属アカギシ亜属を用いた部材で、用途は厳密にはわからないが、一方を鉤状に加工したもので、表面は丁寧に整えられている。あくまで想像ではあるが、倉庫扉の門など、別部材に組み合わせて使用するものかと推測する。1589は背負子と考えるもので、樹種はサカキである。背負子は流路1～3域で出土した図133～762があるが、材の太さや細部形状に違いはあるものの、全体的な形状は同様である。基部と斜め上方に延びる爪部からなり、基部の先端（下端）には頭部を削りだし、若干の縦擦れ痕跡が残る。爪部の先端は欠失するが、762を参考にすると頭部を削り出していた可能性がある。基部は比較的扁平な鈍鉗形の断面形状をもち、背面は平坦である。1590はアカトリで、樹種はケヤキである。遺存状態は悪く、基部から底の一部と一方の側が遺存する。したがって確定的な法量は深さが6cmということに限られる。1591は腕木状の製品で、樹種はマツ属複維管束亜属である。本体を失い、先端部分にも加工痕があるが、欠損しているものと考えられる。形状は蓋の腕木に類似するが、腕木の長さがやや短いと考えられるところもあり、別の製品の一部である可能性もある。1592・1593は用途、名称は不明であるが、棒状の製品で、1条の溝をもつ。樹種はそれぞれイヌガヤとカヤである。図201～1594は方形の小型槽で、不整な直方体に加工した材の、一方の小口寄りに方形の縁り込みを施す。全体の法量に比べ縁り込みは浅い印象がある。樹種はマツ属複維管束亜属である。1595は弓の弓幹と考えられる部分で、樹種はアサイ属である。やや扁平な本体から細い突起をのばす。突起部の長さは7mm程度であり、弦を張った痕跡はみられないため、用途、名称も推測の域をでるものではない。1596は三稜



1588



1588



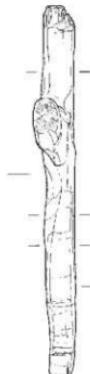
1588



1588



1589



1589



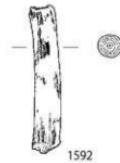
1590



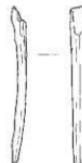
1591



1592



1593



0 10cm 20cm

図200 流路1-4域 出土遺物54

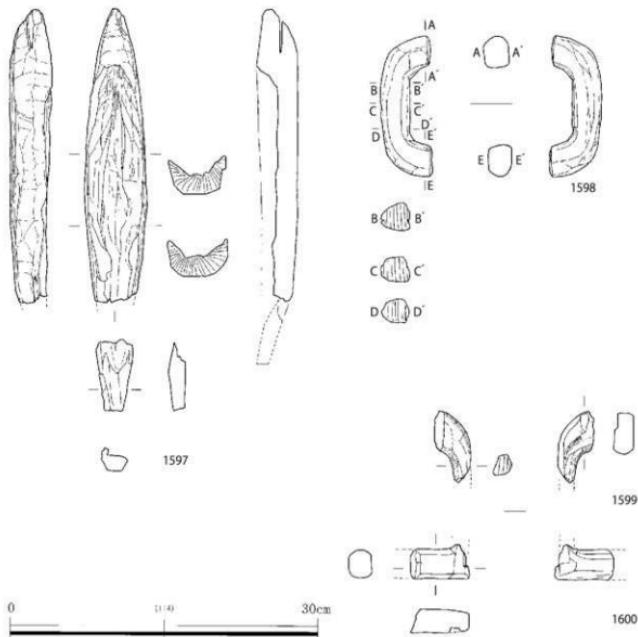
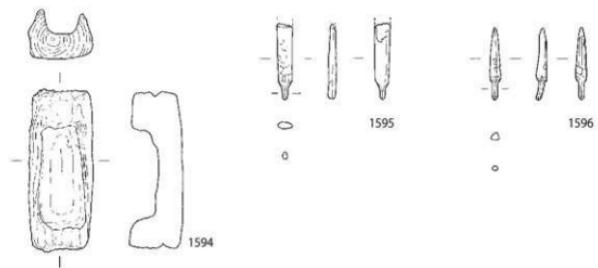


図201 流路1-4域 出土遺物55

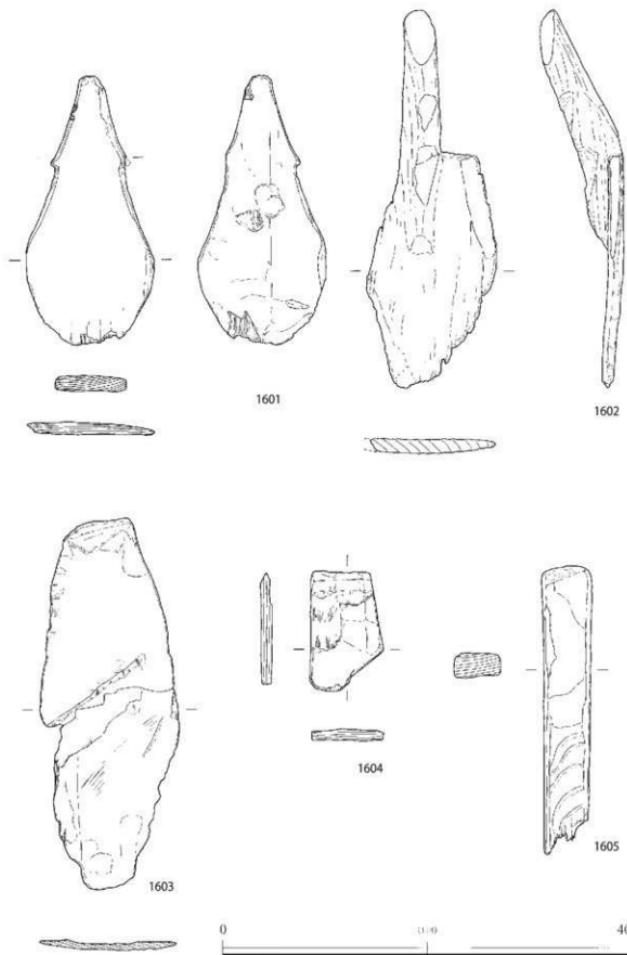


図202 流路1-4域 出土遺物56

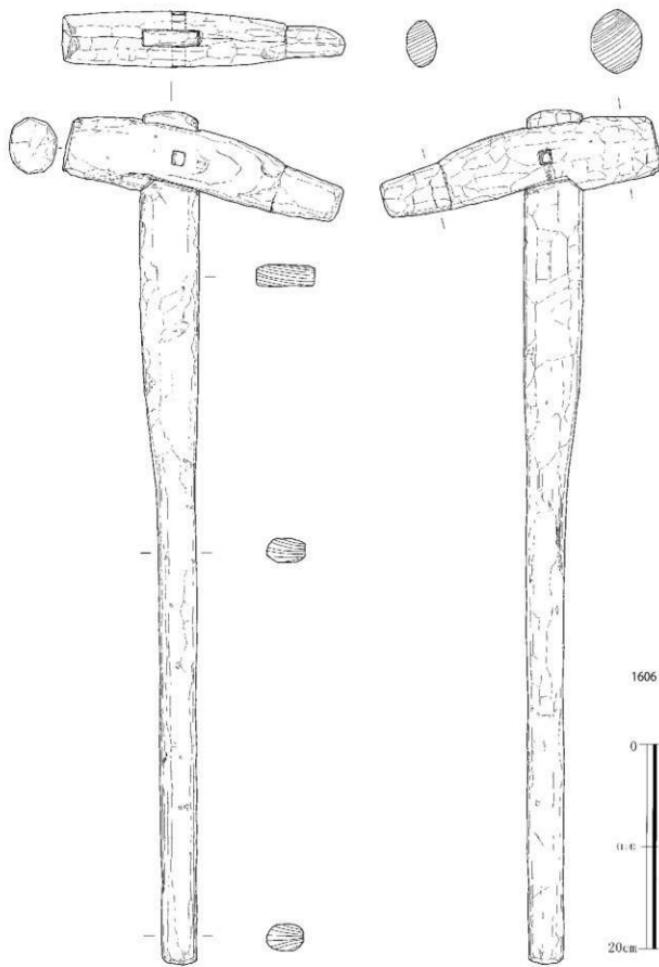
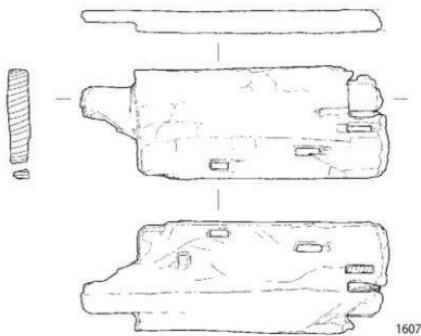
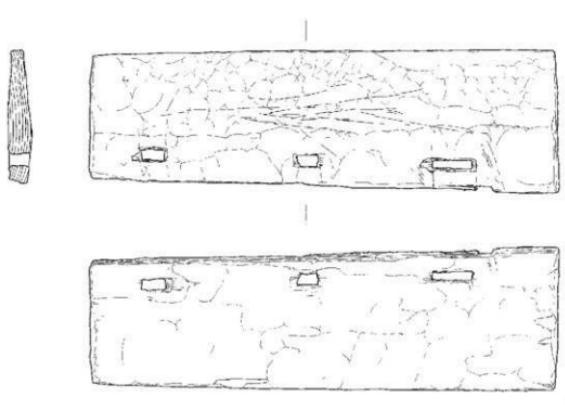


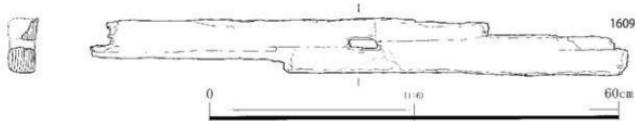
図203 流路1-4域 出土遺物57



1607



1608



1609

図204 流路1-4域 出土遺物58

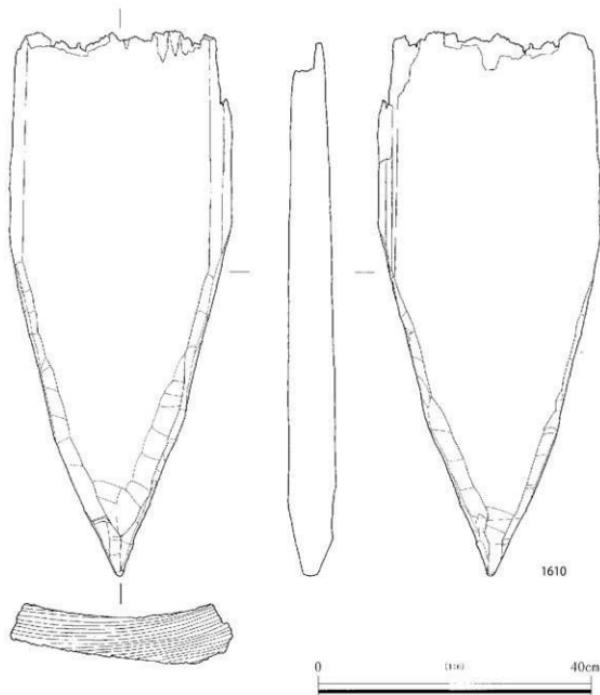


図205 流路1-4域 出土遺物59

鐵で、残存長7.1cm、幅1.0cm、厚さ0.8cmを測る。鐵身の先端部を欠損する。やや湾曲がみられるが、茎部に顕著である。後に傷があるが、実際に使用されたものであるかどうかはわからない。樹種はモミ属である。1597は舟形木製品と称されるもので、先端の一部を欠くが、別の個体が同一個体の可能性があり、併せて図示した。面取りを施した丸太材の先端を尖らせ、練り込みを施したもので、断面形状からは練り込みが浅い印象がある。形代であろう。樹種はヤナギ属である。1598~1599は馬具を構成する鐙の残欠と考えられる。1598はスダジイを用い、隅丸方形の輪部をもつ鐙と考えられる。輪の内側の加工をみると、やや平坦に調整した部分があり、これが足を乗せる脚とすると、残存部位は脚辺と考えられる。1599・1600は同一個体の残欠と考えられ、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。極小片のみの残存であるので、復元部位の推測も難しいが、材の厚みの変化と内側部分の直線的な加工から、釣鐘形の輪部をもつものと推測しておく。図202-1601はナスピ形鐙で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。水滴

形の平面形をもち、上端から8cm付近に突起を削りだしている。刃の部分は扁平であるが、先端に欠損があり、劣化も進行していることから、鉄製刃先の装着については良くわからない。1602は一本作りの鎌で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。扁平な刃部に約25度の角度をもって柄が取り付く形状をもつ。全体の遺存状態は悪い。1603は農具かと考えられる薄い材である。樹種はコナラ属アカガシ亜属であるが、遺存状態が悪く細部は不明瞭である。1604も用途不明の材である。板状に加工され、表面に加工痕跡をよく残す。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。1605は断面形が長方形の棒材である。端部をやや丸く加工するが、基本的に角をよく残す形態をもつ。表面の加工痕をよく残すが、具体的な用途は不明である。樹種はツガ属である。図203-1606は縦斧の柄で、柄、斧台、両者を留める木釘からなる。樹種はいずれもアカガシ亜属である。斧台は長さ27cm、幅7cm、厚さ5.4cmのもので、先端6cmの部分に鉄斧の装着部を削りだす。柄は長さ83cm、幅5.8cm、厚さ2cmを測り、先端から30cm付近では断面形を方形に、それより持ち手に近い側を断面形円形に作っている。現代の工具の柄と同じである。柄の先端を、斧台の方形に貫通させたはぞ穴に挿入し、木製釘で固定する。装着角度は約75度程度である。木釘孔は正方形のもので、木釘は断面形が円形のものを打ち込んだようである。図204-1607・1608はともに準構造船の舷側板で、二次利用のために再加工されたものと考えられる。1607はスギ、1608はヒノキである。1607は厚さ3cm程度の板材で、貫通する長方形の穴が4ヶ所あり、縦に並ぶ穴のうちのひとつには巻かれた樹皮と、それを固定する木栓が残される。1608は最大厚3.4cm、上方へ厚さを減じる板材で、材の下より、長辺に沿って長方形の穴を3ヶ所に配している。表面には加工痕を顕著に残し、遺存状態はよい。1609は用途不明の材で、断面形が方形の棒材の中央付近に長方形の穴（はぞ穴？）が配されるものである。樹種はスギである。図205-1610は流路1-4域に構築された、杭列5に転用された材で、残存長80cm、残存幅32.9cm、厚さ7.6cmの大型材である。出土状況から推測すると、杭として再利用する際に先端を尖らせる加工を施したと考えられ、本来は内側を削り抜いた丸太材であったと考えられる。材の規模、形状から推測して、本来は船の本体部分であったと推測する。樹種はスギである。

図206には長尺の材を示す。1611は杭列2に用いられた杭材である。最大径15cmを測る大型の材で、樹種はヒノキである。先端を加工し、尖らすが、本来は柱などの材であったと推測する。1612も大型の杭材で、長さ1.5m、径12cm程度を測る。樹種はスギで、規模の面からはやはり柱材などの再利用ではないかと推測する。流路に投棄された状態で出土した。1613は用途不明の材で、断面形が長方形の材に、2列に方形の穴を配置するものである。残存長は145cmを測る。穴の間隔は約30cm程度であり、規則的な配置である。両端部の形状は欠失があり定かではないが、一方にははぞ穴の残れと考えられる痕跡を残す。樹種はスギである。1614は天秤棒かと考える、ゆるやかに湾曲する棒材である。残存長は168cmを測る。一方の端部を失うが、残存する側には面取りの加工が認められる。天秤棒かと推測する根拠はあくまでその形状から得られる印象によるものであって、弱い。樹種はスギである。

1615は流路1-1域において出土した材で、本来は当該の項目において記載すべきものではあるが、その法量から図206に図示することとした。残存長201.2cmを測る。本書において報告する最も長尺の木製品である。断面形態は方形の材で、幅広の面に5ヶ所、もう一方の面に3ヶ所の方形の穴（はぞ穴？）を配置する。穴の配置間隔は厳密ではないようであるが、60cm程度の間隔をもつ部分と、10cm程度の間隔をもつ部分とがある。穴同士が材の中心で連結する箇所があるが、それが機能的に意味をもつものであるのかどうかは不明である。他の部材と組み合わされることは間違いないが、本体の規模からは建築材とみることは躊躇される。2mを越える長さと穴の数や配置が適切かどうかについては不明な部分も

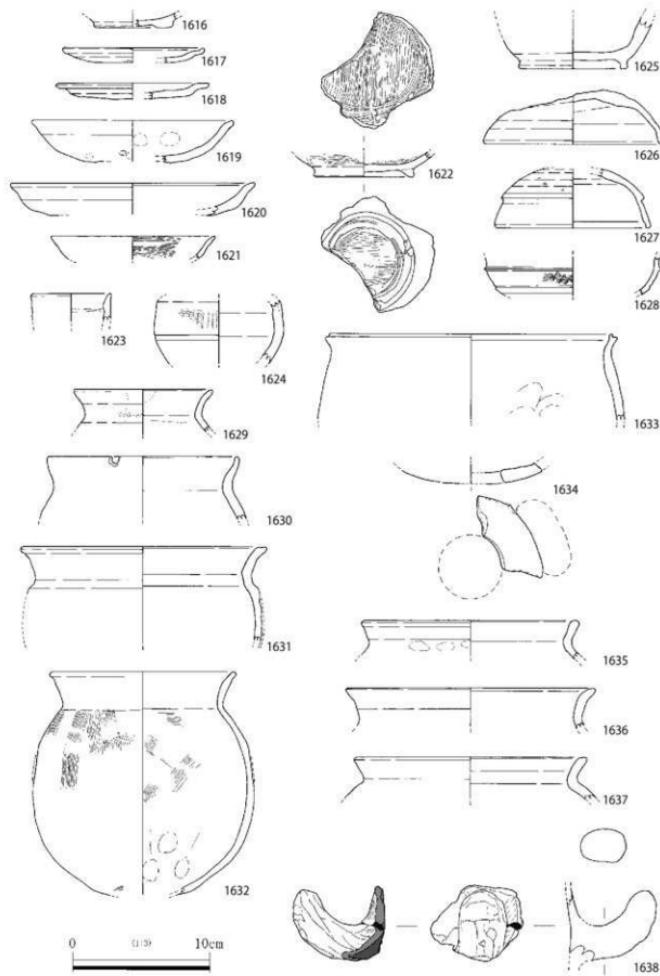


図207 流路1~4域 上層出土遺物 1

多く残るが、地機の機台である可能性を指摘しておきたい。樹種はヒノキ科である。

図207～図209は流路1～4域の範囲における、直上層出土の遺物を示す。図207には第1・5層出土の遺物を示す。1616は青磁碗で、削りだし高台をもつ底部の1/4程度の残存である。1617・1618は土師器皿で、「て」字状口縁をもつものである。1619・1620も土師器の皿で、いずれも遺存状態は悪い。1621は黒色土器A類、1622は黒色土器B類のそれぞれ碗である。1622は高台内側の底面にも密なミガキが観察される。1616～1622は流路には直接かかわらない時期のものと判断され、第1～5層の形成時期を示す遺物かと考えられる。1623は土師器の壺で、流路1～4域出土の1155などと類似する形態である。1624は土師器の壺で、体部中央位を沈線と波状紋で飾る。酸化炎焼成された須恵器かと考える。1625は須恵器壺の高台部分である。これも流路の時期よりは新しい可能性が高い。1626・1627は須恵器の壺蓋で、1626は流路出土遺物の中では最も新しい時期に帰属するものである。1628は須恵器無蓋高壺である。1629～1632は土師器の壺で、1631の時期は古代に下るものと考えられる。1633・1634は土師器の瓶で、1633は口縁端部に段差をもつ特異な形状である。1634は中央に正円形、四方に稍円形の蒸気孔を配するものである。1635～1637は土師器壺で、比較的短い口縁部をもつものである。1638は韓式系土器の把手で、下面に刺突痕跡を残すものである。

図208・図209は第2a層出土の須恵器である。1639・1640は壺蓋で、1639は流路出土遺物の中では最も新しい段階のものである。1641は有蓋高壺の蓋、1642是有蓋高壺である。いずれも流路1～4域出土遺物の中では、量的に最も多い時期のものである。1643～1647は壺身で、1643が時期的に新しい。1644は時期的には最も少ない段階のもので、量的な意味では注目される。1648は須恵器の無蓋高壺かと考えられるもので、極微細な破片から復元して図化したものである。したがって若干の誤差はもつものかと思慮するが、須恵器に一般的な器形でないことは明らかで、焼成も独特のものである。単純に還元炎焼成された土師器とすることには躊躇する。1649・1650は須恵器壺である。図209～1651～1653は大壺で、

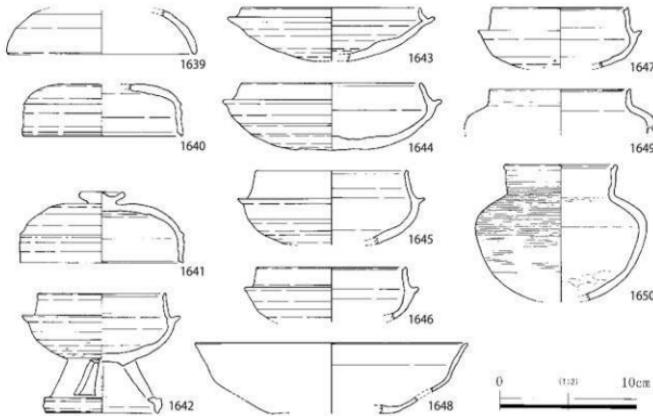
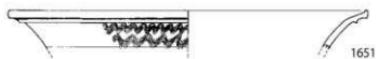
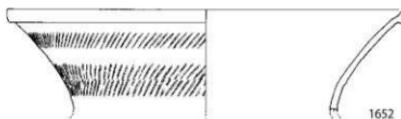


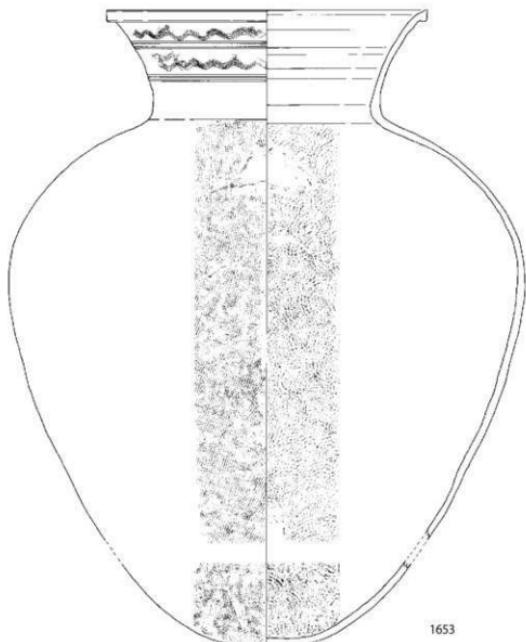
図208 流路1～4域 上層出土遺物2



1651



1652



1653



図209 流路1-4域 上層出土遺物 3

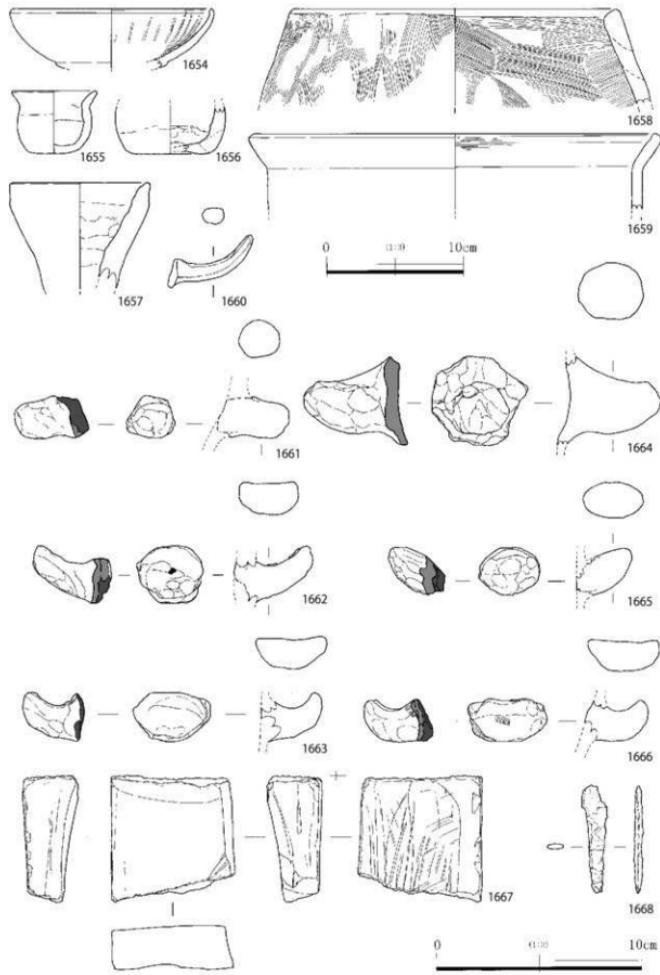


図210 流路1-4域 上層出土遺物 4

1653は器高90cmを越えるものである。

図210～1654～1666は第2a層出土の土師器である。1654は高杯で赤褐色を呈し、見込みに放射状のミガキを施す特徴的な類型に属するものである。1655は小型壺、1656は平底の壺底部かと考えられるが、造りも粗く、製壺土器の可能性がある。1657も製壺土器と考えるが、流路の時期より後出のものかと考えられる。1658は移動式竈の釜孔部、1959は鍋の口縁～頸部である。1660は把手付壺の把手部分で、流路1においても出土数は極少数である。1661～1666は把手で、切込みや刺突という特徴をもつものは含まれないが、1661は棒状の把手で、先端を丸く收めるものであるが、水平方向に延びるようであり、軟質土器の形状に近いものである。

1667は流紋岩製の砥石で、扁平な形状をもつものである。上面には滑らかな使用面がみられるが、下面には粗い線状の痕跡が多く残される。用途により使用面を使い分けたものかと推測する。1668は鉄鍛と見える鉄製品で、遺存状態が悪く、全面に錆化が進行している。詳細については観察できない部分もあるが、扁平な茎部分と、わずかに躰身部が残されているようである。残存長は5.3cmを測るもので、茎の幅は5～10mm程度である。

第7項 流路2

流路2は03-54トレンチ、03-55トレンチに位置するもので、検出長、約30mを測る。西側は流路1の屈曲部に取り付き、平面検出時の所見では最終的な流路1の充填堆積物が、流路2の堆積物を切ることを確認したが、流路1には少なくとも2段階の埋積が確認されていることから、当初は連結していた可能性が高い。検出範囲における形状は、ほぼ直線的に東西方向に流れるものであるが、東側は調査範囲外へ延びることから様相は不明であるものの、直線的にのびるて微高地1に達する位置関係となる。幅は約3mで、ゆるやかな逆台形状の断面形状をみせる部分がおおい。人為的な掘削により形成されたものかどうかを判断する材料は形状以外に乏しいが、直線的にのびることからは人為的に掘削された可能性を想定しておきたい。

流路内堆積物については、図211に土層断面図を、図版46に同写真を掲げるが、下位には壁面から流出したと考えられる砂、シルトの堆積があり、それ以上はほぼ一連の作用により埋積したと考えられる極細粒砂やシルトの互層で満たされている。流路1、特に新しい堆積物と比べ泥質の堆積物が少なく、比較的の流れを保ったまま埋積が進んだものと推測する。

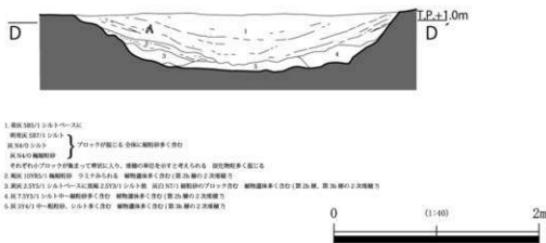
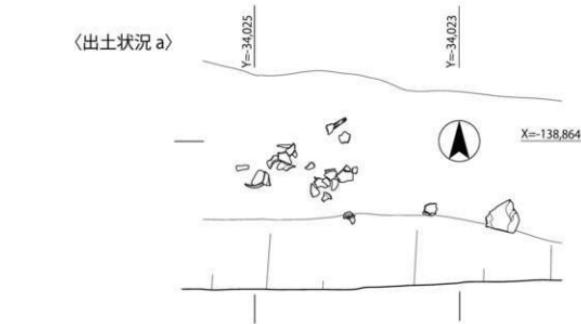
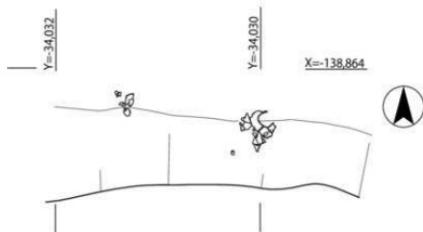


図211 流路2 土層断面図

〈出土状況 a〉



〈出土状況 b〉



〈杭列 8〉

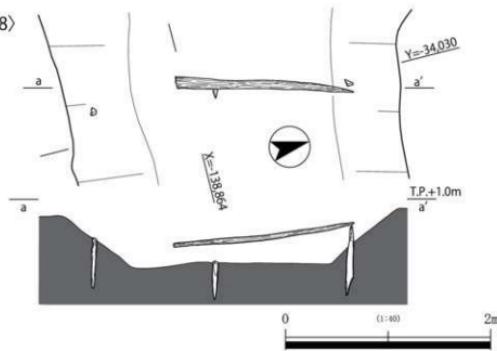


図212 流路2 遺物出土状況図 杭列8 平・断面図

流路2内の遺物の出土状況については、図面に記録したものを図212の上段に、写真を図版46に掲出した。底付近に比較的土器や木材などがまとめて分布するが、意識的な配置は見出せず、埋置行為は無かったものと推測する。流路1ほどではないが、土器細片や木材などは流路内堆積物中から散在的に出土しており、周辺からの投棄や堆積物に含まれていたものが主体であると考えられる。基本的に完形土器の出土は無く、破片と化したものや、一部を欠くものに限られる。なお流路1同様、流路の掘削により下層の堆積層を掘り込んでいることから、弥生土器時代の遺物が混入する可能性がある点には留意しておきたい。

流路内に設置された遺構としては杭列8をあげることができる（図212下段）。検出範囲の西寄り、流路1との合流地点に近い位置に設置されたもので、流路2の南北斜面と中央底に計3本の縦杭を打設し、その上に横木を渡した構造が遺存する。堰とするには縦杭の間隔がまばらであり、堰きとめて上昇させた水位をどのように利用するのかについても不明瞭である。実態として使用が可能かどうかは不明であるが、流路をわたる簡便な橋のような施設を候補としておきたい。

流路2出土遺物（図213～図216）

流路2出土遺物の中で図示し得たものは土器、石器類併せて46点である。鉄器については出土せず、堆積物の洗浄も行なっていないが、玉類など微細遺物の出土も確認していない。

図213～1669は須恵器類で、頸部以上を欠く。体部には紋様を施さないものである。流路2からの須恵器の出土点数は限られており、1669以外には大甕の破片が数点出土するにとどまる。1670～1685は土師器の高杯で、図示し得た土器の中では最も点数が多い。坏部の形態では体部と底部の境界が明瞭で棱をもつもの（1670～1673・1675）、境界ははっきりしないが稜をもつもの（1677）、体部と底部がなだらかにつながるもの（1676・1678～1680）、塊形のもの（1674）に類別できる。内外面の調整にはハケメを施すものが多いが、1674などは比較的の密度の高いヘラミガキが残される。脚部については内面に強い棱を形成し開くもの（1681～1684）、ゆるやかに開くもの（1685）に類別できるが、1681は坏部との接合部分から釣鐘状の脚柱部をもつもので、特徴的である。透かしをもつものが少ないので、1674には円形の透かしが4方向に配される。

図214～1686～1965は土師器の壺である。1695を除くと、いずれも極部分的な残存状態を示すものから復元的に図化したものである。1688～1690は頸部の接合時に内面の接合痕を消しきれていないものである。器壁も厚い。1691～1695は頸部から口縁部にかけて古式土師器の特徴を残すものである。細かい形態はさらに分類も可能であるが、いずれも口縁端部内面を肥厚させる点を同じくする。体部の調整は内面にヘラケズリを施すものがある一方、1695の球形の体部については内面に指頭圧痕がよく残されており、ヘラケズリの省略がなされたことも考慮されるが、それでも器壁を比較的薄く作り上げている点には注意される。1696は土師器の鉢で、口縁部を欠くが体部の残存率は比較的高い。1697は厚い底をもつ土師器で上半部を欠くが、塊形の製塙土器ではないかと推測する。1698は土師器台で、接合面に棒状の道具による凹圧が施された痕跡をみることができる。1699は製塙土器の小型の脚台部分である。1700は土師器の把手で、断面形状は卵形である。

図215～1701～1704は土師器の小型壺であるが、それぞれに特徴的な形態を示す。1701は手握ねに近い形状、調整をみせるが、1704は器壁も薄く、調整も丁寧である。1705～1707は中型の壺であるが、いずれも体部内面にヘラケズリを施している点が注意される。1708は大型の壺で、頸部からゆるやかに外反

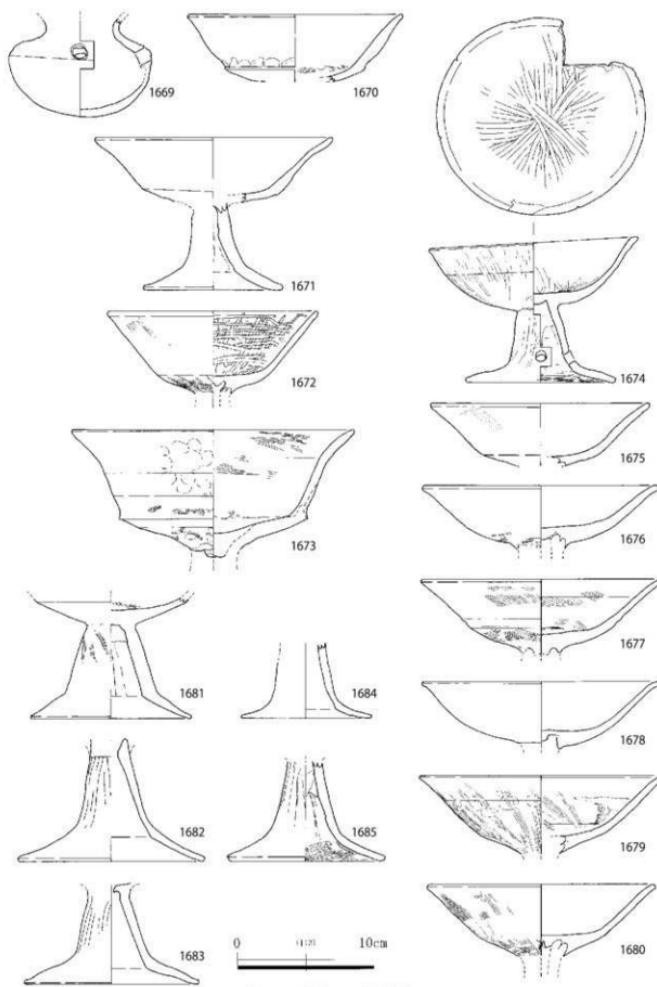


図213 流路2 出土遺物1

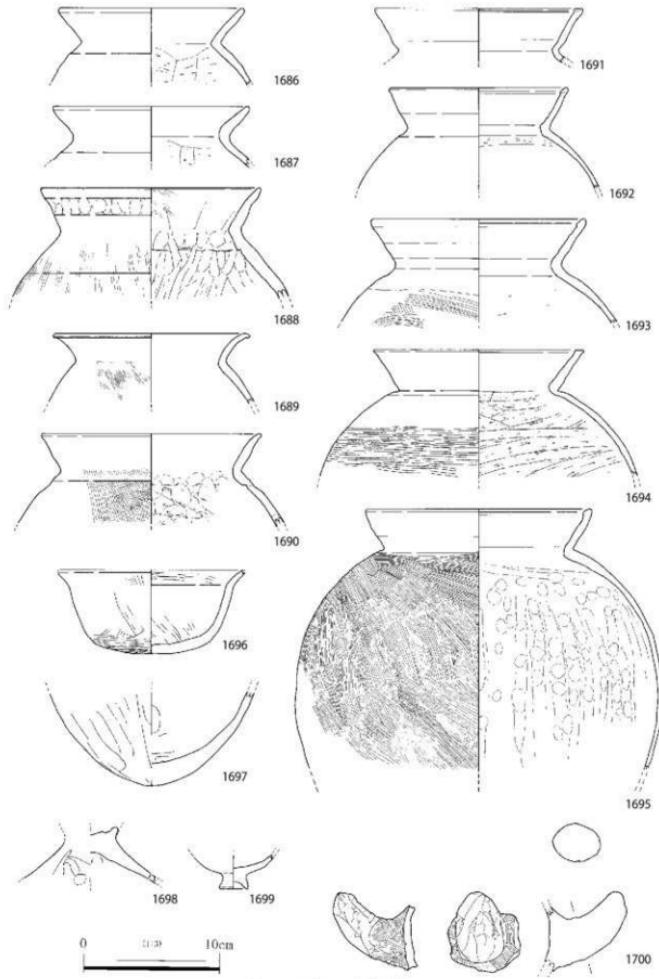


図214 流路2 出土遺物2

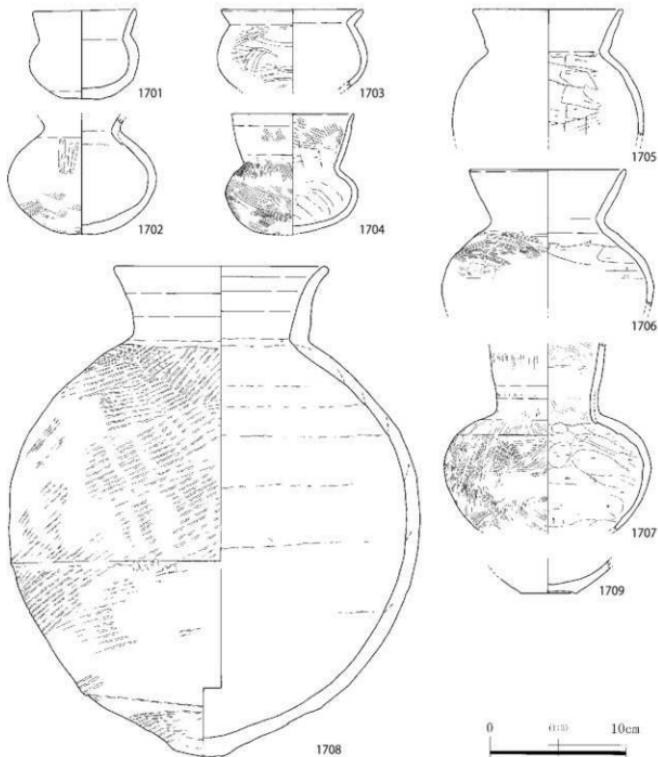


図215 流路2 出土遺物3

する口縁部をもち、端部は丸く收めている。底部は高さの低い平底をもち、分割成形とみることのできる痕跡をもつ。体部の内面には粘土紐の接合痕跡をよく残し、調整はゆき届いていないが、外面調整は右肩上がりのタタキを施している。土器の諸特徴は弥生時代後期後半に特徴的なものであって、流路2出土の他の土器とは様相を異にする。1709も小さな平底をもつもので、中央部は上げ底風に成形される。

図216-1710~1714は石器類である。いずれも円錐に近い形状を残すものであるが、1710以外は石器であると考える。1710は珪石製の礫で、顯著な使用痕はみられない。1711~1714はいずれも砂岩製で、敲打痕、擦痕などから用途を推定した。1714は長さ20.7cm、重さ1.1kgを測る大型のもので、整った形状を示す。

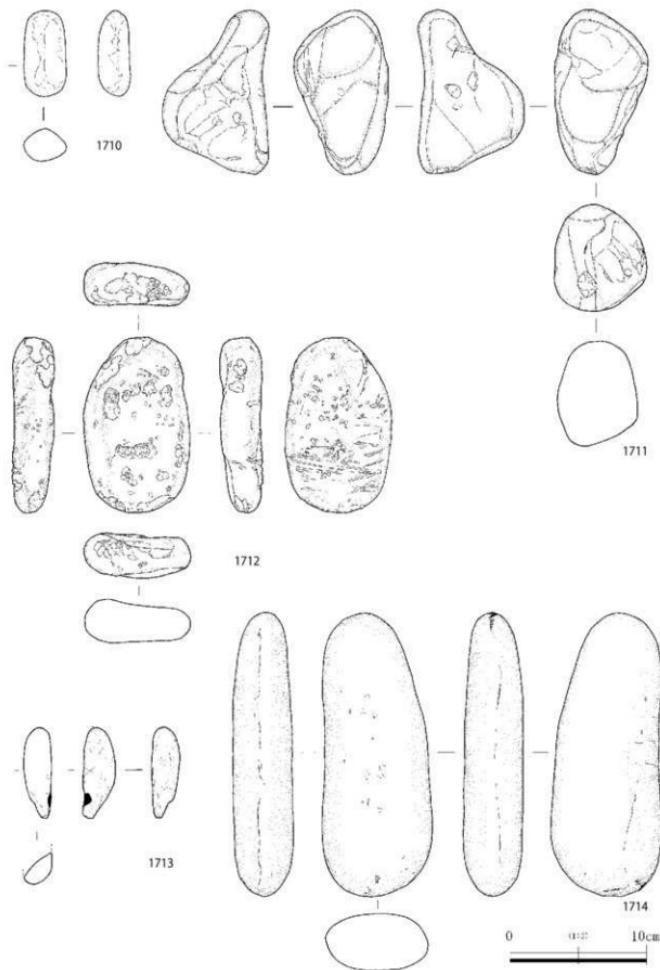


図216 流路2 出土遺物4

第3章 第2面の調査成果

第1項 第2面の概要

第1面以下、調査深度最下部に広がる第3面までの間に存在する、複数の造構面を総称して第2面とする。調査範囲全体に広がる第3面上面は数度の洪水堆積層に覆われるが、それら堆積物の残存範囲は調査範囲全体に及ぶものではなく、本来的に部分的な土地利用が行われたと推測されるものを含めて、それぞれを独立した造構面と呼称することに躊躇するものであった。このため、大きくは第2面とした上で、細分される造構面については第2-1面から第2-4面の呼称を上から付すこととした。本項では個別の報告に先立ち、層位的な認識の整理と各造構面の概要を記載する。

調査範囲全域で確認できる第4層は、黒色の粘土と緑灰色の粘土が互層を形成する特徴的な層準であるが、この層の上面を削りながら、黒色シルトを主体とする第3-4層が形成される。第4層との間に明瞭な堆積層を残さず、第3-4層はほぼ、攪拌を伴う土壤と考えられ、03-5-1トレーニチ、03-5-2トレーニチ、03-5-5トレーニチ、03-5-10トレーニチでは畦畔を伴う溝、畦畔などが確認され、一部ではピットや土坑が確認された（第2-4面）。調査範囲西寄りの部分では、大阪府教育委員会の指示により、この面の調査を行っていない部分があり、様相が不明である。また調査範囲中央部分では上層の侵食、あるいは地震による変形などにより、面として把握できない範囲がみられた。

第2-4面は遺存状態のよいところでは上面が灰白色のシルトに覆われ、さらにその上位は砂へと変化していくようである（第3-3b層）。それらを母材として、一部に攪拌を伴い土壤化した層が第3-3層であり、03-5-4トレーニチの範囲ではその上面に水田畦畔、溝が良好に遺存していた（第2-3面）。第2-4面同様、調査範囲西寄りでは調査を実施していない部分もあるが、03-5-8トレーニチにおいては第3-3層が第3-2層による浸食を受け遺存せず、第3-3層・第2-3面は調査範囲東寄りに遺存する層・面であるといえる。

第2-3面は大規模な洪水に襲われ、厚いところでは厚さ1mを超える堆積層に覆われる。この堆積層は下位を中心にシルトや植物遺体の堆積がみられるが、上位は粗い砂を主体とし、調査範囲内の各所に微高地を形成する（第3-2b層）。このうち、調査範囲西側のものは微高地1として第1面にまで残存する。また03-5-1トレーニチ、03-5-2トレーニチ、03-5-4トレーニチ、03-5-10トレーニチの範囲に分布する、南から北へ張出す微高地上では、堆積層上面でピット、土坑、溝などが集中する範囲を検出し、土壤層（第3-2a層）上面では、水田畦畔を検出した。土壤層上面を第2-2面、堆積層上面を第2-2b面と呼称する。これらの面は微高地1となる部分を除き、その後の堆積層による侵食を受け、さらに第1面の流路1により削られている範囲もある。したがって全体的な広がりについては連続して層を追うことはできなかったが、03-5-8トレーニチ付近まで第3-2a層の広がりが認められ、それ以外の範囲では遺存していないものと考えられる。

第2-2面も洪水に襲われたと考えられるが、その痕跡は03-5-2トレーニチ南寄りにおいてのみ認められ、極部分的にしか遺存していない。逆に調査範囲北寄りの部分では微高地2を形成する堆積活動があったことが明らかであるが、それが南寄りの範囲でのどの層準に対応するのかについては不明瞭である。しかし第2-2面以降の堆積により第1面が形成されるまでの間に造構の切込み面が存在し、03-5-1トレーニチ、03-5-2トレーニチ、06-2-1トレーニチ、06-2-2トレーニチにおいて流路状の造構と、その内部に構築された杭列を検出した。これらも明確な土壤が遺存するものではなく、造構面としての対応も連続して確認することはできなかったが、段階的に把握すると第2-1面に置くことが適当と考えられる。

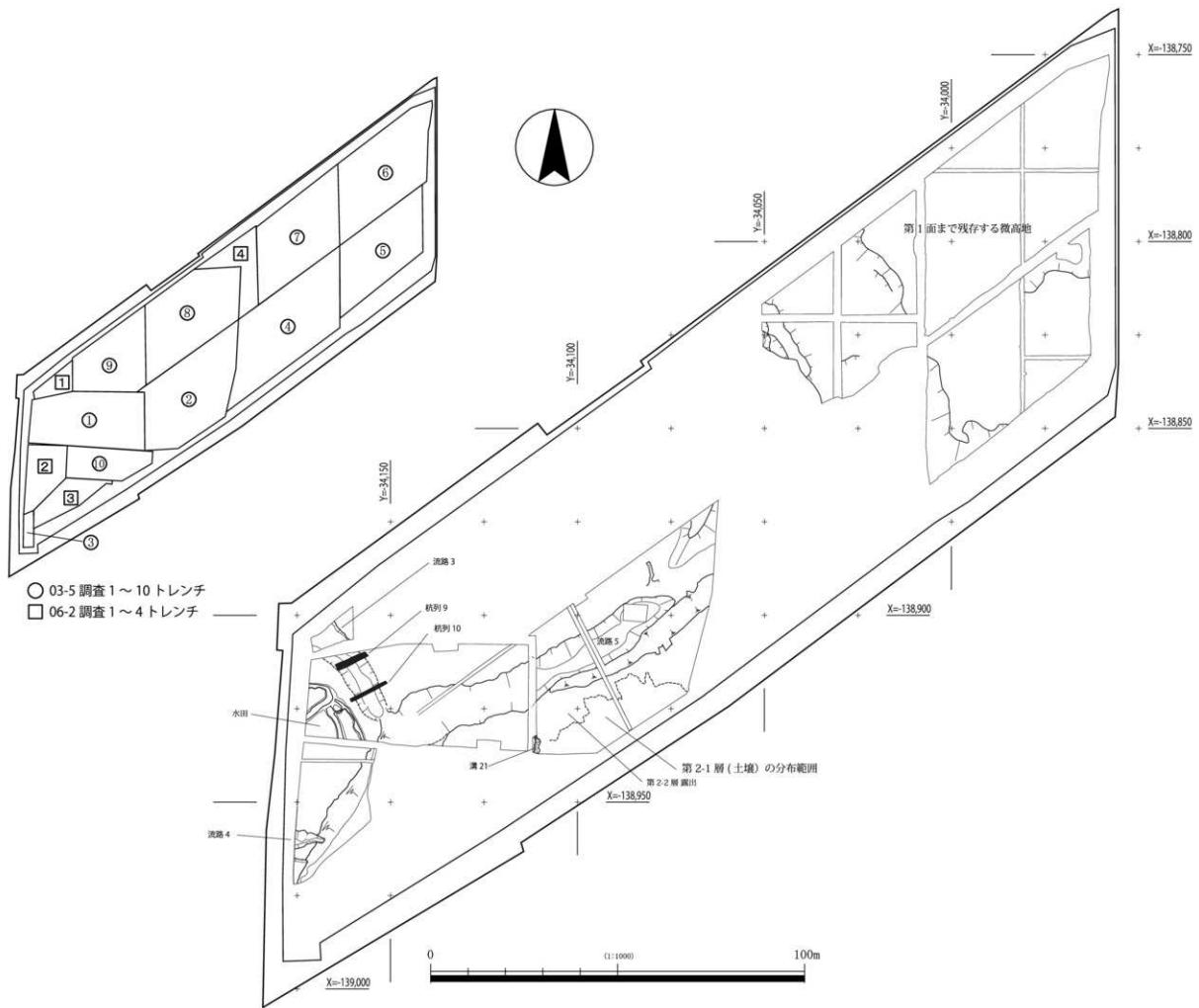


図217 第2面（第2-1面）遺構分布図 (s=1/1000)

第2項 第2-1面（図217）

第2-1面では調査範囲南側の微高地に残存する土壤と溝、北西角部分で検出した流路、杭列が確認された。また西側の微高地上では水田畦畔と、流路と呼ぶが流水による侵食痕跡が認められた。南側の土壤

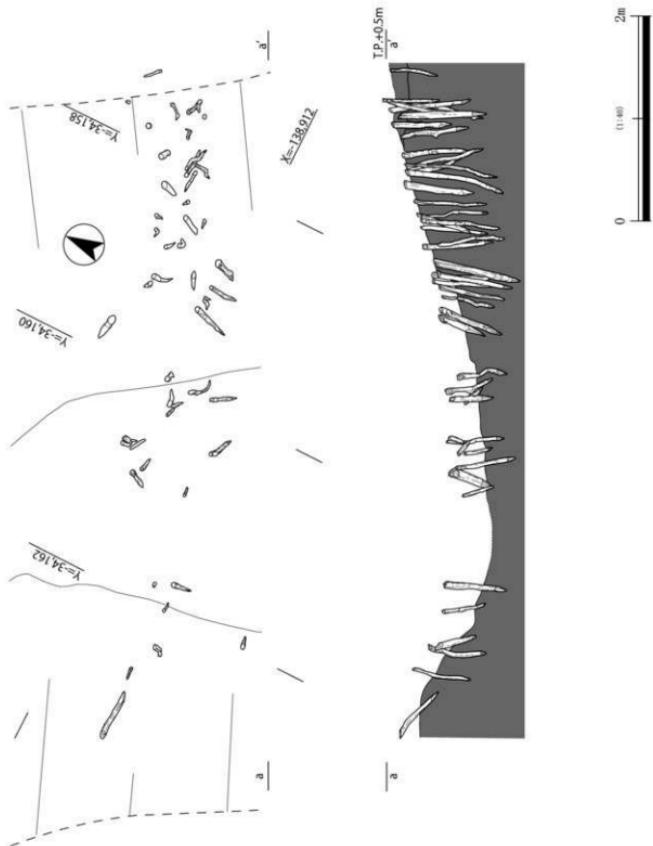


図218 杭列9 平・立面図

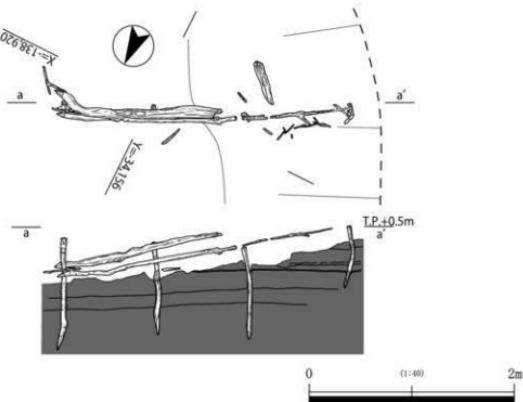


図219 杭列10 平・立面図

部分は、層相からは水田作土層かと考えられるが、上面が遺存しておらず、畦畔の存在は不明である。水田であったとしても地形的に広範囲に広がっていたものではなく、部分的な土地利用であったと推測する。溝21はトレンチの境界付近にあり、両端を確認できなかった。規模などについても不明瞭であるが、地形の高いほうから低いほうへのびる点のみ指摘しておきたい。遺物は弥生土器片が数点出土しており、図225～1755・1756に掲出した。南側微高地部分における第2.1面残存範囲の標高は、最も高いところでT.P.+0.9m、そこから12mほど離れた最も低いところでT.P.+0.5m、を測り、南から北へゆるやかな傾斜を示す。

西側微高地部分において検出した水田城は検出範囲が狭く、全体的な畦畔の配置については不明な部分があるが、微高地の尾根部分に大型の畦畔が走り、それに取り付く形で微高地の縁辺を巡る畦畔や、それに平行し、斜面地形を区切る畦畔が認められる。基本的に第2.2面において検出した畦畔を踏襲するが、畦畔の数は第2.1面より増加しており、一見、瀬戸内海の拡大を志向したものとみえるが、大畦畔以外の部分は第2.1面段階の攪拌により、古い畦畔が失われた可能性も高く、積極的な評価は難しい。

流路については流路3～5の遺構番号を付した。流路5は第1面流路1の下層に位置し、流路1の形成要因ともなる地形の鞍部を形成していたものと考えられる。流路3は流路2に流れ込むもので、肩を良好に検出できなかったが、おおむね8～10mの幅をもつものと考えられる。流路内は細粒砂～シルトを主体とする堆積物で充填されている。流路内には2基の杭列が設置され、北のものを杭列9、南のものを杭列10とする。杭列9は流路の横断方向に小規模な杭材を比較的密接して打ち込むもので、流芯部分はややまばらで、東斜面に密である。堰と同じ構造とみることができるが、分水路などは検出していない。杭列10は杭列9の約10m下流側に打設されたもので、流路の西側斜面に約1mの間隔をあけて4本の縱杭を打ち込み、その上部に横木を渡すものである。間隔がまばらな点で堰とはいいがたい側面が

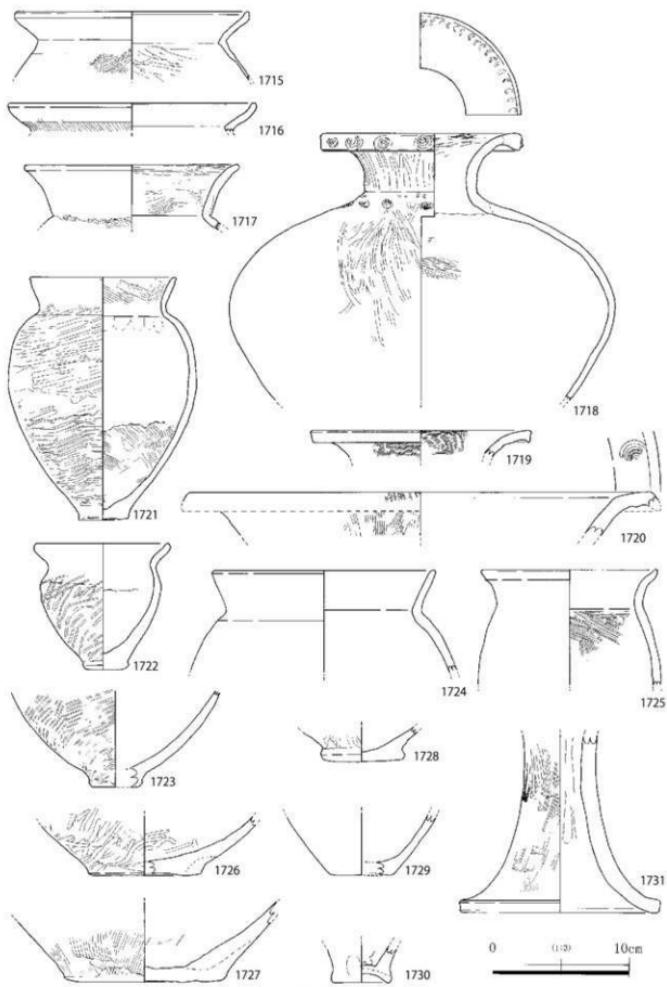


図220 第2b層 出土遺物1

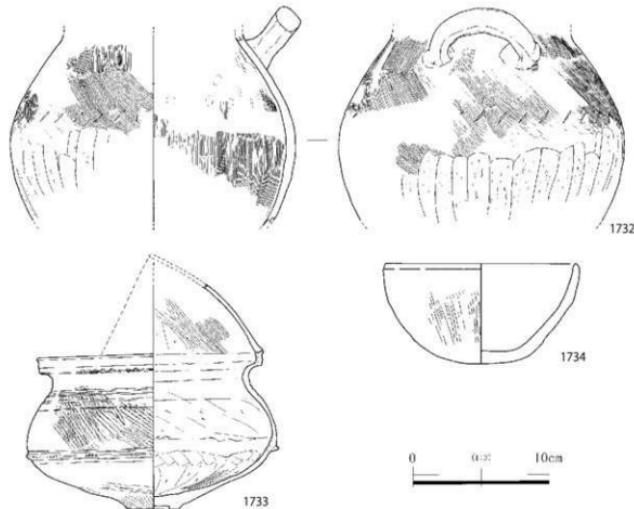


図221 第2b層 出土遺物2

あり、性格は不明である。流路4は調査範囲の西端部で確認したもので、第1面において微高地4とした高まり上に痕跡を残す、流水による侵食痕かと考えられる。幅5mから東寄りに規模を減じ、流路5に相当する地形鞍部へ抜けたものと想定する。流路内は比較的粗い砂を中心とした流水堆積物で満たされており、侵食後に埋没したものと考えられる。流路4の充填堆積物からは図220-1735に示した弥生土器無頸壺が出土している。口縁端部をわずかに残す体部上半の破片であり、体部外面にはハケ調整を施すものである。体部下半の形状について不明ではあるが、ややゆるやかに屈曲するものと考えられることから、第IV様式に帰属するものと考えられる。

第2-1面に直接かかる遺物は少なく、図220-1715～図221-1734には第2-1面を覆う、第2b層出土土器を示す。弥生土器から古式土師器までが含まれる。1715は口縁端部の造形がやや甘いが、庄内型壺の口縁部と考えられ、1718の口縁端部や頸部を竹管紋で飾る壺や、1733に示す手焙形土器も含め、弥生時代後期から庄内期にかけての遺物が含まれる。1721～1723に示すタタキ窯も同時期のものであろう。また、1720に示す広口壺は、極わずかの部分の遺存ではあるが、大きく開いた口縁部上面に扇形紋を配するもので、IV様式に帰属する弥生土器かと考える。1732に示す水差し形土器も、肩部にヘラによる刺突紋がみられるものの無紋化が進んでいるものであり、体部が球形化していることから、ほぼ同じ時期のものかと考える。1726・1727の弥生土器底部は外面の調整はヘラミガキ、ハケと異なるが、いずれも比較的薄い底部を示している。1730は小型の弥生土器底部であるが、上げ底に成形している。なお1734は第2b層出土の遺物であるためここに配したが、流路1の肩付近での出土であり、混入の可能性がある。

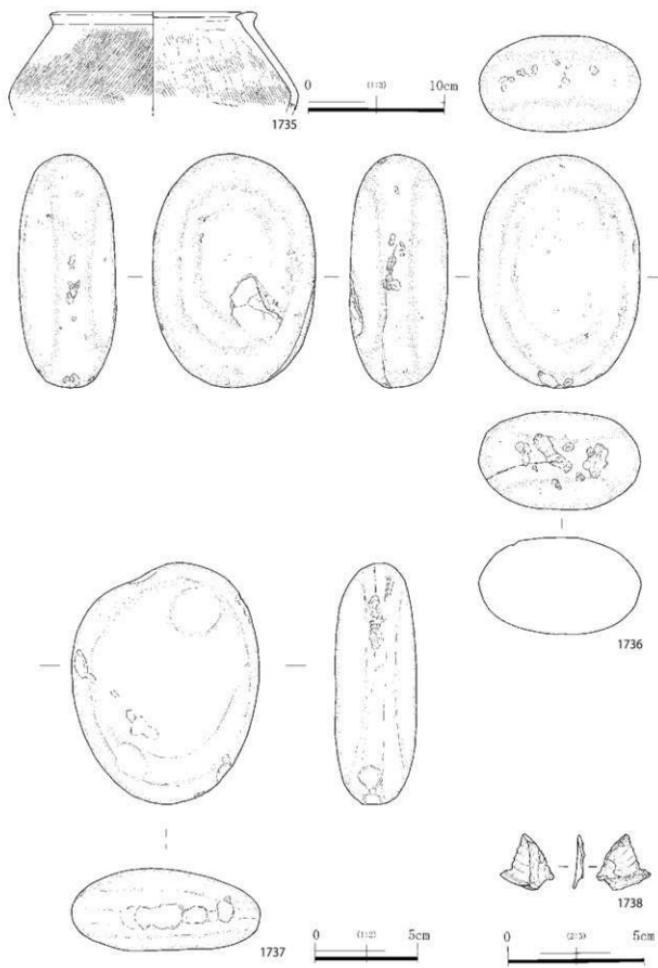


図222 第2b層 出土遺物3・第2-1面出土遺物

図222-1736は細粒黒雲母トータル岩製の敲石で周囲の4方向に敲打痕を残す。また1737は砂岩製の敲石で、下端と側面に敲打痕を残す。1738はサスカイト調片である。

第21面の帰属時期は、遺構に直接かかわる遺物が乏しい中で、上層出土遺物なども勘案する必要があるが、流路4出土の1735、第2b層出土の1720・1732などが第IV様式に属すると考えられることから廃絶に近い時期を該期に置くものとしておきたい。第2b層自体は、最末期の弥生土器や庄内期の土師器がみられることから、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて埋積が進行したものと考えられる。同じ時期には既に微高地と化している微高地1上では土地利用が開始されているものと考えられ、いくつかの遺構から弥生時代末の弥生土器が出土している。

第3項 第2-2面（図223）

第2-2面の調査は、調査範囲東側の微高地1、第1面・第2-1面において検出した流路により侵食を受けた部分、当初より調査を実施しなかった部分においては遺構面を確認できていないが、調査範囲南側と西側の微高地上では水田域を、北側の低地部分では土壤の分布を確認した。また03-5-10トレンチの範囲では、水田土壤を除去した面（第2-2b面）において、ピット、土坑、溝など、集落にかかわる可能性の高い遺構群を検出した。地形的には南側の微高地は、削平を受けているものの06-2-3トレンチ部分が最も高く、T.P.+1.0mを測る。ここから北側へ高さを減じ、約30m離れた付近でT.P.+0.5m程度となり、水田畦畔の分布もこのあたりまでとなる。一方、西側微高地では検出範囲も狭いが、最も高いところでT.P.+0.5m程度、低いところでT.P.+0.2m程度を測る。

西側微高地部分で検出した水田域は、第2-1面の水田との間に堆積層を介在していないため、直接的に新しい作土層を除去することで、古い作土層の上面を検出したことになる。したがって、第2-2面の水田面として検出した範囲も、厳密にはその上面は遺存していないと考えられ、大畦畔以外に畦畔がみられない点も、かかる要因で説明できることと考える。もとより検出範囲が狭く、畦畔の設置にかかわる具体的な様相もすることはできないが、このような理解のうえでは大畦畔を基軸に、小畦畔を巡らすことでの漏水を確保するという、第2-1面においてみられた様相と基本的には変わらない水田域の形態であったものと考えられる。

南側微高地上の水田域については、検出範囲が幅は20m程度と狭いが、畦畔の確認できなかった部分を挟むものの、長さは150mに及ぶもので、比較的広い水田域であると評価することができる。調査範囲南側への展開については想像の域を出ないが、今回検出した部分が微高地の縁辺であると考えられることから、微高地を覆う水田の広がりを想定することも可能であろう。検出した水田域ではそれぞれの畦畔も大型のものが多いが、基本的には等高線に直交する方向のものがより大型であり、それにより画された大型の区画を高低差にあわせてやや小ぶりの畦畔で区画したものと考えられる。具体的な給・排水にかかる水路などは検出されなかつたが、03-5-10トレンチ部分で検出した東西方向の畦畔は、途中でとされる箇所があり、この面の埋没時期（季節）にもよるが、検出範囲に限れば畦畔を超えての給水がなされていたものと考えられる。また03-5-2トレンチにおいて検出した畦畔は、母材となる第3-2b層が粗い砂主体のものであることから、いずれも砂質の強い土壤で構築されているが、中には芯にあまり搅拌を受けない砂の残るものも認められた。それらを大畦畔として毎年の搅拌を受けないものと理解することもできるが、そうみると毎年の耕起に際して作り変えられる畦が少ないことにもなる。いずれにしても個々の畦畔の意味については十分に検討できなかった部分が残された。

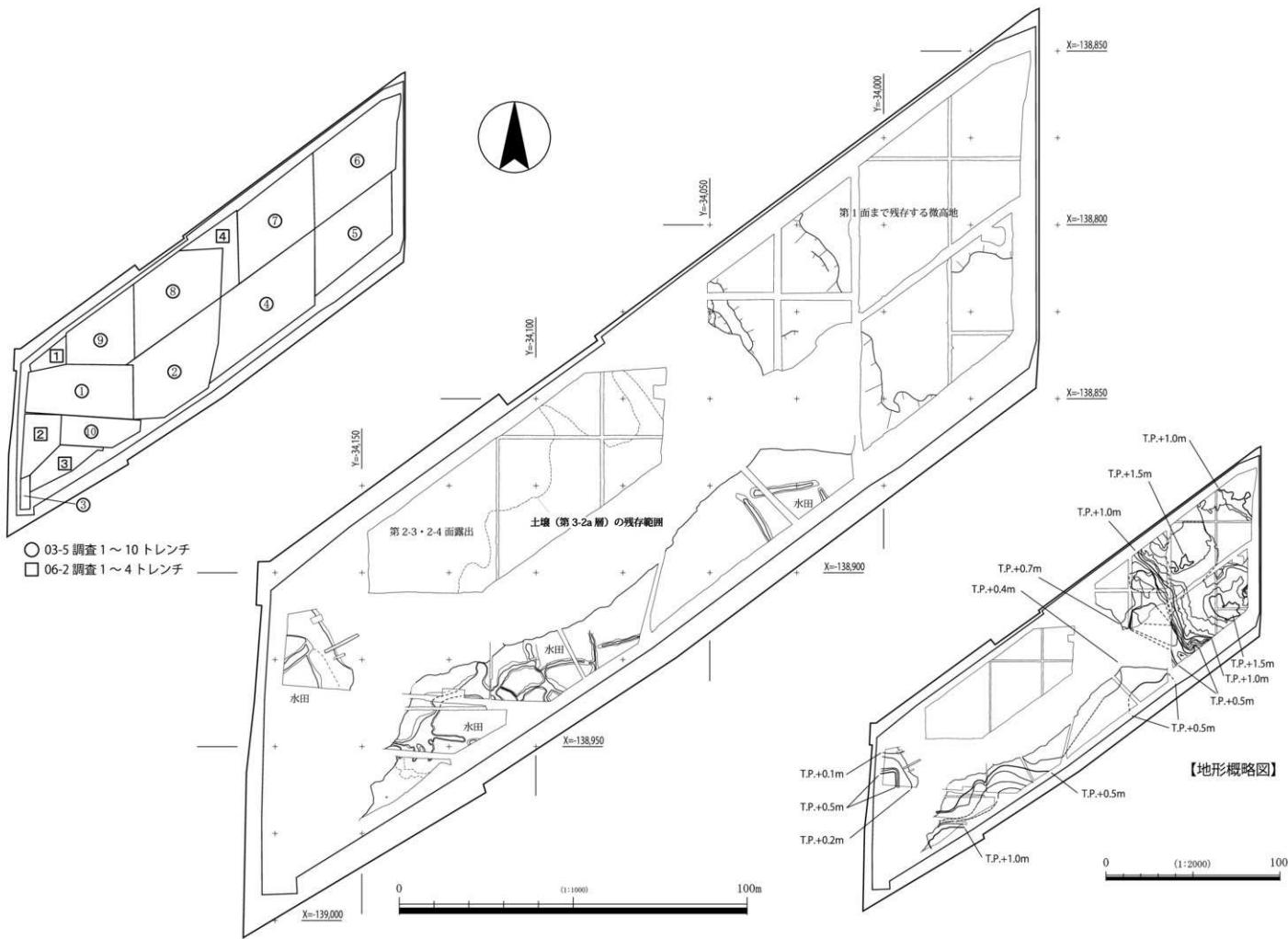


図223 第2面（面第2面）構造分布図（s=1/1000）・地形概略図

第2-2面においては水田城での土器類の出土は無く、水田の時期について直接することはできないが、第2-1面の帰属時期を弥生時代中期とし、後述する第2-2面作土下で確認された遺構出土の遺物もやはり弥生時代中期のものであること、またベースとなる第3-2b層からも弥生時代中期の土器が出土していることと併せて、水田の時期も弥生時代中期と判断できる。なお、03-5-1トレンチ西端に位置する箇所の畦畔部分を掘り下げている過程で石庭丁の出土をみ、隣接する03-5-2トレンチの畦畔部分の掘削においても石庭丁の出土がみられた。明確な埋納遺構のようなものは確認できなかったが、ほぼ同一箇所から複数の遺物が出土していることから、意識的な埋納によるものであったと推測する。

第2-2b面（図224）

第3-2a層、すなわち第2-2面における土壤層を除去すると、南側微高地部分では比較的厚層のある第3-2b層が露出するが、03-5-10トレンチではこの段階においてビット、土坑、溝などを検出した。連続する面については、北東側の03-5-2トレンチにおいては遺構の検出は無く、西南側の06-2-3トレンチにおいては第2-2(a)面を最終遺構面とするよう、行政指導がなされたことから面そのものを検出していない。遺構の分布範囲はおそらく南西側には一定の広がりをもっているものと推測され、調査範囲外では南西側に広がると予想される微高地に連続するものと推測する。

検出した遺構には土坑76~81、溝22~29、ビット178~182の遺構番号を付した。おおまかな遺構分布の特徴としては、微高地の等高線に平行する方向に複数の溝が密集する様相がみられ、その溝群と重なるあるいは地盤が高い側にビットが分布する。土坑とした遺構も溝群以南に集中するが、やや大型の土坑数基は溝より北側に分布する。個々の遺構同士の有意の関係までは不明であるが、調査範囲南側が地形的により高いものと推測されることから、南側に広がる集落域の縁辺部にあたるものと考えられる。

土坑76・77は溝群より北側に位置する一群で、土坑76は不整形なものであるが、土坑77は直径約2mの円形の平面形を呈する。土坑76からは図示し得る遺物の出土は無く、弥生土器の細片が出土したのみである。土坑77からは図225-1739~1746に示した弥生土器、図227-1778に示した石器のほか、弥生土器片、自然礫と思われる礫2点が出土した。1739は壺で口縁端部にキザミを施すものである。1741は剥離の著しい壺口縁部で、口縁端部が下垂する広口壺かと思われる。1742・1743は鉢で、1743は口縁端部内外の角にキザミを施している。1747・1748は壺の体部片と考えるが、1747は粗い櫛搔紋を、1748は櫛搔列点紋をそれぞれ施している。弥生土器の底は3点を示したが、なかでも1744は新しい形態をみせる。1778は砂岩製の敲石で、側面に敲打痕がみられる。前面、背面とも角部分が打ちかかれているようにみられ、敲石としての使用に際しての加工であるか、使用後に何らかの製品への再加工を試みたかのいずれかによるものと考えられる。

土坑78・79・80は溝が密集する部分の南寄りに、東西方向に並ぶ円形の小規模な土坑である。土坑78からは図225-1749・1750に示す土器のほか、弥生土器細片が出土している。土坑79からも弥生土器細片が、土坑80からは図225-1751に示した壺口縁が出土している。

土坑81は調査区南側の壁にみられた遺構で、側溝の掘削ならびに壁面から遺物を採取した。図225-1752は長頸の広口壺で、頸部はミガキによる調整を施し、上下にわずかに拡張する口縁端部には波状紋を施している。1253・1254は壺の口縁部で、いずれも残存率の低い個体である。

溝22はおおむね南北方向を指向する溝で、南端でやや大型の土坑に連続する。また土坑につながる手前で東西方向に2条が平行する溝24・25とも接続する。溝24・25も西端部で円形の土坑状の遺構に連続する。それぞれの関係については明瞭な切り合い関係はみられなかったが、細部においては相互の関係

が不明瞭なまま残された。また溝22の東側に位置する溝23も溝24と同じ方向をとり、関連する遺構かと考えられる。溝22からは図226～1760～1772に掲載した土器類が出土したほか、図228～1792と接合する広口壺片もみられたが、多くは南側の土坑状を呈する部分からの出土である。1760は小型器種であるが、外傾する口縁端部をもち、高环かと考えられる。1761、1762は有段口縁の壺で、1762は外面に雜な簾状紋が2段に施される。簾状紋は1763の上端にも認められるが、同下半や1766には櫛描直線紋が施される。壺にもいくつかの特徴がみられるが、1767・1770・1771のようにゆるやかに外反する口縁部をもつものと、1768・1772のように内面に鋸い稜をつくり、「く」の字に外反するものがある。また1768・1769では口縁端部にキザミメを施す。溝23からは図225～1757～1759に示した土器が出土した。1757は玉縁状の口縁部をもつ無頸壺（甕）で、図236～1901に類する器形と考える。溝24からは図226～1775に示した弥生土器底部が出土している。

溝26～28は平行し、円弧を描くように位置する溝である。それぞれが有意に関連するものと思われるが、埋土に切り合いが認められる関係もあり、同時期に開削されたものではないようである。溝26と比べると溝28は浅い小規模なものである。これら溝からの出土遺物としては、溝26から広口壺の口縁（図226～1773）を、溝27からは甕口縁（図226～1774）のそれぞれ細片を図示したにとどまる。

溝29は溝26とも連結するものであるが、北東方向、微高地の縁に沿ってのびるものである。北端は第1面流路1に削られており、失われている。出土遺物には図226～1776～1777に示した弥生土器があげられる。1777の広口壺は体部外縁の遺存状況は悪いが、ミガキが施されているようである。

ピット178～182はいずれも溝群周辺に分布するもので、遺物の出土がみられたことから遺構番号を付したが、建物を構成するなどの、有意の関係性は見いだせなかった。出土遺物にはいずれのピットからも弥生土器の細片が出土しているものである。

第2-2b面に対応する土壤層である第3-2a層からも、図228～233に示すように遺物がまとまって出土している。図228～1779～1783は弥生土器の蓋で、比較的整った外面調整をみせる。1784～1801は壺で、広口壺の割合が多い。裝飾面でみると口縁端部の端面に波状紋を施す1784・1788や、端部に下端にキザミメを施す1785・1789・1790・1791・1793がある。有段口縁をもつものには1794・1795があり、口縁端部や段部の外面にキザミメを巡らしている。1796・1798は形態が類似する口縁で、壺としたが、甕の可能性も考慮される。1798～1801の口縁部とも裝飾性に乏しいものである。

図229～1802は無頸壺としておくが、内傾するシンプルな口縁端部をもつものの、端部にはキザミ、外面には櫛描波状紋と直線紋で飾るものである。1803・1804は壺頭部であるが、1803には断面三角形突帯が2段に巡り、1804は雜な櫛描直線紋で飾る。1805～1812は細片ではあるが、特徴的な紋様が施されるものである。1813～1817・1819～1826は高环と考えられるものである。环部から脚部にかけて遺存するものは無く、1819のみ、それぞれが同一個体かと考えられる。1818は残存率が極めて低い個体で、1827とも甕かと考える。1828も残存率が低く、判断も難しいが、1802と類似する装飾をもつ。

図230～1829～1851は甕で、法量、形態ともさまざまである。全体の形態では1837や1849が如意形を呈する可能性があり、口縁部の分類では短く外反し、丸く收める1829～1831や、頭部内面はゆるやかでありながらも大きく外反する1836・1842などがある。するどく「く」字状に外反するものには1835・1839・1841などがある。1843～1845は残存率が極めて低く、甕以外の器種の可能性も考慮する必要がある。1852・1853は鉢と考えるものであるが、やはり残存率が著しく低い。

図231には弥生土器の底部を配した。厳密な器種同定は難しい。底部外面に葉脈の痕跡を残すものが一

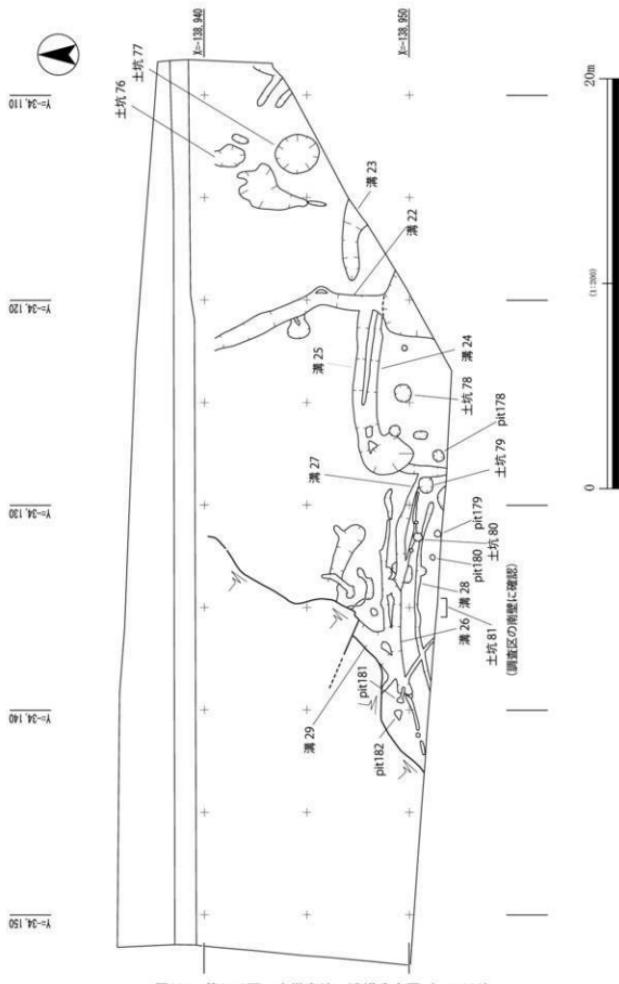


図224 第2b-2面 南窓高地 遺構分布図 (s=1/200)

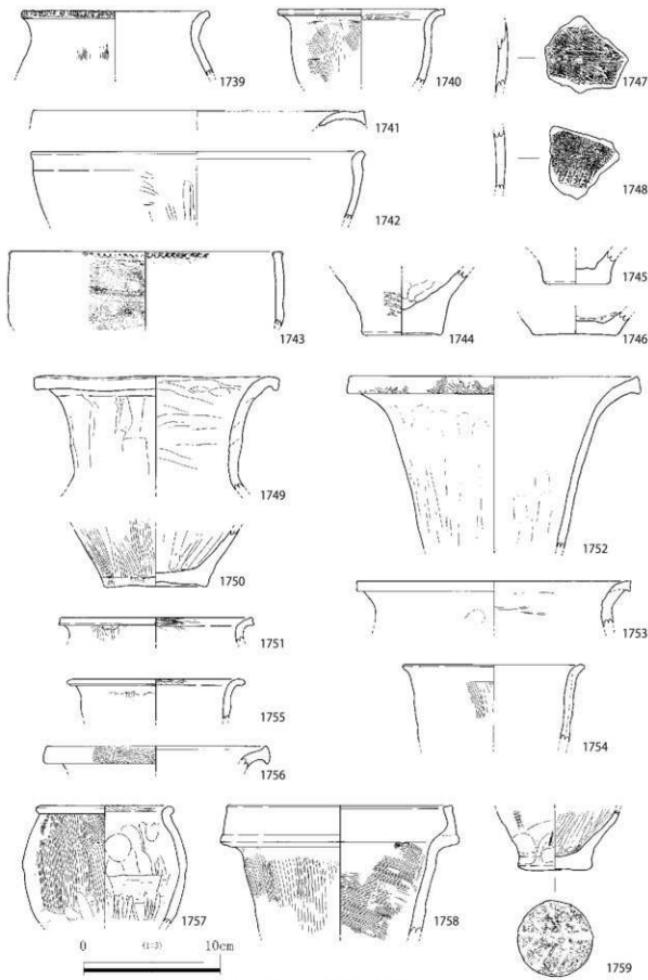


図225 第2-2b面遺構出土遺物 1

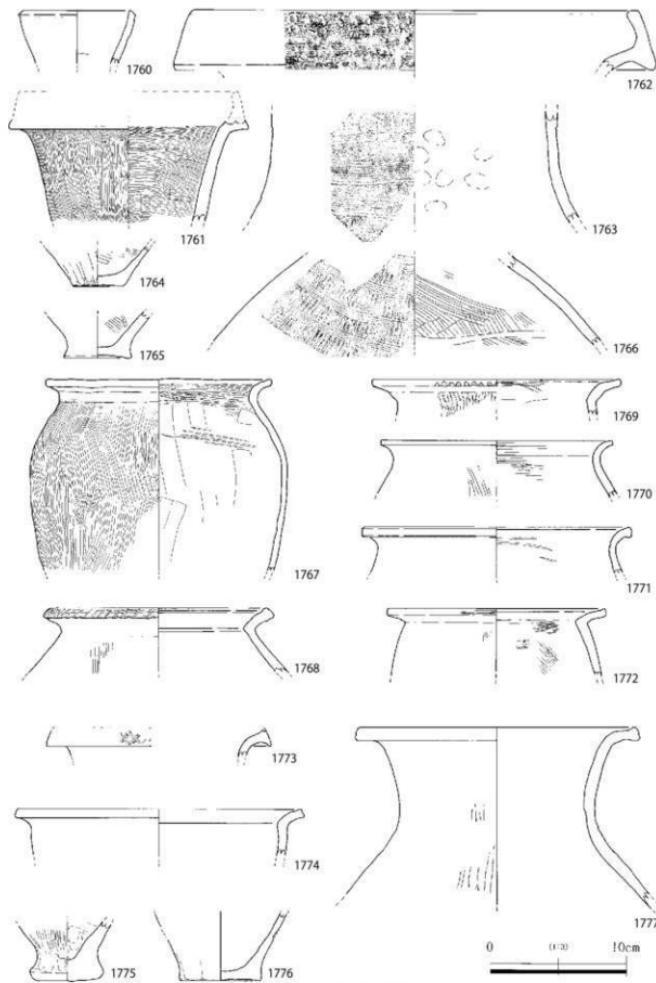


図226 第2-2b面遺構出土遺物 2

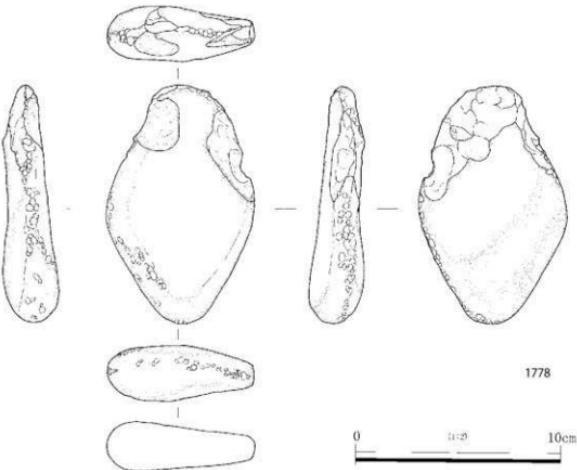


図227 第2-2b面遺構出土遺物3

定数あり、上げ底風のものでは輪台状の部分に異なる痕跡を残すものもみとめられる。

図232-1879~1885は側溝、ないしは断ち割りなどの掘削時に出土したもので、第2a層出土と限定できない一群である。1879は繩文土器の深鉢で、ゆるやかな有段状の口縁端部にキザミを施すものである。残存率の低い個体ではあるが、後期に属するものだと考えられる。1880・1881は弥生土器の鉢あるいは高环の坏脚部かと考えられるが、残存率はきわめて低い。1882の高环脚は柱実の脚内部に円形に削りを施す特徴的なものである。1884は丸底状の底部外面に指頭圧痕を顕著に残すものであるが、本来の器壁面ではない可能性がある。

図232-1886・1887は石庭丁で、水田畦畔を構成する第2a層出土のものである。1886は直線刃半月形を呈し、石材は頁岩である。1887は杏仁形を呈する可能性もあるが、残存部が少なく全容はよくわからない。紐穴の位置が低い点が特徴的で、石材は緑泥石片岩である。1888は欠損が著しいが、頁岩製の石椎と考えられる。残存長は11.3cmで、断面形状は長梢円形を呈し、長径3.5cm、短径3.0cmを測る。側溝掘削時に出土したものであるが、第2a層以下の層出土である。1888・1889はサヌカイト剥片である。1890は背面に横方向の剥離痕が認められる。

図233-1891は脈石英製の敲石と考えられるが、表面中央部にも敲打痕を残す。凹石的な使用がなされた可能性もある。重量は270gを測る。1892は砥石と考えられるものの残欠で、上面が平滑に加工されている。石材は砂岩である。1893は火山礫凝灰岩製の台石かと考えられるもので、重量は15kgを測る。上面各所に礫の分離痕とともに敲打痕が多数残されるが、側面は比較的平滑に仕上げられており、砥石としての使用も推測される。

出土土器には一部にⅡ様式を含み、Ⅲ~Ⅳ様式が主体となる。居住域の機能時期もこれをあてたい。

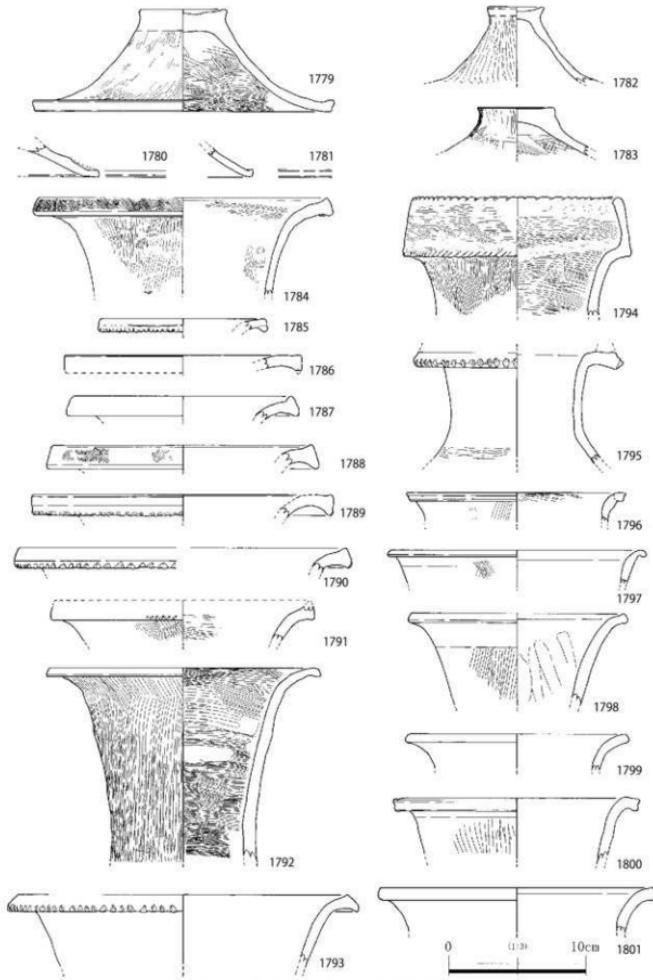


图228 南微高地 第3-2a层 出土遗物 1

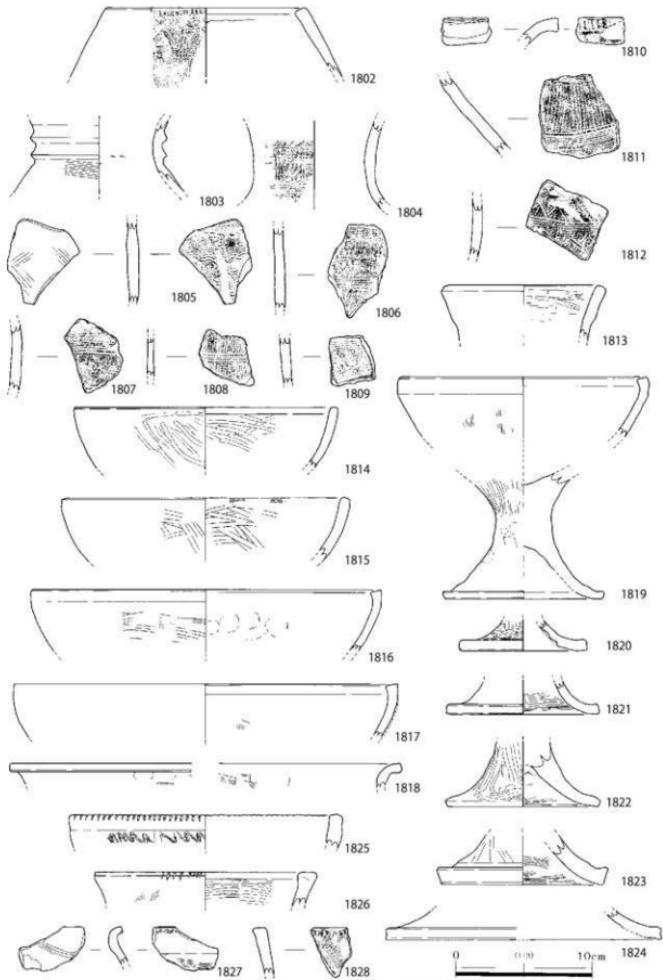


圖229 南微高地 第3-2a層 出土遺物 2

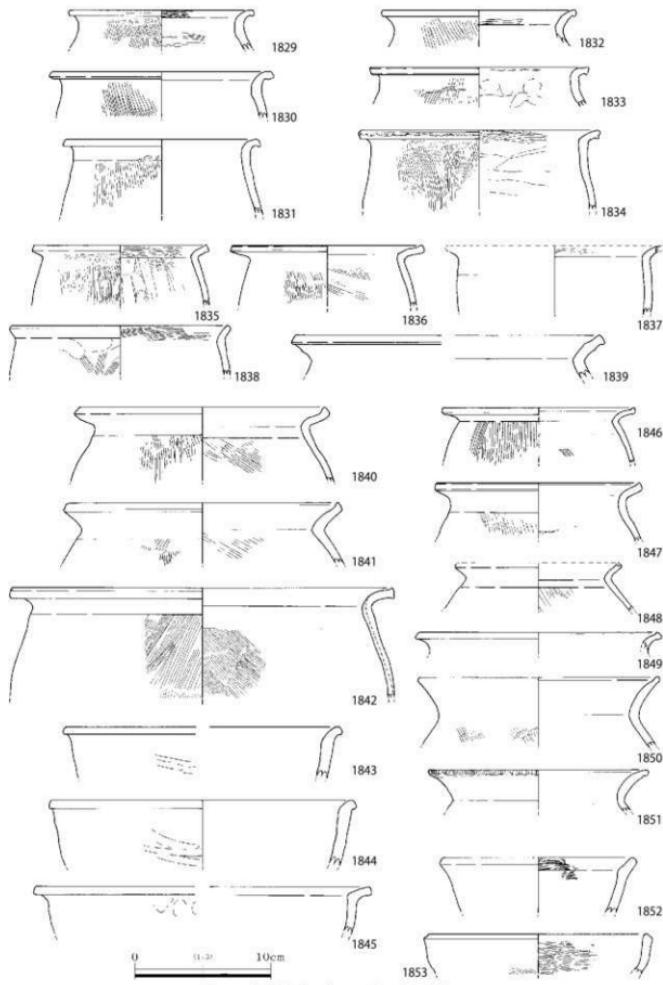


図230 南微高地 第3-2a層 出土遺物3

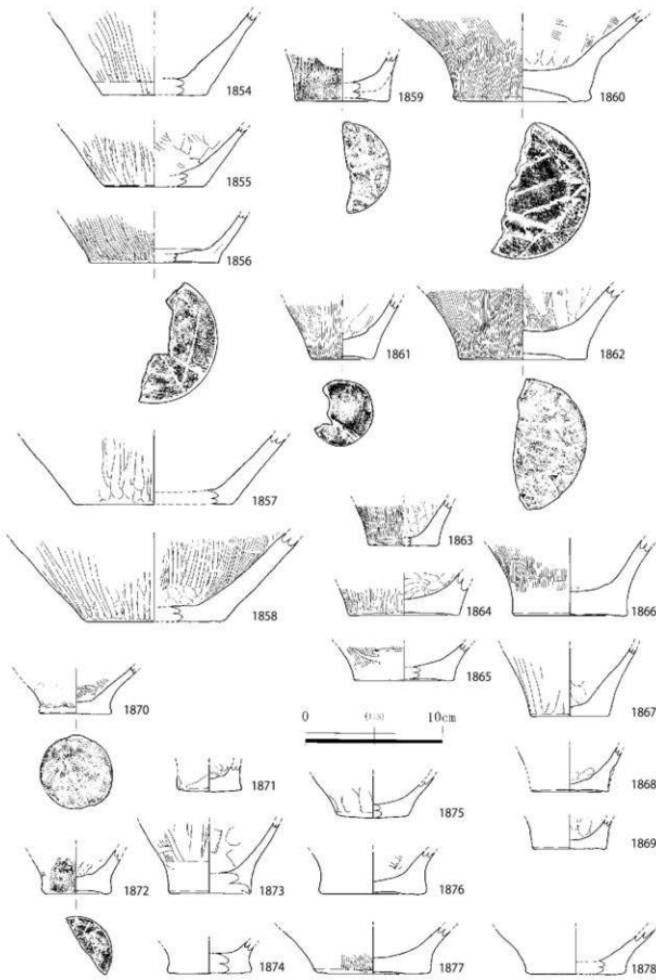


図231 南微高地 第3-2a層 出土遺物 4

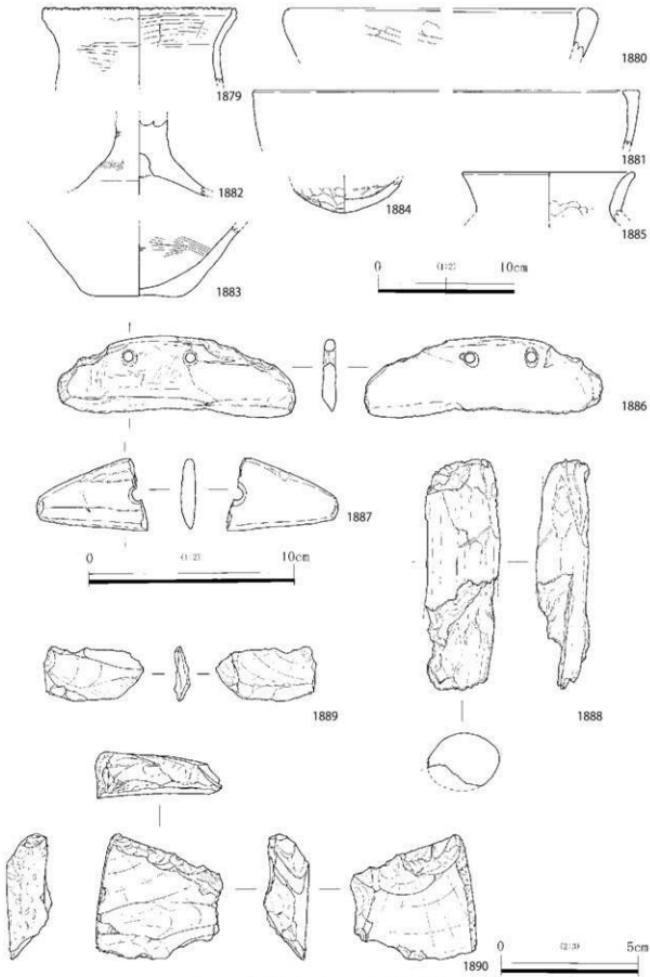


図232 南微高地 第3-2a層 出土物5

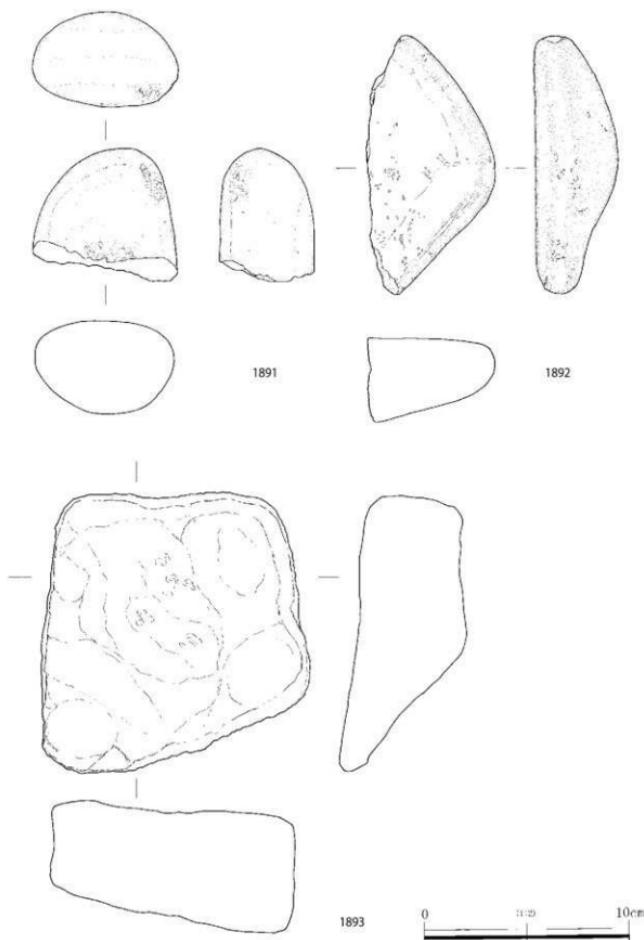


図233 南微高地 第3-2a層 出土遺物 6

第4項 第2-3面（図234）

第2-3面は第3-2b層とする調査範囲南東側では厚く堆積した堆積層を除去することで検出される遺構面である。直上には植物遺体を多く含むシルト層が堆積している範囲がほとんどであり、旧地表面の遺存状況はよい。調査範囲東寄りとなる03-5-2トレンチ・03-5-4～7トレンチにおいては堆積層を除去し、遺構面を検出することができた。しかし、厳密には確認できなかったが、第2-3面の土壌、あるいはその母材となる第3-3層の広がりは03-5-1トレンチ、03-5-8～9トレンチには達しておらず、また03-5-10トレンチには第3-2b層最下部あるいは第3-3b層と考えられる堆積層のみが認められ、明確な地表面を認めることができなかった。さらに06-2-4トレンチでは第1面以下の調査を実施しておらず、06-2-2～3トレンチにおいても第2-1面ないしは第2-2面以下の調査は実施していないことから、図234においても調査範囲北西部については空白の表示とした。

第2-3面の全体的な地形としては、調査範囲中央南寄りに第1面にまで影響を残す微高地があり、標高は高いところでT.P.+0.3m程度を測る。こより西側・北側への傾斜がみられるが、北側にややゆるやかで、最も低いところではT.P.+0.1m程度まで下る。また奈良時代にまで大きな地形変化をみせなかつた微高地1もこの段階には形成されておらず、第2-3面では南側の微高地から浅い鞍部を挟み、調査範囲東端へと上の緩傾斜面が形成されている。03-5-5トレンチ東端では標高がT.P.+0.5m程度まで上ることから、緩傾斜面といつても相対的にはきつい勾配といえるかもしれない。

第2-3面では、03-5-4トレンチにあたる調査範囲南側の微高地部分において、堆積層に厚く覆われた水田域を検出した。また微高地東寄りの最も高い尾根部分では直線にのびる溝（溝30）を検出し、部分的ではあるが、03-5-7トレンチにまで達していることも確認した。同じトレンチの西端では南北方向の溝を検出したが、03-5-2トレンチ南西角にある微高地の縁辺で検出した数基のピットとともに、第2-3面に帰属を限定できるかどうかは不明瞭である。

南側微高地で検出された水田域は、長さ70m、幅35mの範囲において畦畔が遺存していた。調査範囲から南側の様相についてはもとより不明ではあるが、検出部分が微高地の縁辺部であることを考えると、さらに南側に広がることが推測される。東側は溝30で画されるようであるが、西寄りの畦畔は徐々に高さを減じ、痕跡程度のものとなることから、溝と畦畔の関係はやや不明瞭である。また北側・西側については畦畔の存在は確認できおらず、痕跡程度になったものか、作土自体が残存しない可能性もある。

確認できた畦畔や作土上面は堆積層に覆われており、遺存状態は良好であった。畦畔の配列をみると、西寄りの蛇行する部分は等高線に沿った配置とみることができ、東寄りの文字通り「田」字を呈する部分では、等高線に直交する南北の畦畔と、それに交差する東西の畦畔という配置をみることができる。個々の畦畔は第2-2面でみられたものと比べると細く低い。おおむね下端の幅が70cm程度、高さは3～8cm程度であり、10cmを超えるところは無いようである。畦畔の上面は比較的細かな起伏が多数みられ、また畦畔両側の作土上面には畦畔に沿ってこまかなく凹凸の連続する箇所が認められた。これらが埋没直前の畦畔、作土上面の形がそのまま検出されたという前提が必要ではあるが、作土を盛り、畦畔を造成した直後に埋没した可能性を指摘しておきたい。

この水田面からは残りのよい足跡が多数検出された。水鳥や偶蹄目の動物足跡も含まれるが、多くはヒトのそれであった。記録し得たものを図235に示すが、詳細な検討にはいたらないものの、歩行痕跡を確認できるものが多く含まれている。東寄りの区画では畦畔に沿って小刻みな歩行を行っている様子が見て取れる箇所もあるが、多くの足跡は等高線に直交する方向、すなわち高いほうから低い方への往復

を示している。さらにやや意的な見方になるかもしれないが、足跡の出所がある程度集中するようにも見受けられ、同一の箇所から畦畔を越えての各所への往復歩行が推定できるかもしれない。この点からは水田に稲が植えられている段階のものではないということが推測される。また足跡には砂が充填されており、一見残された足跡に砂が入り込んだかに思えるが、作土層上面にこれだけの足跡が残され、洪水に襲われるまでそれが残されていたと考えることは難しい。このような足跡は作土上面が相当軟弱であった場合に付けられるが、それが蓄水環境であったならば、おそらくは足跡がぬかれた直後に何らかの堆積物（泥化した土作）が流れ込むであろうし、ある程度の乾燥状態であれば他に砂の入る乾痕も多くみられるはずである。いずれの痕跡も認めがたいことから、足跡が付けられた直後、すなわち足を抜いた段階にはすでに作土上面が砂を含む蓄水環境にあったと考えることが合理的である。しかし比較的層厚のある第3-2b層の上面から踏み込んだとしても、作土上面に足跡が残らないことも事実である。したがって、断定は難しいもののこれら多数の足跡は、畦畔の造成が終了した直後、水田面が洪水におそれ、ある程度の堆積物が水田面に流れ込んだ段階の極短時間に残されたものであると結論付けておきたい。

水田域の東側ではほぼ直線にのびる溝30が位置する。砂により内部が充填されるもので、内部からは足跡とともに動の痕跡が認められた。詳細は不明であるが、水田域の給排水をなった水路と考える。掘削後、時間をおかずして砂に覆われたものと理解しておくが、こう考えると水路の掘削が水田畦畔の造成と同時かあるいは遅れる可能性も考慮する必要がある。主に排水を担うためのものであったと仮定すると、畦畔の造成に遅れてもよいのかもしれないが、推測の域を出るものではない。

微高地西縁で検出した数基のピットは、すべての検出面を確認できないが、唯一、遺物の出土したピット183については、第2-2面に帰属する水田畦畔の直下にあり、畦畔を構成する作土が埋土となるものであった。出土遺物は弥生土器の体部片が1点であり、意図的な埋納という行為によるものかどうかは判断できない。ただ、ピットが集中すること、また畦畔作土中から石庖丁が2点出土した場所に近いことから、第2-2面の水田造成にかかわる遺構である可能性は高いと考える。

第23面の水田や溝に直接かかわる遺物は認められなかった。図236-1894~1911には第2-3面を覆う関係となる、第3-2b層出土土器を掲載した。1894は弥生時代後期に下る甕で、調査時に第3-2b層出土したが、層位を正確に確認できなかったものである。1895は厚い器壁をもつ甕で、内外面は緻密なハケで調整される。1897は底尖気味の底をもつ鉢で、口縁部をユビオサエで形成し、調整は粗雑である。1898~1900は比較的口径の大きい甕で、1900はゆるやかに開いた口縁端部にキザミを施す、前期にさかのぼるものかと思われる。1901は微高地Iの下層から出土した無頸甕（甕）で、完形のまま遺存する。1904は短く外反する口縁部と、「く」の字の屈曲が推定される体部をもつ甕で、口縁部外面には粘土の接合痕跡をよく残すものである。近畿の弥生土器の系譜にはのらない土器かと思われる。1906は鉢で、外面に簾状紋が施される。1907・1908は口縁端部直下に刻目突起を施す深鉢で、口縁端部は明確に面取りを施しており、滋賀里IV式にさかのぼるものと考えられる。1909は浅鉢かと考えられるが、口縁部直下の外面に浮線網状紋が施される。1910は口縁端部にキザミを施す深鉢で、縄文時代晩期のものかと考えられる。1911は深鉢の体部と考えられる細片であるが、外面に沈線による紋様が認められる。縄文時代中期にさかのぼる資料かと考えられる。

図237-1912~1919は第3-2b層の最下部に堆積する植物遺体を多く含むシルト層出土の土器である。細片ばかりであり、甕が主体である。1914は台付鉢の脚台部で、脚部付近には凹線紋が施される。

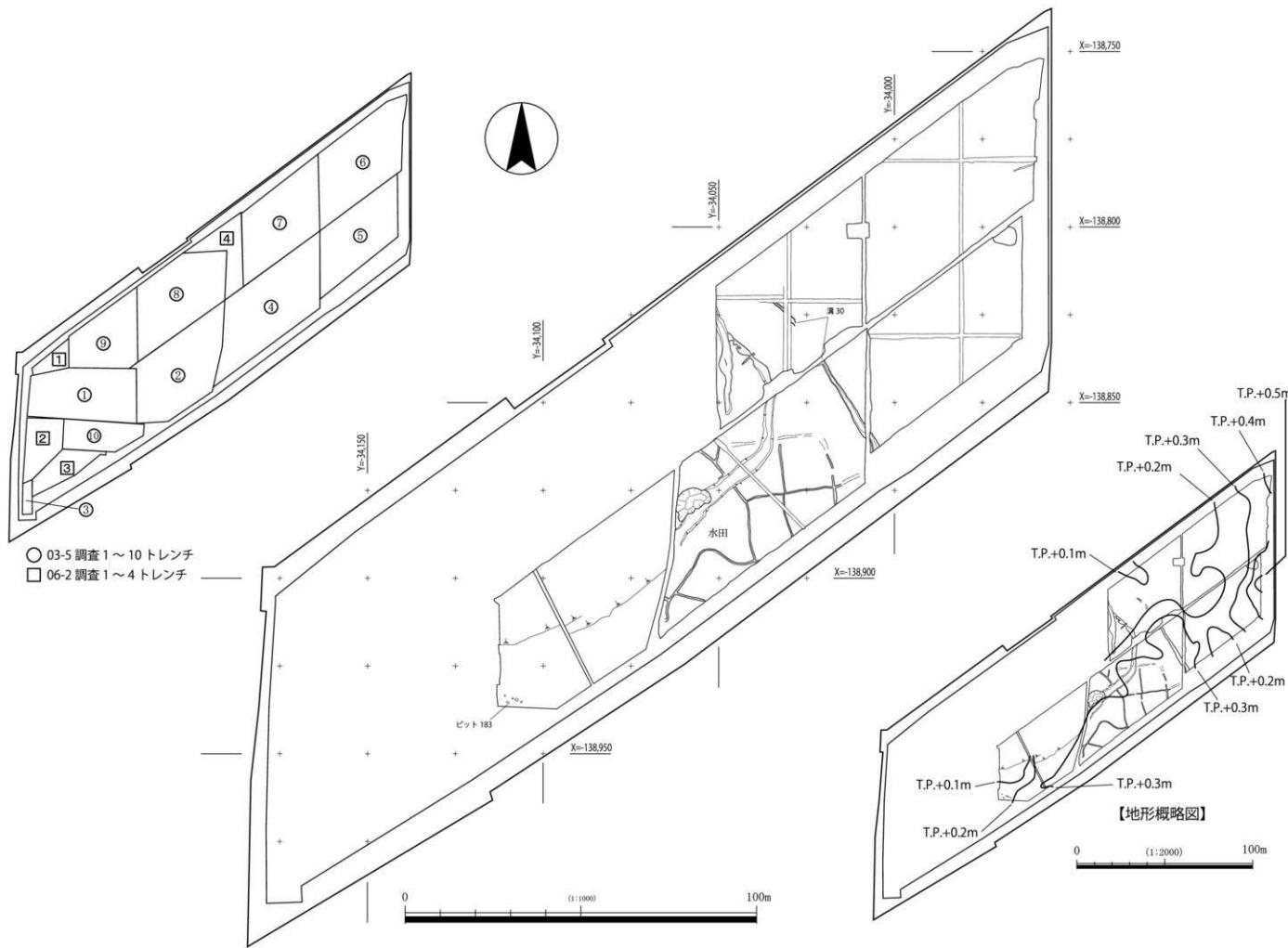


図234 第2面(第2.3面) 遺構分布図(s=1/1000)・地形概略図



図235 第2-3面 足跡 (s=1/200)

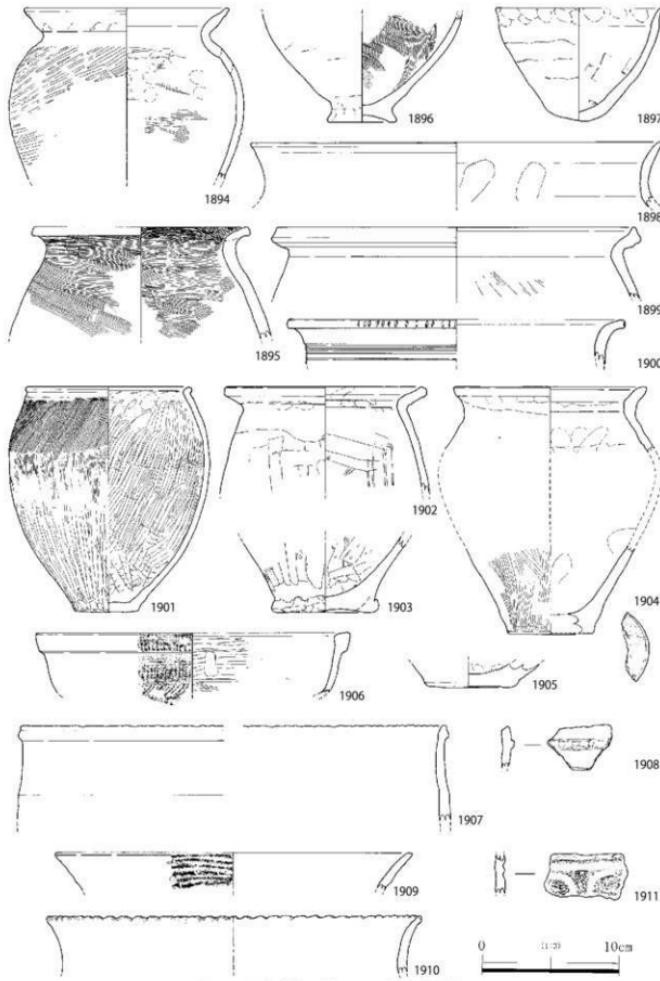


図236 西北低地 第3-1~3-4層出土遺物 1

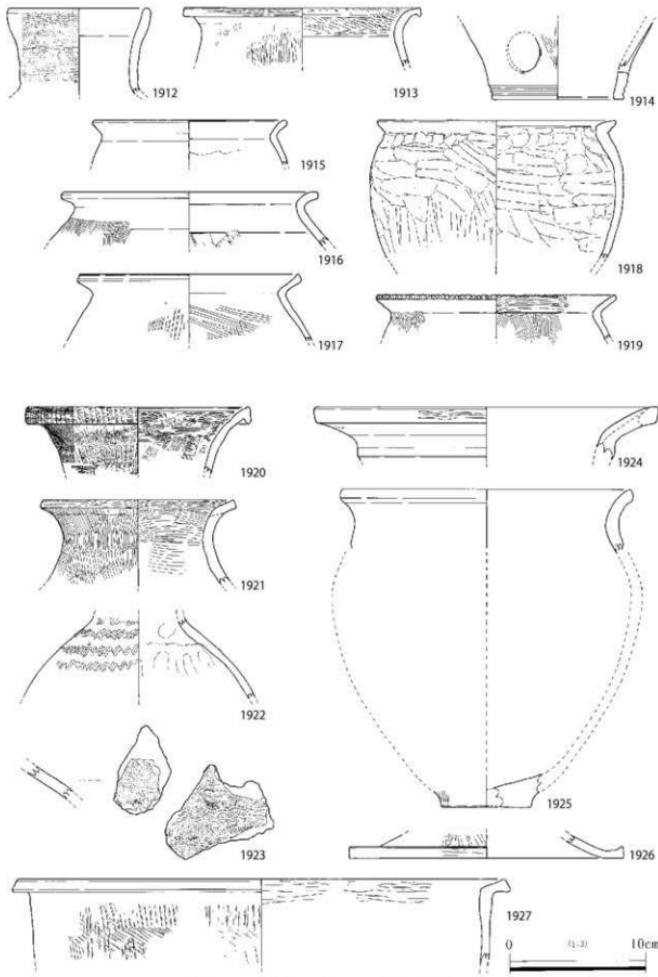


图237 西北低地 第3-1~3-4层出土遗物 2

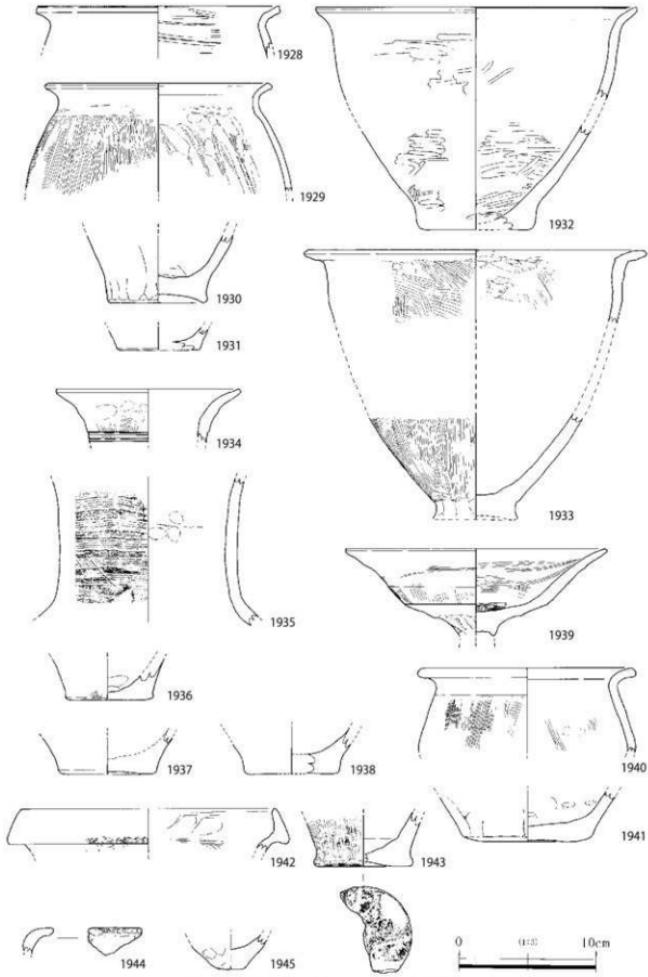


図238 西北低地 第3-1~3-4層出土遺物 3